明治三十四年七月五日發行
毎月一回五日發行

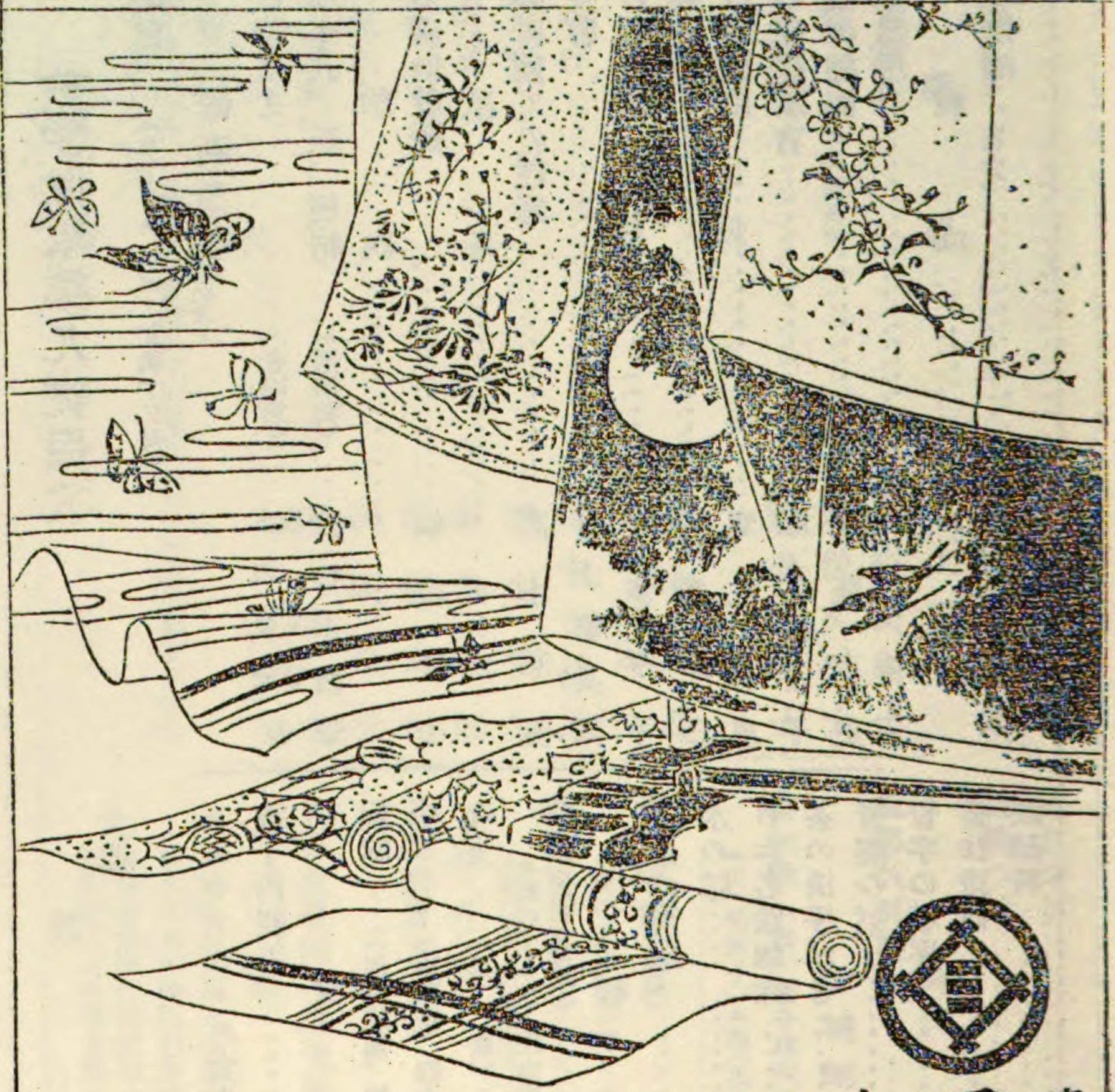
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第一巻才九號

口繪





東京日本橋駿河町
大阪高麗橋貳丁目

三井呉服店

電話
東京本局
特五二一五
一二一七
一六八〇

大阪東
特四七三
一六五〇

季節向新柄流行品を階上階下總體に陳列致し有之尚御休息室をも取設け置候間御慰みに御子様方御連れ遊ばされ緩々御遊覽なし下され度願上候
地方よりの御註文に對してはくわしき御案内書有之候間御一報次第御送り可申上候

女學世界第九號目次



小松若宮御息所周子殿下



山內侯爵及同夫人禎子御方

無我　（泰西名畫）



畫伯レイノルヅ筆

改良婦人服の正装



（雜報欄參照）

梶田半古氏の意匠

七月十日發行

少年世界定期増刊 探涼軍

第七巻第拾號
定價金拾錢
郵税壹錢五厘

口繪

○相州函嶺玉簾瀧○陸前松島花魁島（アートペーパー）○世界一週者シルリング氏○播洲坂越港○遠州濱名港○周防錦帯橋○相摸大涌谷○靜浦海水浴○沼津海濱等

記事要目

- 海に千人　江見水蔭
- 初島物語　遲塚麗水
- 水馬　多賀義行
- 鬼水兵　聲乃英
- 古魚類の話　今井金牛
- 羽前の三山　久保天随

- 木曾の御嶽　寺崎留吉
- 探涼軍　松井松葉
- 大洋水　黒田湖山
- 水の世界　竹貫直人
- 夏の海と山　木村小舟
- 山の清水　武田櫻桃

名家涼感

理學博士 坪井正五郎君
文學士 大町芳衛君
幸田露伴君
山縣盞湖君
文學士 高山林次郎君
理學士 西松次郎君
尾崎紅葉君
今井金牛君

記者涼感

江見水蔭君
武内桂舟君

讀者涼感

文學士 久保天随君
陸軍中佐 多賀義行君
遲塚麗水君
竹貫直之君
全國少年世界愛讀者諸君涼感數十章

發兌元　東京　博文館

総裁　小松宮大妃殿下
副總裁　鍋島侯爵令夫人

大日本女學會發行（東京麹町區土手三番町二八）

をんな

第◎六◎號◎發◎兌◎

第壹號以下　再版　出來せり

定價金拾五錢　全國無遞送料

（前附）三輪田眞佐子筆歌かるた（論說）女子の職業に就て添田壽一●吾等の良友安井哲子●新女大學評論德富猪一郎（學藝）心理學大意島村抱月○作歌批評大口鯛二●作文批評今泉定介●搆文學の一用意五十嵐力（修身）經驗の効佐方鎭子（齊家）看病後閑菊野子●改良女服の仕立方渡邊辰五郎（世務）法制談岡田文學士●紙幣の話伊藤秋南○鑛山の話石井相洋○物產の話（史傳）英女皇傳下田歌子●十九世紀の婦人櫻井鷗村●梁川紅蘭津田黃昏（譚草）暗流水谷不倒○生捕られ熊淘山人（詞藻）皇長孫の降誕を賀し奉る歌みやび會詞藻（雜錄）東海道汽車の旅喜田貞吉○岡山孤兒院の歷史炭谷小梅子●圖案武村千佐子○新選女百人一首答解（時事）不景氣の回復期●新内閣（彙報）兩陛下の御仁悲其他

大賣捌　東京堂

東京神田表神保町

治肺新法

附錄　肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗ハ方法を詳記したる物郵劵三錢封入申込者に無代施本致べし

東京下谷上根岸町百十一
（電話本局二二二五九番）

藥學得業士　金澤巖

●博文館諸雜誌廣告大取次　弘報堂

東京京橋區尾張町新地

●有効目藥　晴光水　定價一瓶拾錢　送料貳錢

如何なる眼病も一度用ゆれば全治請合の妙藥なり

●目藥　眼清膏　定價一貝五錢　送料貳錢

●虫齒妙藥　九仙散　定價一袋九錢　送料貳錢

蟲齒に苦しむ人之を服用せば四時間後に必治の特効ある無類の靈藥なり

●注意＝替爲は最寄局へ振込郵劵代用壹割割

調劑本舗　羽後刈羽郡石地町　名達半十郎

特約取次　東京京橋區大鋸町十一　野口竹次郎

(甲の三)

中學世界秋季增刊

懸賞文募集

英才詞苑秋の卷

懸賞課題

- ●小說 題隨意（二十四字詰二百行限）
- ●論文 題隨意（二十四字詰百五十行限）
- ●抒情文 題隨意（二十四字詰百五十行限）
- ●叙事文 題隨意（二十四字詰百五十行限）
- ●書簡文 題隨意（二十四字詰六十行限）
- ●英文 The. Moon.（本誌一頁以內）
- ●新體詩 題隨意（七五調卅句以下）
- ●漢詩 過古戰場（七絕韻限七陽）
- ●和歌 水邊立秋殘暑（短）
- ●俳句 秋季亂題（學字結）

題を定めざるもの季節に關するものは秋季たるべき事但し小說は此限にあらず

投書締切 七月卅一日

英才詞苑夏の卷は去月二十日を以つて發刊したり、乃ち茲に引續きて來る九月一日に發行すべき秋の卷の投書を募集す、例の如く全紙數二百四十頁其三分の二を懸賞文の披露に宛て殘餘を大家の筆に成れる名編に宛つ、締切期限迄には十分の餘裕あり、天下の青年秀才諸子、大に思想を養ひ、滿腹の抱負を傾瀉し來れ、課題と懸賞品等は左右に就て見よ

九月一日發行

懸賞品

甲種 小說

- 第一賞（銀側時計一個）價拾圓
- 第二賞（無線電燈一個）價七圓
- 第三賞（白銅側時計一個）價五圓
- 第四賞（縮緬兵兒帶一筋）價三圓
- 第五賞（小刀一丁）價貳圓

乙種

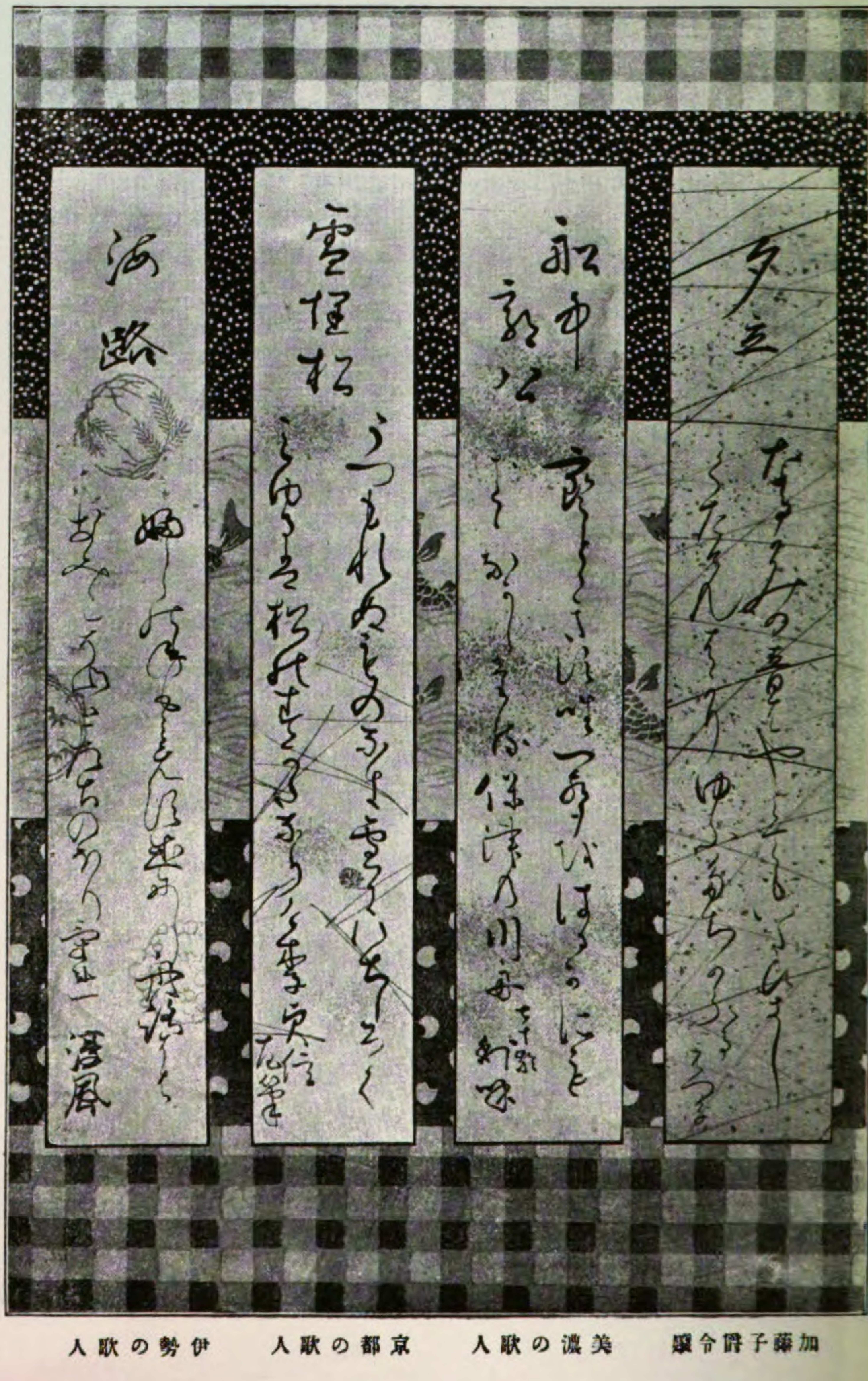
- 第一賞（圖書切符）金貳圓
- 第二賞（仝）金壹圓五拾錢
- 第三賞（仝）金壹圓
- 第四賞（仝）金七拾錢
- 第五賞（仝）金五拾錢

〔注意〕

小說五篇に甲種の賞を附す、論文以下新體詩に至るまでの優等者三十五名に乙種の賞品を配附し、漢詩、和歌俳句の優等者は第二賞、以下に於て別に相當の賞品を定む投稿規定は例刊の中學世界に準ず例刊の誌上に就て見よ小說原稿に限り必ず總假名附たるべし、猶投書の封筒には『英才詞苑原稿』の文字を附記することを忘るべからず

（甲の四）

名流筆蹟

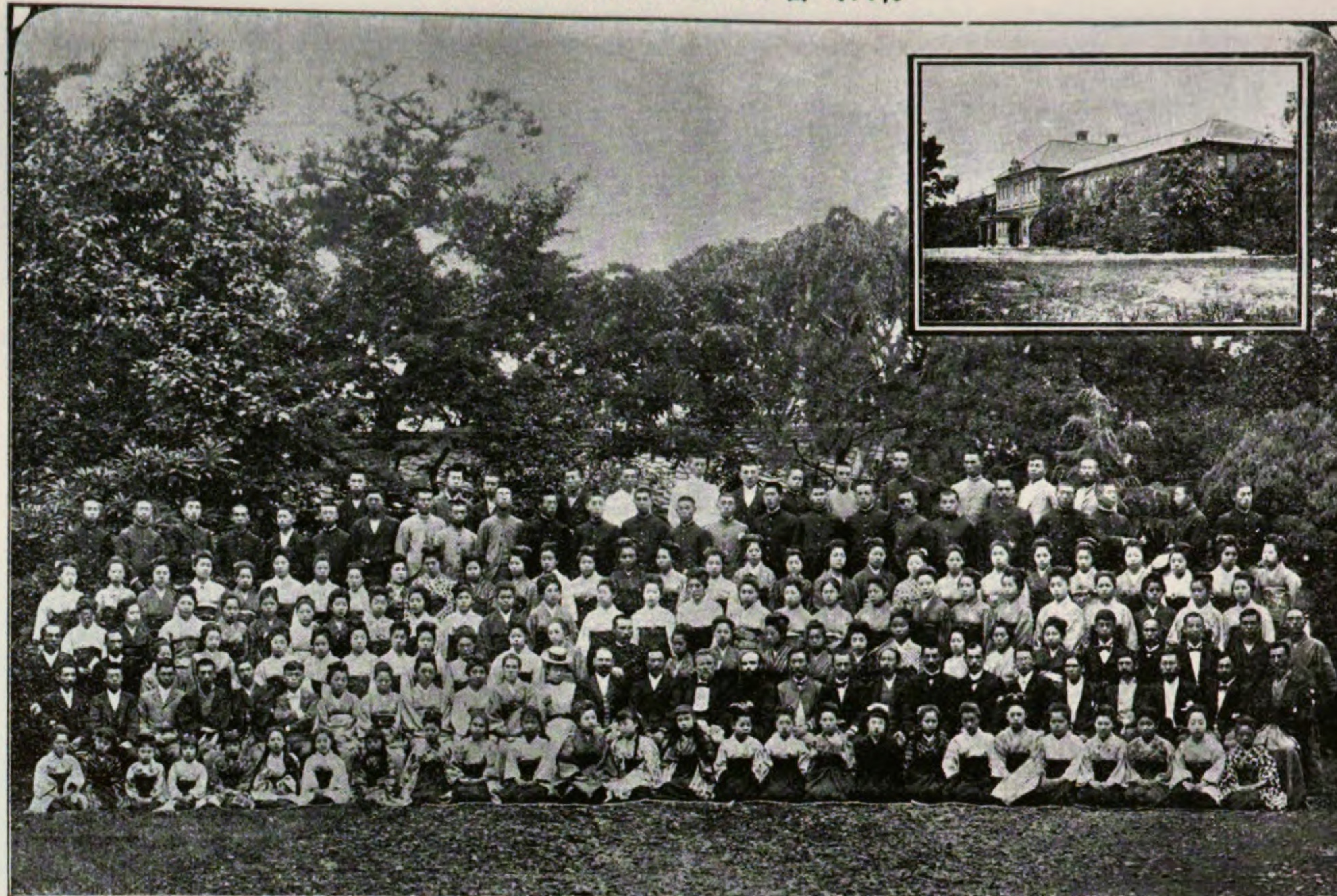


加藤子爵令嬢　美濃の歌人　京都の歌人　伊勢の歌人

姥捨山上の湖水



東京音樂學校職員及生徒



幸田延子孃歡迎會

竹柏會八佳人

音樂學校教授橘糸重子　片山廣子　大塚楠緒子



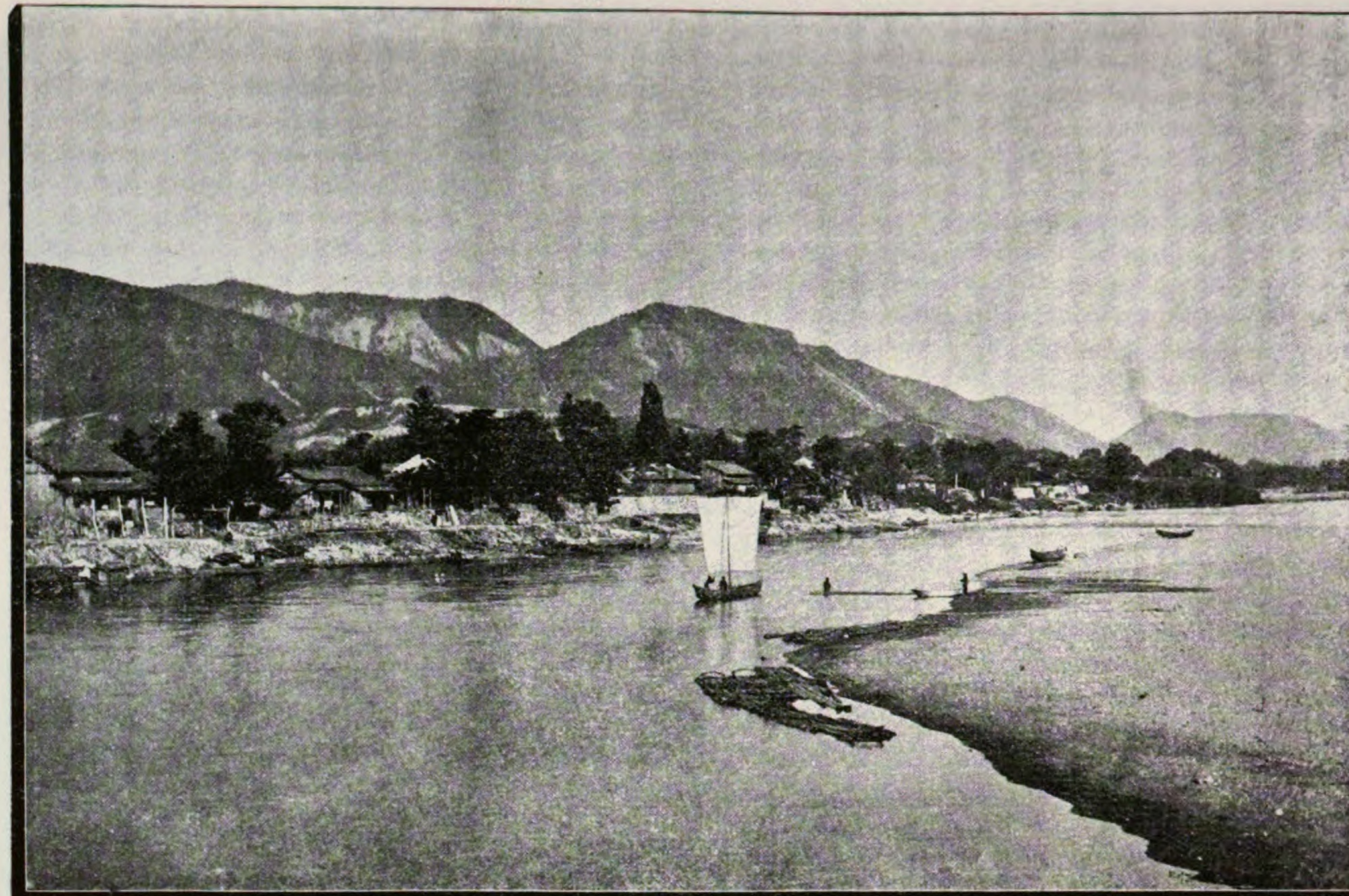
東洋英和女學校教諭松永曾代子　男爵母堂四升子　子爵夫人竹屋雅子

佐々木夫人雪子　村山夫人元子



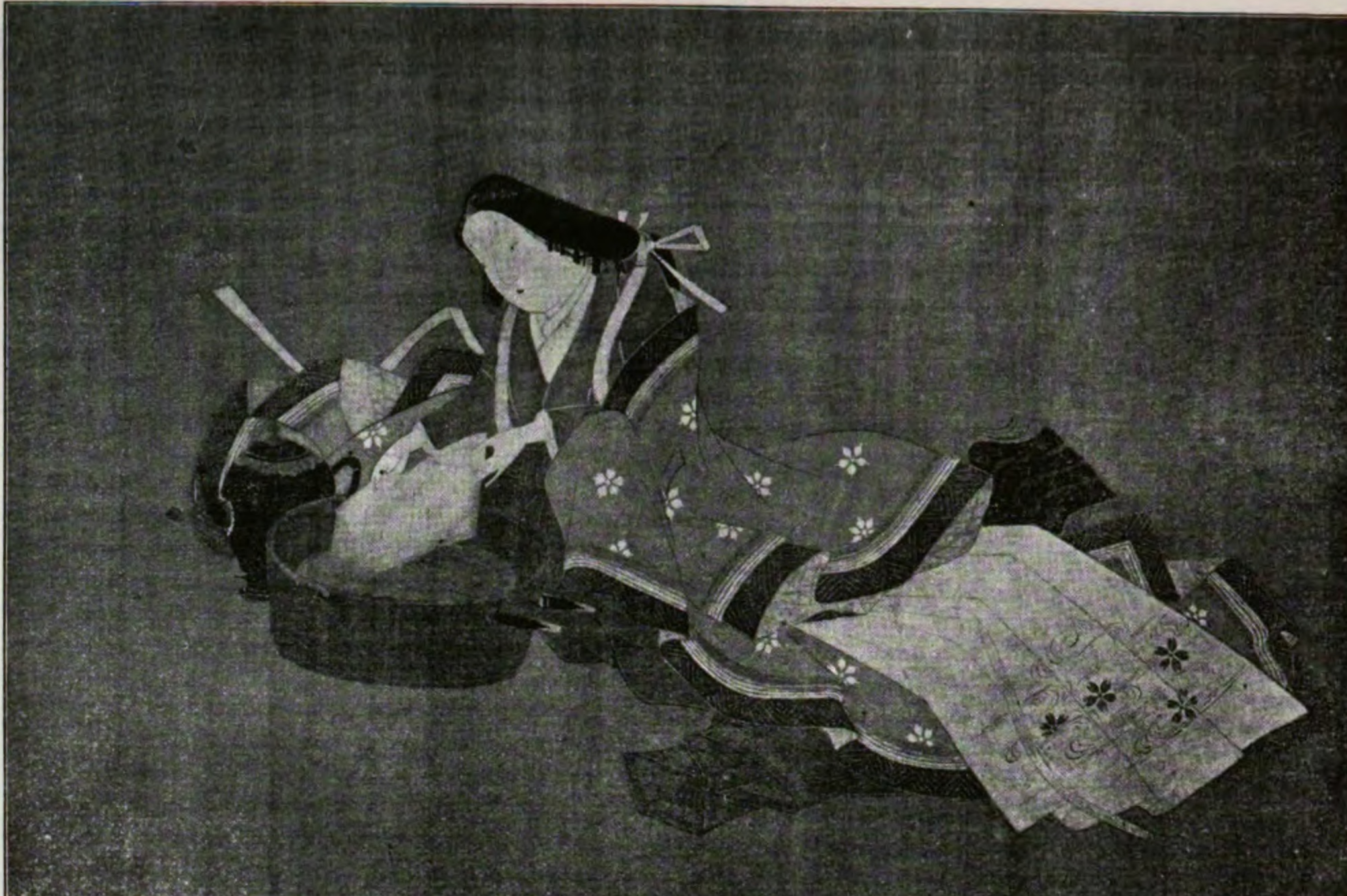
成女學校割烹實習

長良川の清流





ひらあ紙双



筆宣師川菱

東京の祭禮

日枝神社境内



街上の賑ひ

神輿の通行

(雜報欄參照)



每月曜日發行
四六判四倍大

太平洋

紙數二十四頁

口繪寫眞銅版風景風俗（每號三頁）揷入

太平洋の大改良

（博文館發行）

是れ昨年一月一日を以て、其第一號を發刊したる本邦唯一の週刊新聞なり、其論旨の眞摯精透、無偏無黨なる、其記事の精確明暢にして、一週間細大の時事を、能く秩序的統計的に記述して、首尾本末の一目瞭然たるより、意外の好評を博して、日刊諸新聞紙を讀む者も讀まざる者も、共に一部を購讀せざる能はざるの要紙となれり。歐米各國には由來週刊の新聞雜誌盛に行はれ互に美を競ひ豐を爭ひて、巨萬の部數を發刊し、一は以て娯樂に供し一は以て一週内の事蹟を系統的に明知せしむ。本邦未だ他に此種の物あるを見ず、蓋一缺點なり。仍て一層江湖の厚意に酬はんが爲に、既に今春の初刊よりして、一大改良を加へ、大に字數を增加して、每號四六判四倍大の廿四ペーヂとなし、紙質は精良の舶來品を選びて、幾多の**寫眞銅版**を挿入し、以て時事人物、一切最近の出來事を、精緻なる寫眞ゞ許多の繪畫とによりて嘹知せしむ。時世の進歩に從ひ、事端の繁多なるより、人々皆時事を耳にする每に、併て直ちに其狀態人物を目睹せんと欲するは常情なり。本館茲に見るあり、斷然此擧に出づ。乃ち如何に僻遠遐陬の地に在る人と雖も、事ある每に、總ての境を踐み、總ての人に接するの感あるべく、是れ我邦新聞ありて以來、未だ曾て有らざる所、其如何の精彩を放つべきかは、今茲に喋々するを要せず。其他紙面の增加に伴ふて、各欄を擴張し並に新設すべく、其概要左の如し。

各欄要目

時論　講談落語
週報　文苑
小說　雜錄

太平洋定價

一冊		前金 金六錢
十三冊	三ヶ月分	金七十五錢
二十六冊	半ヶ年分	金壹圓四拾錢
五十二冊	一ヶ年分	金貳圓七拾錢
郵稅壹冊		金壹錢

見本應需

見本を望まるゝ方は郵券四錢送付あらば送呈す見本は號數の指定に應じ難きも可成近刊の者を發送すべし

（乙の一）

在獨逸醫學士 丸川秀雄先生
東京板橋病院長 守川南洋先生著
日本藥學協會講師 鴨田修治先生

通俗衛生顧問

（一名）●●●●●諸藥獨劑術

●全一册三百頁●正價金九十五錢●郵稅金六錢●
●上製金字入●正價金壹圓三十錢●郵稅金八錢●

著者獨逸にて研究の結果諸疾病の起因病狀を說き以て病を其起らざる前に防ぎ或は諸病の發すべき起因を撲滅し或は既に發したる病を療治する方法を病名に依て說明を加へ又其藥劑の調合仕方を詳記す總目錄郵券四錢要す

發行所日本藥學協會

賣捌所 神田表神保町 修學堂書店

●東京堂●東海信文社●●良明堂●中西屋●南江堂●目黑●●丸善●大倉●服部●誠之堂●牛田屋●●大坂丸善●京都大黑屋●名古屋●三輪●片野●

婦人科專門ドクトル 宮田守治先生
中央看護婦會長 松本安子先生著

男女生殖健全法

四六判全一册●密畫數個入●正價金壹圓拾錢郵稅六錢

本書は日新醫學の原理に依り之を詳說せる者にして先づ生殖器の解剖生理を說ぎ且つ其疾病を述べ夫婦とは如何なる者なるや情交とは如何なる者なるやを解釋し情交に因する諸障害を論じ後に小兒養育の事を記載せり世の夫婦たり父母たる者必ず座右に備ふべき寶書なり●總目錄郵券四錢要す●發行所は中央看護婦曾

賣捌所 京橋銀座 二服部書店

●修學堂●東京堂●林平●水野●目黑●小林●山本●丸善●中西屋●東海信文社●上川屋●其他

增酒資料

（さけふやすもと）

壹斗の酒は直に弐斗となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法傳習望の方は郵劵學四錢送れば詳細なる傳習手續摘要錄を送呈す

東京市神田區五軒町拾九番地 日本授產館

わきが根治確證藥

何程重き慢性わきがにても誓つて根治し決して再發せざること確證す價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固慢性症根治分貳圓卅錢の參種あり着金即刻送藥す

東京市神田區五軒町十九番地 日新館藥房

月やく忽ち下る確證藥

本劑藥名（血塊調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き經閉止も忽ち下す特効あり但姙婦は流產の恐あるに付飮を禁ず價六拾錢特別製壹圓拾錢

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

可驚肉色の白くなる新劑

いか程色黑きも本劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となること確證す 價八拾錢特製壹圓卅錢 特別製分貳劑を

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

速記法 自宅獨習生募集

二ヶ月卒業 月謝三十錢

○規則入用者は郵劵二錢を投ずべし

東京市下谷區徒町三丁目九拾五番地 速記學專修所

博文館諸雜誌 廣告大取次 博報堂

東京神田區千代田町二

（乙の二）

櫻井鷗村君著　小島沖舟君畫

少看護婦

文武堂藏版

全壹冊大判　洋裝美本　正價拾五錢　郵稅四錢

普佛戰爭の際兄妹の孤兒あり兄は兵學校に入り妹は叔父に養はる、會々兄敵圍中に落ちて戰死の厄難に瀕すと聞き妹は深夜家を脫し、義俠なる人の助により困難を凌ぎてパリ府に赴きしも兄に逢はず、偶然赤十字病院に入つて少看護婦となり、敵の少年を看護したるが、戰終つて家に歸れば兄また在るの一奇談、可憐なる少女の冒險譚とも稱すべく、家庭の讀み本として上乘の書なり、世の兄妹諸子幸に愛讀を賜へ

發賣元　東京本町　博文館

發賣元　東京神田　東京堂

竹柏會は、我國風なる短歌、及新體詩美文等を研究せんとて、佐々木信綱氏主任となり、東久世伯萬里小路伯等幹事となりて、起せる會なり。竹柏會は。あまねく會員を募集し、歌文の添削質疑に應じ又歌會を催ほし、會誌を頒つ。入會を希望せらるゝ諸氏は郵券二錢を投ぜられよ。速に規則書を呈すべくなむ。

東京神田小川町一番地　竹柏會

工學得業士　松尾哲太郎君編　製本出來

製圖用文字

●全一冊　正價金四拾錢　郵稅貳錢

文字は必ず製圖と相伴ふものにして製圖如何に精巧なるも之に記入する文字拙劣なれば著しく其外觀を損するに至る本書は製圖に關係ある學生及び技術者の實用に供せんが爲めに編著せるものにして製圖用に適せる諸種の字躰幷に輪廓等を集め一目瞭然用ゞ應じて撰擇するを得工業家美術家必携の要書なり

同君纂譯　器械設計　製圖學初步　正價七拾錢　郵稅四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

◯奏効確實　器械不要

簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器機藥品等を要せず此のインキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿こり凡七八十枚宛へ寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり

（使用法說明書を附す）

◉本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品なり

●定價　二オンス堅裝瓶入　送料共金四拾錢　爲替神田郵便電信局郵券壹割增●

發賣元　神田區末廣町三十八番地　中村屋商店

（乙の三）

續帝國文庫

●第三拾五編發行豫告
博文館編輯局校訂
（七月中旬發行）

校訂 俳優全集

古名優の作に成れる脚本並に小説二十種を收む。其目左の如し

金壹冊洋裝背皮
金字入上製美本
正價金六拾錢
郵稅拾六錢

本書目次

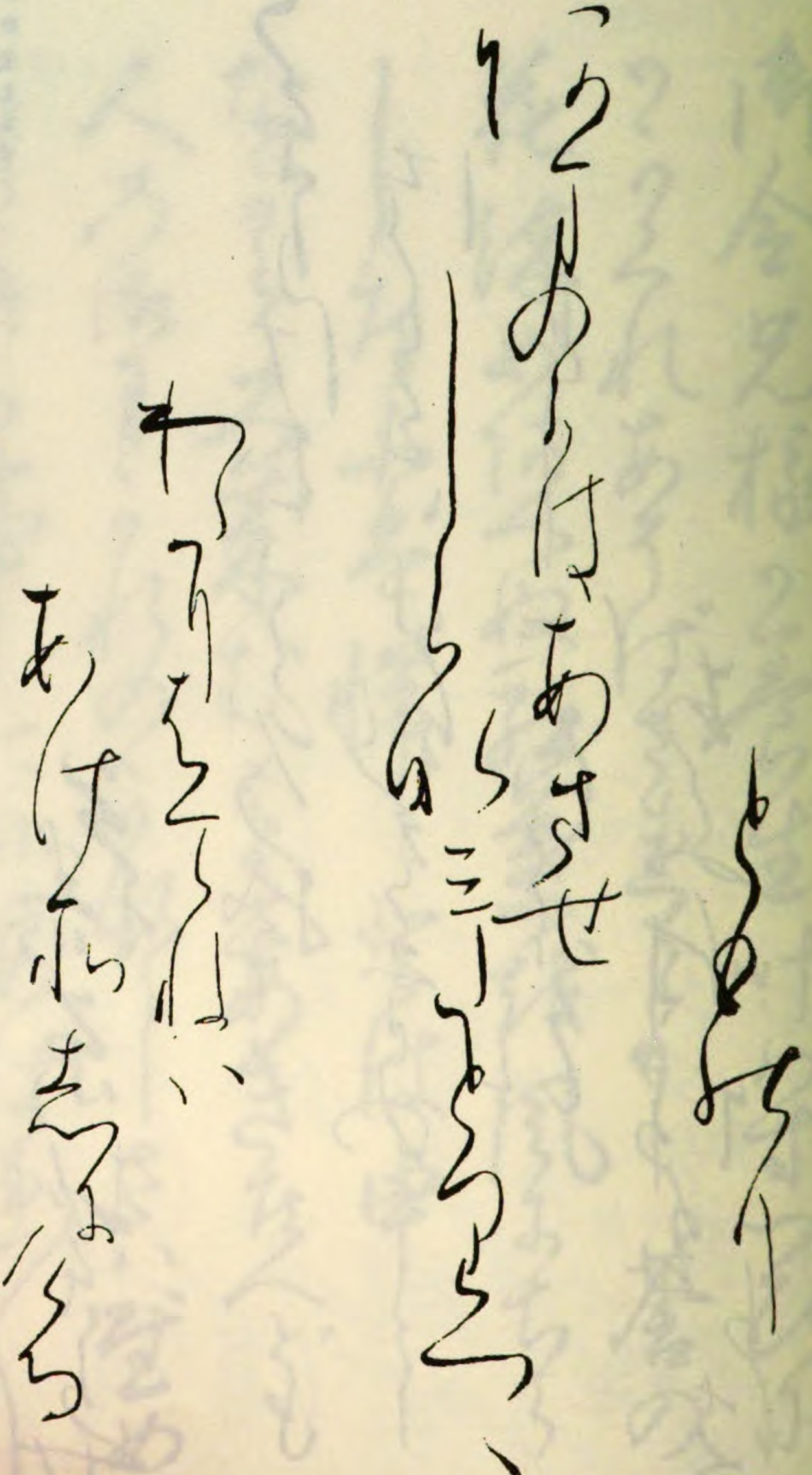
●枝珊瑚京打笄　尾上梅幸
●三ヶ月おせん　松本幸四郎
●聞勇八幡祭　市川團十郎
●其彿夕暮譚　松本幸四郎
●ぬしや誰問白藤　市川三升
●春の曙　市川三升
●風俗女三國志　市川三升
●爰佃大網島　市川三升
●伊達姿辰巳八景　市川三升
●和歌三神由來　瀬川路考
●色三味線　瀬川路考
●流行歌川船合奏　尾上梅幸
●いろはかな娘席書　尾上梅幸
●向人廓山彥　坂東簑助
●蝶雙春花壇　中村芝翫
●傾城が嶽　坂東秀佳
●杜若紫再咲　岩井粂三郎
●俠客意氣地安賣　岩井紫若
●尾上松綠百物語　尾上梅幸
●狂言袴五ツ紋盡　岸井紫若

第三十四編 ●校訂 黃表紙百種　幸堂得知翁校訂　既刊

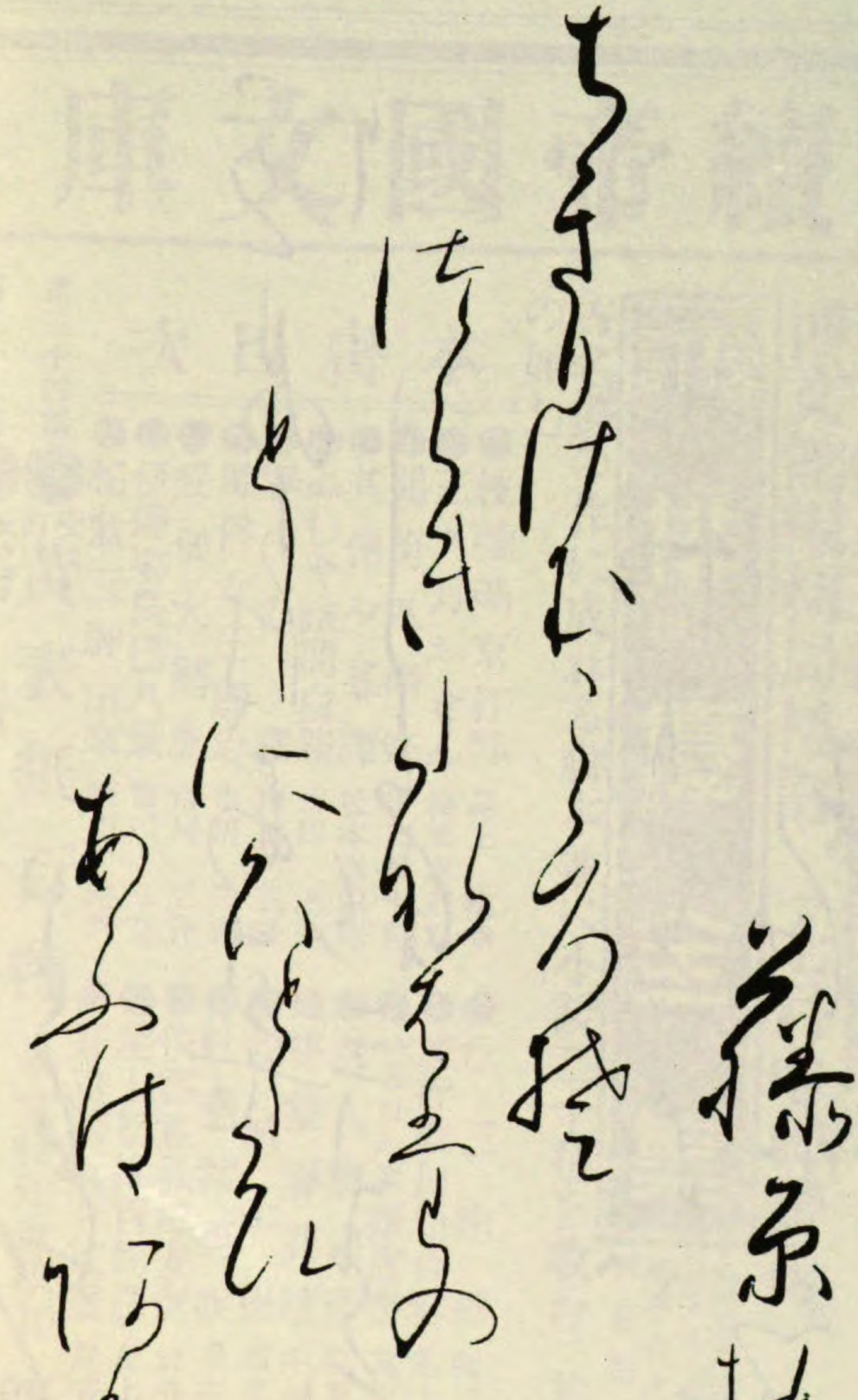
第三十六編 ●校訂 俗曲大全　長井金風君校訂　續刊

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の四）



多田親愛先生筆



御令兄様にも参上叶はず候ふ
つゝくれあればさまでよし　蒼の
花涼め何へ故秋氣残風まちら
しゝふ君帰し　候は申し
などのろ又来むとあきらへども
人乃依星のめの好しさハ望め
ごうさきの事　にハあはまし

坂正臣先生筆

吹きしかせの姿ハ変りても
ゆるさば珠ハ播揚玉をなし、
咳唾より出でん只一片の煙も消
えてしハ文壇乃宏富國家
の損失と申すべくは
ちがひやまさる緑づれぬ袖ぞかにつつ
千代よろづよぞよふ　おもきみのけし







野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



東京專門學校出版部新刊廣告

男爵林董君序　鎌田榮吉君序　栗原亮一君序

法學博士有賀長雄君　鎌田榮吉君閲

佛國學士會員アナトール、レルア、ボリユー氏原著

林毅陸君譯（製本出來）

早稻田叢書

露西亞帝國

全壹冊　背皮金文字入上製　八百五十頁　正價金貳圓　郵税貳拾錢

露西亞の研究は刻下の急務なり、絶東近時の形勢が此奇怪なる大帝國の一擧一動をして、如何に我國民の利害に關係を及ぼすに至らしめたるや識者を俟たずして知るべきのみ、本校曩に歴史叢書の第一編として『露西亞史』を發行し、其の今日歐亞の間に大勢力を占むるに至りたる所以の沿革を示して聊か我が同胞間に告知する所ありたりと雖も其の國情民俗の眞相を知らんとせば更に一段の研究を積まざるべからず、本書は即ち此緊急なる需要に應ずべきものにして原書は露西亞に在ては禁書として其の發賣を抑止せられたるもの、蓋し其の觀察餘りに無遠慮にして、此國の獨裁制度と相容れ難きが故なりと云ふ、記する所政治社會、宗教の各方面より其組織及び眞相を縱横に解釋評論し局外より容易に窺ひ難き社會下層の實情及び露人裏面の性癖に至るまで、能く隱微を穿ちて餘す處なし譯文流暢にして意義明確、偶讀一過して能く露西亞とは如何なる國にして露人とは如何なる民なるやを知るを得べし誠に國民必讀の書なり

發賣元　東京　博文館

（其の一）

華族女學校學監 下田歌子女史著

少女文庫

（毎月一回發行）

定價

全部六冊和裝上製 ◎一冊三十五錢 ◎三冊前金壹圓 ◎六冊前金壹圓九十錢 ◎全部十二冊前金三圓六十錢 ◎郵税一冊金六錢

博學高識女流の名家たる下田歌子女史曩に家庭文庫全部十二冊を完成して普く女子の心得ふべき事項を網羅し懇切に其學藝を指導せられたり故に世上に此編を愛讀せらるゝこと他書の比にあらず又少女文庫を起稿せられて少婦兒女の讀本に備へられたり文詞莊麗挿圖又精妙を極む

第壹編 お伽噺教草 七月出版

第貳編 庭訓お伽噺 八月出版

貴孃方に告ぐ

少女文庫の第一編にお伽噺を出版す抑もお伽噺といふことは其昔若君や姫君の御相手をする者をお伽衆など云ひ其お相手したる噺をお伽噺と云ひたるによれり、この噺の種類はいろ〳〵あり。日本にても外國にても本當の事をまじめに書きたり又其れを少しつゝ變へ其外の事をも附け加へて面白みを添へなどもし或は全く

（其の二）

第三編 内國少女鑑 九月出版

第四編 外國少女鑑 十月出版

第五編 家庭の心得 十一月出版

第六編 學校の心得 十二月出版

第壹編新撰お伽噺の挿畫は山中古洞氏の筆にて三十有餘面以て本文の説明を補ひたり第二編庭訓お伽噺の挿畫は水野年方氏の筆にて是又本文の繪解として二十五面を添ふ印刷は鮮明なり紙質の良好なり机上不可缺の要籍なり

の作り噺もあり寓言とは物によりそへていふのにて鳥、獸が人間のやうなる問答をしたり、花や果物が話をしたりするやうなる事はすべて他の話を借りて自分の考へを云ひ、且つ小供にわかり易きやうにしたるなり。されども近來に至りて猿の咄しを聞くことの發明出來鳥の智恵の度が量らるゝ程の人間の智が進むに從ひ、これ迄ありし寓言を合せて見れば存外能く合して居る事の多きを見るべし。このお伽噺などは大ひに修身の助けとなり、智恵を磨き躰を強くする手引草となるものなりといふことを得べし。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(丙の三)

毎月一回一日發行

少年世界

定價
（定價一册金十錢四册前金世八錢八册前金七拾五錢郵税一册一錢）

明治三十四年 第七卷第九號 七月一日發行

口繪

特別口繪
◎南米墨西哥大統領肖像
◎獨逸伯林花祭景況
光澤紙摺

○日本體育會體操學校運動○伊豆神見元燈臺及附近海面○臺灣少女風俗及全知學堂○少年特別寄書家○羽後國吹浦羅漢巖○伯林繪端書通信○皆既日蝕眞景○南米墨西哥大瀑布

記事摘要

挿畫 山中古洞筆

東京 博文館發兌

（其の四）

學習院納所辨次郎先生、高等師範學校兼東京音樂學校田村虎藏先生共編

教科適用 幼年唱歌

一本書は高等師範學校、學習院、小學科唱歌教授に從事せらるゝ納所、田村の兩先生が熱心なる研鑽の上編纂せられたるものなり

一本書は主義目的なき蕪駁杜撰なる在來の唱歌を排して尋常一學年より高等四學年に至る迄各學年各學期に配當したる本邦唯一の教育的唱歌集なり

一本書は高等師範學校、學習院、女子高等師範學校の教科に御採用の榮を得從て教育社會に空前の好評を博し既に正版出來せるものなり

二編中巻(近刊)

目次 ●虎 ●日本武尊 ●日之丸 ●稲 ●神武天皇 ●蜜蜂

豫告 ●牛と馬 ●海

初編上中下既成

二版上巻出版

洋製頗る美本
壯快繪畫挿入
一冊金拾錢宛
一冊郵税二錢
郵券代用不苦
(以下續出)

高等師範學校鈴木米次郎先生編纂

日本遊戯唱歌

本書は專ら小學校、幼稚園、家庭等に於て用ゐる遊戯唱歌の材料に供科せん爲め特に先生の御實檢に依れる新意匠の遊戯唱歌又は運動の五六種を毎編掲ぐる者なり

第一編第二編既成

第三編七月一日發行

壯快繪畫挿入
洋製頗る美本
一冊十五錢宛
一宛郵税二錢
郵券代用不苦
(以下續出)

●發行所 東京銀座三丁目二番地 十字屋

(丙の五)

●文部省檢定濟

新潟縣第一師範學校敎諭
兼新潟縣高等女學校敎諭
入江好治郎先生編

第三版出來

小學校敎科用 123 唱歌集

洋裝美本全壹冊定價拾八錢 郵稅貳錢

本書は**本邦無比の良唱歌集**として江湖の喝采を博し發行以來未だ期年ならさるに**修正第三版を印刷**せり又六月十日の官報に記載の如く**今般文部省の檢定を了せり**されば本書の眞價は今改めて說くを止め聊か內容の概畧を述ぶれば其曲數二十有餘にして皆嶄新なり書中或は讀本中の歌詞を挿み或は遊戲用の曲を交へ或は子守唄手鞠謠等を加へ悉く假名遣に注意したるが如きは蓋し類を見ざる處とす殊に唱歌者心得書を掲げたるが如きは又本書特色の一なり

發行所 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

●榮譽●皇太子殿下御上覽●榮譽●

總裁公爵二條基弘君
議長男爵本多副元君

帝國少年議會

議事錄 每月一回十日發行 **見本**七錢

第貳期第六號 六月十日發行

口繪 帝國少年議會京都支部、三重縣上野支部、栃木縣中瑞支部、長野縣赤沼支部員寫眞石版。名家筆蹟(奧田義人君、上田萬年君)議員筆蹟名刺。

特別室 大日本帝國は如何にして統治せられつゝあるか篠田法學士、作文の心得記者、色の賦記者。

議場 忠孝兩全ならざることあるか議事錄改良に關する報告其他

短文 初夏文庫 作文、新躰詩、和歌俳句、漢詩、

餘興 **大相撲** 課題『杜鵑』は本會特色の新案和歌俳句新躰詩漢詩等取組勝負表等他に其比を見ざる新趣向也

豫告 來る七月十日發行第二期第七號より紙數三十二頁を增し每號百二十八頁の大冊となし入會金會費等如左

入會金拾錢會費一ヶ月金九錢半ヶ年金五十錢一ヶ年金九十五錢

東京市神田區千代田町二番地 **帝國少年議會** (電話本局四一四)

(丙の六)



第七卷　第八號　七月五日發行

口繪

●有栖川宮威仁親王殿下●紀州湯崎の景●希臘國王ゲオルゲオス一世陛下●佛國ルーヴル宮殿内部(以上アートペーパー)●ワルデルゼイ元帥●新内閣大臣●新任總務長官外風景種々

定價　一册金三拾錢○半ヶ年分(増刊共八册)金貳圓二拾錢○一ヶ年分(増刊共十六册)金四圓二十錢○郵税一册三錢

博文館發兌

(丙の八)

女學世界
第壹卷第九號
明治三十四年七月五日發行
紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

論説

社會の腐敗救濟

鳩山春子

我國に於て社會の腐敗を絶叫する、未だ今日より甚しきは非ずと思ひます。而して其原因は種々ありませう。

●第一　人智が進むに從ひ、生活の度が次第に高まり、人口が增加すれば、生存競爭も彌烈しくなります。左れば人々此世に立ち生を全ふするは、隨分容易のことではありません。常に眞心に刺激を與へ、己に守る所がなければ往々誘惑に陷り、已むを得ざる腐敗の行爲

を敢てするやうになりませう。これは維新以來我國に於ては、智育に比して德育を奬勵せざりし結果もありませう。

●第二● 人は槪して事情が許す時は、安逸怠惰專横に傾き易きものにて、克己、勤勉、反省等を厭ふ樣になります。これは人生の弱點であります。左れば常に或る制裁を以て之を警醒するに非ざれば、遂に腐敗に陷ります。

●第三● 人は重に其周圍の事物に依り、大に感化せらるゝものであります。淸く正しき音樂を聽けは、高尚なる觀念を起し。氣品高く敬愛深き人と談りては、野鄙の念は起りません。即ち有德の女性と交際する男子は、必す腐敗の氣を排斥するでありませう。之れに反して下等敗德の婦女子が陪する社交に於ては、漸次惡感化を受くるの已むを得ざるに至りませう。

家庭の團欒に女性の必要なることは、何人も疑はざる事で、之れと同時に家庭の淸濁は、其主婦の品性に依て分るゝ事も、既に一般に認めて居ます。社交に於ても何ぞ異なる事がありませう、社交を温め交際を圓滿ならしめ、快樂興味を多からしめんには、女性の必要なる事は申迄もなき事であります。

これと同時に、社會の清濁は婦人社會の輿論に依り、大影響を及ぼすことゝ確信いたします。

たとへば、先頃中より新聞紙等にて公盜とか醜類とか盛に論じましたが、男子間の攻撃は左程に刺激を與へぬ傾向があります。それは隨分公德に富む人をも、反對黨の奸手段とかにて誣妄する例がありますから、實際敗德の人々迄があれは反對黨の惡計なりと申、恬として愧ぢず、非理にても敗德にても、勝てば官軍たる有樣が見える樣に思ひます。

然れども、婦人社會には政治もなく、黨派もなく、野心もなく、たゞ人道の爲め愛國の至情により言論する事なれば、何人も之に向て怒る事なく、羨む事なく、誣ふる事なく、公平のものと認めませう。此の公平なる婦人社會の輿論に依り、腐敗の人を排斥したらむには、たとへ、其人惡運にて一時富や位地を得る事あるも、之を樂しみ之が爲めに幸福を得る事は出來ませんのみならず。到底其位地に永續する事は出來ますまい。

然るに我國現今の交際には、品格あり德操ある女性は抑へて之に臨ましめず。下等動物然たる商品然たる敗德の女性を以て、常に交際の興味を助けしめ、社會之を怪しまざるのみならず、主客之を無禮視せず、却て主人は客を待遇するに敗德女性の多寡により、其待遇

の厚薄を斷ずる如き考を有するものあるは、實に習慣の然らしむる處とは云へ、靜かに考ふる時は驚く可く歎かわしき次第で御在いませんか。

斯の如くにして社會腐敗をさらむとするも、隨分難き事と思ひます、全體男性は外界に於て、諸の職務と交際に於て、前にも述べたる如く、やむを得ざる惡感化を受け、誘惑に陷り易きものでありますれば、婦人社會にして愛國の至情と巧妙なる才智を以て、常に之が道德上の保護監督を爲し、絶えず之を警醒するに非ざれば、其社會は漸次腐敗に傾き墮落するものと思ひます。

泰西の文明と稱する國々に於ても、其男性は我國男性と大差なき事は識者は既に認めて居ります。其一例を擧げむに、彼等男子一度印度洋を經て東に向へば、遽かに氣風一變し、其行爲を謹まず醜行を耻ちざるに至ると申します。これ同じ男子にして本國の社會にありては、品行を誤まらず腐敗に陷らざるものが。故なく東洋に於て遽かに惡變化すべき理がありませうか。婦人社會の制裁なき爲めで、即ち婦人社會が道德上の輿論を作らざる爲めでありませう。

女性は概ね考慮周密なればよく正邪を觀察し、同情の念に富めば平和を保つに長し、謹愼

にして注意深ければ誘惑に陷いるとなく、且つ其熱心と勇氣と忍耐は幾多の困難辛苦に遇ふも、其神聖なる愛情を變更する事がありません。

敎育の力に依り婦人の此長所を適宜に發達せしめ、尙其短所たる偏狹に陷らしめず、よく其才智を延ばし其常識を養はしめ、家庭を整理して餘裕あらば、社會の狀態を公平に看破し、實行し得る度合に於て、啻に男女間の品行のみならす、社會一般に對する公共の爲め、諸種の腐敗罪惡を穩かに漸次救濟するに氣付かしめ、之を女性の最も名譽なる天職と認むる事を得は、其社會は智德並に進みて健全なるを得べき事と考へます。



家庭



飲食物に就ての注意

醫學博士　高木兼寛君

人間の身體が斯く自由自在に運動をして靈妙なる働きを致しますのは、原因があることで、其原因は何かと云ふに、即ち或る物質があつて、其物質が身體の中に於て斯くの如き働きをするのでありまして、極く／＼精密に組み立てゝありますもの故、此物を永く充分に維持するには、どうするかと云ふに即ち、飲食物を以て我々の知るべからざる所の精巧の機械を維持して行くので、食物と云ふものは人間の生活上甚だ必要なものであることは申すまでもない。然るに彼れは贅澤、是れは驕りだと云ふやうなことを云つて、食物には一向頓着をしない人がある。吾々の幼さい時などは殊に食物などは何でも宜しいものゝ樣に思つて居つた。今日もなほ斯う云ふ樣な考へを以て居るものが、世の中に甚だ多い、是れは實に、歎息の至りと思ひます。夫れ故に私は食物は、一體どう云ふ工合にして、食すればよいかと云ふことに就て御話を申上る積りであるが、先づ食物と云ふものには、自から成分があつて、野菜、穀類、肉類等、皆悉く滋養分を含んで居る、是れを區別すれば斯くの如くであります。

含窒物、含炭物、水、鹽類

と云ふこの四つであります。米を分析しても、肉を分析しても歸する所は此の四つの品物に外ならない。即ちこれ丈けのものを、一定の原則に從つて食用すると云ふことになれば、人の身體は無病壯健、即ち一年三百六十五日の間、毎日／＼働いて居りましても體重が減りもしない又病氣もしないことに成る。然らば其割合はどうかと云ふに、大約。

含窒物一　含炭物四

併せて五つのものを銘々からだの量目の百分の一を毎

日食すれば宜しい、即ち十五貫目ある人は、含窒物一、含炭物四の割合で出來たものを、毎日百五十匁食はなければならない。毎日百五十匁の食物を食つて働けば、夜に成つても疲勞を覺えず、翌朝に成つても氣分が爽快で又前日と同じやうに働いて往く事が出來るのであります。處で其分量は先づ、含窒物は三十匁、含炭物は百三十匁の割合で宜しい。此割合を過まらぬ樣に致せば、人は無病息災と云ふことに成ります。それならば斯ういふ割合に出來て居る品物が食物中にあるかと云ふに、世界中捜しても斯う云ふ完全した食物は、甚だ少ない殆ど有りませぬ。

細かに御話を申せば、長くなるから大略にしまして、只米と麥と云ふものに付て、御話を申上げます。米を分析しても、麥を分析しても、先に申したとほりの含窒物、含炭物、水、鹽類の四つに分かれる。然るに米の中に在る營養分と、麥の中にある營養分とは其の割合が違います。例へば今百匁の米を食するとすれば、米百匁の中には含窒物六匁、含炭物七十四匁ある。併しこれでは榮養が足りませぬから、米を二百匁食するとすれば含窒物十二匁含炭物百四十八匁になつて、是れでは一定の原則に照らして、蛋白質含窒物の不足なことと十八匁澱粉質含炭物の多きことと二十八匁になります。是れまで米を常食とする日本人は、蛋白質の不足をどうして居つたかと云ふに、豆の類で補つて居りました。即ち大豆、味噌汁其他の副食物で補つて居りました。米を澤山に食すれば、含窒物が不足で、含炭物が多過るから、胃腸の病氣を起し或は、脚氣病を起します。脚氣と云ふものは、全く此理に由つて起る病氣である。故に此病は自分の注意次第で豫防して往く事が出來るのであります。麥は二百匁の中含窒物二十二匁含炭物百四十四匁でありますから、米と比較して、含窒物三十、含炭物百二十の定則に稍々近う御座います。それ故に健康上より申しますと、麥を食する方が宜しいので御座います。米は二百匁食すれば、含炭物が多過き、百匁食すれば、含窒物が餘りに不足をする因つて、其不足を補ふために、牛肉なり、魚肉なりを御食りにならなければ

ばなりませぬから、夫れ丈け金を餘計に費すことになります。然るに米を廢めて、麥を多く食すると、金を費ひやさずに、金を出したと同じ丈の滋養物を身體の中に入れることが出來る。又百姓は粗食すれ共壯健なる理由に、含窒物の多き食物を餘計に食べて居る事が大いに關係をして居ることゝ思ふ。又中流以上の人の食物は含窒物の不足があるために、始終氣分が惡いとか、胃が惡いとか云つて、顏色も青褪めて居ります。原則に因つて食物を攝取いたしますると、人が病氣をしないやうになる、さうすれば長壽をするのは、云はずして明らかであります。皆樣に御注意を願ふ點は玆にあるので御座います。含窒物と云ふものは、鷄卵の白身と同じもので蛋白質と申します。含炭物と云ふのは、澱粉(葛)砂糖及び脂肪であります。で成るべく米を召上らずに麥を召上る方が宜い、もし米を召上るならば、分量を少なくして含窒物の不足は、魚獸の肉で御取りなさる樣に致したい斯くすれば即ち百才迄も壽命を保つことが出來るであります。

又米の中では何が一番宜いかと云ふに、一體米と云ふものは、神武天皇の御降臨前から日本に在つたものです。併し其頃から精米があつたのではなく、古來糙米、干飯、玄米とあつて、精米を用ゐたのは、近世のことで、實に、德川氏以來のことであります。加藤清正の七ヶ條の法令などに食米は玄米たるべき事と云ふことが書いてある、それを以て考へて見まするど、どうしても精米と云ふものは、古は無かつたものと思はれる。さうして此精米と云ふものは、あまりよろしいものでは無い。何故惡いかと云ふに、米の外側にある最も養分のある處は糠として捨てゝ仕舞ひ澱粉の最も多い處が殘つて居るものであります。皆樣は精米のが好と云つて喜んで召上るのは間違つて居る。食用としての價値の上から云へば、一番好いのは玄米、次に下白米にして、上白米は最も含窒物と含炭物との割合を失うて居るから衞生上から云ふときは、上白米は下白米、下白米、上白米と斯う云ふ譯になつて、玄米は最も食用に適すると云ふことになつて居る。是れ即ち古代の人が長く壽を

保つた一つの原因であらうと思ふ。古の人は燒米玄米等を多く用ひた、それ故身體も壯健で長壽を致した。然るに後世に成つて白米を食ふやうになつて、營養の權衡を失ひ生命を縮めた、之れをどうしたなら、宜いかと云ふに、麥を混用して、用ひるがよろしい。俄かに米を全廢ることは出來ませぬが私の考では從來は、日本中で米を四千萬石用ひたものならば、二千萬石に減じて、半分の二千萬石は販賣することにして、外國に出すが宜しい。一體日本の米は世界の市場に於て販賣すればなか〳〵價ひが高い故半分丈けは輸出品として外國に出し、半分丈けを食用として、其補ひを麥を以てすると云ふことになれば誠に一擧兩得である即ち一方に於ては外國に輸出して、利益を得、一方に於ては身體を壯健たらしむることが出來るのであります。麥は初めの程、慣れないうちは隨分食べ惡い、即ち先入主となり、好いものでも、初めはそれ程に價値の分からぬものである。併ながら慣れて見れば、麥の方が食する時の味も、食したのちの腹工合も好く、成程此の方が宜いと云ふ樣になるのでありますから、どうかすこしなりとも、御用ひ下さるやうに願ひたい斯くお勸め申すのは、決して高木兼寛が一身のためでは無い。國家のため同胞の體格を强壯にし、壽命を長く保たしめ、以て對外の策を施さんとするの意に外ならないので御座います。人と云ふものは一度決心をして事をなせば、何事も行はれぬと云ふことはない、況んや斯くの如きの些事、決して行はれぬと云ふことはありませぬ。併しながら中には、麥を食するのは、外聞が惡いと云ふ樣な點から宜いと知りつゝも自から等閑にするものも隨分ありますが、是等は眞に國家を憂ふる念慮の薄い人の言ふことで、斯樣なことから、人の譏謗を受けるのは決して頓着するには及ばぬ、苟も好きことであれば、速かに實行する樣に、自分は冀望を致して居ります。殊に何事も習慣が大切ですから一家の主婦と成つて居る方が常にかゝる事を心懸けて居つて小供などにも幼小の折から食べならさせれば決して〳〵厭ふものではありません終には嬉んで常食とする樣になります。

割烹實習

共立女子職業學校割烹教師　井上善兵衛　口述
岡野をりえ　筆記

▲玉子豆腐

玉子十個（大玉）をこはし、よく攪きまはし、羮汁三合、煮きり五勺、醬油二勺、鹽二勺半を入れて味をつける。』蒸器は丼、武力箱（淺き）、笹折、ありあはせたものにてよろしい、たゞ丼ならば其儘でよろしいが、武力箱、笹折のときは、美濃紙、端きらず紙のうちを底へ敷く、又笹折は破れ易きゆへ、周圍を麻糸等にて結ひ置く。』以上蒸器のうちへ玉子を移すときは、いくらよく混ぜた玉子でも裏漉へかける、滓などのないやうにするためである。』蒸籠の蓋は一方少許口を切つて置く、これは吹こぼれぬため、又七輪の口は塡いで置く、凡そこれで二十五分時間蒸し出してから、少しさまし、算木其他適宜に切つて、茶碗又は椀種につかふ。

▲蒲燒豆腐

豆腐を松露豆腐（前々號松露豆腐參考）の樣に作る、そこで紙湯葉一枚を四片に切り、一片每に指さきにて玉子を引く、其上へ幅五分位に切つた海苔を中央二分ほどあけて二行に並べる、玉子を引くのはこの海苔と湯葉と貼着すためなので、さてその上へ前記の豆腐をのせ指さきで凡そ幅一寸三分位に平にならし包みて湯葉の兩端を中央のところで合せて置く、』玉子燒器へ油を引き、其中へ右湯葉の豆腐を入れ、火へかけて兩面を燒く、』別に味淋一杯、醬油一杯を羮立てゝ、其中へ右油でいためた豆腐を入れて煮る、汁のしみた時分を見量ひ引上げ、殘の汁ばかりを煮つめて、引あげて豆腐の上へかける、』さめた時まんなかから二つ切りにして、竹串をうち皿へ盛る、精進料理の燒肴につかふと丁度鰻の蒲燒のやうである、又味噌汁の種につかつてもよろしい。

▲金糸芋

甘藷を長さ二寸位に切り、皮をむき、さらにくる〳〵とカツラにむき、小口より切る、

〔參考〕カッラとは筒にしたのを一端からうまくむき(甲)て、さらにこれを小口よりはやす(乙)と丁度糸の様にはら〳〵と亂れる、左圖のやうである。



右カッラは鉢の水に入れる、この水へ水一舛に鹽十五匁を加へる、かうして二十分間經ちて、別に鍋へ生酒一合五勺、水一合、砂糖八十目、明礬一塊(以上甘藷五百目につきての割合)を入れ、煮立たところへ、鉢の芋のカッラを絞つて、そのなかへほごしながら入れ、蓋をして一分時間程煮る、又裏かへして一分時間ほど煮る、手早く卸して皿へ盛る、これも口取の向ふ盛につかふ。

▲よせ胡麻

胡麻のごみをよせ除き、炮碌で煎る、煎れあがつたとき、鍋へといて、胡麻五合について、砂糖百目、鹽十匁、水飴三錢ほどを入れ、火にかけて砂糖のとけるまでかきまはす』。別に玉子燒器に油を引き(これは詰めたのを出すとき離しよきため)、これへ右胡麻をつめてよくならせばかたまる、堅くなりすぎぬうち、手ばやくあけて、庖丁を入れ、算木に切る、口取にもよく、又たゞの茶受けにしてもよろしい。

▲衣牛蒡

牛蒡の皮を小削けて水で洗ひ、新牛蒡ならその儘にてよろし、老大の時は四つ割位にする、玉子燒に油を引きこれで一寸右牛蒡をいためる。』別の鍋に煮汁一合、酒五勺、味淋五勺、砂糖十匁、醤油五勺、鹽五匁を入れ、十五分間煮立てる、夫より皿へとり汁のさめたところへ、メリケン粉を二摑み程入れる、汁のすくないときは、煮汁を入れてのばしてよろしい、(天麩羅のころもより少し堅い加減にして)、その中へ前記の油でいためた牛蒡を入れ、よく衣をつけて、互ひちがひに組みならべ、玉子燒でその兩面を燒き、さめたところで長一寸五分程にハスに切つて盛る、煮肴の前盛、又はこればかり丼に盛て侑てよろしい、

▲巣籠り雛卵

玉子十個を湯煮る（十五分時間）、皮をむき、白身と黄身とを分ける、もし白身へ黄身がついたら布巾でよく拭きとつ、純白にしなければいけぬ、別々にして白身と黄身とへは、各々鹽五匁、砂糖二つかみづゝを入れ、別々によくまぜて置く。『押枠、又は折どちらでもよし、下へ美濃紙を敷いて、白身の方を厚五分ほどに詰める。』黄身の方へはさらに又生玉子を割り、黄身丈をとつてこれを入れてかきまぜる引筒の中に入れて、白身の詰めた上へ端から段々に引く、引きつくした時、枠をぬき蒸籠へ入れて蒸す（二十分時間）、切つて口取りにつかふ。

〔注意〕、引筒、



形のもの、下の細き端に金屬製の吸とは澁紙製にて出しが付てある、これに外金と内金とありて、外金をはめると細く 内金ばかりでは太く糸を繰り出す、金團、又は烏羽玉の糸は皆なこれで引く、紙製ゆへ、前記王子の如きやはらかなものはくつゝき易い、それで先づ竹の皮を長さ四寸位にきつてこれでこの黄身の下包みをして、引筒へいれゝばしみ出す恐れがない、紙筒ゆへに外部から手で握り加減に押し出しつゝ引く。引筒は乾物屋に出來合がいくらも賣りにある。

△昆布じめ

酢の魚を昆布で巻いてきつたのを昆布しめといふ、これを作るには、まづ青昆布を水に浸けて置き、これを鍋へとつて昆布のかぶるほど煮汁を入れる、煮汁へは酢五勺、砂糖五十目、生酒一合（これは昆布七八枚の割合）これで凡そ二十分時間煮て、柔らかになつた時に、板の上へとつて放冷して置く。』一方、鯛なり比目魚なり、鯖なり、鰺なりを三枚に卸し、鯛比目などはすき身に作り、鹽を強くあてゝ十五分時間そのまゝにして、後に酢をかける。』前の昆布は長二寸位に切つて、右魚はこの昆布にあはして切り、生姜をセンにしたのを入れ、これを昆布で巻く、巻いた分は角枠のなかへ入れて上から蓋をして、重き壓石をする、二十分時間經て取出し、厚五分位に切りて、これも口取り物につかふ。

△隠元共粉きんとん

隠元一升を水から鍋へ入れ、皺のよるまで煮て、それを度に水を取替へる、こう水を替へる事三度ほどで、三度目には火を緩くして豆の腹のきれるのを煮え加減にして鍋を卸し、其儘十分時間蒸して置く、それからこれへ手を入れるによいほど水を加へて、崩れた豆と崩れぬ豆とを選りわける、崩れた豆はコロモの方につかふ、』コロモは煮た豆の三分の一つをつかふ、崩れた豆はこのうちへ加へて共に裏漉にかける』。一方のこした三分の二の豆は鍋へあけ、豆のひた〱になる程にアク引の砂糖と鹽五匁程を入れる、

〔參考〕アク引砂糖とは鶏卵の白身で砂糖のアクを取つたもの、其製法は砂糖五百目へ鶏卵一個の白身半分を加へ、よく手でこね、水五合を入れ、火へかけて煮立てる、煮えるに從つて。汚物が浮く、其時は一寸水をさして手早く其汚物を除く、幾度もこうして汚物の全く除けた時、鍋を卸して放冷せば、透明な砂糖蜜となる、アク引砂糖とはこれで調味には至極よろしい。

右アク引砂糖を加へた豆は、七輪の口を塞ぎ、こと〱緩く煮る、アク引砂糖の凡そ半分程煮つまつた時、裏漉にして置たコロモの方をこれへ加へる、勺子をつかふと豆が崩れるゆへ、コロモを入れると同時に、焦げつかぬやうに布巾で鍋の兩耳をもつて左右に動かす餘程氣をつけてやらぬと、至て焦げつき易い、愈々煮つまつたら、皿へあけて放冷す、こうしてよく煮あげたのは盛暑でも三日間位は風味が損じない、口取りの向へ盛りにつかふ。

▲金柑甘露煮

金柑にはまん丸なと楕圓とがあり、楕圓の方がよろしい、薄く上皮を剝き、四方から縦に庖丁を中心まで入れ(切り放さぬやう)、水にとり、一方鍋に湯を煮立て、その中へ入れ、十分程煮て又水に取る、鰻の串で庖丁の入れ目より種子をかき出し、蒸籠へ入れ十分間程蒸し、放冷して鍋へとる、アク引砂糖を金柑のかぶる程入れて、其上へ美濃紙をかぶせ、とろき火でゆつくり汁の煮つまるまで煮る、これも口取りに五個位宛盛る、又罐詰

にして菓子の代用にする、(もし急がぬ時なら、前日湯煮をして水に浸し一日置きて、翌日煮れば風味が尚よく出來る)。

▲木の芽合ひ

木の芽五合をよく摺り、その中へ白味噌百目を入れ、又よく摺る、これへ砂糖五十目と味淋五勺を入れ、摺つて裏漉しにかける。』別に鍋に味淋五勺を入れ、前の味噌を入れよく煉ッて置く。『材料は蓮根、筍、獨活などを用ゐる、竹の子は湯煮て斜に切り、蓮根は亂切にして湯煮をする、(これは時間のない急場ゆへでもしゆるりとするなら、全て湯煮をしてから切る方がよろしい)。湯煮をしたのは、皆水にとつて置く。』鍋に煮出し一合五勺、醬油一合、砂糖十匁、味淋五勺を入れ、これで右材料をさつと煮て、前記の味噌を交ぜる、寒い時は味噌も材料もあついのがよろしい、又烏賊を入れるときは、これも味淋と醬油とでざつと味をつけてまぜる、これは丼ものにつかふ。

▲肉五もく

牛肉一斤半、豚一斤、パン半斤を合せて作る、先づ肉はよくたゝき(豚肉は一寸湯煮をして脂をぬく)、牛豚肉ともまぜて摺鉢へとる、この時パンと鹽十匁を加へる、(パンは半斤を水にひたしふくらむだとき、外皮を除きなかのやはらかき部分を布巾にとり絞りて入れる)。摺鉢でよく摺りあげたところへ、煮出し一合ばかりと砂糖二十目、煮切り五勺、醬油五匁を入れ、再び摺る。』一方には新牛蒡と人參を細々に切り、サッと湯煮をする、これも又一寸煮汁と醬油少量と砂糖十匁で煮て、さめた時、前の摺り肉の中へ交ぜる。』まぜ合した肉は客の頭數丈にまるめて、板の上に置き、さらに又饅頭形に手にて直して、これを玉子燒器の油を引いた中へ入れて一寸火でいためる。』別に鍋へ煮汁醬油、砂糖を加へた汁を作り、油でいためた肉はこれへうつして煮る、勿論煮るには煮笊を用ゐて崩れぬやうにする、煮へたら笊のまゝあげる。』あとの汁はさらに汁ばかり煮つめる、その時は饂飩粉を入れどろ〱の汁に作る、このどろ〱を煮あげた肉の饅頭の上へかけ、胡椒をかけて侑

める、これも丼物につかふ。

食物の貯藏法

本多幸子

凡べてものは何幾澤山あるからと云つて、貯へると云事を知るなかつたならば、其少しの部分は役に立ちても、用ゐない所は廢物になつて仕舞ふでありませう、譬へば金錢にしても不用の分を其儘に仕舞つておいては、只紙片や金塊が轉げて居るばかりで有りまして、一向世の中の役には立ちません、之を銀行とか郵便局とかへ預けるといふ貯へ方をしたならば、其金錢が世にどんなにか活動しましせう、それでもまだ〳〵金錢の如きは假令只仕舞つておいても、用ゐ樣と思ふ時にはそのまゝ直に役に立ちます、併之が食物で有つたならばどうで有りませう、澤山あるからと云つて一度に食べて仕舞ふ事は出來ず、其儘仕舞つて置いては腐りて全く役に立たなくなります、それてあるから適當の貯藏法を知りて、腐らせぬ樣無駄にならぬ樣にする事が肝心であります、實に貯藏といふ事は、日常の經濟上からも此樣に大事であるばかりでなく、殊に饑饉戰爭旅行等の時は、如何に之が大切であるかを一層深く感ずるでありませう、若し不意の天災などの爲に一年の收穫が悉くなくなつても、前年からの穀類が貯へてあれば、飢ゑに苦むといふ悲慘な有樣を見ずに濟みませう、又戰時にあつて兵士は敵地に深く入り込みたる時、國に食料の貯藏十分ならぬ爲に、兵糧が斷たれたならば、數萬の忠勇なる兵士をして、空しく異域の鬼とならしむる悲みも見るでありませう、又旅行とても今の開けた國々を歩行く樣に、至る所容易く食物を得らるゝならば、貯藏の必要は夫程ありますまいけれども、昔の不自由な時代には、自分の食べる米や炊ぐ器を背負つて歩行いたと申ます、古歌に

　家にあれば笥にもる飯を草枕
　　旅にしあれば椎の葉にもる

とさへ云つた位であります、今でも臺灣の學校では土

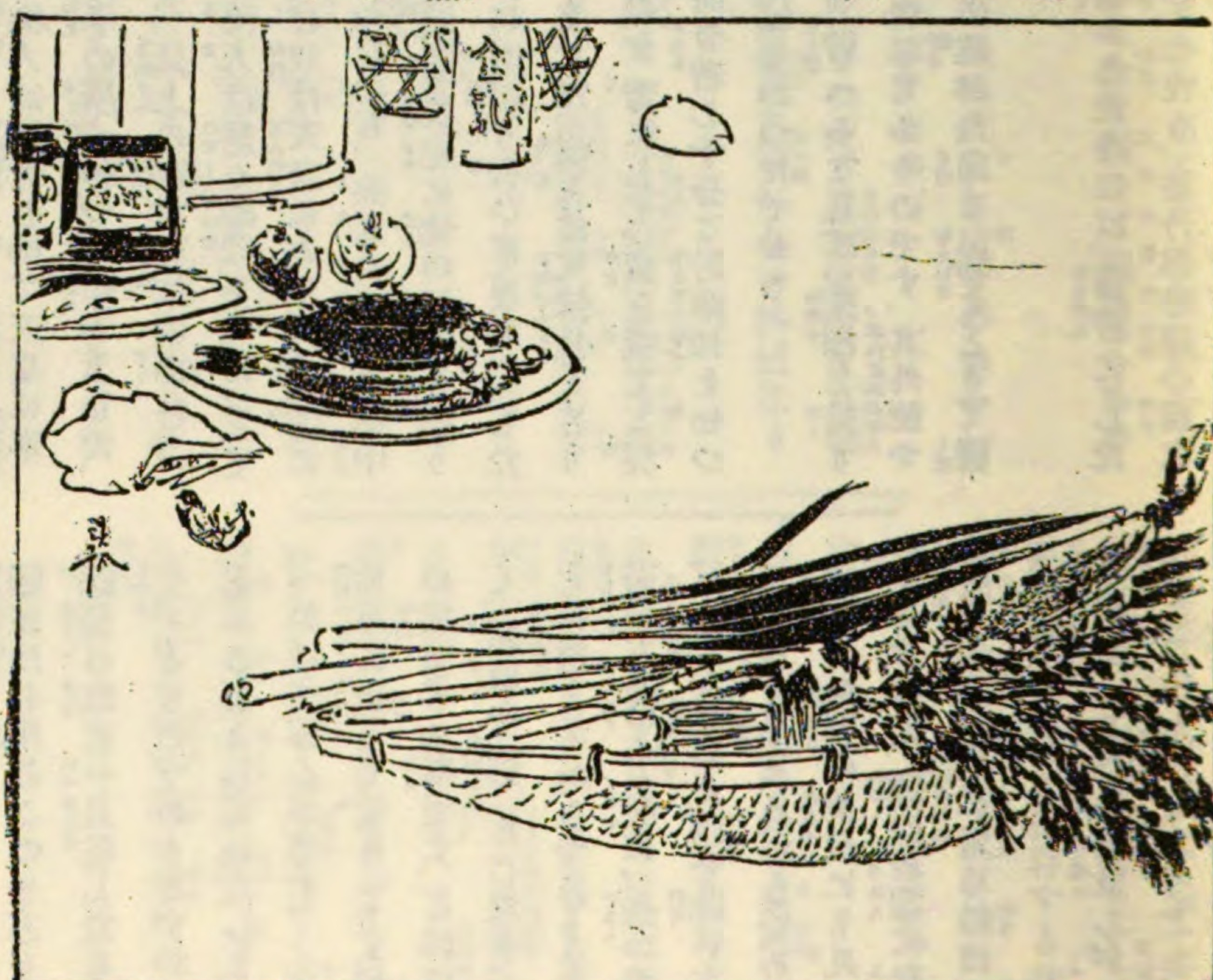
人の生徒が學校へ行くのに、晝飯の爲に毎朝學校用具と一所に米は勿論、七輪まで揃へて擔いで行くそうです、であるから昔に限らず今でも此樣に開けぬ所へ行く時には、やはり食料を貯へて行く必要があります、其他航海をする時には、實に幾日となく陸を見ぬことがありますから其間の食物は悉皆用意をして置かなければなりますまい、して見れば貯藏の方法がます／＼必要であるといふことが分ります、偖其貯藏法は昔からも行はれて居て、普通なのは水分を取り去る事即ち乾かす事であります、例へば干瓢椎茸等の如き乾物で何故斯樣にすれば腐敗せぬかといふに、凡べて水分のあるものは黴菌が發生し易いから、其水分を取り去る爲に乾燥させて貯へるのであります、伊勢物語に三河國八橋のほとりにて、故郷を慕うて或人が歌をよみました處が、恰ど其時乾飯を食ふとしてゐた人々が、その歌をきいて大變に感じて乾飯の上に涙を落したために、飯が皆ほとびたとあります、今一の方法は鹽をふることであります、鹽をふれば食物の中に含んで居る、腐敗し易き物質を腐らせぬ働きをするのであります、（之に付ての詳しい事は別に申ませう）例へば鮭鱒鱈等の鹽引とか、其外鰺や鰯を鹽物にしたのも皆此法に因つたのであります、

今はこれよりもつと進歩した方法を用ゐます、即ち空氣の流入を斷ちて黴菌を撲滅する法で、例へばいろいろの罐詰の樣なものであります、

是までは、貯藏法の極大體をかいつまんで御話申ましたが、是から各の食物に就て一々申述べ樣と思ひます、併し素人の手で容易く出來ぬ事を、申ました所で仕方がありませぬから、今は恰ど夏に向ひ追々物が腐り易くなります故、極手近いものに付ての貯藏法を御話いたしませう、

◎飯　夏向は飯の腐る事が誠に早く、昨日炊いた飯が翌朝は腐り、甚しきは朝のが晩には水づくといふ事がまゝあります、斯樣な事が屢々では、實に不都合な斗でなく、大不經濟であります、これを全く豫防するといふ事は、まだ分りませんけれども、左の如くすれば、幾分

か腐敗を遅からしむることが出來ます、
飯を竹笊の中に入れて、簀蓋をかけて風通のよい所に釣つて置く事、
飯櫃の下に臺を置き下に冷しき風を通ぜしむる事、
蓋にたまりたる湯氣をよく拭ひて飯の中に落ちぬ樣にすること、
飯を盛る時にほぢらぬこと、之はよくすることで、焦を高く殘して谷底をこしらへますが、行儀の上からも甚よろしからぬ事です、尙炊き方研ぎ方にも關係しますから、序に申しませう、米のとぎ方は十分によくといで、而も粒を碎かぬやう注意してとぐのです、若磨ぎ方が惡いと炊いてから、糠くさくて其上早く腐ります、



炊く時に酒又は酢をごく少し入れゝば、腐りを防ぐ一つの法となります、
若し腐りかけた時は、早く日向に乾して乾飯をつくるのであります、これ即ち水分をとる譯です

◎魚 ●魚は食物の中でも甚だ腐りやすく、貯藏に甚だ困難なものです、これについて一つのお話があります、昔仁德天皇樣と菟道稚郎子と、天位をお讓りあひ

になりました時に、一人の海人が鮮魚を得て天皇に奉らうと思ふて、先菟道稚郎子の所へ持つて參りました、稚郎子は我は天皇にあらず、兄上の在す難波に進むべしと仰せられましたから、海人は態々難波まで持つて參りますと、又大鷦鷯皇子は我は天皇にあらず、菟道に參らすべしと仰せられましたから、海人の鮮魚は途中で腐りてしまひました、夫から又更に他の鮮魚を捕りて獻じますと、又前のやうにお讓り合ひになりましたから、鮮魚は又腐てしまひました、海人は又鮮魚をとりに行かなければならないのを苦にして、魚を棄てゝ哭いたといふことです、此時分若し十分な貯藏法を知つて居たならば、哭くにも及ばなかつたでせう、

閑話休題先づ生のまゝで貯へるならば、生洲を造りて其中に放すか或は氷詰にしておくのです、其外鮎や香魚の樣に白燒にし、又前に述べた通り腸をとりて鹽をふりおく事、

一般には澤山のものを貯蓄するためには、蒲鉾にしたり、白子乾田作の如く干物にしたり、雲丹海參腸の樣な鹽藏法を用ゐるのもあります、

鰹節は既に一旦乾したものでありますけれども、黴を生ずるものでありますから、これを貯へて置くには、酒をふるをよしといたします、そして風のよく通ずる所へかけておくのです、

倘序に申して置きますが、食物には凡べて蠅のたからぬ樣にする事です、これは單に不潔ないと云ふ斗でなく、腐敗の媒をしたり、又かの恐るべき傳染病の病毒を傳播するからであります、

若魚を食する際に、些かでも腐敗の懸念が有つたならば、皮と腹のそばを除いておあがりなさい、夫は其部分から腐り始めるからであります、

◎卵　此事は前號にも見えましたから、格別云事はありませぬが、殼の表面に付着した不潔物を取り去りて、風通のよい所に置くのは、極手近な貯へ方でありませう、

◎野菜　これは腐敗しがたきものですけれども、所謂直にひからびて水分を失ふものでありますから、一寸

貯へておくには湿ひたる蓆をかけるとか、土間におくのがよう御坐います、芋類等は土を掘つて埋めておけば永く保ちます、

其他いつまでも長く保たしむるには日に乾すのです、例へば乾大根芋柄干瓢椎茸の如きもの、

右の様に既に乾して仕舞つたものは、其置場所と入物とに氣を付けて、濕氣の付かぬ様に貯へなければなりませぬ、

又漬物にするも一種の貯藏法です、其種類は味噌漬麹漬糠味噌漬砂糖漬等であります、此内普通に何處の家にもあるは糠味噌漬ですが、これは何でも古いのがよいと云つて、中には蛆のわいた様に成つたのを喜んでる人がありますが、これは甚よろしくありませぬ、

◎果實　果實を生のまゝで貯へ様とするのは、普通は其皮に傷の付かぬ樣に注意する事で、それは傷がつけば、そこから黴菌が這入やすいから、從つて早く腐るのです、林檎や梨子を紙に包んで、すれ合はぬ樣にするのは、即ち此爲であります、

栗は瓶に入れて口を封じて逆しまに、土の中に入れて置けばいつ迄も保ちます

其他乾燥させて保存する仕方があります、乾柿搗栗乾葡萄の如きもの、又は柚の砂糖漬梅の鹽漬などの如く、漬物にしても貯へます、これらの譯は云ふに及びますまい、

◎牛乳　これは最も腐敗しやすきものであります、其貯へ方は先煮て貯ふるをよしと致しますけれども、僅に沸騰した斗ではいけませぬから、とろ火にて卅分間程煮て居るのがよろしうございます、

序に申ますが、若一日程おいて腐さつたならば、メリケン粉にこれを交へて卵を落し、小さなかたまりが出來る程の固さになし、まるめて豚の脂で揚げますとおいしいお菓子が雜作なく出來ます、

◎酒　酒は木製の樽へ入れておくと早く腐りますから、成可く硝子製か何かの瓶に入れて、密閉して冷たき所におくがようございます

室內裝飾 (夏向の用意)

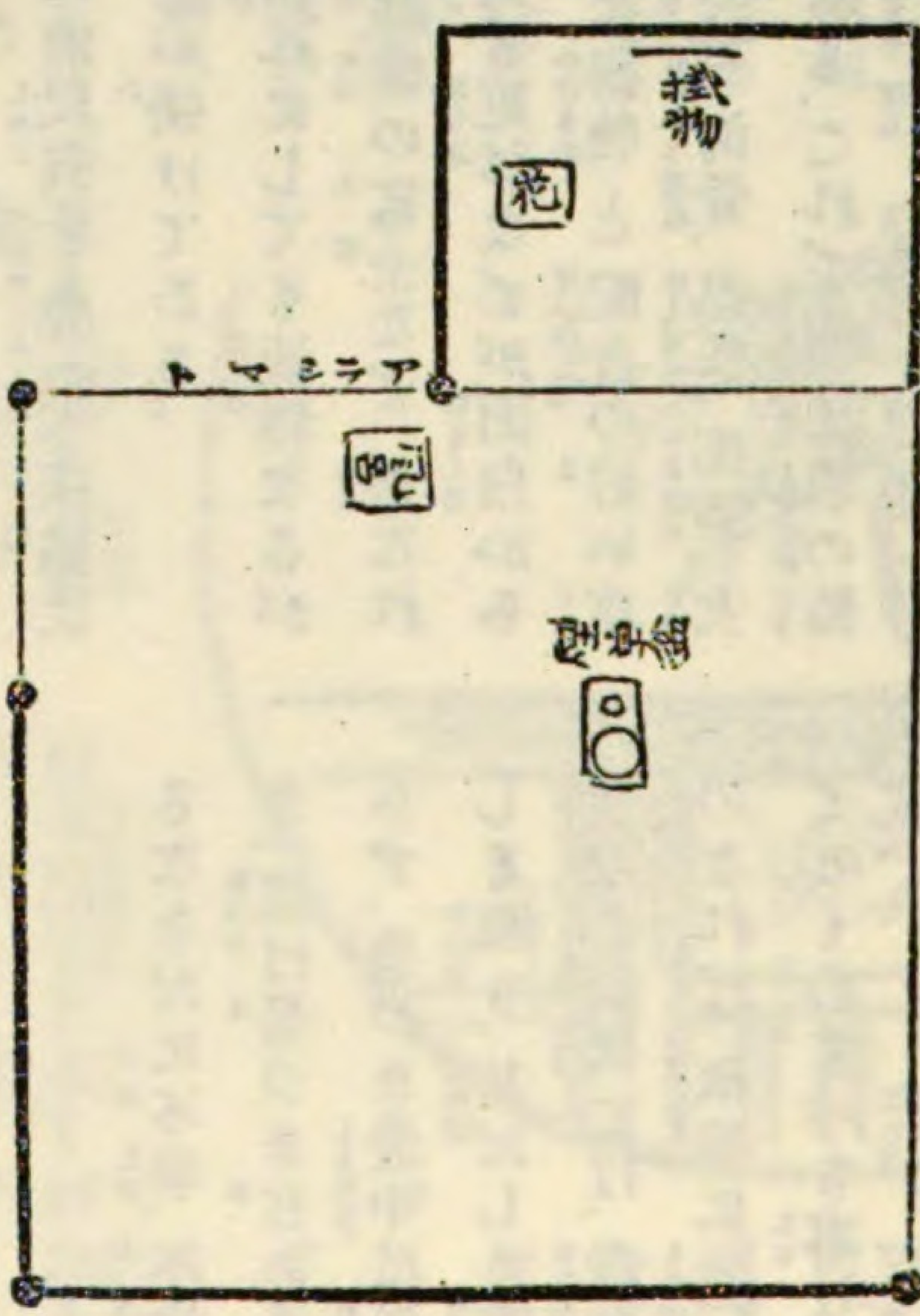
華族女學校教授　近藤嘉三

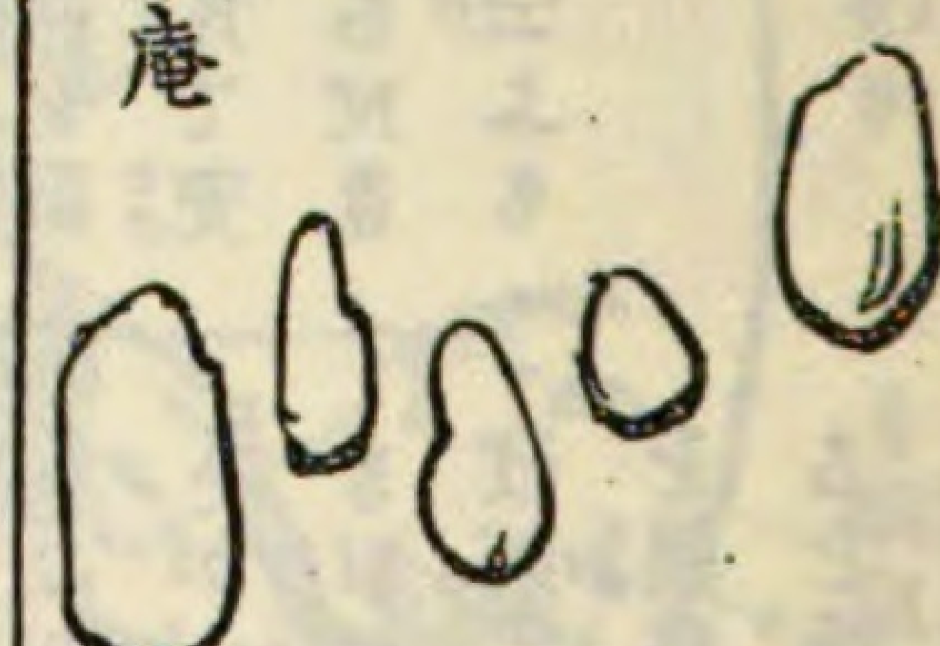
居室裝飾上の要求は種々あれども就中餘裕と相應の二つは殊に大切であると思はるゝ、即ち一寸床の間の飾に就て云へば、こて〳〵と種々の物品を陳列するよりも一點か二點、しかも、わざとらしからず配置した方が遙かに上品に見ゆる、それから相應、言葉を換へて云へば似合しいと云ふことも大切である、即ち居間は居間らしく客間は客間らしく、食堂は食堂らしく、化裝の間は化裝の間らしくありたいのである。然に近時我が中流以上の邸宅の裝飾を見るに、この餘裕と相應の二點が缺て居て窮屈で、そしてらしからぬ方が多かの樣に思はるゝ、例之ば床の間に置てある、調度の如き實に蕪雜亂調極つて居る、活花もあれば盆栽もある、書物があるかと思へば、牛や人物の置物もある、その外、棚にも机にも種々の品物が陳列してある、加之も俗氣紛〳〵たるものが——如何ほど價高く貴重なる珍品にても斯樣に置き列べては全く見る眼もくるしい 恰も骨董店か勸工場などへ參た樣な心持がする、たとへ價は貴からざるも、又珍奇の品でなくとも、その配合の模樣に由ては隨分裝飾上の光彩を副ふることのあるものである、刺身の傍には獨活や山葵の樣のものが大切である、啻に大切である計でなく非常にその必要を感するものである、これが所謂配合の妙と云ふものであらふと思ふ、寶石や、金剛石や、金銀を鏤めたる器物、調度、貴重ならぬではない、然しこれ等計を以ては決して裝飾は完成し得らるゝものでない、もし抱一、光琳あたりの筆に成る所の此節なれば、夕顏か何かを畫ける淡雅なる幅か、それでなくとも儒者禪僧なとの尺牘位を壁間に展して、竹筒に山百合花か撫子の二三も挿けて、謠本の四五冊も飾りたるはその清趣品致却て前者よりも優りて見ゆる。

それから似つかはしいと云ふことであるが、之は獨り書齋は書齋らしく食堂は食堂らしくと云ふ計でなく寺院は寺院らしく住家は住家らしく今少し詳細に申さは

紳士の住居は紳士の住居らしく商家の住居は商家らしくありたいのである、紳士の住宅の裝飾が待合や料理店めきたる官吏の坐敷が博物館の如きは決して相應したると申されぬ、今日上流の人々、世間から紳士とか何とか云はるゝ輩の住居の裝飾を見るに、寺院の佛像や佛卓の置てあるかと思へば楣間には油繪の扁額が掲げてある、又その傍には七寶や九谷燒の花瓶や香爐がある、一方には刀劍の類があれば甲冑や具足なども陳列してある、恰も遊就館か博物館を見る樣な心持がする今少し下調の所では横濱あたりの雜貨店へ行た樣のもある。或は應擧、景文等の僞物の繪畫を金爛表裝にした綺羅々々しい幅が掛つて居て金銀の象眼をした花瓶に何流とか何派とか云ふ俗氣の多い挿花が甚ひのは二瓶も置て布袋や牛の置物が布團の上に飾てあると云ふ躰裁、どうも少しも優雅とか清素とか申す趣味はない、そして傍の朱檀の棚には手携鞄など迄置てある、居間だか客間だか少しも分らぬ、これが先づ今日の中等社會の坐敷飾。この裝飾は主人公がホテルや待合茶屋から習ひ得られた得意の意匠、それでなくば奥方が小説の口繪などから覺えられたる飾付である、これがどうして東洋美術國の居室の裝飾と申されようか。

四疊半草庵





小間の飾　茶室

あらがねの土さへ裂ると云ふ炎熱の季節、大厦高樓の内に籐倚子に安臥して居ても猶暑苦しひ頃、四疊半か六疊の淸素なる草庵に葭簾吹く綠陰の風を受け、風呂の松濤に浮世の俗腸を洗ふは又別に

涼味の掬すべきものがある

この一室は四疊半、東南の二方は障子で、床脇は嵐窓何れも半は蘆簾を掛く。床は四尺五寸疊敷、床脇に敷瓦を置て荒れ風呂に雲龍釜が掛けてある。

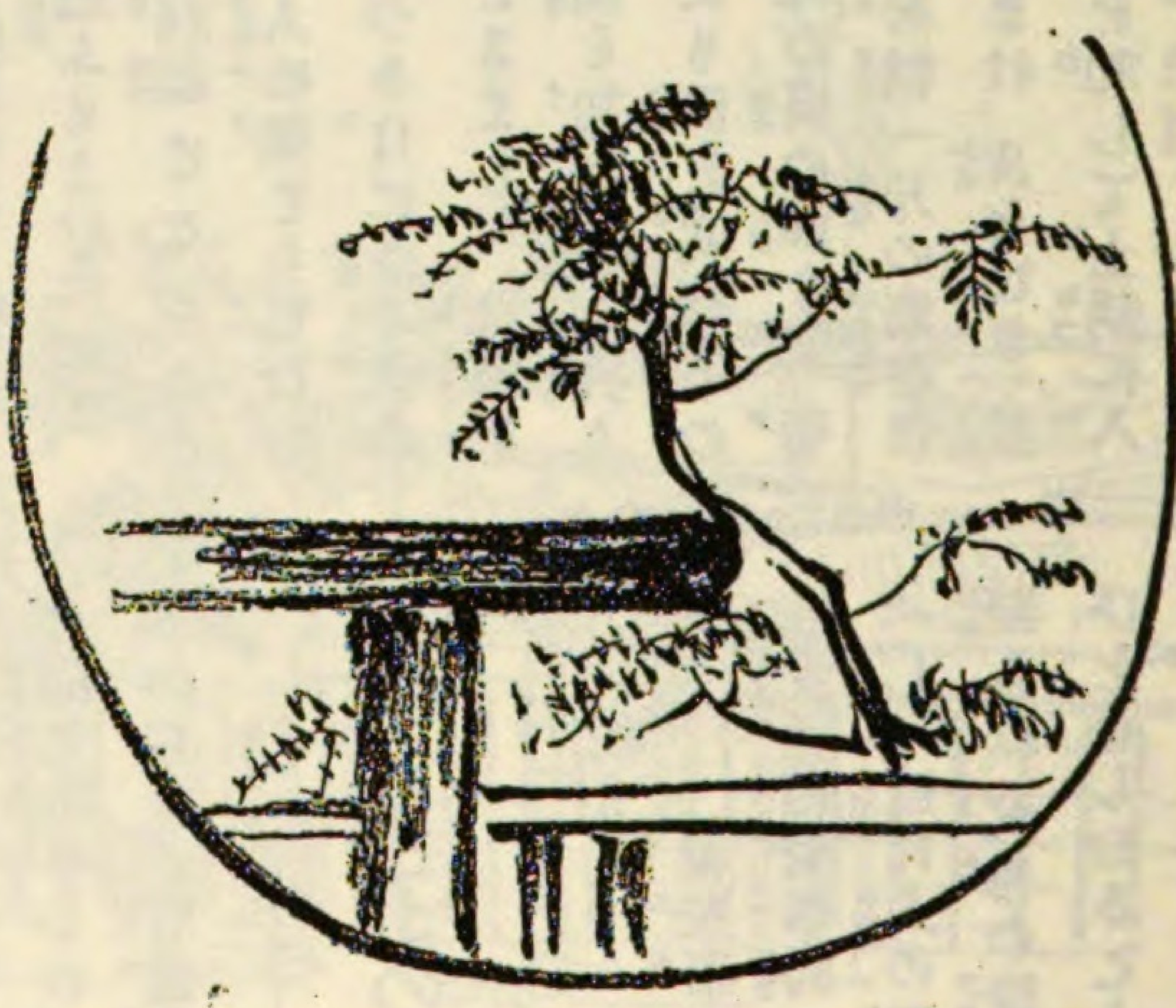
○床は掛物と花。掛物は書畫何れにしても淡雅なるが好い、繪なれば蘆雪か何かの疎筆の富士など、書なれば俳句の經言の類しかも表裝も更紗などが面白からふ、花は青磁焼か古銅の花器に掛物と配合の好い草花を一二本挿む、四季咲の杜若、河骨、忍冬、蜀葵、女郎女のはしり、種々のものがある、これで床、床脇の飾は充分であるそして平たい煙草盆に竹青の灰吹を副へて客坐の前に置く。軒下から庭の飛石まで凡て充分に打水をする、餘瀝のほと〳〵と滴る所、そらだきの香の燻ずる所、まあこの邊には世の炎暑と云ふものは少しも無い樣な心地がする

夏時の看護法

春江女史

さなきだに不幸、不愉快なる病人は、此の頃の如く寒き、或は暑つき日ある時は、格別の注意を拂はざるべからず、暑つき暑中は温躰却て暑さに平均を得て、耐へ好しと雖も、甚だしく寒きかと思へば、又た驚く程の暑さとなる氣候には、虚弱なる人々は、特とに堪へ難たきものなれば、氣候に隨ひて、衣服、室內、食物等何にくれとなく心すべき事なり。寒き日には日光の當りのよき南に近かき處に、病人を携ゆるとか、綿入を衣せしむるとか、火鉢を與ふるとか、それ〳〵の手當を爲し、暑つき日には風すきの好き方に床を向かわしめ、能ふべくは、常に二個の臥床を備へて、夜の臥床と晝の臥床とを異にし、變る〳〵掃除せば、患者に一種の愉快を與ふるを得べし、夏時は特に床の温まりたるは心地よきものにあらざれば便所へ行きたる後等を見計らひて、床を變しをかば、重き病人等には特に快よきを感ずる者

なり。度々患へるは已に經驗もあるへし、病氣の時は枕が善し悪しによりて、大に慰を得ると得ざるの別あれば、枕の中には水鳥の綿毛を煮て乾かしたるものか、若しくは白馬の毛を以て作らば之れに越したるはなかるべし。もしそれを得がたき場合には、茶の出しがらを乾したるものか、そばかすにても枕の袋一ぱひに入るれば、又た可なり。病人の安眠を得ざるもの、或は談し合手のなきもの等は、水の滴るゝ音を聞かしむるは甚だよし。元よりやかましき音はあしかるべけれども、ホト〱と雨たれ位の音は、腦を安すむるの益あり。特とに香氣の猛けしからぬ花を、時々種類を變へて眼前に供するは、大に慰めとなるものなり。中にも最も看護の必要あるは、食物なり。暑さの時には特と更らすゞしき日と雖も、病み臥したるものは、食慾の大に減ずるものなれば、之れをはげますべき食物を種々に取りかへて、供するは、家婦主一の事業なるべし。之より病氣によりて、食物の利害用不用を異にするが故に、一がいには云ひ難たけれども、さしみ、煮過ぎざる魚、煮過ぎたる牛肉、スープ、雞肉、半熟卵子、牛乳等は、滋養物として缺ぐべからざる品なれども、時にさつぱりとしたる野菜ものは、又た必要なることを忘するべからず。脂のひつこきてんぷらの如きもの、或は多量の酢は、大ていの病人には害あるも益少なかるべければ、凡ての病人の食物は、一々醫師のさしづを受けて、最も適當のものを與ふべし。食物によりて下痢を起こし、或は不消化を起すが如きことあらば、千日に刈つた萱を、一時に火くの悔を招ぬくことあるべしたとへ患者の好むものなればとて、醫師の免しを得ざるものは、一時姑息の



情に流がれて後悔せざらんため、嚴しく與へざるを勉むべし。看護人にして嚴びしき時は、患者もあきらむる故に、左程にほしかるものにあらず。又た堪へがたき者にあらず。病人に柔しくすべき必要のある時は、いかにも柔しくして、言ふ通りに隨ふもよけれども、藥の事、食物の事等の如き、病人の不利益となることは、嚴守して、一歩も曲げざるとを病人に覺とらしむへし。これ反て眞の愛なればなり。暑つき日に多く飲みものをほしがる時は、煮たちたる湯をさまして、砂糖を加わへその一合に付き、稀鹽酸五六滴を加わへて、與ふれば、渇を止むべしこれは健康の人にも渇を止むるの功ありて、旁々美しき飲み物なり。此の頃の如き梨、葡萄の多き時候には、果物一斤に付き、砂糖一斤の割合にて必要の量丈けの果物を皮のむくべきは、皮をむき、蔕の去るべきは之を去りて。少量の水を和して土鍋に入れ暫時煮たる後、砂糖を加わへ、又暫時沸騰せしめて、その汁のみを瓶にうつし入れ井戸にでも冷やしをかば、無聊を慰むるの好飲料なりとて無聊なりとて菓子を與ふるは何病に拘らず必らず害あり、外科の甚だしきものにして運動を忌むものを除きては、大低の病人は或は床をかゝげ、或は少々つゝの運動を爲さしむるは益なるべし、外科内科の差別なく、空氣の變動なきは、庭の面を眺めしめ。或は美しき畫本、面白き談話等は缺くべからざる看護道具なり。

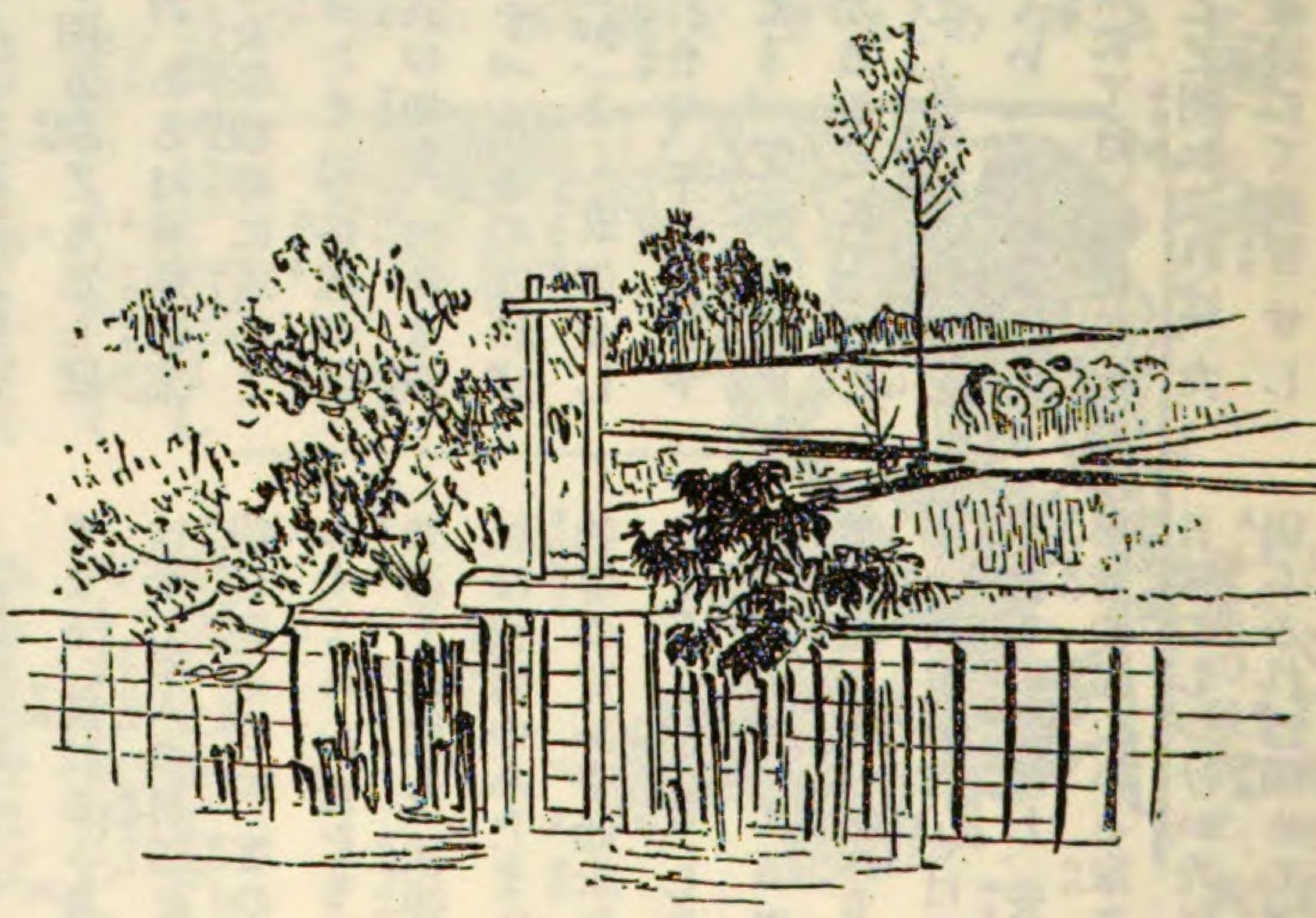
女子の家庭教育

塚本はま子

◉家事に熟れしむべし

女兒に家事的の教育を施すは、極めて幼き時よりすべし。既に人の言葉を解し、立ちて自在に歩行するに至らば、父母の膝元にてその身にふさはしきこまづかひをせしむること、たとへは新聞紙を父親のもとに持ち行かしむるとか、郵便物を母親にはこぶとか、いふの類をなさしむれば、女兒は喜びてこれを果たすべし。總て小兒は、人の爲に何事をかなさんとする念に富め

ふものにて、多くの小兒を幷べて、誰とはなく用事をいひつくる事あれば、各々先きを爭つてなさんとするほどのものなれば、その法を得て、つかひならさば、決して骨惜しみするが如きことはなきものなり、ことに女兒の好むまゝごと、おねさまごとなど、何れも家事の雛形として奬勵すべき遊戯なり。幼稚園にも出入し、小學校にも通學する時期とならばその手にかなふことは、衣服の着こなしにせよ、辨當書物包の如きにせよ、その不束に無調法なるをもどかしとせで、氣ながに敎へ導きて、自分にて始末せしむるやうすべし、これ筋肉の自然なる發育をたすけて、自在に活動なし得る基礎をおくに必要なるが爲なり。かの多くの侍女ある



上流の家庭に育てる女兒は、年たくるまで帯結ぶすべ足袋はく道をも知らず、甚しきは、學齡に達してなほ獨にて食事をなすことかなはぬも珍しからずときく、これもとよりそのうまれつき不具なるにもあらず、或る局部の筋肉が、發達せざるが爲にもあらず、たゞ侍女等の世話行き届きすぎて、十二分の干涉をなし天稟の能力を押へて自然の發育を妨げしに過ぎず、まことに氣の毒の至りといふべし。中流以下の家庭にては、かゝる不幸に遇ふは稀なれども、時としてはこどもには何事をもせしむるを面倒なりとし、自進みてお膳だてをし、兩親の給仕をせんとするを、叱りこらして手をつけしめず、かゝる事は下婢のすべき事なりなど、敎ふ

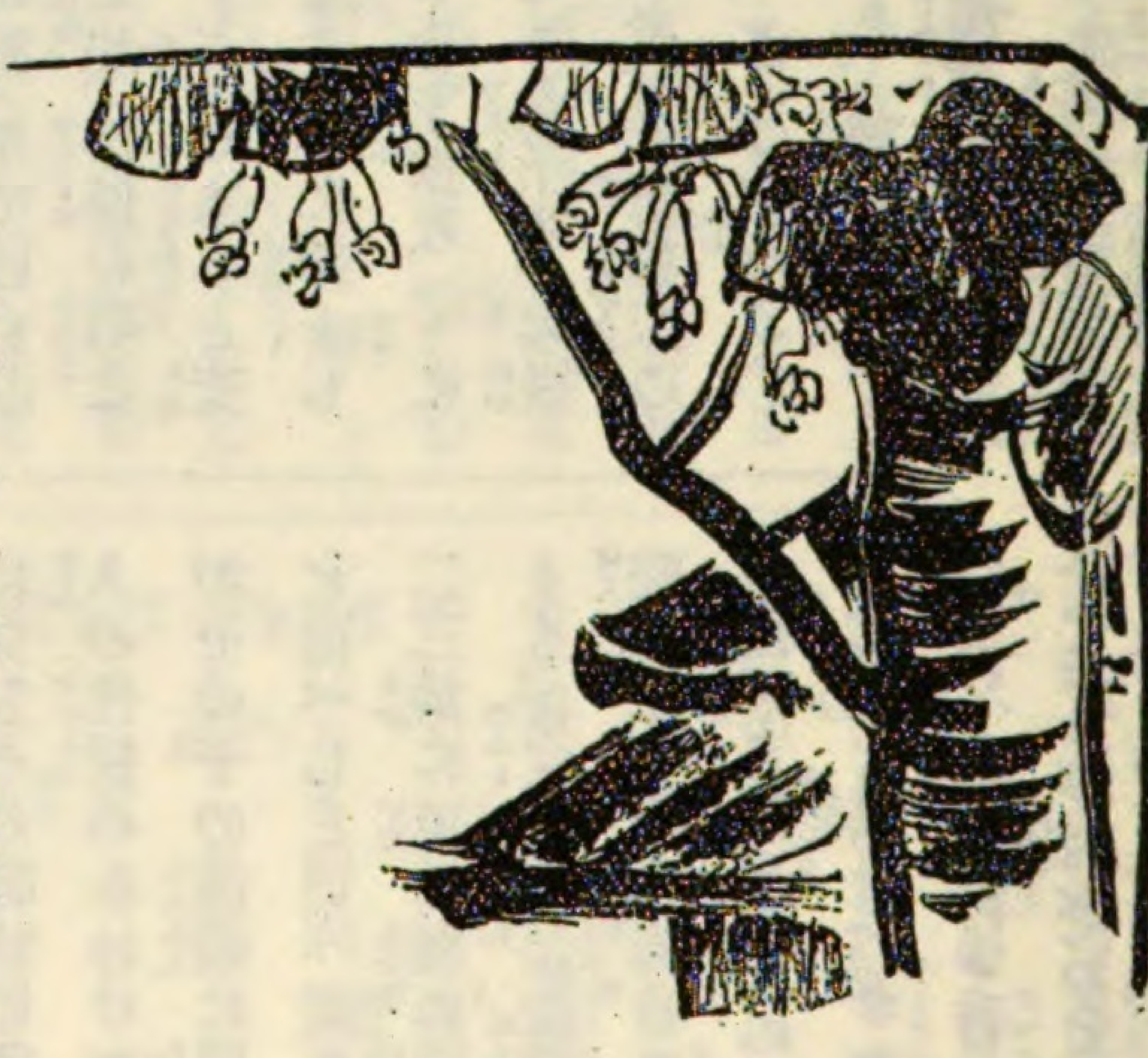
るをもて自然に家事の務を面倒なりとし、卑しきわざと心得るに至るべければ、十歳前後より、手に適ふ事は奨勵して行はしむるのみならず、十四五歳ともならば御飯のたき方、味噌汁のこしらへかた、あるは普通總菜の煮たきのしかた、などをしへ、もし女學校等に通ひて割烹のかたはしなど學ぶ者には、休日ごとに料理の復習をせしむるもよかるべく、裁縫禮式の如き、何れも多くの數を重ねて、始めて熟練し精通すべきものなればわづかに一周二三時間の學校の課程が、よく成就せしめ得ざるを覺悟し、受持ちの教師と打合せ、矛盾なきやう、家庭にて復習せしむること必要なり。元來學校にて裁縫の如きものを科するは、無理なることにて、たとへ我國の如く、裁縫教授所が進歩して、女學校の躰裁をなせるものには、止むを得ざることゝいへ、公の規定に導ひて多く他の教科をも入れたる所にては、時間の配當上、決してよく練習をせしめ得ぬこと明かなれば、たゞ手ほどきに過ぎずとみとめ、十分家庭にて練習せしむべきなり。

この外家事上の事は下婢のてつだひをなして、炊たき、洗濯掃除などする、間に、これを支配し使用することより、使はるゝ身の苦しさにも同情するやうしならはせ、老人の肩腰をさすらしめて、母の手代りとして看病を覺えさせ、客の應接、取次になれしめて、茶烟草盆のすゝめかたをも實地に練習させ、時には伴ひて親戚知己を訪問し、挨拶、辭退の法をもみならはせ、出づるには相當のみじまひを手早くせしめ、歸りては衣服履物等のておき始末を注意せしめ、時折々の衣服のこのみ、さては色合、しまがらの取あはせなど、自身監督のもとに、撰ますなど、總て一時一刻も、妻となり母となりて、不自由なきやう考へて教ふべし。これをまことの家庭教育とはいふなり。育兒の心得も亦、學校教育にのみ依頼し、安んずべきにあらず、もし幸にして、弟妹の多くある家なりせば、そが衣服飲食の世話より、日常のしつけかたに至るまで、悉く實際に練習せしめ得らるれば極めてよろし、若しまた幼兒のなき家ならば、かゝる便利はなしとするも、勉めて育兒保育の談話

をもなし、書物をも與へて、讀ましめ、その興味を引きおこさしむべきなり。

◉遊藝及び裁縫教授所等に關する事

今の中流社會にて、女兒をもてる人々を、ひとつらに見渡すに、なかには特別に、教育に熱心なる親御もあり是非に勉學せんと望まるゝ令孃もありて、小學校以上に普通教育を受くる者も珍らしからずとはいへども、一般には女兒なればとて、まづ高等小學校を卒業すれば、いはゆる學問〻縁を絶たしめ、琴、花、茶の湯の師匠につけて、一通りを學ばしめ、家庭又は裁縫稽古所にて、ぬひはりの道を學ばするか、裁縫を專門とせる學校などに通はしめて、かたはし假名など美しくかく書家のもとにおくりて、書を學ばしむるもあるべし。もとより手をよく書くも、花を美しく生くるも手まへ拙からず、茶を立つるも、琴を彈ずるも望ましき婦人の藝には相違なけれど、これもと遊藝ともいふべきものにて家事の練習、普通の教育と、共におしならふべき價値のものにはあらず、いはゞ裝飾の藝といふべし、ことに琴花など、學ばしむるには、よく師匠の人物を撰むべしかの藝人らしく、權式もなく、主義もなく、たゞ弟子の機嫌をとるをもて、目的とせる卑しき人々のもとに往來せしむれば、知らず識らずのあひだに、家風も亂れ、氣風もいやしくなるものなれば、よく技藝としても、人物としても、先生と敬ひて恥しからぬほどの人を撰むこと肝要なり。また假令師匠のみ立派なる人なりとも、かゝる遊藝の稽古所に出入りする弟子のうちには、高尚なる者のみは少き傾きあるものなれば、よく朋友との交際にも注意すべく、なるべくは師匠をわが家に招きて、學ばしむべし、裁縫



の如きは、かかる遊藝の類とは異りて、實用かくべからざるものなれども、又そふ専門にのみ敎ふる敎授所の類は、規則正しきが少く、時としては學校といふ名のみありて規律もなく、課程もなく、あやしき仕立屋のそれにも劣りて、生徒は勝手に衣服頭髪の雜談、果てはいふまじき人の批評をもいひいで、遂には芝居、俳優の噂なども聞きおぼえ、そこに出入りする得しれぬ人々と交際し、懶惰に一日を暮すもありと聞く。まことに苦々しき事といふべし。かゝる折、若しよからぬ下婢などにそゝのかさるれば、嚴正なる家庭に育てる女子も、卑猥の風に化しその身をあやまるのみならで、父母親戚の名をも汚す楷梯となること珍しからず、こゝに至りて、始めてその女の不徳を責め不義をならし、親戚に預くるとか、出入を差とむるとか、懲誡的の處分を取るといへども、その實かゝる不行跡に陷らしめし基は、皆兩親ことに母親の不注意に因るものなれば始めより監督を嚴にし、我儘の行なきやうするこそ眞に慈愛ある家庭敎育者の任務といふべし。

◉婚嫁に關する家庭の責任

夫婦は人倫の大本といひならはせる如く、婚姻は男女何れよりいふも、極めて大切の事なれども、男子が妻を娶るは多く廿五歳或は卅歳以上にして、獨立して世に立ちその職務に就ける時期なれば、多少は、世の有樣人の性質のみわけもたちたる後といふべければ、兩親がその子の婚姻に關しては大なる責任を有せずといふを得べしといへども、女兒にありては十七八歳以上、廿二三歳に至る間に嫁するを普通とすれば、年齡の點よりも、男子と共に論ずべからず、しかも我國にては、世間を見るべき機會もなく、又世の中になれざるを淑女の標本とし、婦人の美德ともいへば、夫としては、いかなる人を賴むべきか、理想だにも書き得ざるが多ければ、たゞ兩親はその女の婚姻につき、全責任を双肩に負ひて、その婿がねを撰定せざるべからず、若し一歩あやまらば、女をして一生不幸に泣かしめ訴ふる所なき、憂愁のうちに暮さしめざるべからざれば、十分鄭重なる考慮を要すべきなり。まづわが女の性質、才能、器量を

はかり、彼れは華美やかならずとも、平和なる生涯の適すべきものなりとか、これは困難ありとも面白き生活を望む者なりとか夫々判定して撰むべし。婚嫁の準備としては、生れしよりこの方注意して躾し普通教育及び家庭の教育は第一として教へらるべく、相當の衣服調度も、當座に事缺かぬほどは入用ならん、されど猶これよりも必要なるは、結婚生活は娘としての單純なるこれまでの生涯より、如何ほど責任あり困難あるべきかを教へ、身躰を大切にして、この任務に堪へ、幸福なる家庭をつくり、善良なる子女を育つべきやう、誡しむべき事肝要なり。智識は身を守るの楯といへる如く、家政育兒に關する普通の智識をも有し、母の助手として、實家の家政を執り居りし新夫人は、茶の湯生花に日を暮らし、歌よみ琴彈らぶる事にのみ、夜をふかしたる婦女が、困難とおもひ苦境と感ずるが如き事に出て遇ふも、甞て快樂に夢みたる事なければ、失望に沈むの憂すくなからん。これ實に嫁の兩親がその女の聟にもたちすべき唯一の財産といふべし。

聞くならく、世の少き紳士が妻を求むるには、第一に先方の父兄の地位、名望及び財産の多寡、第二に當人の容貌の醜美、第三に性質、第四に體格、第五に教育の有無なれども、まづ高等小學校を卒業し、普通の姓名を讀み分け、自分用の書簡など認むるヿを得、一通りの裁縫を心得るをもて標準とする事普通なり、何ぞ苦しみて女兒の教育をすべきかと論者の紳士を誹謗する言も甚だしといふべし、若しも假りにかゝる望ある人ありとせば、こは一生苦樂を共にする妻をもとむるにはあらずして、世に地位を得、職業を得んが爲に、よきつてを求むるものか、濡手に粟をつかむが如く、働かずして財産を得んとするものに外ならじ、まことに恐るべき聟殿といふべし。寧第二を主とする人こそ、人の天性と思へば頼もしけれ。第三第四もいふ迄もなく必要なる箇條なれど、第五はさまで輕々しく考ふべきものにあらじ若し妻はおのれの小まづかひ、わが家の賄ひ婆々といふが如き理想にて、若し子女あるも、その乳母たるの資格の他、母親の責任を認めざる人ならばもとより

いふに足らざれど妻はわが家を整理し、わが父母を安んじ、わが子女を教育する、わが相談あひてなりと考ふる人は、少しくこの他に望むところあるべきなり。世の女兒をもてる兩親は、かゝる諷言に耳を傾くる事なく、夫に對してはよき内助者となり、舅姑に對しては、よき嫁となり、子女に對してはよき母となり、その養育教導を怠らず、夫をして内に顧慮することなく、十分に公事に務め、學を練り、德を積むの餘裕あらしめ、國に報ひ社會を益するやう、助くる者たるに適するだけ教育を施すべし。わが廿世紀の紳士は、さまで家庭の爲に冷淡なるべくもあらず、子孫の爲に不慈なるべしとも思はれず、寧ろ己が事業は、子々孫々をして繼續せしむるやう育て得る夫人を得んと務むること、疑ひを容れざれば聊かこゝに併せしるして、世の女兒をもてる家庭教育者に告ぐ。

女學生の經濟

桐蔭女史

今日は前號で、女學生諸君に御約束しました通り、皆さんが御つかひになっていゝと思ふ、金錢出納に付ての帳簿のことを申しませう。

月日	摘要	入		出	
		圓	十錢厘	圓	十錢厘

右は日々の金錢の出入を、一ツ〳〵順々に記入する帳

簿で、日記帳と名づけませう。

右の表を見れば、已に御分りでありませうが、初に月日とあるのは、金錢を出し納れた月日を記すところ、入とあるのは自分の手にはいつた金錢の高を記すところ出とあるのは、自分がつかつた金錢の高を記すところであります。これだけでは何月何日にどれだけはいつたか、どれだけつかつたか、といふことだけしか分りませんから、どこから金錢がはいつたか、何々につかつたか、といふことを簡短に摘要といふところに記入するのであります。

さてこれから記入のしかたを申しませう。それには女學生と言つてもいろ〳〵で、父母の膝許で小遣金だけをいたゞいて、それをつかつて居る人もありませうし、又遠く父母の許を離れて、他家に寄宿し、何から何まで自分一身に付ての金錢の出納を自分でして行く人もありませう。從て金錢の出納もよほどちがいませうから、こゝには記入のしかたを、二の例によつて申しませう。

第一例　こゝに一人の女學生がありまして、此人は自分の家に住つて、月々小遣をいたゞいて、自分のこまかな入用は自分で出すとしませう。そうして六月中に左の出納があつたとしませう。

六月中

一日　一、一圓　小遣、母上より

三日　一、四錢　小楠公の歌

五日　一、九錢　改頁半紙三帖

六日　一、十六錢　ゴムマリ一個

十日　一、二十七錢　リボン三尺

十七日　一、五錢　雜記帳一冊

二十二日　一、五錢　習字用筆一本

二十八日

一、三錢　　郵便切手一枚

三十日

一、九錢五厘　　少年世界六月分

右はほんの僅の例をあげましたのですが、實際はもつといろ〳〵の出納があるでありませう。さてこれを記すのに、只品物と金高とを例べて置くよりも、費目をわけて置く方が、後日の參考に便利ですからまづこれから費目をわけませう。

入の部

小遣　　毎月きまつていたゞく小遣金

雜入　　きまつていたゞく小遣の外にはいつた金

出の部

學用品費　　勉強の爲につかふ筆紙墨の類

圖書費　　雜記小册子の類

雜品費　　日用の消耗品でも圖書でもないいろ〳〵の品物

雜費　　湯錢車代郵便税等

さあこれで費目がきまりましたから、これから前の出納の帳簿につけませう。

月	日	摘	要	入 圓	入 十錢厘	出 圓	出 十錢厘
6	1	小遣	母上ヨリ	1	000		
〃	3	圖書費	小楠ノ歌				40
〃	5	學用品費	改良半紙三帖				90
〃	6	雜品費	ゴムマリ一個				160
〃	10	〃	リボン三尺				270
〃	17	學用品費	雜記帳一册				50
〃	22	〃	習字用筆一本				50
〃	28	雜費	郵便切手一枚				30
〃	30	圖書費	少年世界六月分				95
		合	計	1	000		785
		差引殘高					215

右の中の合計のところの一圓は入の合計で、七十八錢五厘は出の合計であります。そうして差引殘高とある二十一錢五厘は入の合計から出の合計を減じたもので、即ちこの月の殘つた金であります。

この残金は、次の月にはいるもので、次の月には、一日の初に越高として入の部に記入すべきものであります。

第二例　こゝに一人の女學生が自宅を離れて他家に寄宿し、毎月學資金をいたゞいて自分のことを一切賄て居るとして、六月中に左の出納があつたといたしませう。

六月中

一日
一、十二圓　學資金國許より
一、十七錢　木綿足袋一足

四日
一、五錢　楊枝一本
一、二圓　學校月謝

五日
一、二錢五厘　湯代

六日
一、十七錢五厘　女學世界一册

七日
一、十錢　双子織一反洗張賃

十日
一、二十錢　婦人のかゞみ
一、七錢　毛筆書用筆一本

十二日
一、六錢　鐵道馬車賃

十四日
一、五十錢　回陽堂藥代

十九日
一、三錢　髪結賃

二十三日
一、二十三錢　裁縫練習用白木綿半反

二十六日
一、二十錢　扇子一本

三十日
一、七圓　六月分食料

これは第一例のものよりも、金錢の出納が複雜ですから、從て費目の數もふやさなければなりません。そこで次のやうに分けませう。

入の部
學資金　學資金として毎月自宅より受取るもの
雜入　學資金の外にはいつた金
出の部
食料　寄宿して居る家に拂ふべき食料
月謝　學校其他の月謝
被服費　身體につける一切の品物たとへは衣服足袋下駄の類及之についての一切の費用たとへば洗濯仕立賃等
學用品費　第一例に同じ
圖書費　同
雜品費　同
雜費　同
臨時費　たとへば病氣及吉凶につきての贈物のごとき臨時の費用

そこでこの費目に由て、前の出納を記入しませう。

月	日	摘	要	入 圓	入 拾錢厘	出 圓	出 拾錢厘
6	1	學資金	國許ヨリ	12	000		
〃	〃	被服費	木綿足袋一足				170
〃	4	雜品費	湯子一本				50
〃	〃	月謝	學校ニ			2	000
〃	5	雜費	湯代				25
〃	6	圖書費	女學世界一册				175
〃	7	被服費	双子織一反洗張賃				100
〃	10	圖書費	婦人のかゞみ一册				200
〃	〃	學用品費	毛筆書用筆一本				70
〃	12	雜費	鐵道馬車賃				60
〃	14	臨時費	四陽堂藥代				500
〃	19	雜費	髮結賃				30
〃	23	學用品費	裁縫練習用白木綿半反				230
〃	26	雜品費	扇子一本				200
〃	30	食料	六月分			7	000
		合計		12	000	10	810
		差引殘高				1	190

右の合計殘高及越高のことに付ての說明は、第一と同じですから省きます。

菓物の効用

春は何時しか夢と過ぎ去りて花美しかりし樹々の枝は若葉の緑色濃やかなる間より、青梅、ゝ、さらくんぼを始めとして菓實の小やかなるを見るにつけても、やがて熟さば目に見たる花の美しきに比べてその菓實の味甘からむとを思ふ、梨、杏、林檎、桃、柚子など園林に栽培た

ろが成長せしを見るばかりにても心ゆくを、家庭生活の資料として食物に供せんとはまた更に樂しくもおもしろくも益あるとなりかし。

食物として菓實は營養に大切なる性質と効用あり、果實液汁は自然に蒸溜せられ、煮沸、若くは濾過たるものにて、容易に身躰の組織を益し、化學上よりいへばポタッース曹達燐の諸種鹽類を供しまた身躰中の毀敗となるものを吸取り總じて人躰にいふべからざる利益を與ふ、その中に含有する酸類は疾病を豫防するの効用あるものは梅干、の我邦一般の必要品として供へらるゝに依りて知る可し。

むかし徳川家康が敗軍を率ゐて走れる時一行の人の飢渇に耐へ難くなりしを、大久保彦左衛門の機轉にて此の前路に梅の林あり今、少しなりと勵ませしに、人々口より津液を生じて渇を醫したる話もあり、米國のフロクダ、州セミノールの戰には、兵士の下痢及び不消化に惱めるもの多かりしが、此等の患者は病院より郊外にぬけ出でゝ果實を食ひ特に黑いちごを食用して病を醫したりといふとあり、猶コレラ等の病患者を桃園に送りて滿足なる結果を得、窒扶斯熱にかゝりし下痢症のものに桃を任意に食せしめて快復しめたる醫師あり、猶猩紅熱、實布的利亞の手當に於ける果實及野菜は有要にして、かの葡萄及「バ、ナ」を患者に自由に與ふる時は熱に伴ふ疾病はその跡を絶つべく、不消化症に在つては何等の醫藥を用ゆるよりも熟したる健全なる果實特に桃を最もよろしといへり。

此の如く果實の人躰に營養の効あると大なるものなれば凡そ一家の主たるもの主婦たるの人々は此心得ありて常盤木の梢を衛生上その庭に植ゆると共に果樹の培養を手づからなし、時節に應じて自然の食物たる此の果實より家庭上に大なる益を得んと望ましけれ、まづ其一例として

◎林檎に就きて述べんに、林檎は果實の王と稱せられ身躰の活動を刺擊し腦髓に最も適當の關係を有す、これは其の燐素の多量を含むによる、此燐素は啻に腦髓の保護たるのみならず、實に知識を補ふ所ろの大切な

る營養物なればなり。
米國に於ては各種の穀を除きて食物として林檎の如く善き生産物は無しといふも可なるべし、林檎を食ふ物は不消化性若しくは膽液の病を患ふと稀なり、英國の諺に果樹園の榮える處に棲まむには、醫者は忽ち乞食となると、我邦にて十月の閉戸醫者といふとあるが、十月は氣候の和順平靜なるが爲めに病人少き理由なるべけれども、此語によりて或は菓實多く食せらるゝ爲に病少きにはあらずやと思はるゝなり。
林檎は肉食に依よりて、生ずる處ろ身躰の弊害に對し清涼防腐の用をなす、自然の解毒劑なり、植物酸及び芳香に富み、黄疸、不消化肝臟の痲痺等に向ては實に良藥たり、外國人特に米國人の林檎を貴重するとその詩歌に咏じ文辭に稱美するを以ても知るべし、その効大なるとも明かなり。林檎は生食を可とし、別に調理を要せず、されども之を試みむとならば方法あり。
小形の錫製林檎くり器を求め、（或は小刀の類にても可なり）之を以て外皮を去らず、好むだけの林檎をくりとり之を陶器製の皿に上せて熱竈に置きくりたる中の處には上等の砂糖を充たし、その熱するまで之を焼き後に取出し食ふべし。



林檎の成分は百分中八十一より八十五の水分を有し、同じく六より十の砂糖分、〇、五より一の游離酸分、三より八の蛋白質物及〇、五より少き鹽類分を含むも佳なるは生食にあり、生食には汁液多きものを良好とす、朝食の際に食ひたる一個は往々人をして一日間快からしむ。林檎に次ぎて効用あるは葡萄なり。
◎葡萄の成分は種類、地質、氣候及天氣のありさまにより差違あり

一葡萄の必要部は糖分にして百分の三〇より一〇に至る、成熟期に於て天氣温暖に乾燥ならば、糖分隨て多く酸類を含むこと少し。
二、如何なる葡萄も葡萄酸を含む此は林檎酸に同じ、
三、葡萄には蛋白様質の少量ありて血中の蛋白に類す又多少の護謨及糊精あり、
四、鑛物組成分の酒石酸、ポッタース、曹達、燐酸石灰、苦土、及鐵を有す
五、色素は少量なり、酥酸及脂油を含む
六、百分中七十より八十は水分なり。
葡萄の營養價値　葡萄の滋養品たるはいふまでもなけれど、肉類などゝ同様ならず、假に鷄卵一個の中に存する蛋白質の同量を得んとするには、葡萄一斤以上を用ひざるべからず此果實の價値は無窒素物、酸類、鑛物質、水分及び清凉劑あるに存す。
その生理上の効用　通常食品と共に日々一斤乃至二斤の量を食すれば營養を増し、分泌排泄を進め、肝腎及腸胃の作用を整へ健康を進む、その糖分は消化を要せずして血中に收められ必要に應じて効力を與ふ、その糊精は「ペプシン」(營養物名)の分泌を進めて消化を容易ならしむ、燐酸を多量に含むが故に身体殊に腦作用を助くるの効多し。
葡萄の良種は(一)子實は小に過ぐべからず(二)外皮は薄かるべし(三)種子は細薄にして小なるべし(四)甘味にて快き芳香あるべし(五)液汁は多濕ならず子實は肉質なるべし(六)一定の成長即ち硬きところあるべし。



梨は鐵分の多量を含む、
桃は虚弱者の補益物たり、
櫻桃は美酸を以て膀胱及腎臓病の治療品たり
黒苺は砂糖を以て煮る時は下痢に有効の飲料を給す。

禮法

女子の作法（三）

實踐女學校教授
禮法講習會師範　田島秀子

坐し樣

坐るには兩足を揃へ、手は正しく兩股の側に置き、左の足を少し引きて、身體の前の方へ屈まぬ樣に、靜かに坐ります。さうして右の足の拇指を、左の足の拇指の上に重ね、手は膝の上に正しく置きます。其坐る事が餘り長くなりました時は、そと足を組み換へますと、左のみ疲れを覺えません。次は拜禮で御坐います、貴人へ對しますのは先づ兩手を膝の前、離れぬ樣につきて、爪の先きを衝き合せ、頭を其上に下げてつけ、丁寧に拜します、又自分と同邊の人に向ひては前の如く兩手をつき、爪先きの間を二寸程わけて頭は前のより同じく二寸位上の所迄下げて拜するので御坐います。次に人の前過ぎ樣を御話致します、坐しました人の前を過ぎますには、一人坐し居る時には其人より少し離れました所で膝だけをつき、兩手を其側にそとつきて禮を致し、すぐ立ちて過ぎ行きます、若し多人數の前は大凡そ中央と思ふ所迄進みて前の如くにして過ぎ行きます。次は途中の禮を申しませう、貴人に行き合ひました時は、凡そ三尺許り離れた所で立ち止り（兩足を揃へて）さうして一足か又は二足位斜に退き、兩手を膝頭の下迄下げて丁寧に禮を致します、若し自分と同等の人なれば御互に立止り、同しく斜に一足引きて兩手は膝頭の上迄下げ、前のより少し上の所まで頭を下げ、禮を致します。さうして貴人の時は先きの人が禮したる後、二三步あゆみ出でましたれば、自分も頭を上げて靜かに過ぎます。又同等の者へは同じに右の袖を摺りちがへる樣にして、互に過ぐるので御座います。次は襖障子戸障子の開けたてゞ御座います、戸障子等を開きますには引き手の方を自分の前にし、斜に坐りて、其右の方へ

開くには右の手をつき、左の手を引手に掛けて三四寸斗りあけて、更に左の手を下につき、右の手を襖の縁下から三寸程上の所に手を掛けてそと開きます、又左へ開く時は此の反對で御座います。閉ぢますには引手を前に同じく坐り、右の方へしめるには右の手を下につき、左の手を引手に掛け、靜かに閉ぢかけて三寸程殘しおき、更に左の手をつき、右の手でしめきります、左の方へしめるには此の反對で御座います、それで前申ました通り、戸障子の前へ斜に坐りましたらいつでも障子に遠い方の手で始め、開け掛けますと間違ひは御座いません。さうして障子等が始めに開けて有ました所は、何度出入りをしても一々しめずと其儘で宜しう御座いますが、若し閉ぢて有ましたら何度でも出入り毎にしめなければいけません、たとひ如何なる心の惚たゞしき時でも、しめた戸などの隙き居るは誠に見にくう御座います、之れで先づ坐作進退の作法はあらまし終りで御座います、次は物品の授受薦撤の作法を御話致します、凡て物品を薦撤、乃ち人に出し又其をひくには其の物品を大切に持ち身躰の形を正しく優かに致そうと心掛けるので御座います、兎角物を持ちて歩みますと前申た樣に其方にのみ心が取られて、身躰の方がからになりまして困りますそれ故、坐作進退を能く習はねばなりません、又何によらず物品を人に授けるには受くる人の取りよき樣に注意をしなければいけず、又受くる人は其の受けた品を大切に取り扱ふのが肝要で御座います、それで人の前へ物品を持ち出でまするには先づ躰を正しくし兩手で靜かに其れを持ちさうかと云ひて(余り小さき物は片手で持つ時も御座いますが)肘を張らぬ樣、又縮めぬ樣にし、持ちたる物を自分の胸の當りの所に据へ手を向うへ延ばし、兩手の指の間をあけぬ樣にして持ち出で、一寸一足引き左の足をさうして正しく坐りましてから、物品を持ちし手を徐かに下げ、自分の前少し離しておき、客の前へ兩指先きにて少し押し進め、一膝下り、一禮し立上りて上坐の方へ回りて退きます。又物品を持ちて退く時は前と同じ樣な心持ちにて、客の前少し離れて坐り、其の品を我が

前に引きよせ取り上げて立ち上り、一足後に引き前の如く回りて退くので御座います、又授受の作法は前と大抵同じで御座います、何でも授けます方の人は其の物品を向うへむけて上の所を右の手に持ちそと左の手を添へて授けます、又重い物等は受くる人の受けよき樣な所を持て出て宜しう御座います、それから受くる人が一禮した時は、同じく授ける人も靜かに禮を致します、先づ始めに證書などの授け又受け方から追々御話を致します、之れ等の類を授けますには其の字頭を自分の前にし、向うへ正しくむけ、右の手に成る可く端の方を持ちて授けます、受くる人の一禮した時に前の如く自分も頷くので御座います、又受くる人は先づ傍に居る人が我が名を呼ましたらばすぐ授くる人の前三尺許り離れて立ち、一禮をして又二三歩進みて兩手で受けすぐ戴きまして、二歩程後へ下り、靜かに自分の席につきます、又證書を戴きすぐに一度開きても見ますが大抵は前の樣に其儘持て退きます、次は文箱で御座います、文箱は文字を自分のよむ樣にして左の手に据へ、右の手を添へて持ち出で、客の前三尺位隔てゝ坐り文箱を下におき兩手にて蓋を取り箱の右におき先きへ箱を右より左りへ回して少し押進め次に蓋も同樣取り回して進め一膝下りて禮を致します若し封のあるのは蓋を開かず其儘前の如く取り回して進めるので御座います進められし人は箱の中より書狀を取り上げ、表を見、後に裏の差出し人を見て右の膝側に置き、箱の蓋を兩手にて取り上げ、正しく蓋をなし、又取り回して返すので御座います、若し返事のいりますのは元入れおりし樣に入れてから前の如くに致します。次は扇、團扇を御話致しませう、扇は要の方を自分の前にして左の掌の上に受け、右の手を其下の所に添へて持ち出で、進める時に左の掌に戴せたまゝ、右より左に回し、右の手にて其頭をつまみて出します、又は左の手を自分の膝の側につき、右の手にて要の上の所をつまみても進めます、さうして之れを受けますには要の所を右の手を下に添へ、目禮して右の手にて自分の右におきます團扇も、扇も同じで御座います、又客の前にある扇を退

きますには、前申た樣に坐り、要の所を右の手にて取り、左の手を裏に添へ目禮して退きます。扇を使ふには要の上の所を持、兩手で靜かに左方へ開き、其表を外にして右の手で要の所を拇指を外にして持、胸の當りを靜かにあふぎます、余り忙しく使ひますのは失禮で御座います、又團扇で人をあふぐには近くよりましてはいけません、必らず五尺斗り離れて、そろ〳〵と大きくあふぎまして決して忙しくしては却て涼しく御座いません、此次は刄物等の渡し方及び受け方を御話致しませうと存じます。



修身

女德

野中千代子

儉約

經濟の要は、金錢を成るべく有効に、則ち生きた使ひ方を爲すに在るのですが、奢より儉に入るは難しと、聖人の誡もありますから、金錢を使ふ道よりも先づ使はない道、即ち儉約を先きにした方が、過ちが少ないかと思ひます、金錢を有効に使ふことを、奢りと申す次第では無論ありませんが、全體使ふ事よりも使はぬ工風の方が、餘程六かしいことゝ存します、其證據に世間には有効無効に論なく、一體使ふことを知つて居るものは、隨分多いやうに見受けます、夫れが使ふことの使はぬ事よりは易き、何よりの證左で御座ます、凡有効に使へといつても、知らず識らず無効に使ふことに流れ易いから、たとひ有効でも使ふ道を先きにするよりは、第一に使はない道即ち儉約を先きにして、使ふ以上は有効ならざるべからずといふことを、次にした方が順道らしいやうに思ひます、さて文字の講釋から申せば、儉約は奢らずやぶさかならずつゝまやかにして、ほしひまゝならず取ひろげざることを申すのであつて、人生之を行ふ目的は、つまり一身の安穩一家の繁昌國家の隆盛を圖るに外ならぬので御在ます、或大家が節儉儲蓄

は人間各自の徳義上の問題にして、經濟上の問題ではない、節儉の美德は經濟上の順逆に拘らず、根本的に平素各人の心かくべき常道だと申されましたが、實に夫れに相違御在ませぬ、昔から榮枯盛衰は世の道理である以上は、貧しいから據ころなく節儉をするといふでなく、たとひ富んで居ても節儉に心がけんければ、必らず榮枯盛衰の理を實にすることを免れませぬ、從來普通節儉といへば、直に金錢ばかりのことのやうに聯想しますが、決して金錢に限つたものではありません、時間と雖も金錢同樣に尊いもので、一生涯といへば長いやうですが、極僅かな時間が積り積つたものに外ならぬのですから、生涯を大事と思ふならば、僅かな時間を大事と思はねばなりませぬ、現に故瓜生岩子さんなどは片時も等閑に過さなかつたのが、積り積つてあれ程の事業を爲したといつて宜しからふと思ひます、又無駄骨折のないやうに、必らず自身の爲か他人の爲か國家の爲かになるやうに働くのは勞力の經濟です、又人の惡口をいつたり虛言をつかぬとかいふのは言語の經濟で、又有益な事は考へずにくだらぬ愚痴なことを考へるのは、思想の不經濟で是程つまらぬことは御坐ませぬから、此儉約を以て人間の五官の情慾をふせぎ程よく財を用ゆれば、夫れこそ弓矢八幡決して貧乏する氣遣ひないのみならず、一身の安穩一家の繁昌は疑ひないと確信致します、聖人も恒の產なければ恒の心なしと申されましたのは、實に格言で世間に幾らも見ることで御坐ます、恒產がないと第一自ら苦しむのみならず、親を養ふこと薄く君に仕ふるに勤めかたく、人に施し惠まず、一家の禮も行はれませぬ、從つて人の惡口をいつたり愚痴なことを考へたり、世間からは賤しまれ疎まれ、迚も他人のため况んや國家の爲に、一心不亂に働くことなどは出來ないことに成行きます、緒言にも申しました通り、國の本は家でありますから、家を富ますのは取も直さず國を富ます道理で御坐ますから、物事は成べく大きい所へ思ひ廻はして、一身一家の事たからと思はずに、是も國家の爲なり夫れも人道の爲なりと考へて決して等閑に心得べきではないと存じ

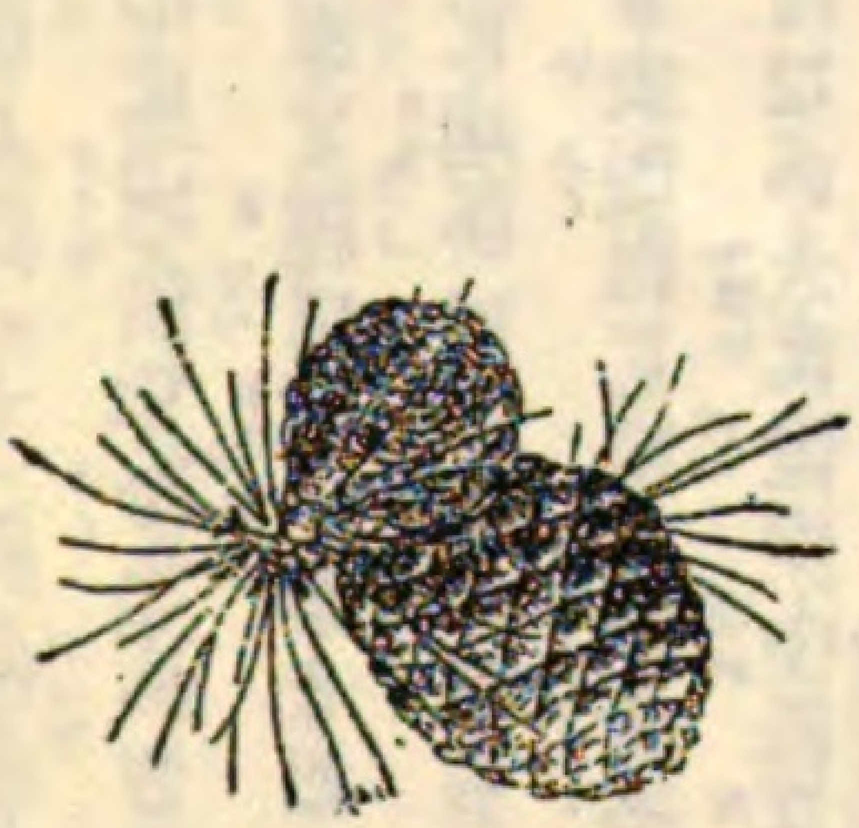
ます、是れを知りて守ると守らざるとは、即ち國家の盛衰存亡の本で御坐まして、其關係が實に重いことでありますから、常に油斷なく心を用ゐ、よく其法を知りて守らねばなりませぬ、家の困窮するとせざるとは、時の風俗の奢れると儉なるにもよりません、又自己の幸不幸にもよりません、只我一心の儉なると怠り奢れるによることで、約を以て之を失ふもの寡點と、聖人の申されましたのは實に信すべきことで御坐ます、偖之を行ふには必らず早く慮ばからぬは、行つまりては役に立ちませぬ、譬へば若い中から中年まで養生せず情慾を姿まゝにして、晩年になりてやう／＼養生を愼しまんとするやうなもので、愼しまざるよりはましですが、衰へて後は効能が少ないやうなもので御坐ます、又是は勤めて力を用ゐねば爲し遂げ難いことで、心よわくては慾にひかれて行はれませぬ、又儉約すれは俗人は誹ります、世俗の誹を誠と心得て雷同するは愚なる人で御坐ます、愚人は儉約を吝嗇と思ふて居ります故に、俗人の誹を顧みずして力め行なはねば、それを恐れては

儉約は行はれませぬ、慾にひかれ誹りをおそるゝは力量がないのです、之を力行せずして貧窮に陷り、只世の成行あしきと我不幸とのみ思へるは、大なる誤りで一身の困窮に止まらず、終には不義の借金などして人の妨げとなり、果は子孫の災となります、昔の人の金を人に借ることを耻とするに引かへて、當今では男子の中には却て借ること多きを以て面目として、金をかりて猥りに用ゆる人を無慾なり、心潔きとて譽めたゝへ、又儉約にしてみだりに費やす人の財を惜まざる人を却て吝嗇なりとて誹る者があります、世間が多く其やうな風俗となりて、習ひて自から風をなして居るやうです、勿論一人の咎ではありませんが、各自我咎だと思ひて身に顧みて道を行ふて貰ひたいもので御在ます、是は畢竟儉約と吝嗇との善惡を辨へざること、雪と炭とを見分けないやうなもので、實に愚なことだと思ひます、是はつまり今の人は我身に倖するには奢りて、人に施し禮義を行ふには薄いからであります、是等は即ち頑民で御在まして、力行して困窮せざる者は即ち

良民で御在ます、話がつい橫道へそれましたが、凡そ家をよく保つとよく保たざるとは、夫の德不德のみでなく、妻の行ひの善惡によることは勿論で、古人が家貧にして良妻を思ふと申されましたも尤もだと思ひます、夫は外をおさめ妻は內を治むるが職分だのに、夫が勤儉であつても妻が若し放逸に怠りて勤めず驕りて儉約でなければ家は保てませぬ、家は多く妻の力によりて盛へ衰へます、夫は常に內に居らずして妻の所爲を知らず只妻にまかせおきますに、妻が不德であれば財を失ひて必らず家を敗ります、凡そ女子にして此心なくば親や夫や息子などか外にて汗水になりて折角骨折りましても、繼子の椎袋の譬の如く後ろの穴から拔けるやうなもので、幾ら汗膏を流しても其甲斐はありません、終には產を敗りて身を亡ぼし親を養ふことは勿論、子の教育も親類や知人との付合も出來ず、家名をけがし世に立ちがたし畢竟國を傷ふに至ります、賢き人は國天下をだによく保ちます、況や小さな家一軒たもつことの出來ぬとは實に情ない話です、女子だから唯出づる方を爲ずばかりで入る方を知らぬといふことは隨分險呑で、妻が必ず夫と同時に死ぬものと極つたものならば仔細御在ませんが、夫に先立たれて明る日から家事萬端戶外との關係やら眞の暗といふやうでは、如何にも腑甲斐ない次第ですから、戶外の經營は專ら男子の任務とは云ふものゝ、其大體に付ては能く心得置きて家政上の掛引をせねばなりませぬ、故に家を保ち國を富ますにも、分に應じたる儉約といふことは缺くべからざる要道で御在ます、然しながらこゝに特筆を要することは、儉約を行ふに事よせて財を惜むことで御在ます、是へ流れては奢りをするのと擇ぶことはありません、財を惜みて禮義をかぎ仁愛を施こさざるは鄙狹です、儉約ではありませぬ、吝嗇で御在ます不德で御在ます、禮儀をつとめて財を用ゆべく、與ふべき時があらば財を惜まずして いさぎよくなければならぬ、又貧窮を救ふには財を惜むではなりませぬ、我身には儉約にして人に施すには財を惜まないのは是善德であります、我身には奢りついやして、禮義をかき人に施し惠

まざるは不德であります、財を惜みて善を行ひがたしと、古人も申されましたが道理で御在ます、又無益のことに財をついやして惜まざる人は愚人であります、無益のことに財を用ゆるは淵にすつるやうなものです、是は善を行なひ人を救ふ道をしらず其志なき故で御在ます、實にむげのことであります、凡そ財を惜むことが過れば、心何となくせはしく禮義にそむき仁愛を失ふ故、わが樂み人の和を失なひて人おもひつかず、何事を行ふにもはかゞゆきませぬ君子の儉約を行なふは、用ゆべき時に用ひんが爲に外ならんのであります、儉約と吝嗇との別ちは溫順と卑屈盲從との別ちのやうに混同し易いから、餘程注意せねばなりません、凡そ財を用ふるには小を積んで大に至るものでありますから、少の費を惜み事毎に心を用ひて精しくこまやかにして、疎略ではいけませぬ、所謂奢らず吝かならず過不及なく、好き程に致すが肝要で即ち節を守るのです、節に過れば已に奢りで節に及ばざれば吝嗇で御在ます、心粗くして疎細なれば、財の用ひかた自ら過不及が出來て與ふべきものを與へず、與ふまじきものに與へ、多く與ふべきものに少くし、少なかるべきものに多くするのは、事そむきて理に當りませぬ、是は心を用ひないのであつて、よし用ひても精しからぬので御在ます、されば身のかざり衣服にしても飲食や器具にしても、我々は世捨人ではない大に世の中に立つて働かねばならぬ躰であるから、墨染衣や粗食は何處までも擯斥致しますが、さりとて分にこゆると彼の榮枯盛衰の理を實にする事に成行ますから、各自の分限の許す限りに於て總ての設備をしたり、無益の技藝等は習はぬ事にせねばなりませぬが、さりとて見す〳〵衛生に害あるものを忍んでまでも節儉するといふことは、是は又大なる心得違ひであるから、衣食住即ち着物にしても食物にしても、住居にしても、僅かばかりの儉約の爲に大なる損を來しては實に愚の極であるから、そこは奮發して何を作るにも先第一に衛生に適へることを主として、次は飾りに及ぼすといふやうなことに致したら宜しからふと存じます、晴衣に三分かけるところを二

分にして、其一分を以てフランネルの寐表を作るとか、髮の飾りの五分の內を滋養物へ廻すとか、客座敷一坪八拾圓かけるのを六拾圓にして、日あたりよき風通しのよき書齋を別に作るといふやうに、體裁よりも實用向き殊に衛生にかなへることを、第一に擇んで此方に許す限り費用をかけて其殘りを飾りや體裁に用ひたらば、眞に程よいものが出來るであらふと存じます、前に申す通り我々は世捨人ではない、大に社會に立ちて働らかねばならぬ人間であるから、決して衣食住などはどうでもよいとは申しませぬ、是も交際などの一具で、貴人の前などへ餘り粗服を着けて出ることの失禮なこと位は、飽までも承知して居りますから、何事も身代相應に身にかなふたことをしたいと望むのですが、是れが中々六かしいことで、いつかしら贅澤になつて、髮や着物にうき身をやつして、學問を忘たり子供の敎育を等閑に附する等、隨分世間に在勝で御在ます、全體心は身の主である故に貴ぶべきものである、衣服は身の外にあるものである故に輕きものである、衣服をかざりて人にほこるは衣服より貴ぶべき其心を失つて居るのであります、凡そ人は其心ざま身の振舞をこそよくいさぎよくしたいものである、身のかざりは外のことなれば只身に應じたる衣服を用ひて、あながちにかざりて外にかゞやかし人にほこりてはなりませぬ、愚なる俗人又賤しき下部しづの女などに、衣服のはなやかなるをほめられたるとて何の益もなきことで、よき人はかへつてそしりいやしむべきわざで御在ます、這般の理をとくと味ふて程よく節儉することを務むるは、人生最も必要の事で御在まして、此節儉といふことは男女の別なく、老若貴賤に通じて守らでかなはぬことゝ存じます、



史傳

ナイチンゲール女史

文學士　中内蝶二

下

榮譽と云へば、榮譽なれど、不幸といへば、また不幸なる運命の手に捉へられたるは、女史が身の上にぞありける。海山遠き蠻地の空に、彈丸飛び、劒きらめくと聞くだに怖ろしきを、まして、其下に病みふしたる數多の軍びとを、看護のために赴かむは、かよはき女の身ひとつに、とても、かなふまじきことにあらずや。陸軍大臣より女史に宛てゝ送りたる手紙の中に『女史は果して、自から進むで戰地に臨み、看護婦を指揮したまふの心ありや、否や』と云へるも、もとより此點に心を勞するところあればなり。さばれ、女史は己が一身を犧牲にそなへて、力を慈善の事業につくさむとはかれる希世の烈女なれば、伏して死ぬるを待つのみなる同胞の慘狀を聞きては、同情の涙とゞめがたく、おのが力の及ぶ限りは、奮つて、これらの人々の不幸を救はゞやとこそねがへ、土地の遠く隔たりしこと、氣候や風土の惡しきことなど、いかでか心にかへりみるの遑あるべき。陸軍大臣よりの書を得るまでもなく、われから進むで、この困難の衝にあたり、兵士の看護に一身を献げむと申し出でぬ。

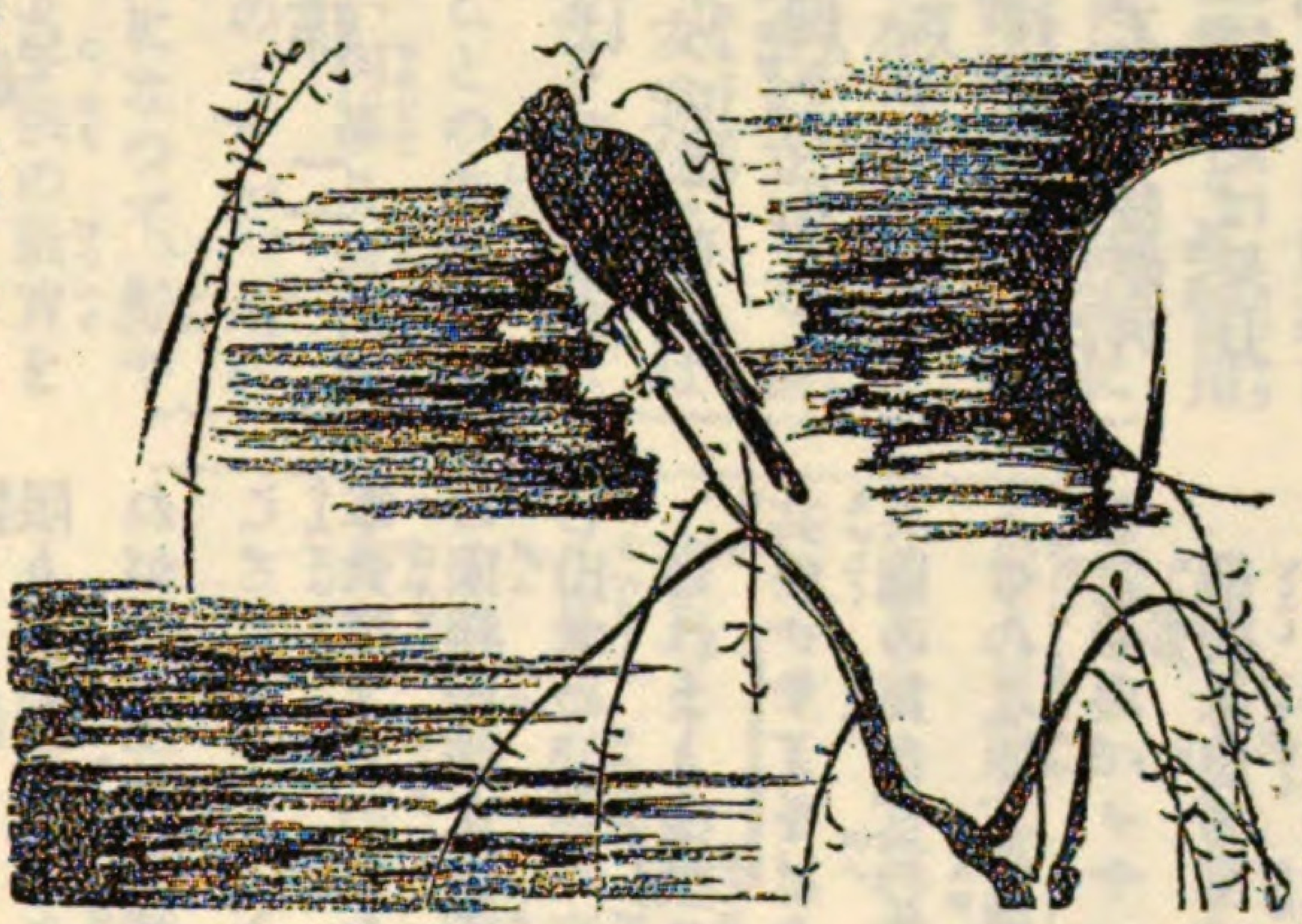
　これより後數日ならず、女史が三十四名の看護婦と共にクリミヤに向ひて、出で立ちぬ。斯くと知りたる英國の民は、老も若きも、男も女も女史が、心に感ぜざるものなく、萬歲の聲と、うれし涙とを以て、この一行を送りぬ。

　倫敦を出でゝ、道を佛國に取るに、この國の人々、また女史が德を慕ひて歡び迎へざるはなく、中にも、ブーロンの港に住める蜑をとめ等は、先を爭ふて女史が一行の貨物を運ばむことを乞ひ、その沿道の旅宿の主等

は、門前に出で迎へて、無料にて已が家に泊らむことを求めぬ。その他の地方の状況も、また推しはかるべきのみ。

かくて、女史等の一行は、マルセイユの港より船に乗りて、地中海を横ぎり、戰塵空に高き黒海の岸に着きたる時は恰も寒氣肌をつむざく十一月の初なりき。

來て見れば、この地の慘状は、げに聞きしにもまさりて、四千に餘る手負と病うどは、狭くるしき假病院に溢れむばかり、もとより藥餌の手當もとゞかねば、痩せ衰へてなやめる聲は、枯野にすだく蟲の音よりも、なほ哀れなり。女史が一行は、着くと其まゝ、長き旅路の疲れを休むるひまもなく、直ちに看護の業に從ひ、或は破れたる蒲團を繕ひ、あるは汚れたる衣を、そゝぎなどしてひたすら軍醫の勞をたすくることにつとめたり。



されど、軍中に在る將官、軍醫などは、この義勇ある看護婦隊の從軍を喜ばず、永の年月、荒し男の手一つに病める軀を托して、癒ゆべき望みもあらざりし數多の兵士が、今こゝに温かなる貴婦人の手によりて、心至らぬ方もなき介抱を受けなやみ、日に去りて、女史等が恩を感ずること月に深くなりまさるを見るにつけても、かゝる際には起りやすき嫉妬の情にかられて、却つてこれをにくむの風ありき。

凡そ如何なる業務にかゝはらず、數多の人の中に立ちて、一つの功績をたてむとおもふときは、嫉妬と、猜忌の身に集まるは、これ免れがたきことにぞある。かゝる時にのぞみては、智慮ある丈夫も、身をあやまり易きが常なれど、女史は、かねてより心に期したることゝて、益身を愼み、彌よ業務に勵み、つゆばかり

も、功名を得むとおもふ心なかりしかば、反對の側に立ちたる將校、軍醫等も、いつしか女史の德に服することとはなりぬ。

女史はやうやくにして、己が路の前にはびこりし荊棘を除くことを得たりしかば、これより心を專らにして病院の整理に從事し、先づ衛生の上に目を注ぎては、新たに庖厨を設け、洗濯場を建て、次に、患者が心を樂まさむが爲めには、牧師を助けて、圖書室を置き、說教室を造り、甚しきは、患者が爲めに書狀を認めて、其貯蓄金を家族に送るべき手續を行ひやるの煩はしきをさへつとめたりき。

かゝりしかば、戰爭の終るまで、一年半ばかりの間に於ける事業の成蹟は著しく、重き病ひになやめるものも、女史が大慈大悲の温容に接しては、自から心地のすが／＼しうなりゆくを覺えしほどに、患者の死ぬるもの、初めは百に對する六十の割合なりしもの、終には、百に付きて僅かに一强に減ぜしとぞ。されば、この役にのぞみし一兵士の『女史の來るまでは、病院は一の修羅道なりき。而して、今や忽ち神聖なる樂園と變じぬ。訝る勿れ、女史を以てクリミヤの天使となすことを』といひけむも、まことに過ぎたる言葉にあらず。今や地球の上、到る所として、慈恩の光を人間世界にかゞやかしつゝある赤十字社の創立も、女史が功勞與つて力あるなり。

クリミヤの役了るや、英國の士民は、女史が德を頌すること頗る盛にして、大にこれを歡迎せばやとはかりしも、女史は初めより虛しき榮を好まざれば、却つて、これを心うく思ひ、ひそかに佛蘭西の船に乘りて、鄕里に歸りしかば、人々いよ／＼その謙遜の德に感じぬ。時の女皇ヸクトリア殿下、叡感淺からず勅使を遣りて、女史をバルモラルの離宮に招かせたまひ、くさ／＼の賜物を下したまひて、大に其功を賞したまひぬ。土耳古の皇帝も、また美はしき腕輪を贈りたまひ、英國政府よりは、特別の賞與として、金二十五萬弗を女史に送りぬ。

女史は、この後も、ます／＼力を慈善の事業に盡し、

看護學に關したる有益の著書少なからず、遂に八十の高齢をたもちしが、去歳、病のために他界の人となりしは惜しむべし。

一たび倫敦の都に遊びたるものは、煉瓦と大理石とにて建築せられし『セント、トーマス』病院の四層樓の、屹然天に聳へて人の目を驚かすを見む。この病院の内に設けられたる『ナイチンゲール』といふ看護婦學校こそ、女史が『クリミヤ』戰爭の偉功によりて得たる二十五萬弗の大金を、悉くこゝに抛ちて設けたるものにぞありける。

瓊子內親王

塩井福子

さばへなす國賊を誅す、朝憲を古へに復さばやと、かしこくも思ぼし立たれし御叡慮。資朝、俊基の朝臣等と無禮講にことよせて、ひそかに東征の謀をかまへさせ玉ひけるが、隱謀もれ易くして、大逆平らぐるに容易からず、忽ちに元弘の亂れを來し、豺狼京師に猛りよせければ、主上は是非なく九重の都を他處にし玉ひて、しばらく笠置を天が下の住家とさして出でさせ玉ひ、思はぬ山の時雨に御袖をしぼらせ玉ふも御いたましきに、此處もまた王體を置き玉ふ事叶はせ玉はず、一夜のあらしに、少許の兵はたゞ木の葉と散り失せて、かたじけなくも十善の君の、あやしき田夫野人に姿をかへさせ玉ひて、藤房、季房の二人に、やう〳〵助けられ楠がたてこもる赤阪へと志し玉ふ。

御心ばかりは、かけらせ玉ひぬれど、如何にせん、かねてならはせ玉はぬ御歩行、折しも長月のつごもり、ひるは人目のはゞかられて、すゝむにかたく、くれぬれば月も出でず、ぬば玉のやみ路に、三日がほど、ものをさへめし玉はで行きくれさせ玉へば、御足はたゆみ、御身はつかれ、つまづかせ玉ひし岩がねをしばし枕に休みては起きさせ玉ひ、藤房を杖にしては立ち上られては、主從もろともにまたぬれ、季房の手にすがり起ちてはまた三人まろびつ、こけつ、やう〳〵有王山の麓まで落ち

させ玉ふ。

あはれ、昨日までは、天が下、卒土の濱までも君が領地ならぬはなく、君が王民にあらざるはなかりしを今日は、僅かに松の下蔭を隱家として立ちより玉へば、其處もまた憑む甲斐なく、なほ梢のつゆのみ袖をぬらしぬるぞかたじけなき。

しかる所に、豺狼の此處ら道を知りたるもの、やがても君を尋ね出だし奉りて、武家へ聞え、あやしのみこしに乘せ奉り、六波羅へ送り奉り、なれぬ板屋の雨雪に御心をくだかせ奉りけるが、其處もまた忍ばるゝやどゝなりて、遂に隱岐の國へ遷され玉ふ。

共に捕へられし季房、藤房も、常陸の國へ流され、中納言具行卿も、また笠置に捕へられて、鎌倉に下されけるが、まことや、行くを限りの逢坂の關、勢多の長橋、今日のみうち渡り、四十二年を一期として、近江の柏原の露と消え失せられぬ。尹の大納言師賢卿は、下總の國に流されけるが、のち世をいとひて桑門に歸し、まもなく病にをかされてうせられぬ。何れを聞くも、あはれならざるはなし。

一の宮、中務卿親王は、正成がもとにおはしましつれど、父御門の六波羅に送られぬと聞こしめし、今は甲斐なしとて、自から都へ入らせ玉ひ、佐々木判官時信と云ふものゝ家にわたり玉ひ、神無月時雨るゝ空をながめても、つれ〳〵と物を思ぼししづませたまひけるが、元弘二年の三月八日、土佐の畑へ流され玉ひぬ。昨日、主上流され玉ひぬと聞けば、悲しき事も、同じ旅路に立つを、せめてものおくれぬ心とおぼしながらも、袖に流るゝ泪川、せき留る柵もなくてぞ出で立ち玉ひぬる。同じ日に、妙法院二品親王も、流されましましぬ。之れは讃岐の國と聞え奉る。

いはけなければとて、九の宮は都にとゞめられ、中納言宣明卿に預けられけるが、主上は人も通はぬ隱岐へ流され、御兄の宮々も遠き島々へやられぬと聞こしめして、まだ七つを一つ越えさせ玉ひしのみなる御心にも、いたく悲しくおぼされ、我れひとり都にとゞまりて何かせん、あはれ、我をも、君が御座まします國へゐてま

ゐれよ、如何ならん浪をも、君と共にきゝ、君と共にしぼらんに、宣明はなど具足せずやとあけくれにむづからせ玉ひ、遠寺の晩鐘幽かに聞ゆるにも

つく〴〵と思ひくらして入相の
かねを聞くにも君ぞ戀しき

小さき御むねに思ひあまりて、此處にも音に泣き玉へば、彼處には、中宮、

此の上の思ひはあらじつれなさの
命よさらばいつをかぎりぞ

絶えぬ命をうらみてなげき玉へば、此處にも玉の緒の絶えよとばかりふし沈ませ玉ふ皇女瓊子內親王。とてもかくてもなげきはつきさせ玉はず、父君に別れ奉りて、片時都にとゞまり玉はん御心もなく、海行かば水つく屍、山行かばこけむす屍、何處の浦も、如何なる山も、御父と共に越え、共に渡り、我れもやがては新島守が女おきの海のあらき浪風も君と共に聞き分かん、沈むもおなじ孤島の涙に消ゆるも、同じ草葉の露に、君なき空の月、我はながめじ、配所の月影、同じ雲間にながめんものと、おぼし入り玉ひけり。

さるほどに、三月七日、千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木入道道譽、五百餘騎にて路次を警固し、主上はいよいよ隱岐の國へと流され玉ふ。昨日は一天萬乘の主君しばし雲井をはなれさせ玉ふにも、二つなき鳳輦に舍人、隨人、心の限りをつくしてかしづきぬるを、今日はたゞあやしの網代車に、御前ども仕ふまつり玉はず、あまたの東夷にかこまられて、世を卯の時ばかりに都を出で立たせ玉ふ御心の程や如何ならん、つひにかく沈みはつべきむくひあらば上なき身とは何生れけんとかこち玉へるも、道理にこそ。御供には、一條頭大夫行房、六條少將忠顯、外に內侍三位殿、大納言小宰相ばかり、御介錯として從ひ奉らる。

さて、六波羅より七條を西へ、大宮を南へをれて、東の洞院を下へ、御車を輾れば、京中の貴賤男女、小路、小路に立ち雙んで、皆目を押ぬぐひ、鼻うちかみ、あはれ、聲立てゝ泣くもあり、忍びてむせぶもあり、日來は何の匂ひにもふれず、數ならぬ人、及ばぬ身までも今日の御

別れ、涙を袖に包まぬはなく、悲み奉れば、さしも警固の武士もあはれを覺えて、鎧の袖をぞぬらしける。まして、ゆかりの君、日來なれ奉れる男、女は、如何ばかりなげき聞ゆらん。瓊子内親王の君にはかねて、君をしたひ奉り玉ふ事限りなく、たゞに都にとゞまらせ玉ふ御なげきにあらず、遂にかしこくも三位殿の女の童に姿をやつし玉ひて、具されてこそは出で玉ひたれ。

かゝるがせめての御なぐさ、淀をわたり、櫻井を過ぎさせ玉ふにも、八幡をふし拜ませて、再び帝の還幸を御心に祈らせ玉ふ。日も夕ぐれ、津の國の昆陽野につかせ玉ふ、夕づく夜のをかしきをながめ玉ひても、主上、

命あればこやの軒端の月も見つ
また如何ならん行くすゑのそら

とかこち玉へば、此の君もおぼつかなきの空を仰ぎて、



かきくれ玉ひしなるべし。又の日、武庫川、神崎をはや過ぎ、難波津を今日こそ御津の浦毎に、鹽くむ海人を見るにも、からきしき世の習ひと、そゞろしぼたれさせ玉へは、住吉の松ふく嵐に沖津浪も聲うちそへてあはれなり。廣田のあたり過ぎさせ玉ふにも、はるかに社をふし拜みうき身はともあれ、御父君に幸あらせ玉ひてよと祈らせ玉ふ。あしやの松原、すゞめの森、布引の瀧、他處に過ぐるにも、袖に涙の玉をぬきみだし、生田の里も名のみに過ぎさせ玉ひ、今日湊川に着き玉ふ。中務の宮も今宵は此の宿におはしつき、おなじとまりと聞くをせめてのうれしさと、あはれにかなしうおぼし玉へるが、やがて夜もあけ、福原の島より宮は御船にたてまつる。今朝はいよ〱みをやつくさせ玉ふらん、此方は和田のみさきより、苅藻川をうちわたり、はりまがた、須磨、明石の門より淡

路島をふりさけ玉ふにも、かへる涙をうらやみ玉ふなるべし。野中の清水もこの心を忘れずば、たまくしげ二見の浦、必ず今一度をと心にかけ玉ふ。名も高砂の尾上の松風も流石春にやはらぎて、白雲と花さへまがひぬるにも、花の都に帝をかへし奉らまほしく、くりかへしおぼしなげかせ玉ふ。かこ川の宿をはなれ、姫路、新宮、三日月、末廣等をうちこえ、杉阪すぎて、美作の國へおはしましつきぬ。都を立ち玉ひてはや十日あまり、かりにもならはせ玉はざりし板間の風を御身にしめ、なれぬ山路の雫に御心をしぼられ、さしもうき日數をつみさせ玉ひし故か、主上例ならずやませ玉ひて、此の國に二日、三日、日を經たまふにも覺束涙かわく御ひまもなくおぼしわづらはせ玉ふ。やう〳〵に御心ももとに、かへられ、きゝおかせ玉へる久米のさら山をもこえられ、此處にもありと聞く逢阪をすぎ、伯耆の國、會見郡、車尾村なる深田某の宅に御輿をとゞめ玉ひて、數日留まり玉ふ。悲しきは豺狼、なほ道に横はつて、孝ある君の子をいため奉る。御いたましきは皇女なりけり。供奉の人數の幕府の指圖ありしよりは、一人あまりけるに、御警固の武士ともあやしく思ひ、さま〳〵にとりしらべ奉れるに、龍種如何に包ませ玉ふとも、玉の光りのかくれさせ玉はんや、遂に皇女の女童にやつれ玉へるを見あらはされ玉ひぬ。

御いたましきかな、日來は玉だれの小すもる風をもいとはれし御身の、なれぬ板間の風に御夢をくだき、軒もる雨に御袖をしぼり玉ひ幾重の山を越え、幾瀬の川を亘り、はる〳〵と此處まで具せられしは、よく〳〵御父をしたはせ玉ひて、なるを、情なやあはれを知らぬ武士も、無殘にも皇女を從はしめずして深田の家にとゞめおき奉りぬ。あはれ情なの世や、かばかりしたはせど玉ふ皇女、よしやつれさせ奉るとも、もとよりたわやめ、何の事をかせさせ玉はん、何のさはりにかならん。當時の武士は虎か、ひやうか、狼か、情なや人心、あはれを知らぬ人心。皇女は身のおく方もなく沈み入り、消え入り、しばしは人心地もなくおはしけるが、とてもかくてもうかるせ、上なき身とは生れきながら何とては

かばかり上なきなげきに沈むらん。とてもうき身、父君御位に居まして、こそ我れにも花の都なれ、兄弟共に住みてこそ、我れにも月の都なれ、今は都も仇のうき世、虎ふす野邊、狼の世に住まんより、うき世を他處に法の道を治め、君が御行末をも祈らばやと思ぼし入り玉ひ、花散りて世もうの花のう月ばかり遂にみどりの黒髪をおとし玉ひて、花のさかりの御身を、すみぞめにやつし玉ひ、御寺をつくられ、あけくれ、行ひすまさせけるこそいみじけれ。

甲斐ありて、翌年、主上、ひそかに隱岐より還幸ましましける時、皇女へ阿彌陀佛一軀、開運の佛舍利一粒を附與し玉ふ、其寺安養寺とて、今も存じて同國米子町を去る半里ばかりの處にあり。今、本尊として安置せらるゝ如來は即ちそれなりとぞ。又其の境內に齒形の栗とて、枯れたる木を存す。これは、主上還幸の折り、寺僧等、栗の實をむして献ぜしを、皇運再び開くに至らば、此の栗もまた成長せよとて、地中に埋め玉へるが、不思議にもその栗、蘖を生じ、年ふるに隨ひて、枝葉しげり、其實悉く齒痕を印す故に、かくは名けて、今に存するなりと云ふ、信徒等は、その木のはしを僧に請ひて開運の守りとなすとかや。今に皇女の陵墓存じて、現時宮內省の管轄に屬するとぞ。此の皇女は後醍醐天皇廿七の皇女と聞き奉る。あはれ、あだ浪のたゝぬ世なりせば、玉の御臺にあやにしきとりかねても居させ玉はんを、吾妻路ならねどはにふの小屋のいぶせきに、墨ぞめの衣に一生をやつれ玉ひしぬば玉のやみの世の御あと聞き奉るもかしこしな。

文苑

和歌

海邊梅雨

阪正臣

あみの目のねぶり勝ちにや暮すらむ

あまかとまやの梅雨のころ　　小出粲

舟うたをへにうたいてあまの子か
やれ帆縫ふなりさみたれの頃　　小杉榲邨

あまの子かけつらぬ髪もさみたれて
けふもしほきぬほすひまのなき　　植松有經

いとまなき浦わのあまもつれ〳〵と
家にこもれる梅雨のころ

人傳郭公　　松浦益子

われにのみなとかつれなきほとゝきす
ことしも人にまつきかれけり

杜間郭公　　三田葆光

まつち山こえてやきつるゆふかけて
妹妻の杜になくほとゝきす

山家棟　　黒川眞頼

くはこかふ片山里の花あふち
さかりになれとくる人もなし

名所郭公　　津輕承昭

卯の花もさかりなるちん夕月の
桂のさとになくほとゝきす

野新樹　　大谷章子

野つかさの松のみとりも色そひぬ
木々の青葉の中にましりて

桐花

五月雨のくも吹きはらふ朝かせに露もかをりてきり
の花ちる　　前田利鬯

窓ちかきあを葉の陰にひともとの桐のはなこそ
咲きましりけれ　　水野忠敬

夏木立たちましりてもきりの花おもひあかりし
色のよろしさ　　小杉榲邨

けたかさはならふものなし桐の花あふちか中に
咲きましれとも　　阪正臣

桑原のみとりはてなき岡の邊のわら屋の軒にきりの花さく　小出粲

五月雨のしつくひまなき山かけの林かくれにきりのはな咲く　植松有經

いろつきし麥生のすゑに桐の花ひと村見ゆるやとは誰かやと　鎌田正夫

山はたのくろに咲きたるきりの花いちことる子の袖にちるなり　大口、鯛二

珍しくすかるのこゑそ聞ゆなるのき端のきりの花咲きしより　千葉胤明

たかはたの音きこゆなり桐の花散りこほれたる里のほそ道　加藤義清

磯菜集（大磯會詠草）

ふるさとのあれに庭を春とへはやへ山吹のはなもなつかし　侯爵夫人 伊藤梅子

故郷のまかきのゆひめほころひてしとろに咲けるやま吹の花　同

むかし見しやへ山吹はそのまゝに殘りてさけりふるさとの庭　子爵夫人 末松生子

としをへて故郷とへはそてかきにまたなつかしく匂ふやま吹　同

いとまあらは行ても見はや故鄕の井出のなかれの山吹のはな　板倉止子

山吹の花のいろ香はむかしにてうつりかはれる故郷の庭　男爵母堂 西升子

ふるさとのませの山吹この春もわれを待てや咲そめぬらん　板倉藤子

早苗ひく時來にけりと賤の女はひろきにはにて麥うちにけり　高木富子

山吹のはななつかしく匂ふかなとしふるさとのなれし垣ねに　小幡八重子

山里はとなりといへと程とほし岡のあなたの森かけにして　奥村岸子

殘りなく花ちりしより自つから心しつけきはるの暮かな　大澤國子

まゝことの遊ひにむかし手折つる山吹のみは猶のこりけり　印東益子

那木の下葉（竹柏會兼題）

こきうすき妙なる色に匂ふかなうへもいひけり花の大王　板倉藤子

いひしらぬ色にもあるかいひしらぬ姿にももあるかほうたんの花　瀬川久可子

舞姫のたちまふあけの振そてにとこの牡丹の花ちりかゝる　有賀晴子

たくふへき色かはあらず深み艸いかなる花の幸にか有らん　松永そよ子

ほうたんの散りし花ひら拾さつゝさもたふとげに持てる幼子　久保花子

大君のめぐみの露をかきわけて花さきみてるふかみ艸かな　遠山直子

養ひしこゝろつくしも知られけり来た見なれぬほうたんの花　國枝やす子

くれなひのいろ深み艸さきにけりのほる旭ににほひかはして　池谷久子

こほれたる牡丹の花のはなひらを重ねても見るこの夕へかな　水橋康子

富人のすめるかき根のふかみくさ深くも花のにほひぬるかな　加藤雛子

螢

岩かけのとこなつの葉に宿かりてわひしく光る友なきほたる　浅井鐵子

里川のなかれも音もくれそめて我田人の田ほたる飛ふなり　佐藤朝恵子

捕へたれと籠なきまゝにをとめ子か螢いれたるうすものゝそて　池田愛子

しる人を誘ひあひつゝゐなかみちほたる狩りにと出つる頃哉　松浦島子

うみはてゝ打おく文のまとちかくいさめかほにもとふ螢かな　吉田靜子

幾たひか一つ道をは歩みけんあなたこなたと螢

おひつゝ　久保花子

たわし守ねふりやしけん戸さしたる小屋のわたりに螢とふなり　有賀晴子

利根川を夜ゆく船のとまのうへに一つとまりてゆくほたる哉　小笠原政治子

我庭に柳ふたもとゆふへ／＼螢みたるゝ川そひのいへ　池谷久子

河水にうつる螢のひかりこそ手にもとられぬま玉なりけり　藤平雪子

まな子らの夜半のすさひに放ちけん螢あまたとふ富人のには　佐々木雪子

和文

厨のすさび

片山廣子

みゝはさみがちにて厨に立ちたるさま、人の見ばいかならん。人も見ねば心のどかにて、釜より立ちのぼる烟をながめたるに、うすく濃くさま／＼の物のかたちしたるが、つきせずわきいづるに、引き窓より吹き入るゝ風に散らされて、忽ちに消えゆくもいとはかなし。仕たなしといへど、これはめに見ゆる上の事なり。その中のあるものは、空氣の中にながく留まりて消えすつきす、天地と命を同しうせん事を思へば、はかなきものゝ限なるはかなきものも、さまではかなきものにはあらざりけり。人の世やいかにと、よしなし事を思ひつゝけて、一人打ゑみたるに、何事の御一人ゑみそと、何時か井戸の許にきて、立ち居たる女のいふ。此けふりを見よ。さま／＼のをかしきかたちの見ゆるはといへは、幼子にや踊らせ玉ひし。あやしの御物與しや。おのかすさひにてもこれよりはまさりて侍るをと、さも教へまほしげなり。いかなるぞ、我に教へよとゆかしがれは内に入りきて、流しの許の桶に水のみちたるを、もとはこれにぞ侍る、まつあてさせ玉へといふ。見るから涼しげなる物哉。その中に足そひたして、居眠りをするにやあらむ。あないみしきこと。これは物を洗ふ桶に侍り。足など入れ侍は刀自の君いかにのたまはせ

ん。さる罪深き事は申させ玉ふな。おのれは只立ちつ居つ、此中をながむるのみに侍り。されど小さき鏡の塵にくもれるをながめんよりは、こよなう心ゆきてたのしきものになん侍る。何をか笑はせ玉ふ。これは誰にも〱ひめて侍ること。さ笑はせ玉ひて、また人に申させ玉はゞ、得生きては侍らじ。まづその井戸にこそ飛び入り侍らめと恨む。恐ろしき事かな。更にいはじ、いはじ、いはじといへば、障子のあなたにて笑ふ聲す。

野中の清水

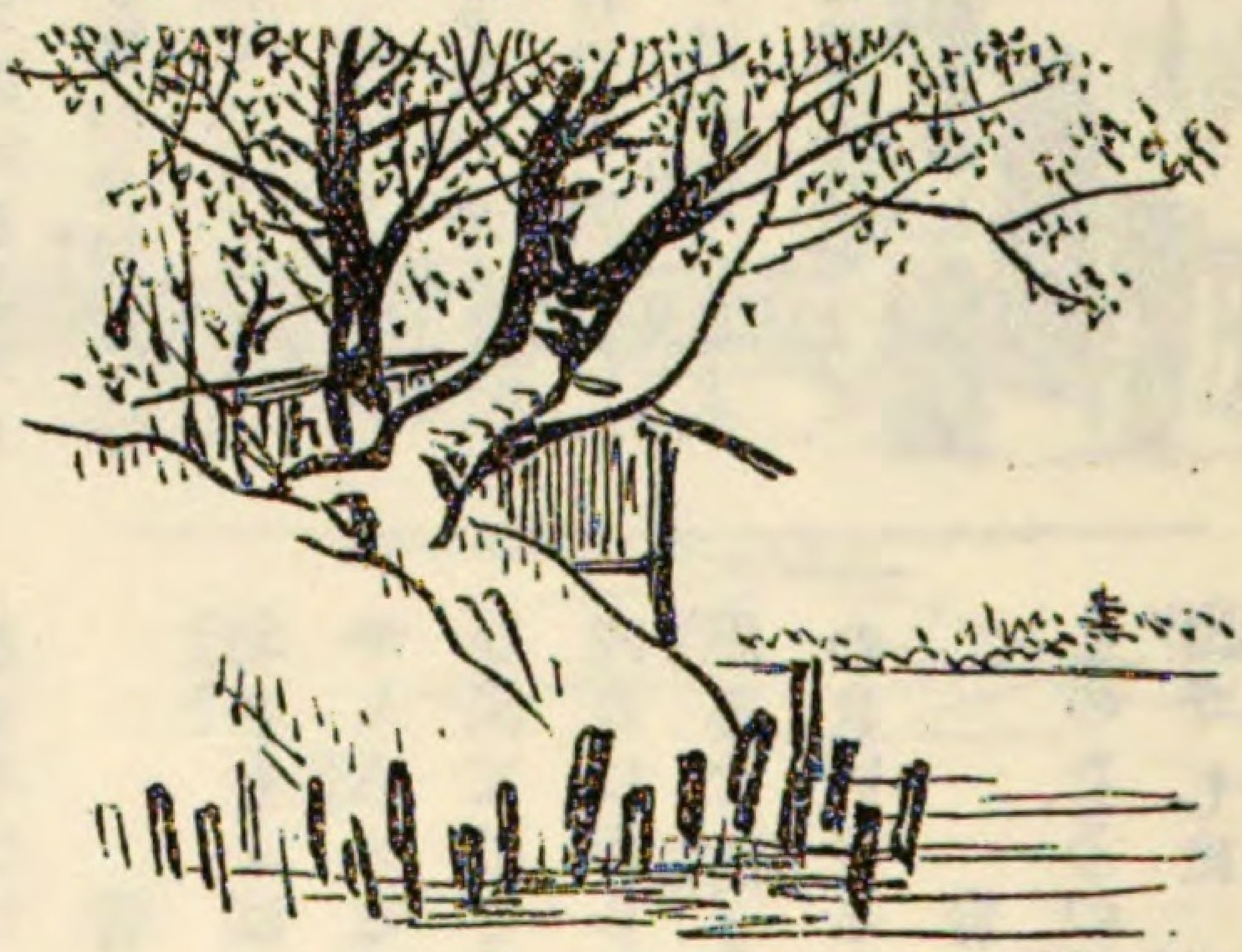
峰ゆり子

折ふしにつけて、いつ迄もなつかしう忘られ難きは、をさな友どちなり。たまさかにそか一人に逢ふたに嬉しきをまして、幾春秋を共にせし學やなる立教女學校の、こたひ新たに家居なりて、今日祝の席に再ひ肩を並ふる事の、あかす嬉しくも覺ゆるかな。

海老色の袴つけたる生徒たちが、花やかにうたひ出てたる唱歌のコーラスを聞けは、過し我等か面影さへ浮ひ出でゝ、そゞろ涙ぐまる。飾の花のかをり調に和し、垂れたる帳の風なきにゆるぐかと疑はるゝまで、只ならすすみ渡れるは、誰が敎へ導かせ給ふにかと、オーガンの傍さし覗けば、うべこそ斯道には名手として聞え高き師の君の、今も猶指揮の杖うちふりつゝ、立ち居給へるなりけり。やかて式はてゝ場外に出て來る人々の、案内のまゝにかなたの室こなたのいでゐと見ありくもあり。又おのかじし打つどひ語らふもありき。

大方はマダム姿にかはりたる友のよそほひの、をさな面ざしそれなつら、いづれも見給ふまて美しく品高になりまさり給へり。リングレットにリボン結ひし昔の現をくり返し、夢ならてしはし見る事の樂しさに母とははるゝ身をも忘れて、かたみにゑみまけつゝ、何よりきこえまつらむかと、誰も〱同じやうなり。手紙など交さんはさるものにて、今日別れなば又いつかはとて、聞き傳へたる消息どもくつし出てつゝ、興に入りて思はす昔の字名を呼ふに、いらへするもをかし。よく覺え

ゐ給ひけるよといへば、いらへし給ふ君こそはといふ。さなり、某の君、今なれはこそさたかに告げ參らすれ。誠は君があまりに世話やかせ給ふとて、ひそかに小雷となん呼ひあへりしといふに、さは少しも知らさりけり。いかて聞捨なるべきぞと聲つくる。されはよ例のと皆くつかへり笑ふ。又さまでならす、相見ての今更思ひ出つるもあり。かつて文學會に文章よみさして泣きいて給ひける君なりしよ、御名を忘れたりと云ば、さりとは老いほけ給へる哉。たやすくは名のり難しといふを、げに何の夫人となり給へればと、傍よりされはむもあり。さては高ききはにとつきまして、光そひ給へる君もおはしぬ。殊に親しかりし君とて、人なき片隅に二人語りあひて、今のさかえをことほぐに、いな其かみ諳誦を幾べーシと數へて、苦しきものとかこち、冬の朝の掃除に手のひゞの堪へかたかりける、あるは長きあひた家に歸り得さるをことよのうつらく情なくも覺えたりしが、思へはパラダイスの天使にもまさりたる境界なりしよとの給ふ。あはれ人の上、殊に女の身の幸あり幸なしなといひもてはやすも、そはよそめに定むへき事かは、と何となう胸くもりぬ。



久しう見まゐらせさりし師の君たちの、思の外に年よらせ給ひしも、又さまでならず見えさせ給ふもおはします。最も老いたる師の君の、いつも變らでもとの如くおはするが、其かみ何くれと耳いたきまて敎へ諭し給ひし御詞、其折は口かしましき師の君と思ひしかと、子を持ちて知る親の情と、今漸く思ひしみぬるも、我おろかなる故なるへし、同じ國にあらはかくても逢ひまつらん折はあれと、海の末雲のはて、遠きとつ國に歸りゆかせ給ひけるは、折々は此方の空詠めさせ給ふ事もあらむ。取りわきて我等か上にいと多くの紀念と功とを殘しゆかせ給ひける師

の君の、今日この樣をまのあたり見給ひなば、いかに喜はせ給はむ。歸らせ給ひて後、家あるしと爲りまして御子たちあまた生み給へりと承るに、再び渡り來まさむこと期すへくもあらず。空氣ランプあかるきテーブルの邊に、編物しつゝやさしう物いひきかせ給ひける折、また片なりの英語に答へまつらんすへもなくて、只打笑むのみなりし折々、煖爐の上のベガーの額のいつも我顔をみつむるやうなりしも憎かりきそガルームもなれとパーラゝ跡かはりぬれと、うけつる御惠はいつの世にか失せなん。いて今日を昔といはん後の日よ、更に又いかならん。さらは君たち健におはしませよと、手をとりかひつゝ別るゝ門に、夕日の影さひしけに殘りて。

その折り〳〵

夏の月夜

小幡八重子

月は夜こそよけれと昔よりいひはやするさる事なれど病がちなる身には、やゝ夜寒にて、更くるまではし居に見ん事おもひとまる折もあるを、夏の月こそ樂しけれ。さるは若竹のなよ〳〵と打なびくかげ、えならぬけしきもそひて、例の宵まどひを忘るゝもをかし。

昔の友

幼名をよばれて語の月の宴、げにわらは遊びの頃より、やゝ人となりて學の窓に頭かゝへつゝ語りし夜など思ひ出ては、さらに古きしたしき友はかり、樂しくありがたきはあらじ。月花の折々、文の音信、たゞなつかしく思ふを海また海をへだてし友におひおふ今日は、涙わきいづる心地して、嬉しさたとへなしや。

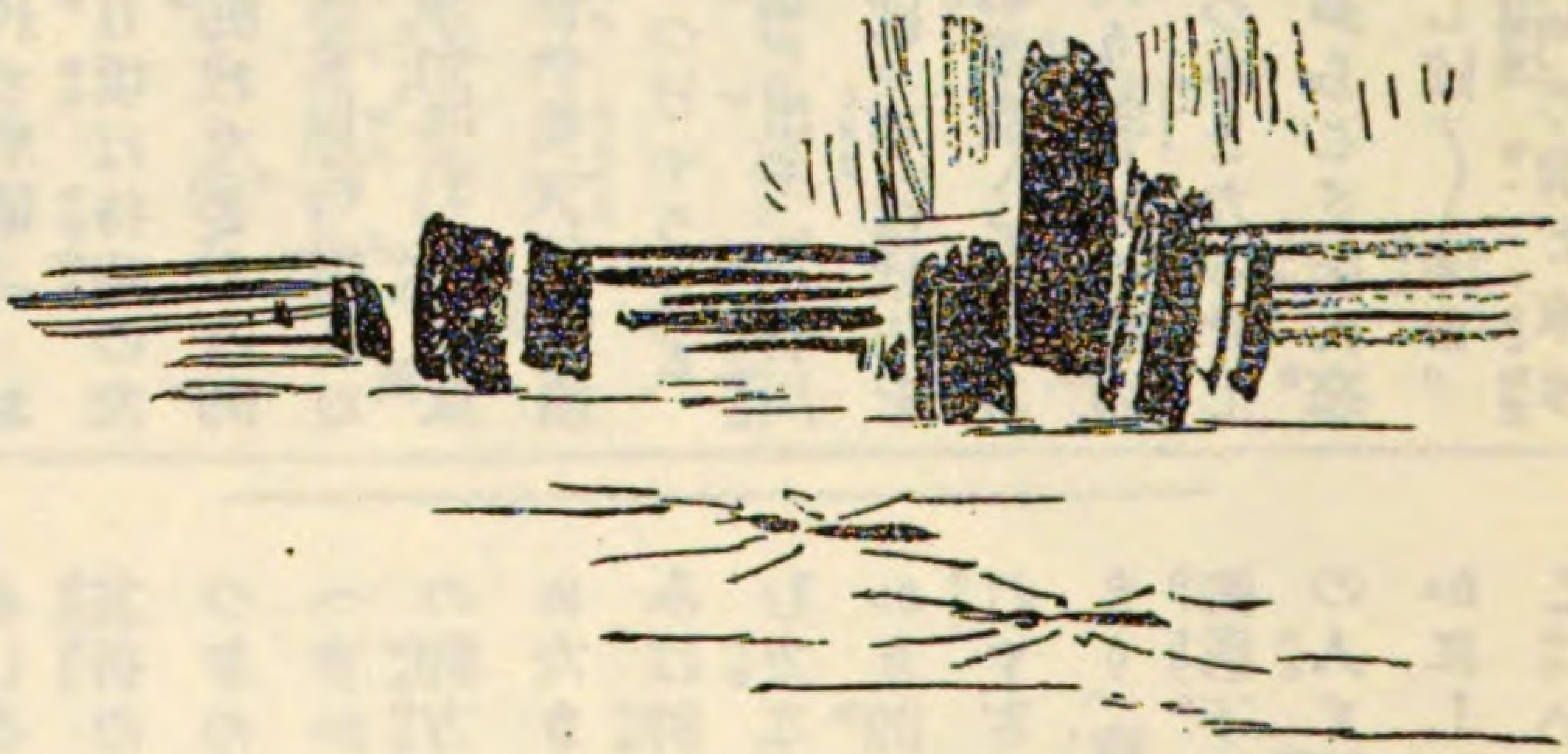
春日郊行

このごろの春の野を見んとて、病ある身をつとめて立出でしに、咲匂ふ花の數々、霞にけぶる遠近の山、小川の流、苔の色そひて、一際うつくしう見えわたりたる中にいとめでたきは、菫になんありける。心なき人にふみしだかれ、荒き風にもふきたてられつゝ、えみかたぶける花のやさしさ、つひにわれも心なき業と知りつ

ゝ手ははや花の上にいでぬ。家をいでし折は、かしここゝにと思ひたちしかど、此花にみいりては、去りがたき心地せらる、身にひやゝかに風のあたるに、あふぎ見れば日はいつしかいりて、霞をもるゝ夕月の、流にやどれるかげいと靜なり。月もかゝる所こそすみよかるらんと覺えしか。

瀧のほとり

木がくれの芝の上になみゐて、酒くみかはす。故ある瀧の水岩にあたりて、さながら玉をこきちらすやうなり。一人のわかうど、懷より笛とり出してふきすましたり。片への翁、扇はかなううち鳴して、小歌うたふ、いみじうをかし。あるは遠く、あるは近く谷にひゞきて、しらべいと妙なり。折しも風のまに／＼琴の音きこゆ。所からとてあはれまされり。早極樂のむかへ近きかと心ときめきせらるゝこそ、をかしく、はた嬉しかり



しか。

花をまつ詞

花はさかりに、月はくまなきをのみ、めづるのかは。雲ふかき夕月のかげをこひ、雨の夜はたあはれになさけふかし。咲きぬべき花にもいとゞ日數のまたれて、そゞろ心いらるゝぞをかしき。花のちり月のかたふくをしたふは、情ありて情なきぞかし。梅はちり柳はけづる春のこの頃、やゝ咲きぬべき花にゆびかがなふるあさ／＼ばかり、樂しくめでたきはなし。ゆきかふ人のけはひ、そゝのかす風のけしき、霞をもるゝ雨の音にも、ひたすら、花の立まひのまちわたらるゝもをかし。

日記の一節

此日頃おもひつけつゝ、家事にまきれ打すぎしに、今日は殊に天氣もおだやかなれば、いとけなき頃つかへ中

し、徳川伯の御やかたへと思ひたつ。今日はくもれり。明日こそよからめといふ人もあれど、暇なき身なれば、これかれ心づきし品々いとさゝやかなれど取揃へ、おしてまゐらんと、一人思ひさだめぬ。日頃は持病のため、髪はたゞつがねたりしかど、ことに御わたましの御祝をかねまゐる事なればと、髪などいはせしに、馴れぬ爲にやいとおも〱しく、後髪ひかるゝ心地す。後の氣分はいかゞあらんときづかひつゝ、湯あみをへし時、須満子の君きまして、つむりの世話、帯のつけやうなど、いとねもごろにものせらる。十二時半家を出て、小石川へとゆく。道の程は折から風猶寒ければ、車はほろを打おほひつゝ急ぐ。御住居ぢかき林町ときゝて、ほろをあげさする折しも、荘田氏の邸のあたり、さいつ頃の雨雪にて、道はいと悪けれど、梅のさきつゞきたるけしき、軒つゝきの住居にくらぶれば、さながらこと國に來たらん心地す。そこはかとなき鶯の聲しば〱聞ゆ。たどりつゝやゝ御館へ近づく折から、御門の前を車多くつらねて、何れへ歸り給ふ御方々にや、過ぎゆかるゝ

御うしろを見る。御門の人々、車夫なども、車のまゝゆかるゝやうにすゝめたれど、態と徒歩にて内にいり、所々しるべの家居もやと打ながめながら、こゝろ昔の人、其折のさまなど思ひ出しつゝ、御用所の口へとゆく。取つぎの者出來りて、御方々には今の頃徳川公の御もとへゆかれしと答ふ。はたと思ひあはするに、今しも何れの御方々にやと、御あとをながめしは、此年月日頃たいめたまはりたしと思ひ煩らひし御方々なりき。今日のみは神もみ放し給ひけん、悔しとも口をしくともいはむ方なし。其者何くれと申されし人々のうち、おそはちかき御つとめなりし福田の君に御面會をこふ。幾間を打すぎ、いと清らかなる所へいざなはる。待つ事半時あまり、障子のこまも數へおきし頃、まちまうくる聲は、御廊下に聞ゆ。此君はことに氣短にて、其かみは取次の人と同時に、かけこらるゝをつねなりしに、今日はいかにしてかく遅きにやと、こらへかね袂をひらきしに、こはいかに人は昔のまゝなれど、かく遅くなりしもことわり、あざやかなりし目もとは、兩眼生れもつかぬや

避暑の海邊（其二）

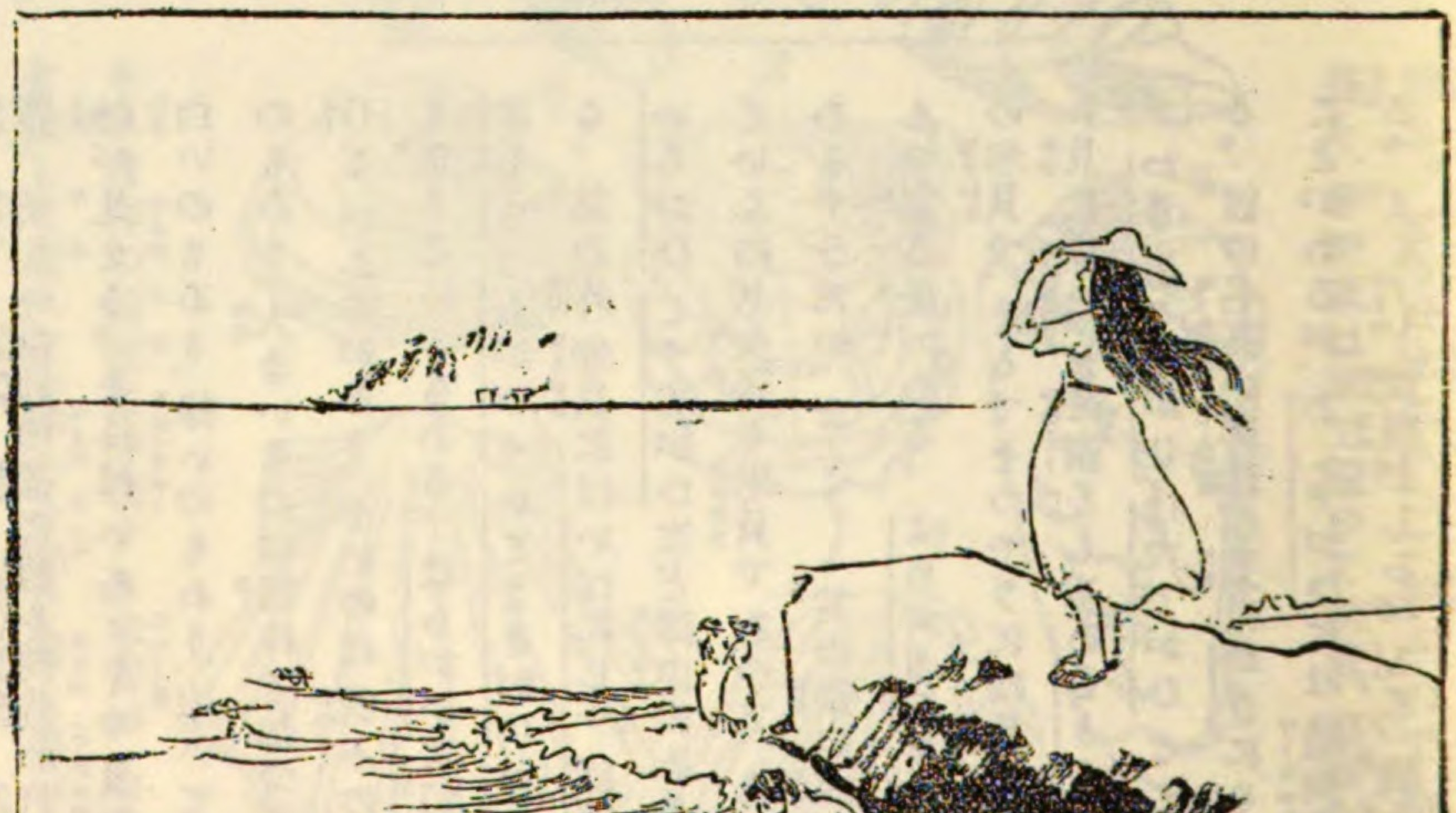
女子高等師範學校教諭　藤堂梅軒

ア、涼しいこと！　海に向つたときの心地は……而かも磯の小高い岩の上に立つたときなどは。これが東京かなどの市内に暮して居やうならば、どんなであらふ。

ア、有難い！　海邊の避暑ほど今日此頃の炎天を知らずに暮らさせるとは　否々有難味はこれだけではない、我々は涼を掬ふと共に、天地自然の智識を漁することはどれほどであらふか、チト眼を圓くして見廻さう。

全躰海邊は何故こんなに涼しいのであるか。ナニそれは風があるから涼しいのサ。その風のあるは何故であるか。炎々と輝く此の熱が地と水と、ど

第一圖

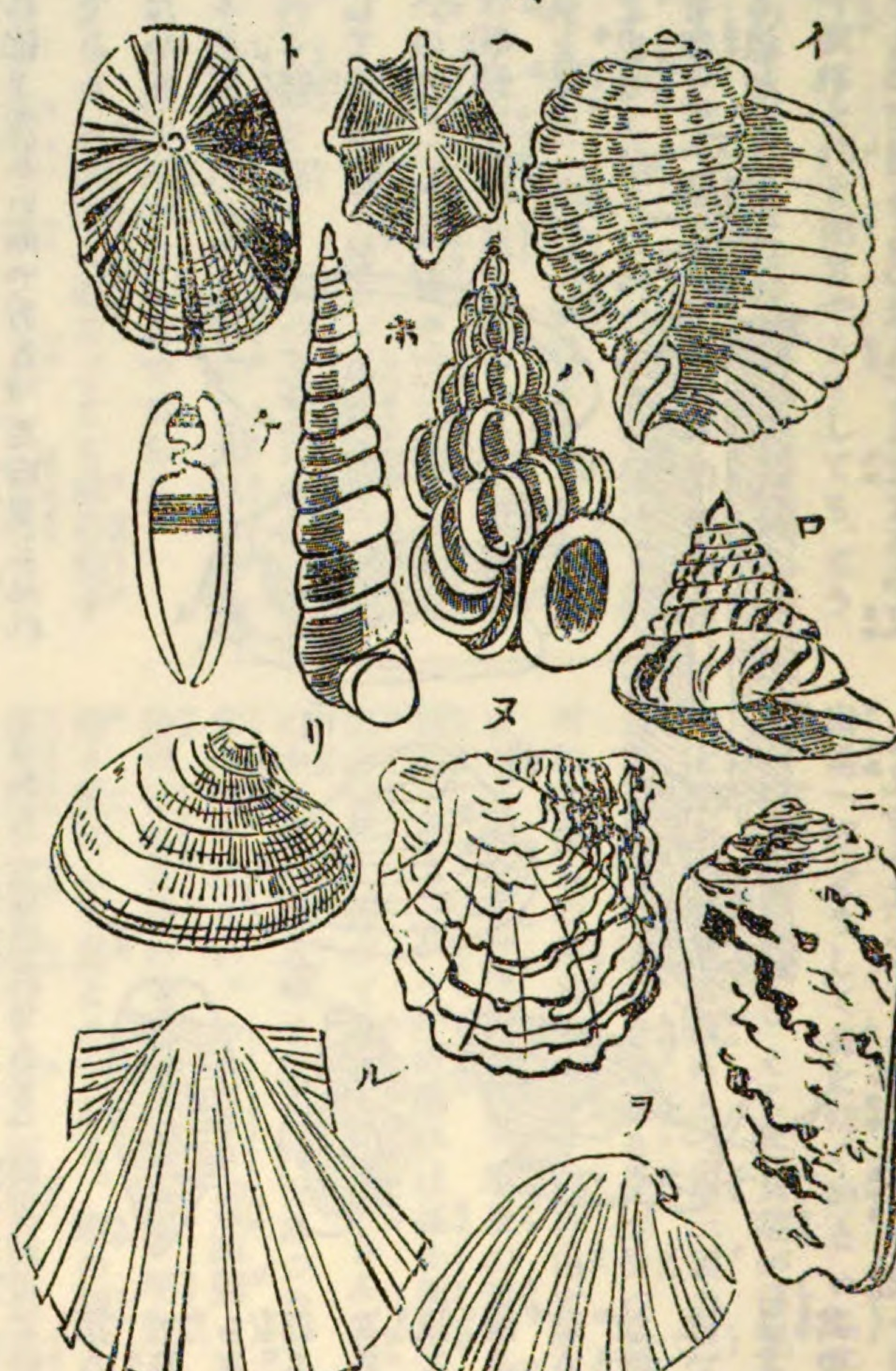


ちらに甚く照り反さるゝかを考へ給へ。どうしても地である、地が甚く此の炎熱を照り反す、それだけ地上の空氣が下から強く温められる譯である。それで水はどうである、水は地に比べて熱を反すよりも、吸ひ取るのである、だから水面に照り當つた熱氣は其の中へ潜んでしまふ理合になる。これで分るであらふ、海面の空氣は陸上の空氣よりも冷で、それだけ密で重くあるから、このやうな空氣が陸上へ向つて流れるは少しも怪しいことはない。と思へば、自然に此の廣大な海が人間にどれだけの利益を與へて居るかをも推し量られやう。まだ〳〵ある、海が我々に利益を與へて居ることは、殆んど數へ切れない。今一々之を擧げれば理化學に渉ることもあり、博物學に渉ることもあり、又氣象天文等の諸學問に渉つて、とても此の限りある紙上には盡されない。我々は今此に最面白味のある博物に關係のあることを述べて、それだけでも海の効用の廣大無邊なることが想像できると思ふ。

先づ濱邊に立ちて浪打ち寄せる水際をツク〳〵と御覽。美しい白妙の砂に處々何物か打ち上げられてある物が見える。それはいろ〳〵の貝殼で赤いのもあり、白いのもあり、緑いのもあり、巻いて居るもあり、扁いのもあり、大きいものは誰れも知つて居る所のほらがひといふのがあり、小いのは我々の小指の爪の半分にも足りないのもある。ほらがひに似て小いものにあかにし、うづらがひ(イ)いとまきがひ(ハ)ながにしなどがある。其の外巻貝にはいはにし(ホ)ばい、こしだかがひ(ロ)いもがひ、こやすがひなど澤山にある。あわびとこぶしといふのも矢張り巻貝であつて、そういへば一寸變であるやうだが、よく〳〵其の殼の表面を見れば巻き込んで居る所がある。よめがさら(ト)じんがさがひも亦此の巻貝で、まるでそのやうには見えない。それから片い貝には蛤を筆頭としてあさり(リ)つぶがひあかがひ(チ)かき、おこやがひ、ほたてがひなどこれも中々多くある。彼の名高い眞珠の玉はかきにも不圖すると産することがあるが、おこやがひには通例多く出てるのである。よく〳〵貝類をしらべると、數千種もあつて、砂濱

をそゞろ歩いて拾ひ上げた品々を撰り分けて御覧、立ち所に數十種は得られるものである。

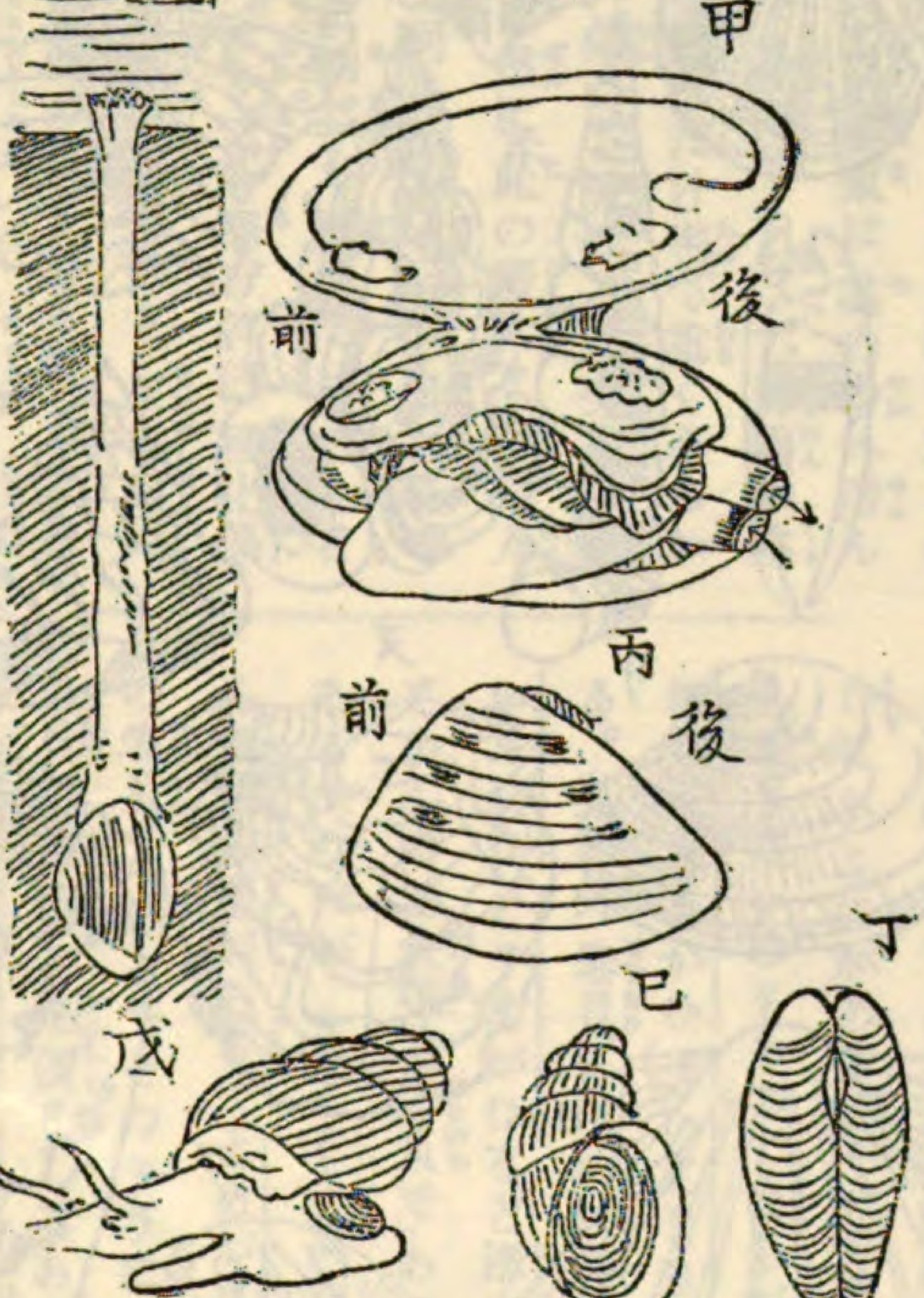
第二図



大小種々の紙箱に之を藏めて保存するは最も樂みなもので、隨分昔から貝道樂を好んだ人もあつて他愛もない、下品でもない、弊害もない、又之を集め歩るくは健康上甚宜しいことである。ナアニこんな死殼を拾ふだけで滿足しては詰らないと思ふ。どうせ水に入つて遊ぶのであるから、淺い砂の底を、手で或は足で掘つて御覧、場所によると何か觸るものがある、拾ひ上げて御覧、あさりか蛤か何かの貝である。これ等は潮水が滿ち來るときは躰を幾分か露して水を吸ひ込むと共に食物を採り入て居る。それは躰の後部に呼吸する水管があるから、それだけを出して居れば、躰の全部を露す要がない。蛤などの

貝殼の扁いものは眼がないものであるから毎も躰の前部を隱して、只僅に躰の後方にある呼吸管をさへ砂泥の外へ出して居ればよろしいのである。左圖(甲)を見れば自ら理會るであらふ。それだものだから呼吸や食物を取ることが出來れば成るべく躰は砂泥の中に沒して身を安全に保ちたいのは尤のことである。今おほのがひといふ貝を見るに後の呼吸管を成るべく長くして躰を深く砂泥に沒して居る樣が實に面白くある。それで之等の扁い貝をもつて居るものは人でも近よるか又潮水が涸れると砂の中へ竄り込む、それには二枚の貝殼が閉づれば右圖の(丁)のやうに鑿の形になるものであるから砂を切つて竄るには都合が好い、そこへ(甲)圖に見える舌のやうな肉足を貝殼の間から出して之を助けるから一層便利である。我々が現に蛤を見とめながら其の竄つた所を掘つて見るに、行衛の分らないことのあるは即ち彼れが此の便利なる貝殼と肉足とを以て素早く砂の中を潛るからである。遲鈍い動物でも存外に油斷ならぬものではないか。

第三圖



さて愈々之を捕つて其の貝殼の口を開いて見やうに、どうも大變な力で我々の手尖では迚も駄目である。それは貝殼の内に二本の貝柱があつて、二枚の貝殼を中から繋いで強く引付けるからである。若

しもどうして其の口を開けやうと思へば、小刀を差し入れて貝柱の附根を搔き切るより外はない。此のやうにして貝柱さへ切り離せば、それからは自然に其の貝殼が開く、而かも今度はそれを閉ぢやうとしても、どうしても止まらないのである。それは又どうしたかといへば、二枚の殼の直上のやゝ後方に一種の彈力性ある革質の繫ぎがあつて全く強く二枚の殼を引付けて居る、之を貝帶といふ。即ち二枚の貝殼はどちらも蝶番で咬ひ合つて、一方には貝帶で以て成るべく之を開かうといふことを考へ、他方には貝柱で以て成るべく之を閉ぢやうといふことを考へて居る。畢竟此の二ツの操り方で其の動物が貝殼を開くも閉づるも自由にして居るのである。第二圖の(チ)はそれを明にした想像畫であるから氣をつけて見れば大方は分るであらふ。

ほらがひやさゞえなどの卷貝類は蛤などとも餘程樣子がちがふ、第三圖の(戊)を御覽。第一に角が二本具つて眼も其下に明にある。そうであるから蛤なんかに比べれば其の運動が活潑で、自分で確と食物を探ねて行くだけでも違つて居る。蛤のやうに只一個所に動かずに後尾から管を出して偶然に來る小い食物を吸ひ込むやうな意氣地なしとは遙に變つて居る。それで敵にでも出逢へばどうして身を防ぐかといふに、矢張身を殼の中へ引込む、しかしそこに貝蓋が後尾に附着ひて居るのを閉ぢて堅固に固める。第三圖の(己)を御覽。

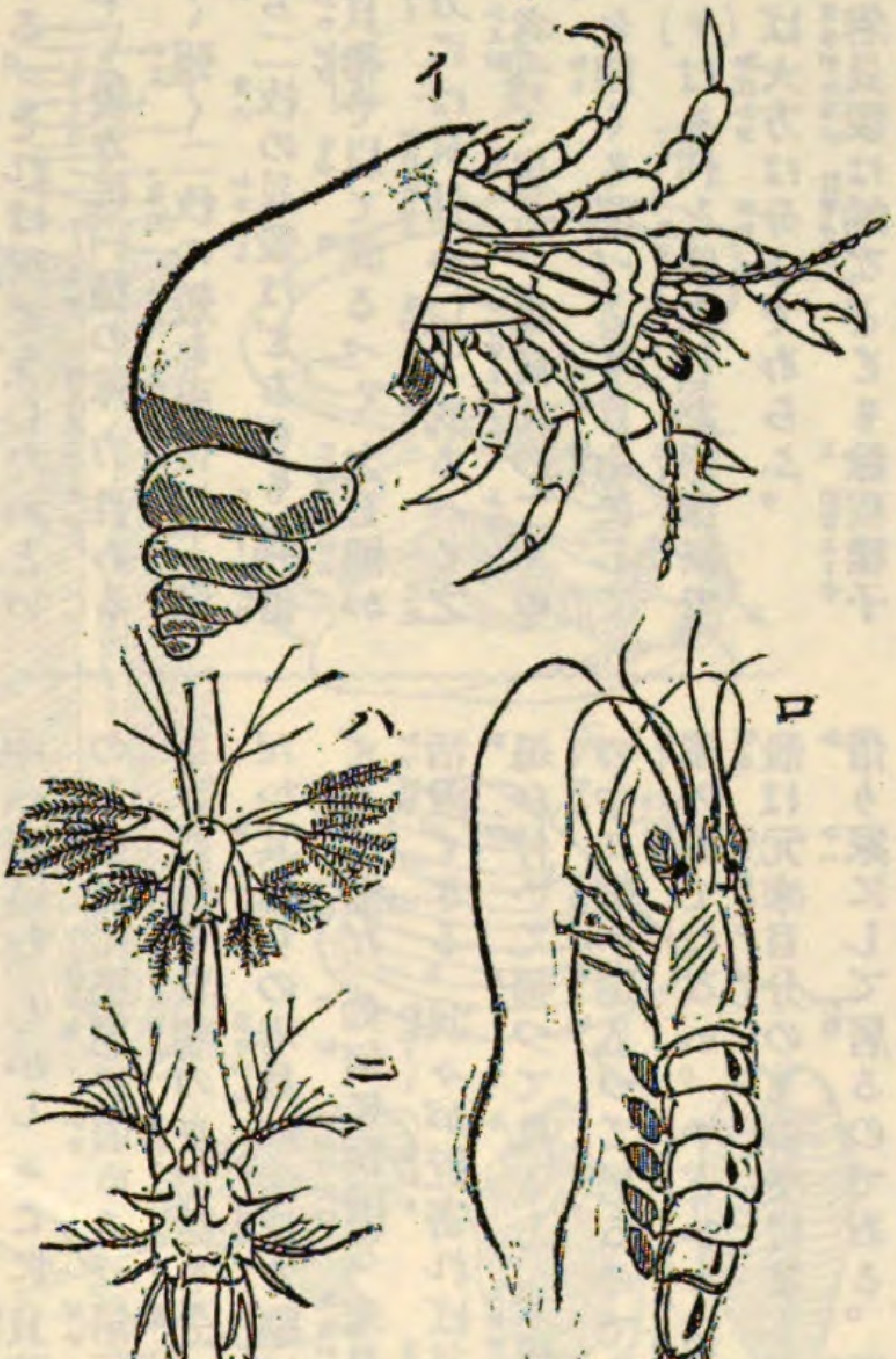
さアこれで貝類の身上話も先づ分つた。ところへなんだか其處らの卷貝が素速く驅け出すを見付け出した。

どうも變だ、如何に活潑な卷貝の歩き方にしても餘り活潑すぎる。我々が近寄れば益々逸早く逃げ出すから、追ひ付いて捕つて見ると、豈料らん、貝ではなくて貝殼の中に蝦が這入つて居るのであつた。否、蝦の類で、本當の蝦ではない。やどかり(第四圖(イ))といふもので、貝殼は元來自分のものではなくて、明殼を求めて、それを借り家にして居るのである。蝦の類であるから體には多少堅い皮を被つて居るが腹だけが柔くてそれを確と貝殼の內面に吸ひ着けて居る。若しもそれを殼より拔き出さうならば、大變の力で以て中々頑張つて出ない、

それを無理に引き抽くと腹から切れて終はねば取り出されない。だから滿足な形で抽き取らふと思へば、其の殼の後尾を熱い湯に漬けるがよろしい。さうするとやどかりは後尾が熱くなつて來るものだから、仕方なしに這ひ出して來る、そこを旨く拔き取るのである。

全體蝦は頭に四本の觸角を持つて其の二本は短くて二叉になつて居るが、他の二本は甚く長くて、中々感覺の鋭いものである、我々が少し指先でも觸れやうとしたならば、直樣跳ね出して逃げてしまふ。それに其の眼の玉が柄の尖きにあつて、自在にクル〳〵と回るものだから後からも横からも敵や餌の來るのを見出すことが出來る。そんなであるから體の運動も素早いもので水の底を匐ふことも、叉泳ぐことも出來る。そこで其胸を御覽(第四圖ロ)十本の足があつて何れも其先きに尖がつた爪がある、その爪が幾等も二叉になつて鋏のやうなのもある。殊に其の第一對の足の端が尤さうである、やどかりを見ても矢張左樣である。それから其の腹の方を見ると亦五對の足がある、しかし其の形は團扇のやうで、即ち水を泳ぐに都合よく出來て居る。水の靜な底を瞰いて見ると石の上などにそれが

第四圖

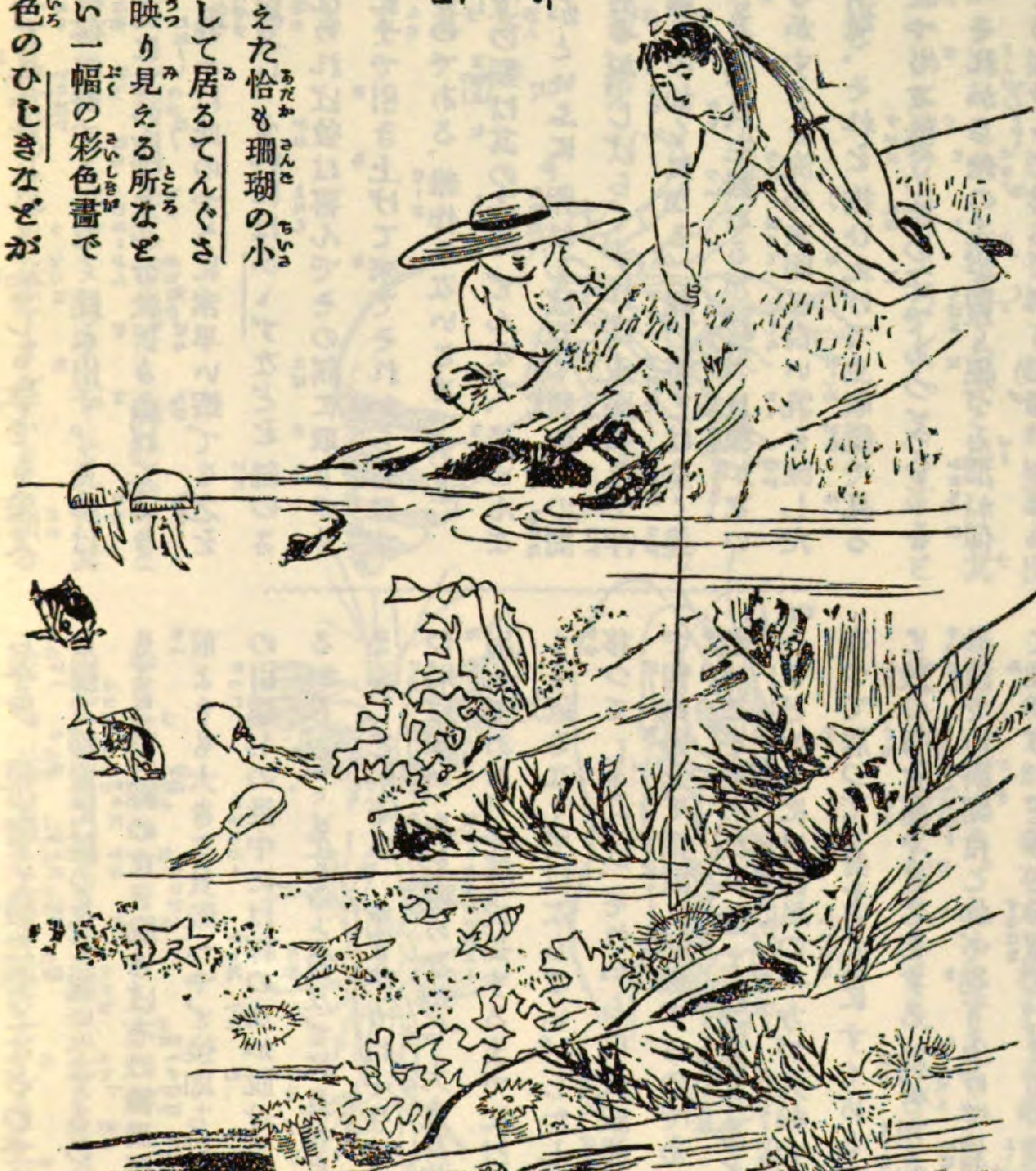


匐つて居るところを見かけられる、若しも竿でも差入れて驚すならば彼等は勢すさまじく跳ね出す。それは泳ぎ足のあると、更に其の腹を充分に折り曲げて彈き出すからである。我々は此のやうに素早い蝦でも之を釣り取ることは容易い、それにはみゝずなどを絲のさきに着けて水に沈めれば彼は喜んでその餌に取りつくから靜々と水面にまで引き上げて來てそれから急に水の上へ釣り上げるのである、雜作もないことである。

此の蝦ややどかりの類は其の子がどんなで、又どんなにして成長するかといふに、卵はしばらく親の足の間に繫いで保ちて居るが、しばらくすれば水面にまで浮んで孵ると第四圖(ハ)の如くになる。親の姿とは全く違つて、足のやうなものが只三對あるだけで、且腹がないやうである。どうかすると海の表面に白い乳を流したかと思ふことがある、それを掬ひ上げて虫眼鏡で見るならば上に述べたやうな姿の蝦の子であつて、ピンピンと跳ねて居る。それから此の子が暫く經つと形が伸びて足のやうなものも段々と增して來る(ニ)圖。それから今度は親によく似た姿となるのである。こんなに姿を變る都度に躰の皮を脫いでするのである。やどかりもさうで、躰の皮を脫げばその都度に體が大くなつて前よりも大きな貝殼へやど換即ち引越すのである。其の引越しの最中には躰の皮が脫けて實に軟かいものでるから、動ともすると魚などに見付けられ食はれてしまふことがある。やどかりは一生の中此の間ほど心配の時はない、身を潜めながら大きな相當な貝殼を尋ね出すのである。充分成長するまでにはこんなことを數回くり返さなくてはならない。しかしさうして貝殼へ引移つてしまへば、それからは大威張りで砂濱の上へまで匐ひ出して活潑に運動するのである。若しもそれで危いことがあれば忽ち殼の中へ身を潜めてしまふ、或るやどかりには前足の一方が大相大きく太く且つ堅くなつて居つて、身を貝殼にすくめるときにはそれで確と殼の口を塞ぐことをする、何と用心深いではないか。砂濱での研究はこれで切り上げて岩のある磯の處へ來て見やう。どうも砂濱とはまるで樣子がちがふ。一面

に青赤褐色の藻が茂つて居る、浪に搖られ漂ふ様は陸上の林が大風に動くかのやうで、而かも綠いあをさが扁い躰をヒラヒラとさせて、その間〳〵から紅色のさえた恰も珊瑚の小いやうな枝をなして居るてんぐさなんかチラ〳〵映り見える所などは得もいはれない一幅の彩色畫である。それに褐色のひじきなどが

第五圖



岩の隙き間を縫ふて各〳〵嚢形の枝などを押し立て居る趣は又一段と面白い。隨分昆布の小いのも見える。

植物がこんなに繁殖して居るだけに、流石に動物も甚多い。先珍らしいのはいそぎんち

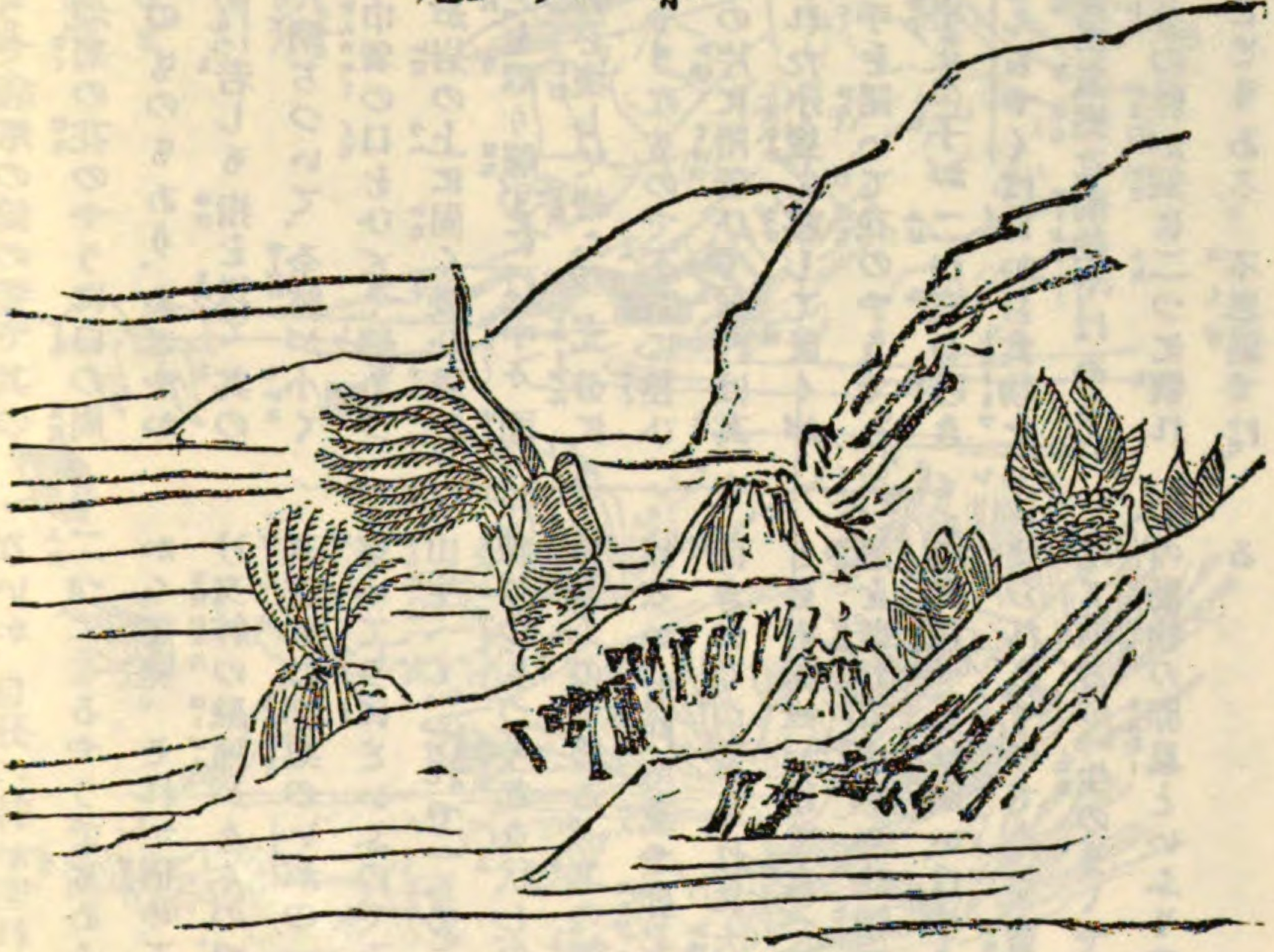
やくであらふ。實に巾着のやうで袋形の筒の姿で其の上に口が一つ明いて多くの手が菊の花のやうに口の周りに着いて居る。それに眞赤のものもあり、あざやかに綠色のもあり、又褐色もあり。若しも指を以て其の手に觸れて見るならば直ちに閉ぢついて、全體が小く縮かまつて終ふ鹽梅はまるで巾着の口をひどく締めつけたやうなものである。それが岩の上に固く吸ひ着いて離れないものであるから、之を取り離すには中々面倒で、下手にやれば其の柔な軆を壞して終ふ。充分に開いて居るときに庖丁か鎌のやうなもので不意に拯ひ取つてよろしい、或は丁度岩の片に附着ひて居れば其の片のまゝ取上げて潮水を容れた小盥に移して置くがよろしい。さうすれば見事に手を開いて花のやうである、どうかすると其の口から小さな子が二つ三つ吐き出されることがある。いそぎんちやくは口から食物を取るが、又子を口からも產む、實に氣樂な動物ではある。しかしながら此の動物は又自分の軆が縱に二つに割れて、二つの新しい動物となることもある。不思議ではないか、自分の軆が割れるとは、全く植物が枝を出して二つになるやうでもある。第五圖の中に其の畵があるから御覽。それが極めて下等な動物であるからそれだけ又軆の融通がきくのである。

其處には亦栗のいがのやうなものがある、之を海栗と書いてうにといふのである。饅頭形の殼に堅い棘が澤山生へて、それで一身を堅固に守つて居るのみか、此の棘が少しづゝ起き伏しの出來るものからそれで底を徐に匐ふのである。其の殼の上に一つの穴があるは口ではない、肛門で糞や卵を放り出す所である、口は別に下向きになつて、それに大きな齒が五つもあつて貝類などをあぶせかけて食べる。此の動物を取り上げて其の殼を破して中から味噌のやうなものを採り出して味つて御覽。これがいはゆる雲丹と稱して我々に廣く食用せられるものである、賣品は多少食鹽を加へて味を付けてあるが、生のまゝでも食せられる。これは一體此の動物の卵巢といふもので粒々の小い卵の集りである。

それから底にはひとでといふのがありて五本の足が一寸紅葉形、否、桔梗形になつて居る。之に似て其の足のやゝ幅の廣いものをもみぢがひとといふ。又一層其の足の幅が廣くて五本が大方合併したやうなのがいとまきがひといふ。これ等は皆うにの類であつて、多少の形を變じたものである。しかしうにのやうに其の味噌を食べることはない。

それから岩の間はかめのてふじつぼといふものが居て、かめのては一寸龜の手を開いたやうに堅い貝殻が四つ五つ集まつて立つて、どうかすると岩の上を跣足で歩いて足を切られるとがある。ふじつぼも亦堅い貝殻が確と喰ひ着いて離れない、名の如く壺の形をなして居る。此の兩動物は實は蝦やどかりの類で其の兒のときは丁度蝦の兒のやうな姿をして水中を活潑に泳いで居つたが成長して後は殻で以て全く附着いてしまひ、體も大に變じて只數對の毛足をもつて居るだけて、それ

第六圖

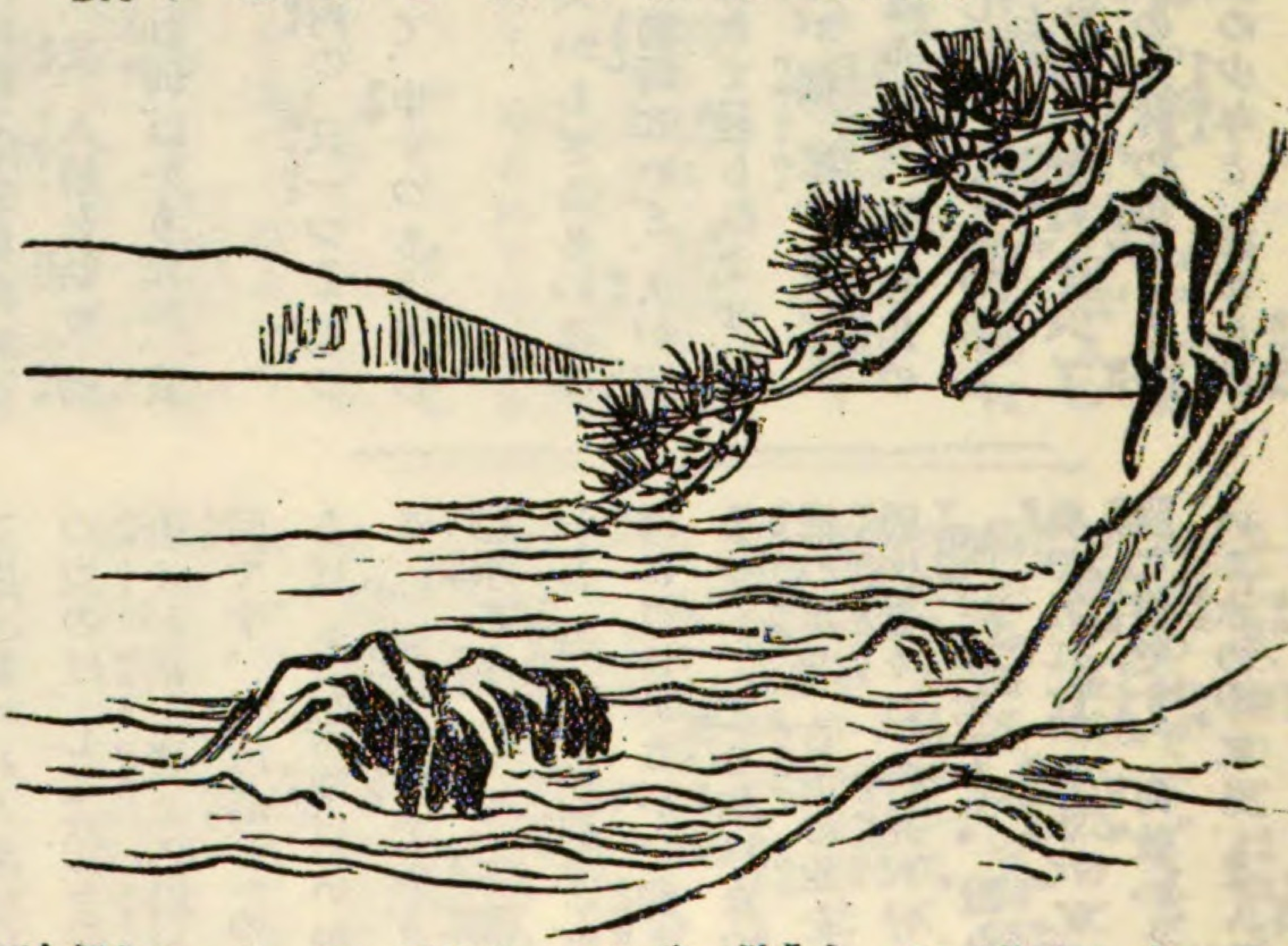


て以て水を煽て波を起して食物を引よせるのである。

水の話

女子高等師範教諭　岡田光子

◎時候もいつか暑くなりまして、緑翠滴らむとする木の下蔭や、潺湲と流るゝ水の邊が、懷しい時節となりました。そこで此處に掲げまする話も、涼しさうな水といふ題にいたしました。とは申すものゝ、之について金玉の句を連ねた名文でも作つて、讀まるゝ皆樣をして、知らず識らず、暑を忘れしむるといふやうな風流なのではなく、至極殺風景な（しかし知らなくてはならぬ）話ですから、その御積りで御覽を願ひたう御座います。



◎そも、この水は、吾々の周圍に如何なる有樣をして居りますか。東京のやうな都會の地であつては、河の水か、井戸の水としてよりは、見る事が出來ませんが、田舍の山高く谷深い處に行けば、白絹をかけたやうな瀑布や、糸の如くに流るゝ細川になつて居るし、また所によつては、滔々たる急流や、洋々たる大海ともなつてゐます。その形こそかく樣々ですが、兎に角人の居る所として、水のない處はありませむ。それはその筈で、水は地球の表面の凡四分の三を占めてゐる、即ち人の住むでゐる陸地の三倍もある廣さの處に、滿ち〳〵てゐて、しかもそれが絶えず、地から天に上り、また地に下つて、グルー〳〵四方を循環して

ゐるのですもの。ですから、之がために、地球自身が影響を蒙つてゐる事はどれだけだか、又、人類を始め、動植物がその御蔭を蒙つてゐるのは、如何ばかりだか、實に分らない位であります。

◎只今こゝでは、數々の水の用の內の、只一つを取つて、飲料としての水といふ事について、申すつもりであります。

◎水は、人の飲料として、必要缺くべからざるものなる事は、誰でも知つてゐます。空氣が暫時ないと、人が死ぬやうに、水がないと、やはり人は生きて居られませむ。さうでせう、我々の身體の中を血液が循環するのも、食物が躰內を廻つて、各所の養となるのも、又無用の物が躰外に出るのも、皆、水が運送してくれるのでありますから。もし水がなかつたらば、之等の働は、すべて止まつてしまふわけです。實に、人の身體の半より多くは水から成つてゐますので、紅顏の少年と、皺だらけの老人との重なる相違は、何處にあるかと云へば、躰內にある水の量の、多きと少なきとによるのであります。丁度水氣のある果物は、艶々してゐるし、水氣のなくなつたのは、しなびてゐるのと同じやうなものなのです。吾々が渇を覺える時は、即ち躰內で、この水が缺亡した時です。その時、この渇をいやすべきものがなかつたらば、その苦痛はいかばかりであるか。飢を忍ぶよりも、一層辛い事でありませう。

◎水と申しても、不潔なのも、純良なのも種々ありますから、吾々が飲料としてとる水は、どれでもよいといふ譯にはゆかない。即ち適當なのを、撰ばなければいけません。之も知れきつた事で、如何なる無智の人でも、溝の水や、古池の水を飲んでよいとは、思ひません。が、通例吾々は、外見だけの觀察で滿足して、安心して使ふ傾があります。澄み渡つてゐて、無色無臭で、味が甘美であれば、良水だと思ひます。けれども、之は甚だ危險な事です。何故かと申すと、後にも述べますが、そういふ水の中にも、まゝ有害なものが入つてゐて、却てそれが爲にきれいで、味がよいなんていふ事があるからです。だから水は外見ばかり清潔なので、決して滿足

すべきではありません。その水は何處から酌むたか、どういふ地を通つて來たか、などいふ事までも、考へて見なければなりません。

◎一躰人間が使用する水は、何處から來ますか。大躰二つに分ければ、天から直接に來るのと、地から來るのとです。天から來るのは、即ち雨や雪で、地に在るのは河水、海水、井水、湧泉、などであります。

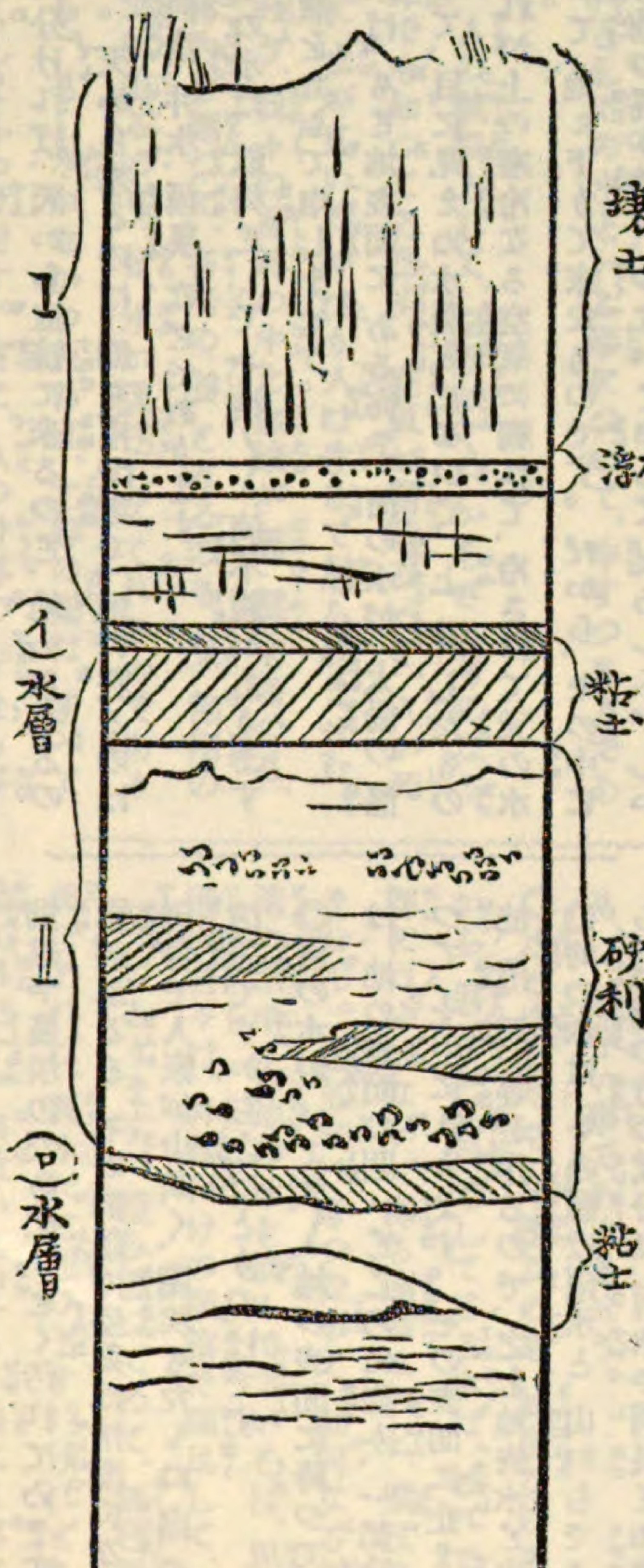
これらの水は、飲料としてそれ〴〵適不適がありますから、順をおふて申しませう。

◎雨水は、もと地表面にある海や、河の水が、太陽の熱をうけて、目に見えぬ水蒸氣となつて、上昇したもので、其れが上の寒冷なる空氣に觸れて、冷されて元の水となつて、地に下りて來たものです。だから、その中には固形物の混り物は、少ないと申してよろしい。しかし地に落つる前に、永い間空氣の中を通つて來るので、其の間に空氣と觸れあうて、爲に空氣中の有害物を受け取ります。その有害物とは、製造所から立ち上つた有毒な瓦斯だの、動物が炭酸ガスと共に肺から呼出した微少の有機物だのです。之等が皆雨水の中に含まれるのですから、どうも雨の水は如何に天から降るといふても、清いとは申されません。從うて、飲料には出來ないわけです。ことに屋根から傳はつて來た雨水は、烟煤や塵埃のためにひどく汚れてゐます。そのかはり雨がふると、その御蔭で空氣は清潔になります。尤、田舎で人家が少なく、塵埃もたゝぬ處の、雨水は、ごく清淨ですから之はとりのけです。

◎雨の水がいよ〳〵地の表面に降つて來ると、一部分は、地の表面の凹いところに溜り、一部分は地にしみ通つて、土中に入ります。その表面に止まつた水が即ち池、沼、河、等を作るので、之を地表水と申します。

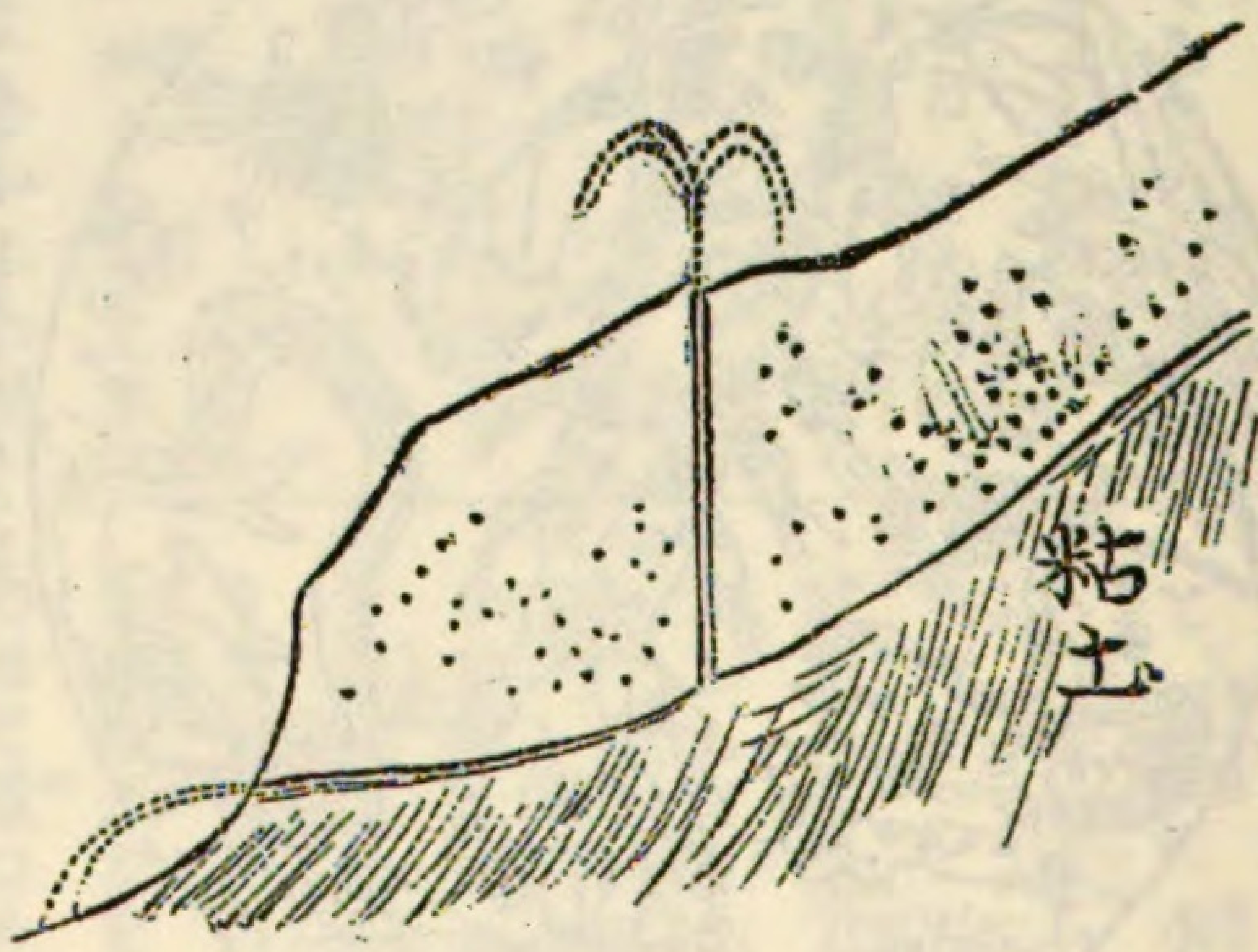
◎河の水は、その源は雨水と、山からでる清泉どですから、上流の方の成分は、雨水や清泉と相違はありませんが、ダン〳〵流れてゆく途中で、或は河底の土の中にあるものが溶解したり、或は人里に近くなくて、下水の水や、種々の不潔物が入つたりして、つまり流れゝば流るゝだけ、汚なくなるのであります。しかし、一方では、

河の自浄力と申して、河水は流るゝ間に、空氣や日光にさらされて、一たん溶解したものを失うたり、又水中の酸素の働で有害物を減らしたりする事が出來ますが、とても悉くきれいにする事は叶ひませんから、兎に角、下流の水は汚れてゐます。河でさへ之ですから、流れないで水のたまつてゐる池沼等は、不潔物の集まるはかりで子子や小蟲の棲處となるのも、無理はありません。ですから、まづ河水もそのまゝでは、飲料にするわけにはゆきません。處が人が悪口をいふやうですが支那の話をきいて見ますと、彼の有名な揚子江の水は、混々たる濁流であるのに、その沿岸の人々は皆江水をそのまゝ飲料にしてゐて、一向その不潔を意に介せないさうです。もしも其れを咎めでもする人があると、「河水三寸流るれば則ちこれ清きなり」と、いうてすまして居りますとか。眞にその不潔な理を悟つたならば、まさかかうでもありますまいに、誠にきのどくの事であります。



東京地層斷面圖

◎河水、雨水、共に、飲料水には落第したとすれば、地下水は如何でせう。地下水というのは、地表水に對していふので、地にしみ通つた水を申すのです。地の層は、我々が常に見るやうな土壤ばかりで、出來てゐるのではなく、次の圖（東京の地層圖）のやうに、ある處は土壤ばかり、或る處は粘土ばかりというやうな、工合に層をなしてゐます。だから今雨水が地に浸透して、第一の部分を通つて、（イ）まで行くとします。その下は粘土の層であつて、水が浸透しにくいから、一部分の水は粘土の層の上に溜ります。之は地表面に近い地下水となるので。尚、粘土の層も通りぬけて、いつた水は、（ロ）にいつて溜ります。之が第二の地下水となるのです。そこでこの二つの地下水ですが、第一のものは、地表面から離れてゐる事が僅かであるから、汚水が入りやすい。殊に市街、埋葬地、田畑等のあるところでは、甚しく汚穢のものが入るから、そこらの地下水は最危險です。井戸を掘るのは、地下水を得るためですが、この層に掘りあてゝも、此處の水は、妄に用ゐる事は出來ません。



然らば、飲料としては、どこの水がよいかと申すと、深い地層中にある水（ロ）が、まづよいのです。その理由は、深い處にあるから、雨水がそこまでゆく間に、地の中で長い間濾されて、前にえた種々の有害物を失ふし、地表面の悪水もこゝまでは、來ないからです。こゝまで堀りぬいてある井戸の水ならば、清潔であつて、至極よろしくあります。この層の水が、自然に地中に道を求めて地上に出たのが、即湧泉です。これは深井と同樣飲料によく適します。

しかしながら、水は物を溶解する性質をもつて居りますから、この深井も泉も、清いというても、その土地の層の性質によつて、差異があります。即ち水に溶けや

すいものを多くもつてゐる土地を通つた水は、どうしても溶解物が多いので、たとへば石灰質や、白堊質の地から來る水の中には通例炭酸石灰が多量にとけてゐるがごとくであります。溶解物があまり多いのは、飲料水としてはやはり、用ゐる事が出來ません。

◎以上申したやうに、雨水は申すも更なり、河水といひ、泉の水といひ、何れも多少混り物のない水は、ありません。實に天下に眞の純粹の水はないと申してよろしいのです。故に飲料とするには、比較的最混りものゝ少ないのを撰ぶんであります。水の中には何れにも、多少の黴菌、寄生虫の卵類をはしめとし、動植物の組織の廢棄物、(毛髮、細胞、虫の羽翅、植物の纖維等)や又は石灰だの苦土だの鐵、硫黃なんどの無機物が入つて居ります。肉眼には清く無一物に見えても、その一滴の顯微鏡下に置いて見ると、次のやうな物であります。之を知らずして飲むかと思へば、如何にも氣味がわるい次第ではありませんか。その内最恐るべきは、病原となる黴菌てあつて悪い水になると、三分三厘立方の中に黴菌が一千萬も入つてゐるさうです、しかも之等は至て微小で、ちつとも目に見えぬ處が、顯微鏡下でも知ることが出來ず、化學の力でも、見分の附ないのがあるのです。之等の黴菌の存在する水は、彼の恐るべきコレラ、チブスなどの傳染病の媒介をなします。



一滴の滯水中に居る小虫の圖

黴菌については、寄生蟲の卵などが恐るべきです。蛔蟲、條蟲、ヂストマ等が、人畜の體內にわくのも、之等の蟲の卵の居る悪水を飲用するから、起る事がしば〲あるのです。かく思へば、いかな

る場合でも、うかと水は飲めないわけです。その他の含有物は、直接の害はそれほど無いかもしれませんが、有機物はいはゆる黴菌の食物となるものゆゑ、それらのものゝある水には、黴菌も從うて蕃殖するわけです。水に溶けてゐる無機物の内で、通例よくあるのは炭酸石灰です。石灰質の地を通つて來た水によくあるので、鐵瓶に湯垢が着き、石鹼のよくとけないのは、その存在の證據であります。かゝる水は硬水と申しまして、直接にどれだけ害があるかよく分りませんが、石鹼を使へば水に溶けない白濁のものが出來るし、ソップや、茶を煮るのに用ゐれば、よい味が出ないし、又これで手を洗へば、手の皮膚が粗るし、どうもよい事はありません。

◎此の如く水の中には、恐るべきものが多くありますから、如何なる水でも飲料として安心してつかふのには、固より專門家の鑑定を賴むのが必要ですが、簡單な試驗法や、淨水法を知つてゐるのは、都合がよい事であります。

水の良否を檢する簡單なる試驗法。

一目して水に濁りのある、又臭氣のある、滋味から味のあるのなどは、その不良なる事、直に分ります。

高さ一尺ばかりのガラスの圓筒を、白い紙の上にのせて、圓筒に水を滿たして、その上から眺めて御覽なさい。もし色を帶びてゐたり、汚濁ならばそれは不良の水です。

試驗管に水を盛つて、之に硝酸銀といふ藥の液を數滴たらして見ます。もし白い濁が出來れば、鹽のある證です。飲料水として、食鹽の多いのは不良です。何故かといふと、之は動物の排泄物がこの水の中にある事を示すので、排泄物は即黴菌の成育を助けるからであります。

土瓶のふたをのけて、その上に皿に水を盛つたものをのせて煮つめて御覽なさい。水は蒸氣になつてたちますが、もし水中に固形物があれば、皿の中に殘ります。たゞし水を蒸發させる間に、他から塵の入らぬやうにしなければいけません。

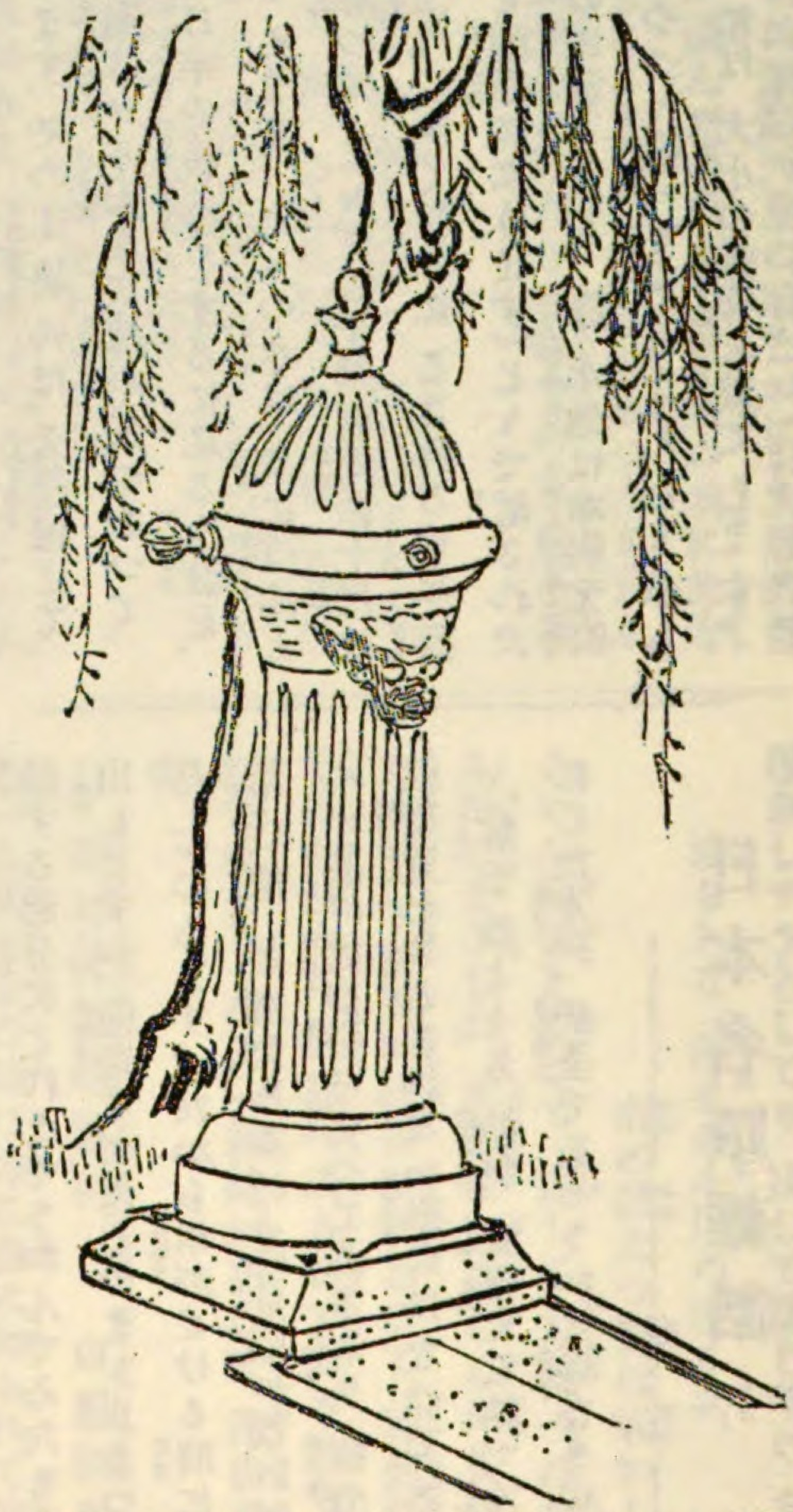
淨水法

ごく普通にする淨水法は、濾過法です。水を濾すには、砂と木炭とを使ひます。砂は水中にある有機物を變じて無害のものにし、木炭は水中にある汚物、黴菌をも吸收する働をするものです。簡單な水濾器は、小孔のある水瓶で、棕櫚の皮や海綿などで瓶の內面から、その孔をおほふておきます。瓶の中には、一番下に清潔な砂利をしきまして、その上に木炭を積み、またその上に砂を入れるのです。之を使ひましたらば、時々中の砂や棕櫚を出して、十分に洗つて日光にかわかし、炭も無論新しいのに代へるかよく洗ふかしなければいけません。いつまでも、同じものを使用する時は、黴菌や水垢が炭の氣孔や、何かをふさいで、水を通さないのみか、こゝに來て水が却て不潔になるからであります。家內でつかふ水濾器では、最十分に水を清淨にする事が出來ないものなので。黴菌などは、悉く除去せらるゝ事はないから、その點からいへば水を煮沸した方がよろしい。水を沸かせば、有害の瓦斯は飛散してしまうし、黴菌は死にます、石灰等は沈澱するから、まことに安心です。けれども味をよくする炭酸瓦斯まで、飛び去りますから、飲んでは冷水など御いしくありません。この他には、化學的の方法で、明礬を入れて水を清むる法がありますが、之は水中に浮遊するものを誘うて器底に沈めますが、その他のものは、如何ともする事は出來ませんから、あまり功力はありません。

◎都會に住んでゐるものは、前に申した種々の理由によつて、よい飲料水を得がたいから、そこで水道を設けて、よい水源から水を導いて、人々の飲料に供します。我國では未だ何れの都會もとはいはれませんけれども、東京、大阪、橫濱を始とし所々の大都會にその設があります。こゝでは、少しく東京の水道の事について述べませう。

東京市民の飲料水は、昔から玉川上水、神田上水等でありますが、その玉川上水は、德川四代將軍の時に始めて出來たのです。はしめ市中によい水がなくて、人民の困難一方ならなかつたもののゆゑ、幕府で武藏玉川の

村民の、清右衛門藏右衛門といふものが、水利の術に委しいといふのをきいて、この二人に命じて玉川の水を引かせました。そこで、二人は種々辛苦して、水路を考へ多摩郡羽村から四谷大木戸まで、堀をほりて水を通じ、大木戸から町々へは地中に伏管を設けて、四方に導きました。この爲に江戸の町民が御蔭を蒙むつたとは、非常であつたのです。神田上水は何時ごろ出來たか、分りませんが、これは井の頭池から引いてあります。尙その他に、玉川の支流を引いた千川上水といふのもあります。この三上水とも現に昨年あたりまで、我々皆が用ゐて居つたのです。處が學問の開けて來て世の中であるから、いろ〱その道の人が取調べたのによると、玉川上水でも、神田上水でも、水源に近い處と、ごく遠いところとでは水の性質が大さうちがつてゐる、即徽菌の數だけでも、羽村では三分三厘立方の中に五百以內、井の頭池では、二百九十餘であるのに、築地で、玉川上水は、徽菌の數が五千二百神田上水は一萬八千以上といふ夥多しい數になつてゐるのです。一體飲料水としては徽菌の數は三分三厘立方の水中に、いかに多くても、一萬を限りとしてあるのだそうです。そこでこれではよろしくないといふ事で、水道



改良の論が盛に起つて、終に昨今の水道が出來るやうになつたのです。

今も水源はやはり、玉川をつかひますが、淀橋町に淨水工場を設けて、そこで一旦水を濾して、然る後市中に配水する事になつてゐます、その工場には、大澄池とて、水源から來た水を沈澱させる大きな池が三つあつて、人口百五十萬人に一日半の供給をするに足る水量を、入れるやうになつてゐます。この水は、次に濾池とて、砂濾にする處に移つて、こゝで二十四時間に十尺の割で徐々に濾されます。(かく徐々にこされるゆゑ家でこすよりはよほど清涼になります)こゝで濾された水は、淨水地といふのに移ります。淨水地は本郷元町にも芝榮町にも一つゞゝ備へてあります、こゝから市内へ水を給するのには、大小の鐵管を以てします。これは以前の竹や、木の管のやうに腐らず、從うて不潔物が入らず、又土管のやうに破れないから、大そうよいのです。四谷、赤阪、麻布、その他市中の高地へは、淀橋工場の淨水地からポンプを以て、給水管に注ぎ入れて、配水して居ります。

◎時節柄でありますから、終に氷について一言しておきませう。氷は一見玲瓏として誠に美しいが、泉水、井水に比べてその清潔の度は、如何であるかといふと、氷結する時分にこれまでうかんでゐたもの丶一部分は脫出しますが、黴菌などはそのまゝ止まつて(たゞ一時閉息して)ゐます。だから氷がとける時には、再びその生活の働をはじめるので、危險がないとは申されません。其れ故市中で賣つてゐる氷も、檢査をうけなければ發賣をゆるされない事にはなつてゐますが、そのまゝ食するよりも、飲料、食物をこれで冷して、用ゐる事にした方が、安全であろうかと思ひます。

日本名蹟雜話

文學士　喜田貞吉

◎京都の郊外

京都市中の名蹟のあらましは、第六號の雜話で述べた

所で、ほゞ盡きた次第なれば、之から讀者と共に、郊外を散歩しやうと思ふ、

前回の終りに淨土宗の本山、通稱百萬遍本名知恩寺の事を記して置いたが、あれはもと淨土宗の開祖法然上人の開いた寺で、後に後醍醐天皇の時とかに、大層流行病があつて、澤山人が惱んだので、病氣平癒の爲に此寺で念佛百萬遍の修行をして大きに利益があつたと云ふ事から、百萬遍といふ通稱を得たとの事である、此百萬遍から東へ出れば、

後二條天皇の北白河陵　の前を過ぎて、白河村となる、即ち白河の上流地方で、古への北白河の地は即ちこの所、これから、山中越といふのを越えれば近江の國へも出、又山傳ひに比叡山へも登る事が出來る、

白河の北の村が一乘寺村で、此村には有名な

◎詩仙堂　といふのがある、これは石川丈山といふ人の住み家であつたので、堂の四方の壁に支那の名高い詩人三十六人の肖像を描いて、一々其詩を書き付けてあるので、斯かる名が出來たものと見える、一體此丈山といふ人は、もと武士で、德川家康が豐臣秀頼と戰うた大阪役の時にも、家康の軍に從うて戰爭した程の人であるが、後こゝに隱居して決して大名の招にも應ぜず、京都の所司代板倉周防守は、其學問に感じて幕府に推擧しやうとしても、決して應じない、自ら

渡らじな、瀨見の小川の淺く共、
　　老の波たつ影は恥かし、

といふ和歌を送つて、決して京都へは立ち入らぬといふ決心を示した、此歌に瀨見の小川といふは賀茂川の支流で、下賀茂神社の所にあつて、詩仙堂の所からは、此川を渡つて京都へ入る譯であるから、斯く詠んだものと見える、此人一體詩が巧みで、澤山名作がある中にも、

雪如紈素煙似柄、　白扇倒懸東海天、

といふ富士山の詩は殊に世に知られて居る、

一乘寺村から北へ行けば修學院村、こゝには

◎修學院離宮　がある、もと後水尾天皇離宮の地で、庭園は殊に幽邃であると承る、此村からも比叡山へ登

る事が出來る、元來

◎比叡山は山城近江の境上の山ではあるが、其山上の延暦寺は、近江の部に屬して居るから、こゝで說くのは或は適當でないかも知らぬが、京都から日返りの旅に丁度適當の所であるから序に登つて見やう、

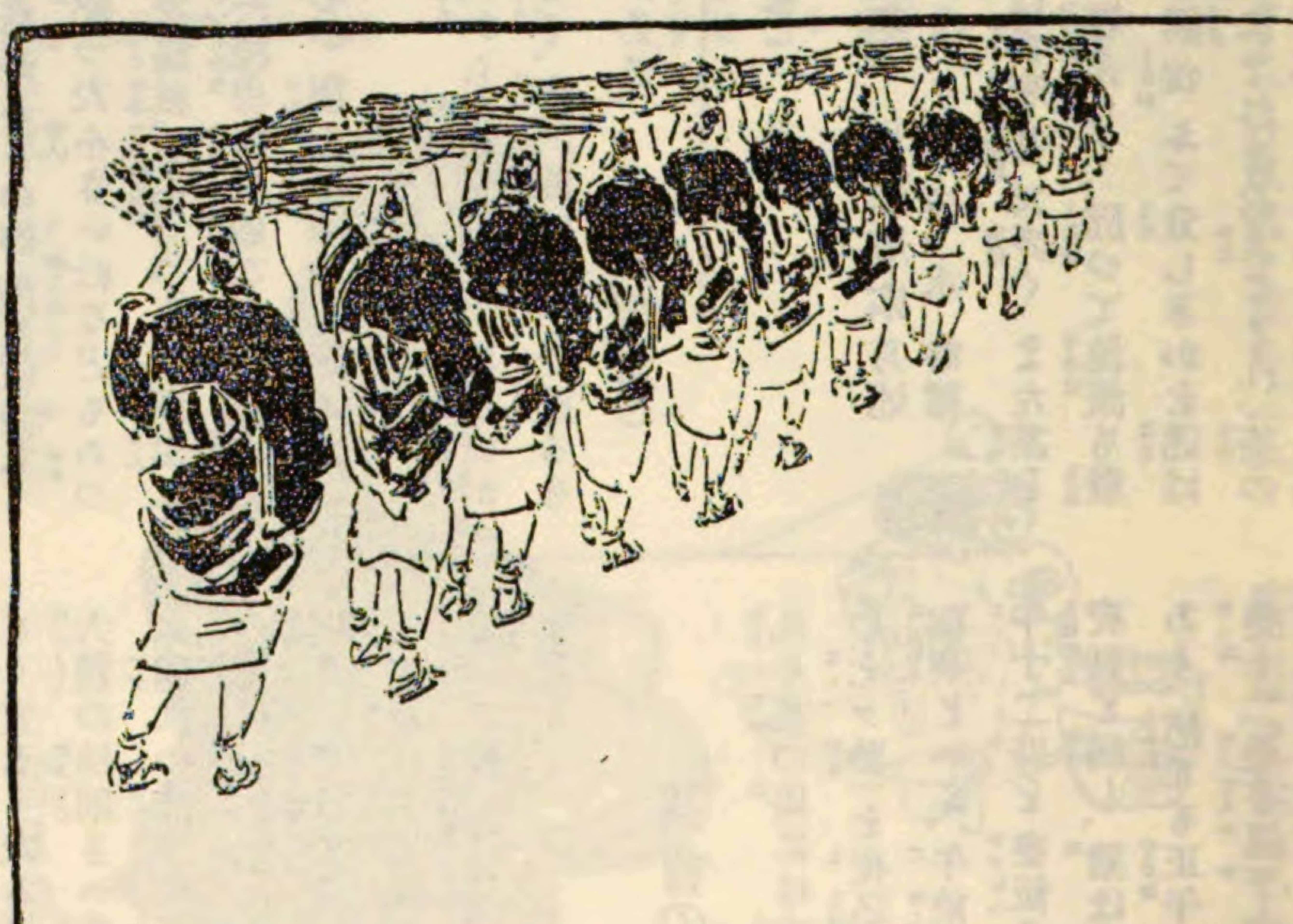
此山は恰も京都の東北に當るので、王城鬼門の鎭護といふ事に成つて、延暦七年に傳敎大師が建立したのがもとで、其後大師は支邦へ留學して天台宗を我國に傳へ、此寺で弘めたから、天台宗と共に此寺は盛に成つて、遂には叡山三千坊といふ樣に澤山に僧房も出來、後には同じ天台宗の中間でも、園城寺即ち三井寺と喧嘩をはじめて、度々大變な騷ぎを致し、形は坊主で、本當は兵隊である、所謂僧兵といふ荒法師を澤山に養ふ事と成つて、朝廷にも大に閉口せられた次第であつた、

◎彼の白河法皇といふ方は、なか〳〵盛んなお方ではあつたけれども、此僧兵にはトント閉口遊ばされて、天下に朕の意ふ樣に成らぬものは、加茂川の水と、双六の賽と、山法師とのみであると仰せられた事すらあつた、

なぜ山法師が斯う六かしかつたかといふに、彼等は何か事件か起つたなら、早速其奉仕して居る日吉神社の御輿を擔ぎ出して、京都へ押し懸けるといふ騷ぎであるから、之を打ち退けやうとすれば、勢ひ神樣を相手に戰爭せねばならぬ事となり、若し一本でも箭が中らうものなら、直ちに御輿を打ち捨てゝ逃げて歸り、一山の大衆何千人といふものが大講堂の前へ集つて、恐ろしい修法して反對の人を呪い殺すといふ勢込であるから、到底山法師には抵抗する事出來なかつたものである、故に此僧兵を打ち鎭めるには、神樣も左程に恐れず、呪咀も一向に恐れない人が出なければ、到底出來ない事であつたから、此後五百年ばかりも其勢を保ち、最後に、切支丹宗○基督敎を信じた英傑織田信長が出て來て、四方から燒き討ちにし、全く僧兵を殺し盡くす迄、始終人から恐れられて居つた、信長の後には叡山は大に衰へ、殊に明治維新後、ます〳〵衰へたが、尙山中立派な建築物が多く、根本中堂の如きも其儘にあつて、極めて森嚴な有樣である、寺から尙八町ばかり登れば、即ち叡

山の絶頂で、之を
◎四明ヶ嶽といふ、頂上には樹木なく、近く京都を眼下に見下ろし、東には琵琶の湖水恰も泉水の様に見え、遠く諸國の山々を望んで、天氣のよい時には、西南には四國の山までも見えるといふ、

叡山から東へ下りになり、近江の阪本へ出るか、之を横川の方から西北へ降りたら、山城の
◎八瀬の里へ出る、これは修學院から一里餘北に當る、八瀬から尚北へ行けば、やがて
◎大原の里となる、八瀬大原邊の女は、毎朝まだ暗い時



から、薪、梯子、横槌などを頭へ戴いて、京の町へ賣りに出る、之を京では、八瀬女、大原女というて、名物の一つと成つて居る、大抵數人列を成して出て來るので、揃ひの衣服に、白の脚半ぞろひ、頭には同じ樣に手拭を被り、「薪いらんかえ」「梯子買うておくれ」など〻、家々へ押し賣りして行く所、極めて愛嬌がある、

大原から西へ山を越えて、
◎鞍馬へ出る、京都からこ〻迄四里弱、遠足には極めてよい所である、山は嶮しう、杉が大變に繁つて極めて物悽いので、成る程天狗がでも居りさうなといふ所、牛若丸が僧正坊から劍術を敎はつたの、

兵法を授かつたのといふ場所があるのが面白い、こゝには魔王大僧正といふのを祀つた小さい社などもあつて、鐵の鞋、大きな鐵で出來た錫杖、長刀などを、澤山に奉納してある所、如何にも一種異様の感なき能はずである、鞍馬山から西北へ嶮しい阪を下りつゝ進んだなら

◎貴船神社へ出る、下の社から更に六七町、奥の社があつて、共に極めて幽邃の境で、實に都に住んで居るものから見れば、別天地の趣がある、（此項未完）

茶の湯手びき

利休流家元　正瓢庵宗月述
坪谷水哉補

茶の湯の事を記したる著書は古來甚だ多く、また茶を以て門戸を張る者、今も其數夥多しく、隨つて流派も數多に分れ、學ぶ者をして何れに從ふて宜しきかを迷はしむ、然れども其の何れの書にあれまた人にあれ、茶の奧儀として奉する所の根本は一にして、其の法則は盡とく定まりたる道理に基づき、理由なきもの無く、此の大體の法則さへ會得せば、其他は學ぶ人々の心まかせに何れの流派に從ふも妨げ無きなり、故に余は今初學の爲に茶の湯の法則の梗概だけを、極めて簡單に說き明さんと欲す、乃ち普通に催さるゝ茶會にて、主人となる者及び客となる者の心得だに知れば、それにて事足るべき故、今は專ら其の事につき、順序を逐ふて記すべきなり、

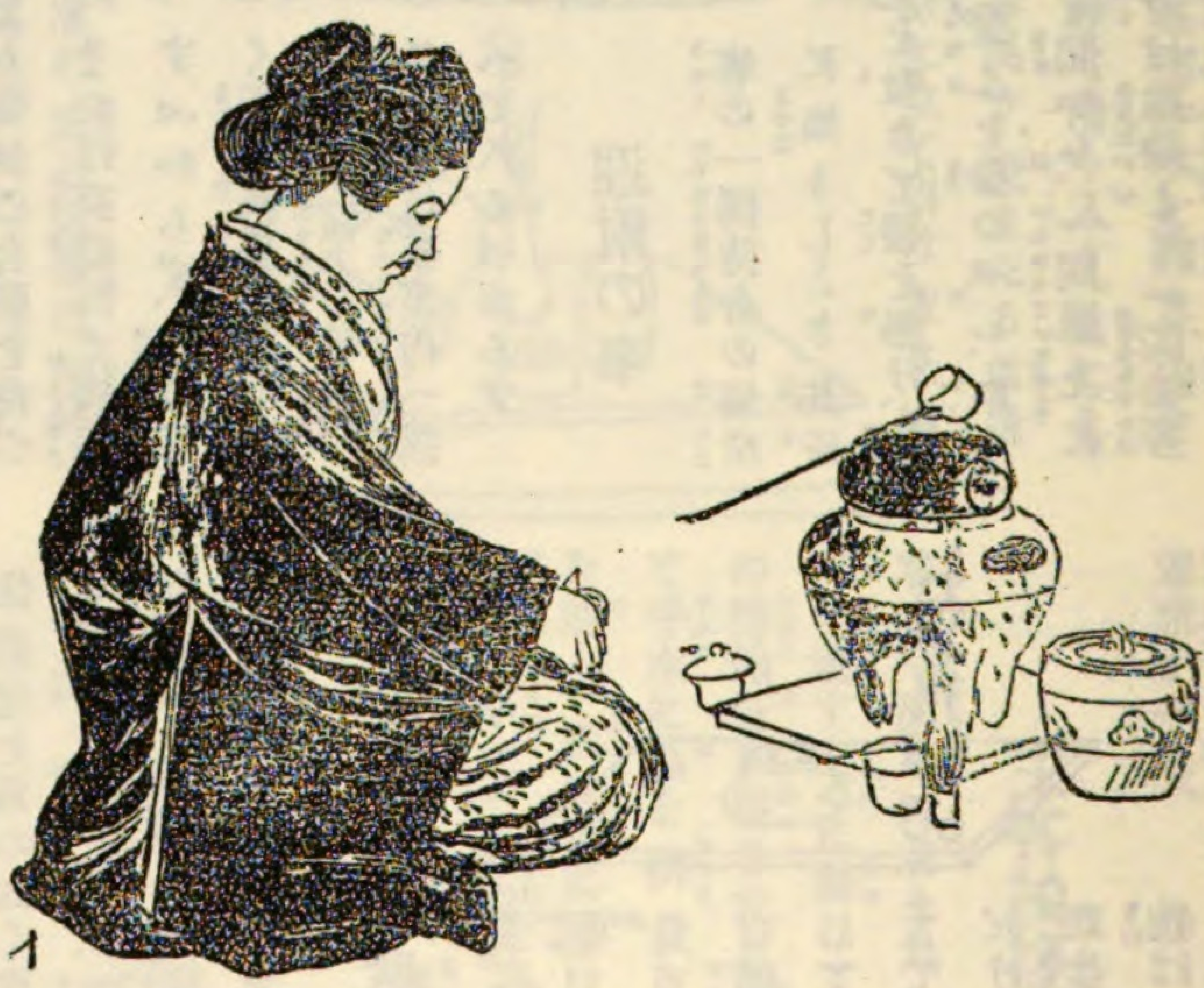
茶會の時期と茶室

凡そ茶の湯には古來定りたる時刻あり、午前四時（昔時の七ッ時）を夜込と唱ひ、午前七時（昔時の六ッ半頃）を朝茶といふ、午前八時（昔時の五ッ時）を飯後と云ひ、正午十二時を晝飯とゝなへ、午後六時（昔時の六ッ時）を夜話と稱し、猶ほ他に不時と稱へて隨時に催ほすことあり、然とも正午の茶事を以て本式と爲す、次に茶室は疊十二疊半以下七疊以上を廣間と唱へ、七疊以下四疊半以上を小座敷と云ふ、外に數奇屋及四疊半以下一疊

以上の小室あり、又茶室の床は本床、向床、脇床、及下坐床の別あり、また五月より十月までは風爐を用ゐ、十一月より翌年四月までは爐を用ふ、(圖は風爐前に薄茶を立てる所なり)客の數は一客一亭のこともありまた數客一亭の事もあれど五客一亭を普通とし、五客の中に首たる者を上客と爲し、茶事に慣れたる者を詰と稱して末席に居り、亭主を助けて席上に周旋するを常とす、

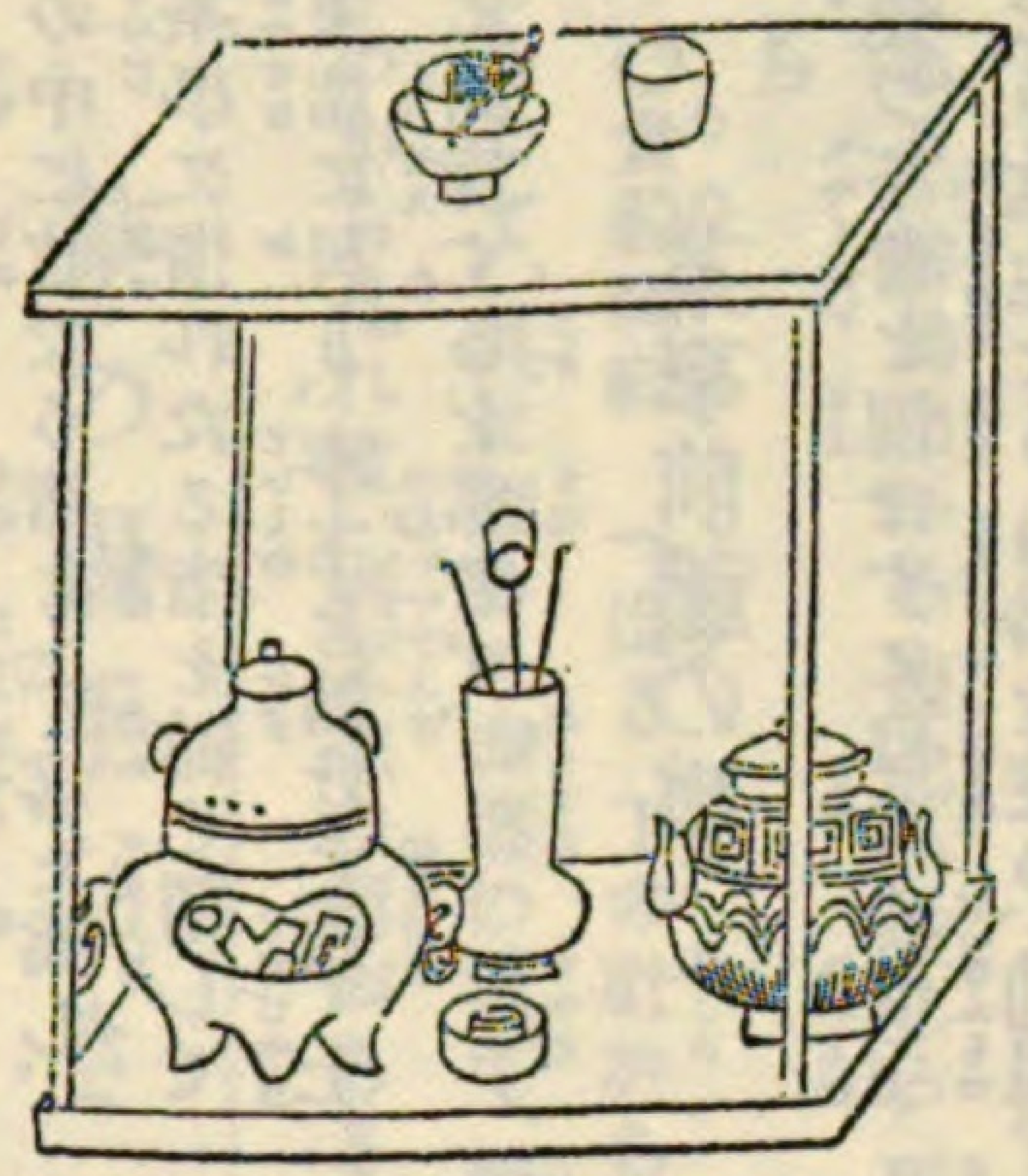
茶事前禮の事

先づ茶會を催ほすには其の催主たる亭主より日時を定め、前以て案內狀を差出すを例とす、其の案內狀には定りたる文例ある故、其事は後に示すべきも、普通に、來る何日何時御茶進上可致候御故障なくば御來車被成下度當日の來客は誰々、室內の飾附は何々にて、料理は何々と詳かに書き上客より順次連名は認め、回章として持廻るものにて、案內を受けたる客は各々其名へ點を懸けて廻し、前日中に上客の宅へ參集し、當日の衣服、打扮方并に待合の場所を定め、其他諸事申合の上催主の宅へ赴き、明日御茶事につき御案內を賜はりし厚意を謝すべし、之を前禮といふ、若し事故あるときは使者または郵便にて、書面を以て前禮を演るも可なれども、貴人に對するときは、前禮及會日の後にも自身に挨拶の禮に赴くべし、



當日參會の事

偖會の當日は、豫て申合せし如く遲刻せざる樣に參會し、待合の場所にて打揃ひ、主人より報知の合圖を待つべし、此の待合にて相客と耳語き、または高聲にて談笑すべからず、當日穿く所の足袋は新しきを要す、帽子、手袋、外套等は茶室內へ携へて入るべからず、



迎附の事

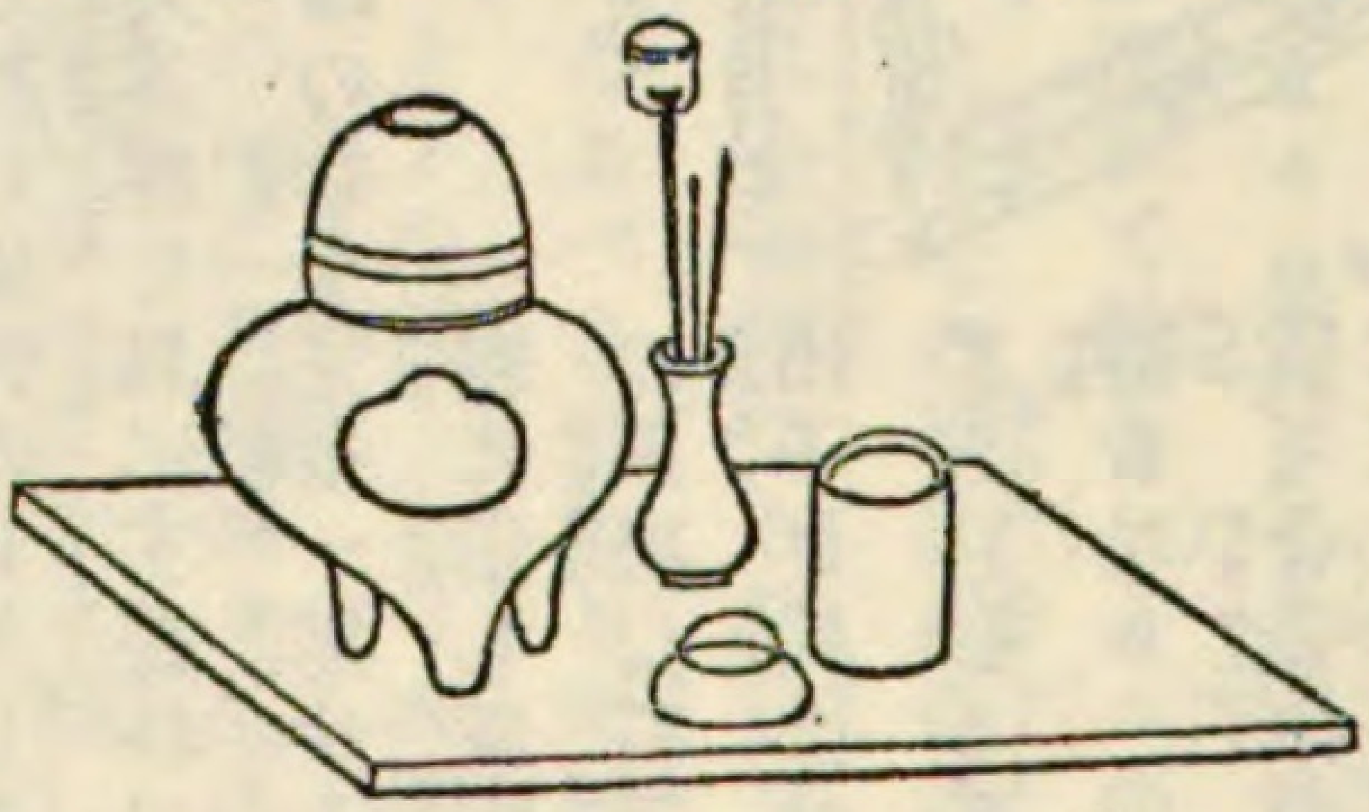
客の一同待合の場所に集りしとき、其所は疊なき板敷ならば、各自に圓坐を敷きて腰を懸け、茶室の方に注意して亭主の用意の整ふを待つべし、斯くて亭主が手水鉢の水を換へる音を聞かゞ、一同庭上に佇立み、亭主の迎附あるとき、客は總禮とて一同挨拶す、此時亭主は一同に向ひ何卒室へ御入下されたしと云ふて一旦戻れば、客は一同之を目送して再び待合所に烟草を喫し、小用を便し、盥ひ、嗽ぎなどして而して後圓坐を舊の如く重ね、烟草盆火桶ともに隅に片附けて坐入を爲すべし、若し當日雨天ならば備附けある竹の子笠を隻手にて戴き、茶室の外にて亭主の用ゐたる笠と重ねて置くべし、



坐入着席の事

坐に入るときには上客先づ咳拂ひして中くゞりを明け、暫時露地をさし覗き見て後に這入るなり、次に二番目の客は續いて飛石三ッ計りの間を置く程にして入るべし、末の客は待合の戸を打ちて入るべし、總て茶席の客は出來るだけ亭主の手數を省く樣に注意し、烟草盆火桶等より草履笠まで、用ゐたる物は一々客の手にて自から片附け、戸も客の自ら打ちて去るは、何れも主人の勞を助くる意なり、偖坐に入るときも、庭中に貫むべき事あらば深く

感したる體なし、噺なども亭主の居るべき勝手まで聞ゆる程なるがよし、斯くて上客は次客に向ひ一禮して後つくばひに向ひ、手水を使ふて茶室の水を開き、內を窺ふて雙手を疊に附き、片膝を擧げて滑り入り、直にまた片膝を入れて上り口の方へ捻ち戻り、脱きたる草履を重ね之を沓脱の內なる入口の壁に立て掛け置き、室內にては先づ第一に床の正面に到りて懸け置く所の軸を見るべし、次に第二客は沓脱に蹲踞ひ、入口の閾に双手を掛け、內の樣子を窺ふべし、此時上客は第二に風爐幷に釜を觀、また飾り附をも觀て坐に着くべし、第二客以下之に倣ふ、總て客の出入する時は、襖又は障子を開閉するに少しく高く音させて亭主に報するを例とす、若し下座に床ある席は床の方を上席とす、また小間にては上客既に着座し、第二客以下床前に到りかたきことあるべし、其時には上客は爐を觀了つて後、假りに便宜の所に座し、末客の床前より風爐等の前に到るを待ち上客第二客ともに本座に着席すべし、



主客挨拶の事

客の一同席に着きたる時を計り、亭主は通ひ口を明けて一禮す、之に對して客は總禮し、上客はまた路地萬端の掃除行き屆きたる事などを謝し、若し嚴寒の時節にて手水に湯を供せられたるときは、其等の注意に禮を述べ、或は床に懸けたる軸の由緒を尋ね、または飾り附品の中にて拜領の重寶品、若くは貴人より贈られたる什器などあらは、其の由緒を尋ね、拜見を乞ふもの可なり、

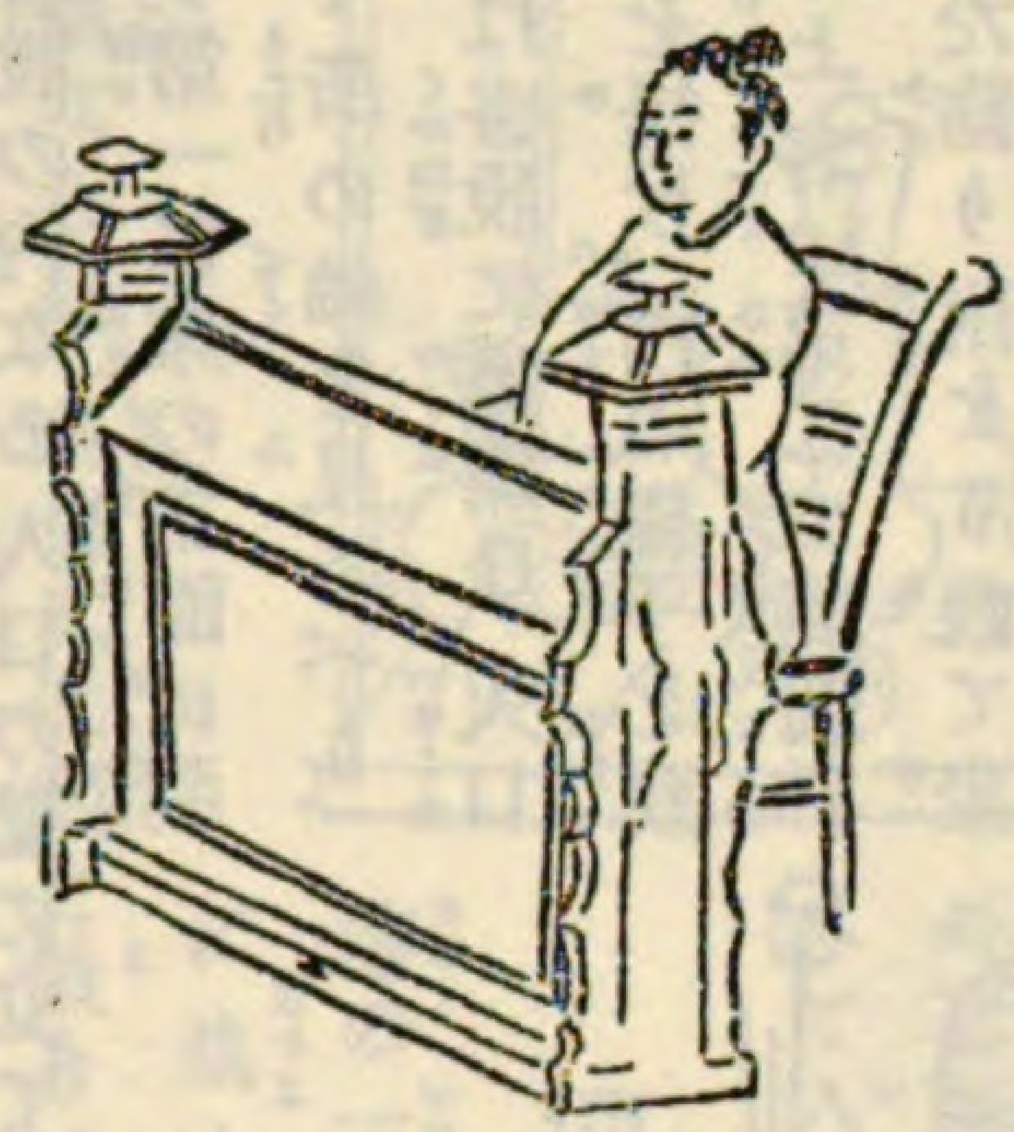
（つゞく）

音樂の栞

大林小星

我國の音樂は概ね其調能く樂律に適ふと雖ども拍子に

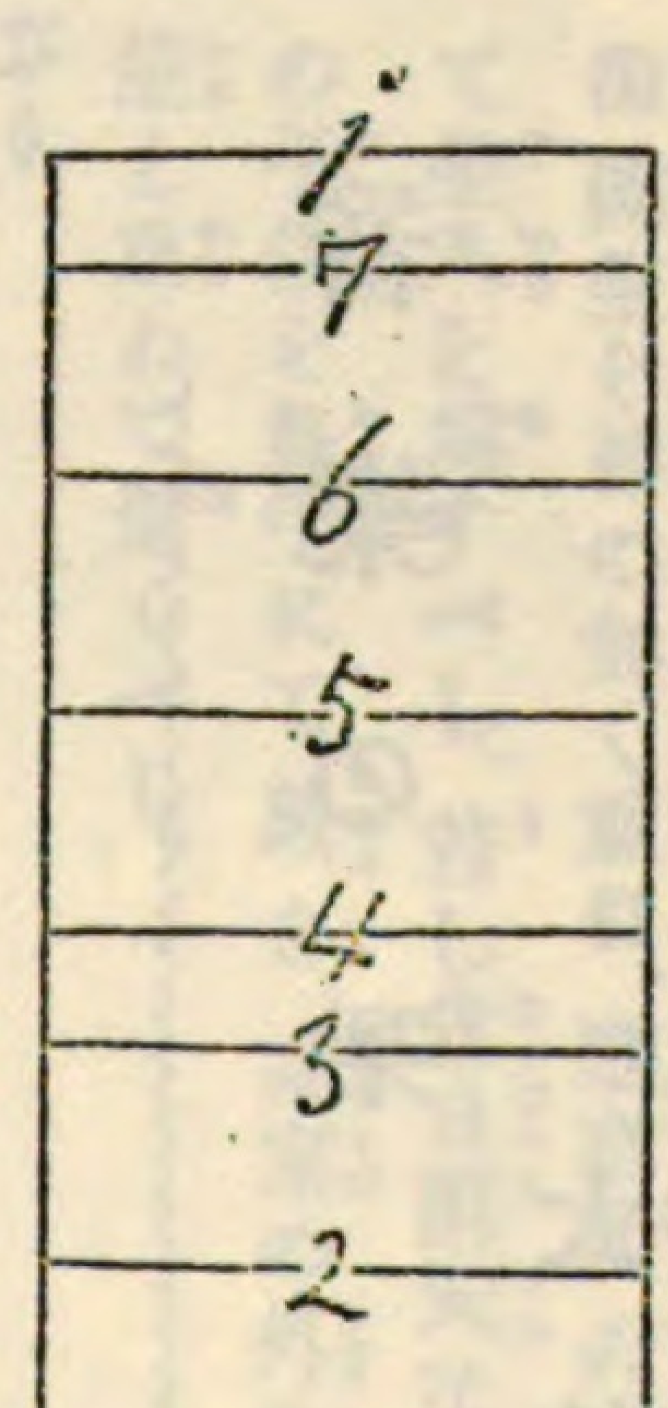
至りては更に探り知ることの能はざるもの多し之に依り師を求めて究むるの他途なし又假令師に就きて學ぶも唯教師の口授にして一定の譜表の如きものあらざれば師は又各隨意の拍子を以て之を授け傳習の日久しきに至りては終に同一の歌曲も各人其趣を異にす是れは何に因るかと言はゞ則ち西洋樂譜の如き完全一定せる樂譜なきが爲なるべし



然れども近來大に音樂の道發達し我國古來の樂も之を譜表に示し多數の人決して其拍子を異にせざらしむるに至るなり依て今音樂の階梯を左に述べて未だ音樂を手にせざる諸孃の參考に記す其高尚の音樂に至りては他日專修するにあらざれば解すること能はず

(一)　階名

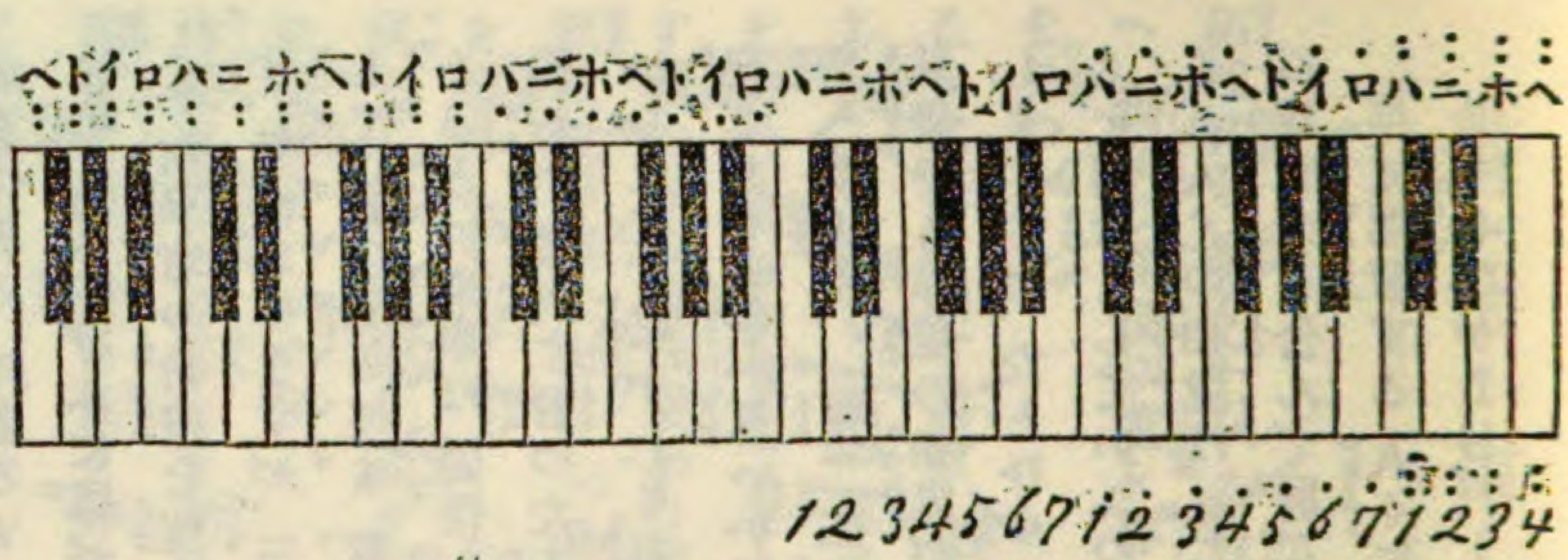
音階　音階には數種ありて一定せざれども西洋歌曲の自然長音階を示して樂音の高低の差を上圖に擧ぐ即ち或樂音を基音(1)とし(1)と(2)、(2)と(3)、(4)と(5)、(5)と(6)、(6)と(7)と五音間の距離は(3)と(4)、(7)とiとの二音間の距離より大なると各二倍なり而して(1)より(2)に至る距離即ち音程を名づけて全音といひ又(3)より(4)に至るものは之を半音といふなり



以上の全音及び半音の兩種の音程より成るが如き音階を稱して長音階といふ之を唱するにヒー、フー、ミー、ヨー、イー、ムー、ナーといひ此のナーを經て(i)ヒーに至る八音を一調子或は(オクタブ)といふ

風琴の鍵盤

風琴は通常三十六箇の白色鍵と二十五個の黒色鍵とを具ふれども其構造の大小に因りて鍵數一定せず而して



發音せしめんと欲せば踏板をふみて此の黒色或は白色の鍵を壓すべし

右の圖に示せる如く(ハ)を基音(1)とすれば(ニ)は(2)(ホ)は(3)(ヘ)は(4)(ト)は(5)(イ)は(6)(ロ)は(7)(ハ)は$\dot{1}$とするなり是れを(ハ)調音階といふ而して鍵の(ハ)と(ニ)の間及び(ニ)と(ホ)との間に黒色の鍵あり是れ全音階なるを以て其間に用ゐるべき音ある所以なり又(ヘ)と(ト)の間(ト)と(イ)の間(イ)と(ロ)との間に黒鍵あり是れもまた全音階なればなり而して(ロ)と(ハ)との間は半音なるを以て黒鍵なし(つゞく)

習字の順序

小野鶯堂

凡幾年習へば能く書けますかとは極めて大切なる疑問であります、これは人々の熱心の度合と、其人の性質とによりて、多少の遲速はありましやうが、少なくも三年以上はかゝるといふ事を承知せねばなりません、勿論書は秘術でありますから、習へば習ふほど、面白くも六かしくも成りまして、其點からは年限など附けらるゝものではありませぬが、普通習字の目的は、おもに書翰文などを、醜くないやうに安らかに書くといふ位の處ですから、假りに大凡の年限を附けてよかろうと思ひます、又能く書くといふ能くといふ字に次第がありましやうが、これも私は右の程度と考へて御咄し致します、又專門に習ふ人と違ひ、種々の都合ありて、殊に婦女子にありては、出來る迄習ふといふ事は年齡が許さない、そこで初めに大凡の年限を問ふといふ事は尤の事と思ふ、然るを普通と專門とを混同して、書は

六かしいもので、なか〳〵一朝の修行ではいけぬ、終身の業である、年數などいふべきものでない、など初學者に對して大げふに述べ立つるのは、誠に不親切の頂上で、初學者の希望を挫くべき、一の通弊だと私は思ひます、ではありますが、三四年習つてもよい時間があるとして、習ひ初めても、當分は面白くない、困難なものであるといふ事は覺悟して居なければなりませぬ、但し幾分か特別に習つた人は、それだけ數がかゝつて居るからして、必ずしも右の年限を要さないでも宜しい道理であります、又いかに熱心でも、時間の都合で、毎日習へる人と、一週二三回しか習へぬ人とありますから、其邊でも餘程の相違がありますが、私が三四年位と申しますのは、たとひ少々づゝでも、毎日習ふ事が出來る人を標準としていふのです、又獨習する人と、師授を受くる人との相違は、言はでも知れて居りますが、私の說は獨習者を含んで居ないのです、

序に獨習する人々に御注意いたします、獨習の事情は種々ありましやうが、時間がない、經濟が許さない時期が後れて恥かしい、といふのがおもなる原因らしうおもはれます、そこで恥かしいといふことは、敎ふる方には少しも感じのないものですから、これは思ひ切つて師を求むるのが第一の捷徑です、時間がない、經濟が許さない、けれども能く書きたい、といふのは又別に賴もしい處がありまして、精神一到何事か成らさらんと申す通り、自分の學ばんとする手本に向ひ、一心を凝して勉强すれば數のかゝるに從ひ、おのづから自得する所が出來て參ります、かやうな人の中には熱心の度が違ひますから、却て師を求めて習ふ人より好結果を得る事が往々あるものです、しかしながら獨習者は制裁するものが無いので、此手本は習ひにくいから、あの手本を習て見やう、などゝ兎角に迷ひやすく、つまり何の得る所なくして空しく時日を費すに過ぎません、ですから初め信じた手本をどこ迄も習ひ通す事に決心し、習ふべき時間、習ふべき紙數など、それ〴〵に自ら法律を設けてかゝらないと、得て亂れ勝になりますぞ、

畫法指南

野口小蘋

柘榴花を畫くには、全般の花を作り、枝を畫き、葉を添へ、側面の花及び蕾を作る、但し葉を作るには墨の濃淡を分つべし。

こゝに畫き出す蓮は、先づ淡き墨を以て裏葉を畫き、後ち表葉を作り、其の莖を畫き、而して花を作り、花の莖を添へ、終りに實を畫くべし。蓮房は墨の餘り濃からす淡からぬ樣注意あるべし、葉筋は最終にゑがくべし。

萩は先づ葉を配置し、最も墨の濃淡を分つべし、次に枝を畫き、花を作るべし、月を畫くには、筆を洗ひ、淡墨を蘸して先づ圓形を畫き後ち順次にくまどるべし。漫りに塗抹すべからず。

桔梗は正開の花より初め、其の萼と莖とをつけ、側面の花及び蕾を畫き葉を作り、花、心及び葉筋等は最終に畫くべし。

裁縫科

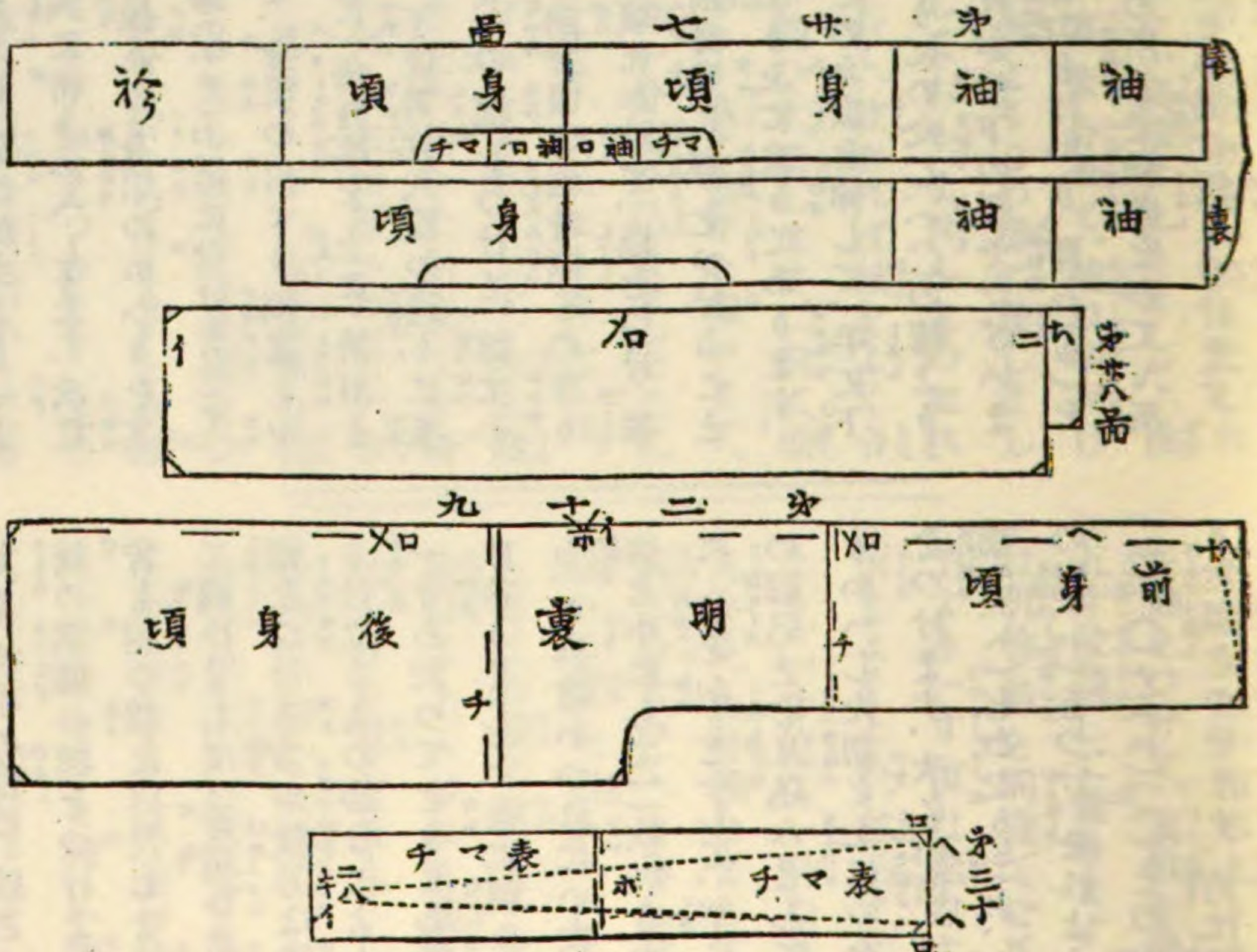
女子職業學校裁縫教員 金子銅子述

前回に男單羽織の裁方、積り方、標のつけ方、まで御話し致しましたから、これより、縫ひ方を申上ます、先づ袖をとりまして、袖口切を袖口明きの所だけ縫ひ合せ、引かへして、袖口あきの兩方を合せ、丁度袷の袖を縫ひました通りに、袖口切と袖の切とを重ね、袖口切のある所だけは、一針ぬきにして、袖口の方より縫ひはじめ、丸みを(袂の丸み)縫ひ、ヤックチまで縫ひます、次に糸を割るかもしくば極細き糸にて、袖口切の奥を表に針目を極細く出して、三四分位の針目に、絎け袂の丸みを括ります、次に袖下の縫ひ込み(一枚長くなつてをります切)を、矢張袖口切を絎けました通り細き糸にて絎けます、(ヤックチの方は一寸位絎付けずに置きます)此通りに兩袖を縫ひ終りましたらば、身頃をとりまして、紋あるものなれば、紋を合せ、白糸にて紋だけの所を、一針ぬきに縫ひ置きまして、背縫ひを致します、背縫ひ

は、前にも申しました通り、衿肩の方より縫ひまして、紋の所にまゐりましたらば、針を向ふに飛ばして、(手前の方背のかへる方に糸を出しますと、外面より透きて見えますから、向ふにとばすのでございます、)紋の所の終より又なみに縫ひ、下まで縫ひ終りましたら、單衣の背の通りに二重縫ひを致します、次に後巾と、肩巾とをあたりまして、後襠を付け、前下りを標の通りに三折にして躾をかけ、乳をつけ、衿をつけます、衿は先つ合ひ標のある方即ち輪になつてをる方を身頃の裏の方につけるので、初に衿山の標を、背縫ひと合せて待ち針をうち、衿肩廻しより乳まで少々衿の方をゆるめ、其他は兩方とも同じ樣に、伸しも縮みもせぬ樣にして、衿のつけはしめと、つけ終りの所は、裾口より三寸位の所より斜に、丁度裾口の所で一分位前身頃の巾の縫込まる樣に致します、皆待ち針で、以上申しました箇所々々をとめ置きまして、此次は前身頃の切を皺にならぬ樣に、よく折て衿にてくるみまして、合へラを合せて、待針にてよくとめ、(衿の輪になつてをる方を、手前にすれは、次が身頃、次が衿の耳と云ふ樣な順序に重ねますのでございます、)左の前身頃の方より、つけ初め、乳の所にてよくとめまして、三つ衿の所にまゐりましたら、向ふになつてをる衿の切一枚をはなして、縫ひまして、衿山にて返針をしてとめまして、衿肩廻しが、すみましたら又再び三枚を共に、左りの通りに、つけます、次に衿先きは中になる切一枚と、表になる切二枚と、丁度三枚かさねて、餘の切をはなして縫ひ、(單衣等に、申上ました通り、付けより一分五厘位はなして、縫ひますのでございます)、それより、衿先は、キッカリ折りまして、衿の輪になりてをる方即ち衿をつけるときに手前に致しました方に返して、縫込を一針ぬきに縫ひつけ、左右とも其通りにして、心を入れます、(心は、衿先の縫ひこみだけ、一枚を短くして、置きます、尤も衿心は、二枚でございます)次に縫込になる切で心をくるみ、外方より、透きて見えぬ樣な糸にて、綴つけ、三ツ衿より(衿付けのときに一枚はねて置きました所)引かへし、中の切や心の工合をよく平にして、後ち三つ衿をくけつけ、躾をか

けます、躾は、乳より上二三寸位の所までかけ置きます、次に前襠を入れ、縫ひ込をとぢ、裾かけをいたし、袖をつけ、縫込みをとぢ、ヒノシをかけ仕上げを致します。

女物は裁方、積り方共男物と同様でございます、標のつけかたも、矢張さほどのちがひはありませんが、ただ袖の所に袖付けのしるし、身頃には身のヤツの標を加へます、又襠は上部脇明きの所を五分巾とし、其他は男物と同様に致します、縫ひ方は袖の所、ヤツクチが明くばかりで、他は男



物と同様でございます、小供物は、すべて女物と同様だ、形が小くなるばかりでございます。次は

男袷羽織

にうつります、裁ち方は第廿七圖の通りでございます、積り方は、袖丈の八倍に、身の丈けの十倍と、二尺五寸(前下と衿先身頃なとの縫ひ代)を加へ、裏表を合せての總尺を得られます、此總尺より表の尺數を減じますには、裏地に何尺いるかといふことがわかります、標付方は、袖は男物袷と同様に致します、身頃は表を中にして、二枚重ね、背を向ふにして、下に置き衿肩より後

丈をはかりまして、縫代三分をまし、前は後丈より一寸四分(前下と縫代)多くして共に折りかへします、次に胴裏を上に置きまして、前と後との身頃のかへりを其上にのせ、胴ハギの標第廿九圖の(チ)の樣に付けまして、動かぬ樣に待針をうちまして、身頃の山より胴裏を中にして二ツに折り、背を手前に、後身頃を上に、衿肩を左にして下に置きますとは、丁度第廿八圖の通りに致しまして、山標(イ)、袖付標(ロ)の標をつけて、襠丈を見てをきます、次に後巾を見、前身頃と後身頃との重りました所(ニ)の標の樣に兩身頃にかけて、標をつけ、後身頃より一分位下りまして、前身頃に標をつけること(ハ)の樣にいたします、それより上に重りてあります、後身頃とをりまして、後と前との身頃を伸して、平に下に置きますとは第廿九圖の通りにいたし、(ハ)の標より斜に(ニ)まて標をつけます、これが前下の標でございます、次に前巾(ヘ)の標をつけ、肩巾をはかり、即ち(ホ)をつけまして、こゝより袖付(ロ)の所まで物差をあてゝ所々に標をつけます、後巾もまたその樣に標をつけます、

尤も、後巾の標は、紋あるものは、猶更のことなくとも、後の胴縫の標をつけましたらば、すぐに、胴縫をいたし、背を四つ縫にいたします、(紋あるものは紋だけ白糸にて縫ひまして、背縫ひをいたします)、それより後巾の標をつける方が致しよろしうございます、しかし、それも仕立る人の都合によりましては、背縫ひの縫ひ代を、一寸あたつてをきまして、後巾をあたり、總躰の標をつけ終りまして、後に縫ひ方にかゝるものもありますから、それはいつれにいたしてもよろしくあります、襠は表を中にして二枚かさね、第三十圖の通りに、襠上を左に、後を向ふにして、下に置きまして、襠の丈と、襠の上の縫込とを見込みまして、折り、其所に襠裏を置き、折りかへした切を上にのせまして、襠の裏表の縫の印(ホ)をつけます、次に山標(ロ)をつけ、丈の標(イ)をつけ、襠巾(ヘ)をあたります、次に(イ)の所にて、襠巾の中央の標(ハ)をつけ、それより一分向ふに(ニ)の標をつけ、(ニ)(ヘ)と(ハ)(ニ)との兩方に物差をあてゝ、圖の通りに標をつけます、衿は單羽織と同樣でございます、以

上申上ゝしただけて、裁ち方、標つけ方が終りましたから、縫方にかゝります、初めに、裏袖をとりまして、袖口をかけ、表袖をとりまして、裏表合せて、袖口明だけ縫ひ、巾をあたり置きます、兩袖ともこの様に致しまして、身頃をとり、背縫のいたしてありません ものなれは、後身頃の胴縫をいたしまして、紋あれば紋をよく合せて、白糸にて縫ひ、背を四ッ縫ひに致します、(前に標付の折り御話いたしました通り)次に前下を縫ひます、(前下りは表を標の通りに裏は一分縫ひ込ます)そこに躾をかけ前身頃の胴縫を致します、人によりましては、胴縫を先にして、前下を後にするともあります、次に襠をとり、裏表の縫を致し、襠の上の縫ひこみ(第三十圖の(イ)の標の左の所)を中に折り、布の動かぬ様に、巾の中央のたてに躾をかけとめ置きまして、後身頃の切にて、襠をはさみ、四ッ縫ひにいたしまして、後襠をつけます、次に前身頃の裏表を合せ、衽をつけますとき縫ひこみになる所をとぢ、乳をつけ、衿をつけます、其つけ方は、男單羽織の仕方と、少しも異る所はありません、衿總躰が出來上りましたらば、袖をつけます、先づ表袖をつけて、裏袖を後の方よりつけはしめ、前の所四五寸位殘して置きます、(袖付け方と縫込みのかへり方は男物袷と同様でございます)次に袖口下を縫ひ、袖下より一寸位は縫はすに殘して置きます、次に袖付の所をよくとめ、其糸にて直に袖下を縫ひ、(針とめの所より、一寸位は一針ぬきに縫ふのでございます)袂の丸みも、此時縫ひまして、袂をくゝり、引かへしてよく其工合をみて、よろしけれは又裏を出して、前襠を四ッ縫ひに致し、引かへして裏袖の付けの殘りをくけ、兩袖ともこの様に致しまして、左袖はヤツクチより、右袖は袖口より、いづれも躾をかけ、ヒノシをかけ疊みつけて仕上げを致します。

女物は、袖を女物袷の着物の様にこしらへ置きまして、身頃は、大概は男物と同様でございます、其ことなる點を申上ますれは、先づ衿をつけました後、直に前襠を入れ、身のヤツを縫ひ、袖をつけます、裏袖は縫ひ得らるゝだけは、縫ひまして、あとはくけつけます、小供物は

すべて、女物と同様でございます。次は

男綿入羽織

の御話しを致しませう、裁ち方、積り方は袷羽織の折に申上ました通り、異る所はございません、標のつけかたは、たゞ裏袖の丈を一分つめますのと、第二十八圖(ハ)の標を一分五厘位下げてつけるのがちがひます所と致します、縫ひ方は、先づ袖をとりまして、表裏とも男物綿入の通りに縫ひます、次に身頃をとり、後身頃の胴縫を致し、背縫ひは表よりはじめて、裏の衿肩に終ります、次に後巾と肩巾をあたり、前下を縫ひまして、隠し躾にておさへ置きます、次に前身頃の胴縫をいたします、それより襠をとりまして、後襠を入れます、これは綿入でございますから四ッ縫ひに致しませんで、襠と身頃の裾の所をよく合せ、待針をうち端より端まで縫ひ、すくに前襠をもつけます、左右ともつけ終りましたらば、躾をかけます、(折のつかぬ品なれば躾をかけ、折のつくものなれば躾をかけるに及びません、)次に袖を付けます、(綿入の着物の袖をつけましたと同様に、)矢張これも、躾にてとめまして、よくたゝみつけまして、綿を入れます、それより袖口をくけ、前襠の付をとぢます、次に前巾のはし、衿を付る所を、裏表合せてとぢ、衿をとり、輪の方の山と背縫ひと合せて待針をうち、(單と袷は袋縫ひに致しましたが、之は四ッ縫ひに致ませんで、裏の方につけ裏にてくけるのでございます、)衿のつけ方は前申しましたのと同様にして、衿先をぬひ、心を入れて、(衿先きと、心の入れかたは、單及袷の羽織と同様でございます、)縫込みを中に折り入れ、合ベラを合せて、待針をうちまして、小針にくけます、三ッ衿は、とりわけ細くくけるのでございます、くけ終りましたらは、單や袷の羽織の通りに、衿に躾をかけます、次に背縫ひを下より一尺二寸位とぢまして、、、、ヒノシをかけ、仕上げを致します。

女物は、裁ち方は、男物と同様、標のつけ方は、袖の所で袖付の標が加はるばかりでございます、縫ひ方は袖は女物の綿入と同様でございます、次に身頃は、男物と同じ様に縫ひて、襠を入れ、それより直に、、、、身のヤツを縫

ひます、其他は男物とちかひはありません、小供物も、また女物と同様でございます。次は

帷子

でございますが、前に御話し致しました、單物と少しもちかひません、單衣がよく縫ひ得らるゝ人ならば、また帷子もよく仕立上るとができます、單衣の所で縫込のとぢかたを、ごくざつと申しましたが、品物によりましては耳を折りてくけますのでございます。

造花科

女子職業學校造花教員　伏見藤三郎述
松本和子筆記

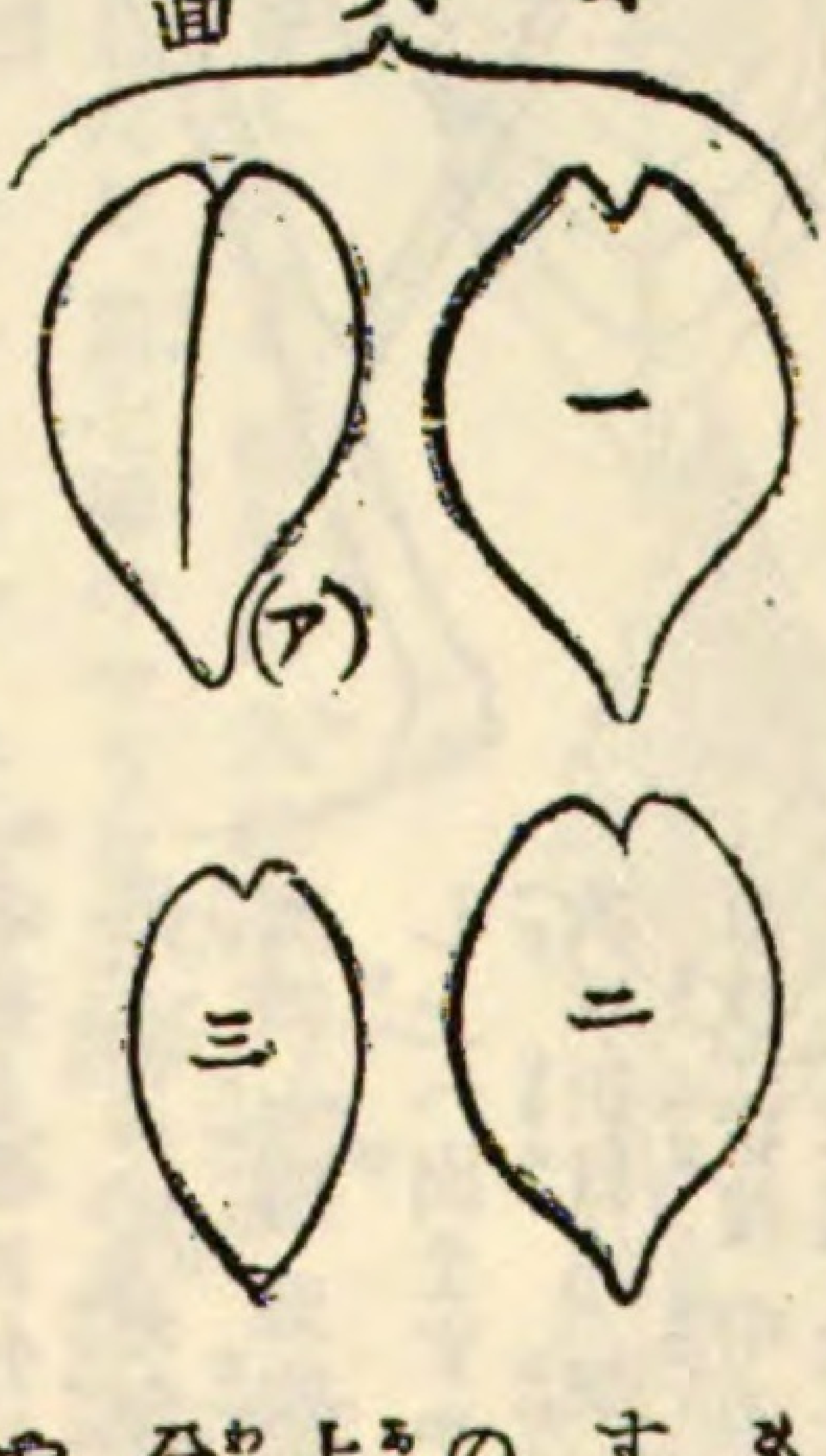
櫻の造り方

櫻の花の造り方は、中々込入て居りますが、先づ造り方から申上ます。

花は、絹又は寒冷紗で作りまして、之を「ローダミン」八方「フロクシン」二分位の割合で、淡桃色に解かしました液で一度染め、絞りまして、又今度は水の中に入れて、よく濯き、堅く絞つて、竹シンシに張りまして乾かします。

乾きましたら、其布で、第六圖のやうに、三種の花瓣の形をとります、(打拔で裁ちます時には、八枚か十六枚を重ねて致します、) 其中、中と小の瓣を半々に、大を尤も多く致します、其詳しき數の割合は後に申上ますので、御分りになりましやう。

第六圖



凡て櫻の花瓣の一番外側の五枚丈は、其瓣先が少し赤味を帶びて居りますゆへ、其瓣を、八枚位重ねて、一寸水に浸け、指先でおさへ、「ローダミン」の汁を瓣先へつけて、模糊し置きます。次に

花瓣に鏝をあてます事を御話致します、大の外側瓣は三枚位つゝ重なりましたのを、「ピンセット」で瓣の先に

少し折目をつけ、「一卜筋鏝」をあて、裏返しに致しまして、兩端をおし、平たい形に致します、又次の五枚の瓣と、大の外側瓣と同じあて方に致します、其次の五枚の大の瓣と、中の瓣の十枚は、折り目を少し深く、眞中の筋の立ちますやう、元を細く折りましてあてます、（第六圖のアのやうな形に）次に小の瓣は、一枚づゝ布の上にのせまして、元の所を矢張細く縦によぢり、先を縮らしまして、後に夫々蕚へ付けます。

蕚の作り方は、前に時々申しました通りで御座りますが、厚き美濃紙を青く染めて、横紙になりませぬやう、裁り置き、凡五六枚づゝ、先の方から凡三分一程の所まで「チウラミン」の液に一寸浸けまして、指先でよくおさへ、尙其先の所を「マセンダ」でぼかし、よく絞つて乾かします、夫から蕚の形に捻りますのは、前に申ました通りで御座ります、且其柄の處の丈夫に、奇麗になる爲めに、細い青紙を巻き付けます。



花瓣を蕚に付けます順序は、初めに、外側の瓣を五枚次に大瓣五枚を前より少し上へ出ますやうに付け、次は折目の深い大い瓣を五枚、次は中の瓣を五枚づゝ二回花の中心の穴のふさがりませぬやう付けまして、最後に、小の瓣三枚を程よく付け、三分の香ひに青糊をつけまして、中心を差し込みます、（青糊とは「グリーン」「オウラミン」で糊をひわ色に致しましたもので御座ります）夫故開きの瓣

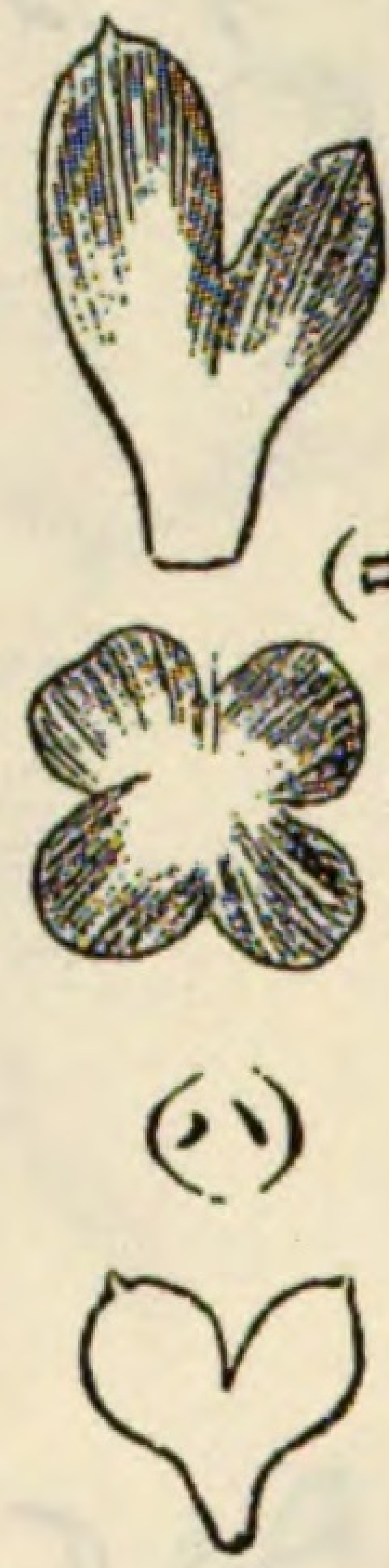
數は、一輪に付て、大瓣が十五枚、中瓣が十枚、小の瓣が三枚合せて二十八枚着けるので御座ります。

大の半開を造りますのと、開きを造りますのと、大抵同じで御座りますが、成るべく、丸みを持たせるやうに、鏝をあてます、瓣の數も、開きと同じに致しますが、造り上げました後、手で少しつぼませ、半開きの風に致します。

第七圖



(イ)　(ロ)　(ハ)



中の半開は、矢張開きよりは丸みを付けますやうに鏝をあてます、其瓣數は中の瓣が十五枚、小の瓣が三枚、口の開きませぬやう適宜に作るので御座ります。

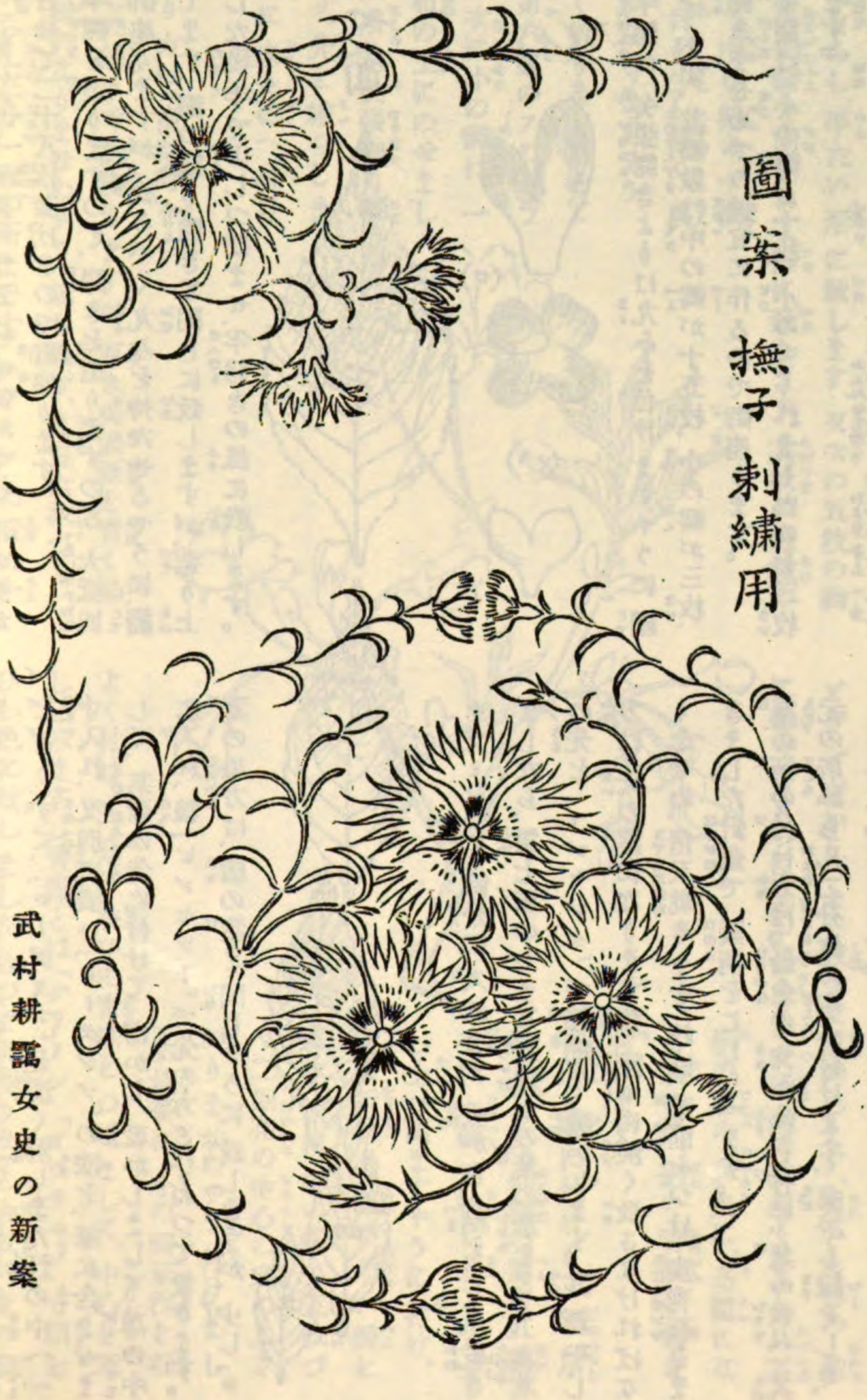
小の半開は、小の瓣を十枚、小のちゞれましたのを三枚遣ひます。

蕾は、花と同じやうに染めました寒冷紗を、凡一寸二分四方に切り、綿を少し入れ、細い針金で結び、殘りの布をきりすて、「ローダミン」を淡く解しました汁の中へ一寸入れ、又別に濃い「ローダミン」の液を、筆に含ませまして、其蕾の先に付けて、ぼかし、乾かしまして、萼の中に入れ、後「ピンセット」で先の方とひねつて置きます。

葉の染方は、藤の葉と同じやうに致しますが、少し「チウラミン」を、餘分に入れます、夫から、糊をしき、乾きましたら、第七圖のやうな五通りの葉の形をとり、其葉の先を「マンセンダ」で糢糊し、乾かします、其ぼかし方は、大の葉になります程、段々に淡く致さなければなりませぬ、偖又乾きますれば、葉筋をつけ、尚青紙をまきました針金で、葉柄をこしらへます。

葉の柄の付け方は、針金の先へ糊を付け、葉の表へ、其元の所から凡二分位の所へ付けます、夫から臘をしき、まとめにかゝります。

圖案 撫子刺繍用



武村耕靄女史の新案

同　百合　刺繍用



武村耕靄女史の新案

葉のまとめ方は、第七圖の(一)と(二)の分は、元の所四分位を青紙でまきおき、そして後、五色の葉、名々三枚づゝとり、其柄を二三分位出し、工合よく實物にならつて、青紙でまとめます、夫から其下に小き葉の二種をつけます、其一種の(即第七圖の(イ))四枚丈に糊をつけて遣ひ、又他の一種は、(即ち第七圖の(ロ))二枚を互ひ違ひに重ねまして、眞中に穴をあけ葉の莖に通します。

小き葉即第七圖の(イ)を造りますには、先其形に青紙を裁ちまして、一寸水へ入れ、「マセンダ」でほかします、又(ロ)は矢張「マセンダ」で染め、乾きました上、眞中に穴をあけて置くので御座ります。又(イ)に鏝をあてますには先づ四五枚づゝ、布の上にのせ、「一ト筋鏝」を一面へあて、又裏返しに致しまして、其他の部へあてます。

花の莖につけます小葉は、第七圖の(ハ)の通りに、青紙で切ります、そして開きなり、半開なり、蕾なりを三本合せまして、青紙で、此小葉を二枚付けながら、まとめます、其まとめます時に、開きは莖を長く、蕾は短く出すやうに致します、夫から、其まとまりましたものを三ッ程合せて、鐵の針金で、以前の小葉より三分程、下を堅く結び、よぢりました上を青紙でまき、前に造りました第七圖の(イ)を四枚つけ、又(ロ)を二枚通して、尙其下を櫻の木の皮色を致しました厚美濃を、細く切つてまきつけます。此厚美濃は初め淡墨で染め乾きました上、「カシトラベル」を濃く解かしました中へ、「マセンダ」を少し加へて、紙目の通りに、成るたけ木皮の色に見へますやう、濃淡に注意して、刷毛でしき、乾かしたもので御座ります。

かやうに出來上りましたなら、一枝に就き、葉七まとめなれば、花は十一まとめ位の割合で前に染め置きました厚美濃紙でまとめるので御座ります。





百人一首講義（七）

文學士　大町桂月

三十六、清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、雲のいづくに月やどるらむ。

○宵は、夜に入りて程經ぬ間をいふ。

○「宵ながら明けぬる」は、實際は宵にて、夜の明けるとはなけれど、夏の夜は、短くして、明け易きものにて、夜中になりても、まだ宵なりと思うて居る中に、はや曉になりて、夜が明けたるを、切に言ひ現はさむとて、斯くは云へる也。「宵と思ふ間にはや夜あけぬ」といふやうな言ひ現はし方をしては、平凡也。「宵ながら明けぬ」とは、理解に訴ふる散文には用ゐるべからざれども、感情を主とする詩歌に用ゐて、大に面白し。「宵ながら」は、「宵のまゝ」の意也。

○まだ日が暮れたばかりで、夜中にもなるまいと思うて居たに、短い夏の夜の事とて、はや夜が明けて仕舞つたがまア、このやうに早く夜があけては、月は入るべき山に達する達はざるべし、途中でぶらづいて、どこかの雲の中にでも隱れて居るならむ。これ一首の意なり。

○唯夏の夜の明け早きことを詠じたるまで也。月は必ず夜明けに山に入るものとも限らざれども、わざと心幼く言ひなして、途中でまごついて居るであらうと詠める也。理を以て解すべからず。されど、强ひて幼なく言はむとせる痕跡見ゆ。同じく夏の夜の短きことを詠める歌にて、紀貫之の「夏の夜のふすかとすればほとゝぎす啼く一聲にあくるしのゝめ」の方が、この歌よりは、少しまし也。

三十七、文屋朝康

しら露に風の吹しくあきの野は、貫き止めぬ玉ぞ散りける。

○吹きしくは、絶えず吹くと也。「しく」は、「しきる」に同じ。即ち「吹き頻る」といふも、同じ意也。

○「貫き止めぬ玉、」玉は幾十となく糸にて貫きて、飾りにするものなるが、その端を止めて置かねば、皆ばらく抜けて志まふ也。糸にて通したるのみにて、端を止めて置かぬ玉を、貫き止めぬ玉とは云ふ也。

○白露滋く置きわたしたる秋の野に、風の吹くこと頻りにして、その白露風に吹かるゝまゝに、草葉より散り落るさま、さながら貫き止めてない玉が散るやうにて、誠に面白き有様哉との意也。

○白露の風に散るを、玉のほつれて落つるに見たてたるまでにて、可もなく、不可もなき歌也。

三十八、右近

忘らるゝ身をば思はず、契ひても人の命の惜しくもある哉。

○忘らるゝ身、男に忘られ、捨てられたる身、即ち作者自身の事也。

○契ひてし人の命の惜しくは、二世も三世も添ひ遂げむ。互に心變はらじ。もし心變りするものあらば、神罰わたりて、命をとり給へと、神に祈りて誓ひしに。男先づ破約せし故、その男の命は、やがて無きものになるべし。その命をとらるゝが惜しいと也。

○あれ程まで、神に祈誓して、二世をちぎりしに、男の心と秋の空とやら、いつしか他し花に心ひかれて、此身は秋の扇と捨てられぬ。かくては祈誓せし如く、男の命は神にとらるゝか。捨てられし我身、もとより悲しからざるに非ず。我をすてし男の心うらめしからざるに非ず。されど、一たびは相愛したる仲也。その男が爲めに命を失ふと思へば、さても歎かはしい事哉。我身の事は、何とも思はず、野たれ死するともよし。せめて、男の命はとりとめたきもの也。

○怨めども、慍らず。忘られし我身の怨みは忘れて、

男の命全かれと祈る。やさしく、可憐なる女子の心も係も言外に躍動して、いとあはれに、戀歌の上乘なるものと云ふべし。

三十九、參議等

淺茅生の小野の篠原しのぶれど、あまりてなどか人の戀ひしき。

○「淺茅生の小野の篠原」は、「しのばら」よりつゞけて、しのぶと言ひ出さむ爲めの序詞にて、別に意味なし。「淺茅生」は、淺茅の生へたる處也。「淺芽」は、まばらなる茅也。茅は、一に「ちがや」ともいふ。その花を茅花といふ。野に生ふる草也。小野は、たゞ野といふに同じ。篠原は、篠の生へて居る原也。

○「忍ぶ」は、自から心を抑へて、こらへる事也。

○「あまりて」は、こらへ切れずして也、即ち思ひが餘りて也。

○「などか」は、どうしてか也。

○この歌、しのばらしのぶと、語路の調子にてつゞけたり。本當の意味は、「しのぶれど、餘りてなどか人の戀ひしき」の句に在り。人に知られじ、顔にもあらはさじと、こらへて居れど、思ひあまりて、こらへ兼ねて、戀しくてたまらぬ。心には、戀れては惡いとさとりて居るのに、どうしてまあ、あの人がこんなに戀しいであらうかとの意也。どうして戀しいであらうかとは、問ふの意あるに非ず、咏嘆の意あり。例へば、「あの人は馬鹿だ」といふ代りに、「あの人はどうしてあんな馬鹿であらう」と云ひても、意は同じけれど、咏嘆の意をふくみて、意が切になる也。

○しのぶれど、人が戀しいと、一通り聞えたれど、さまで面白き詩想にあらず。淺茅生の小野の篠原、調子はよけれど、淺茅、篠、野、原など、くだくだしくよい歌とは云ひ難し。次の兼盛の歌が、遙かに上手也。

四十、平兼盛

忍ぶれど色に出でけり、わが戀は物や思ふと人の問ふまで。

○人にさとられじと、忍びこらへて居れど、つひ顔色にあらはれたり。人が我がやうすを見て、それと悟りて、戀して居るならむと尤めらるゝまでになりたりとの意也。

○自から忍び居るつもりなれど、いつしか素振りにそれとあらはる。初戀の痴態、よみ得て面白し。名吟と云ふべし。

四十一、壬生忠見

戀すてふ我名はまだき立ちにけり、人知れすこそ思ひそめしか。

○「しか」は、「こそ」を結びたる詞にて、過去の時をあらはせる「き」の變化せる也。即ち「人知れず思ひそめき」と云ひてもよし。「ぞ」を入るれば、「人知れずぞ思ひそめし」となり、「こそ」を入るれば、「人知れずこそ思ひそめしか」となる也。「しか」と澄て、よむべし。「しが」と濁りてよむべからず。

○「てふ」は、「と云ふ」の約りたる也。古は歌にのみ用ゐて、文章には用ゐざりしが、今の人は之を文章にも濫用するにいたれり。「まだき」は「早や」の意也。

○「人知れず」は、人に知られないやうに。

○人に知られないやうに、こつそりと思ひそめて居れども、いつしか人に知られて、戀して居るといふ浮名が早や、立ちたりとの意也。

○忠見のこの歌と、ひとつ前にある兼盛の歌とは、天德の歌合に、番ひとなりて、二者ともに同工異曲、いづれを勝とも判じ兼ねしが、遂に兼盛の歌の方が少しまされるやうに判ぜられたりき。余を以て見るに、別に判斷に苦しむまでもなし。兼盛の歌が遙にすぐれて居る也。ひそかに思ひそめしに、早や浮名が立ちたりと云ひては、至極平凡也。物や思ふと人に問はるゝ言ひまはし方が面白く思はるゝ也。

四十二、清原元輔

ちぎりきな、かたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは。

○「ちぎりきな」は、約束したはいな也。
○「かたみに」は「互」に也。
○袖をしぼるとは、涙をながす也。涙をながらは、悲みてにあらず、心からうれしく喜んで、うれし涙をこぼせるならむ。
○「末の松山浪こさじ」。末の松山は、陸前の海邊にある山也。もし二人が心變りしたならば、末の松山を浪が越えるであらう。然し、末の松山は海邊にあれども、決して浪が越えざる如く、二人は永久に夫婦、互に心變るとなしと也。
○互にうれし涙をこぼして、末の松山浪がこさないだらうと約束したとであつたがなあの意也。「末の松山浪がこさないだらう」と約束するとは、即ち二人が他し心をもたじと堅く約束すると也。「然るに、女は薄情にも約を破りて、我を見すてたり」との意を言外にふくめり。
○情も言葉も婉曲にしてあはれ深く、失戀の恨、言外に躍動す。名歌と云ふべし。

漢文評釋（七）

文學士 久保天隨

紀事一則 賴山陽

●●●（作者小傳）賴襄、字を子成、通稱を久太郎と云つて、山陽は其號で、安藝の人である。父を春水といひ、これは有名な儒者で、叔父二人、春風杏坪、ともに詩を以て知られて居た。山陽は若い時、一寸江戸へ來て、尾藤二洲に學び、樣々の經歷をした後に、京都に卜居して、三十六峰外史と號し、帷を下して生徒に敎授し、其傍で詩文著述に從事して居た。死んだのは、天保三年で、年は五十三であつた。日本外史・日本政記・通議・山陽文鈔・山陽詩鈔・山陽遺稿・日本樂府・古文典刑・小文規則などは、その心血を灑いだ名殘の重なるものである。山陽は、經學の力、割合に少かつたけれども、活眼達見の文士であつたことは、誰でも認むるところで、外史政記などは、尊王賤覇の意味を抱藏して、暗に維新の先驅をしたものだと云つても宜

い。何は兎もあれ、一代の偉人と謂ふべき者である。

無二幾何一徵兵聚者六萬。乃盡委二之於範賴義經。因令曰。木曾阻二我兵一必於二宇治河一。皆具二善馬一可二以騎渡一。

これは日本外史卷二源氏記の一節を鈔出したもので、誰でも知つて居る佐々木梶原二人の話の端緒である。毎々、女丈夫や、烈女の傳記ばかり、講義するのも、餘り面白う無いから、少し堅過ぎるかも知らないが、一寸目先の變つた所を掲げた者である。元來、外史は、一篇の大文字であるけれども、その中の或る部分を節取すれば、自然と立派な小品文が出來る。これは、格法の嚴肅な爲であつて、山陽は確かに左傳や史記から學び得たものであろう。就中外史の文章は、初の方ほど錬れて居つて、この一段などは、殆んど比べ物の無い位な出來で、文調の高い上に、少しも緩んだ處の無いのは、流石大家たるに愧ぢないものである。

○無幾何といふのは、前段に木曾義仲が京都で亂暴を働いた爲に、賴朝が之を討たうとした事の書いてあるを承けて、「兎角する中、程なく」といふ義である○徵兵は、召集した兵士、○委は委任、指揮の權を以て與へること○阻我兵の阻は、防ぐこと○宇治川は山城の國にある川で、勢多とともに、京都の要害としてある場處○河で防ぐのだから、必ず橋など斷り落すに違いない。そこで、善馬を用意して、河波を分けて、泳がせ渡るべしと令を下したのである。

これが、首段であつて、上文に接續して、新に端を開き、範賴義經の名を出して、此行の大將はこの二人なることを明にし、下文に出で來る景季高綱二人の陪客としたので、下にある善馬の二字は、一篇の綱領で、面白い話柄も、要するに此から出で來るのである。

賴朝有二駿馬二一。曰二池月一。曰二磨墨一。梶原景時有レ寵。其子景季年少鋭勇。於レ是請レ得二池月一以先登。賴朝曰。乞焉者多。吾不レ與也。顧範賴

等戰不レ能レ克。吾且ニ親往一。此吾乘也。乃賜ニ磨墨一。

○駿馬も、善馬も、同じ意味ではあるが、駿馬の方が何と無くすぐれ居る樣に聞こえる。これは用字の變を示す爲ばかりでは無く、幾分の意味があつて、故らに此に下したものである○池月磨墨、いづれも名馬の名であつて、その產地などに就いては、種々の說もあるけれど、こゝに細記する程の必要も無い○年少鋭勇の四字は、景季の性格を寫し盡したもので、後に大惱とあるのは、此から來た者である○先登は、眞先に進むこと○乞焉者多の焉は、之の字と同じに見れば便利であろう○克は勝つことたが、敵の大將まで打取るをいふので、普通の勝とは違ふ。こゝでは必ず木曾義仲の首を獲ようといふ意味が籠つて居る○且は「將さに」と同じに見よ○吾乘は自分の乘馬といふこと。

この一小段、賴朝に比類なき名馬のあつたことを書いて、景季が池月を欲しいと願ひ出たことに及ひ、乞焉者多といつて、希望者の頗る多く、馬の尋常で無いことを暗寫し、吾乘といつて景季には如何にするも、與へないといふ決心の程を示し、暗に下文にある高綱感喜の一段を呼び起そうとしたもので、文に生色があつて、波瀾橫生と云ふべきである。

諸將士皆發。明日佐々木高綱自ニ近江一來謁。賴朝問曰。聞汝在ニ近江一。盍ニ直從レ軍入一レ京乎。高綱對曰。臣如從レ軍不ニ敢期一レ生。欲ニ一見レ君訣別且奉ニ指揮一也。馳ニ三日一乃達。臣唯一馬。罷不レ可レ用。故後レ期在レ此。賴朝喜。

○近江は、高綱の鄕里、之を重ねたのは、遠地であることを明にする爲である○近江は、京都の近處であるから、諸軍の來るのを待つて、之に從ひ直くに京都に打入れば宜かつたらうといふ賴朝の言、道理至極である○對は、答と同じだけれども、貴人に向ふときに用ふることが多い。如は若しと同じ。苟くも、軍に出れば死ぬる覺悟、最後の名殘に君を見て、暇乞

を爲し、その上よろづの差圖を仰がうといふ高綱の言は、むかしの武士の精神をあらはし居る○罷は疲れること、遠路を一馬で三日に馳せ通したから、疲れに疲れて、役に立たないといふ義○頼朝喜は、その忠勇に感心したといふ程のこと。

以上第二小段は、高綱が遠地から態々尋ねて來て、頼朝が喜んだことを叙し、遂に池月を賜はることになつた引子としたもので、一馬といふのが主眼の文字で、前後に文脈を通じて居る。その上、叙事の精細簡潔の處は、最も玩味すべきである。

因謂之曰。汝能爲我先登於宇治乎。曰。能。臣居河上識其淺深也。於是遂出池月賜之。高綱感喜。謝曰。君聞高綱未戰。而死則不能先登也。聞未死而戰則先登者高綱也。拜舞而出。頼朝呼返戒之曰。景季等乞焉而不與。汝記之。對曰。諾。

○因の一字を下したので、喜の餘といふことが分る

○河上は、河の邊○淺深は、瀬の淺いところ、深いところといふこと○於是遂の三字は、頼朝が十分に高綱を信用して居る樣子を寫したもので、頗る面白い○高綱が、不慮の事でも出來て途中に斃れたならば、先登も出來ないが、死なゝくて戰て居たと御聞きになれば、先登した者は、必ず矢張高綱で御座ろう。これは頼朝に誓つた意味の言○拜舞は、喜び勇んで、その儘跳り出たまでのことであろうが、早速池月に跨つて踴躍するさま迄が連想される○汝記焉とは、善く心に覺えて居て、宜しく取り計ひ、怨を結ばぬ樣にせよとの意。

他人に與へなかつた名馬を、別に懇望もせぬ高綱に賜はつたのは、頼朝の胸中、十分に見るところがあつたからのことで、高綱は死命を以て托されたのである。末段訓誡の語は、簡にして盡し、老將の語氣、洵にかくの如くあつたろうと思はれる。高綱が之に答へて、唯だ諾の一語を以てしたのは、猶更簡であるが、俊傑の氣概自ら露はれて居る樣だ。こゝまでが

二大段で、池月磨墨を中心として、之に景季高綱を配合したのであるが、次の段になると、この四つの者を一處に合せて、その間の紛擾から和解になるまでを寫して、局を結ぶことに成る。文の妙は事實の奇と相待つべきものであるが、之を見付け出して、此處ぞといふ意氣込で、筆を揮ふのは、一に作者の識力に關係するらしい。

時大軍陣于浮島原。景季視群馬無過磨墨者。牽而上高丘。誇示於衆。已而有大嘶聲。畠山重忠曰。池月聲也。何以至此。已而高綱僕牽池月至。過丘下。景季曰。誰乘。僕對曰。佐々木氏之乘。景季大慍曰。不圖公之視彼踰我。我寧與彼死。使公喪二良。即扣刀要路而待。高綱望見之謂其騎曰。彼非梶原耶。公之囑我殆爲是也。

○大軍は、即ち徴兵六萬とあつた軍勢○浮島原は、富士の麓にある原。こゝに姑らく兵士を留めて休憩したのだから、軍と書かなければならない。陣と書いたのは、疑もなく、山陽の誤である○景季、六萬の軍勢の乗馬を見るに、磨墨より勝れたるものが無い。そこで、態々高い處へ引き上げて、自慢らしく人に見せる。これが誇示の意○池月の聲が聞こえて、どうして此に來たのだらうと怪しく思ふのも、無理ではない。前に頼朝が、此は自分の乗馬だと言つたことがあるからである○慍は、怒氣を含むこと○公は、頼朝を指す○二良は、二人の家臣といふこと○景季は、父が寵あるのを恃んで居るから、自分よりも上に、彼即ち高綱を見られたのは、實に心外の事であると怒つたので、前にもいふ通り、年少氣鋭であるから、前後の考も爲く、高綱を刺し違へて、死にでもし、頼朝に二人の家來を失はせ、非常の損をさせて、せめてもの腹癒をしようといふので、刀の柄に手をかけて、高綱の來かゝる路に出鯱張つて待つて居るのである○其騎とは、從者のこと○囑我とは、「態々御注意下

つたこと」の義○殆爲是也とは「ハ、――こんな事のあるのを言はれたのだな」といふやうな語氣を寫したものと見れば宜い。

この一小段は、景季が怒つたことを寫したものであるが、初めに景季が大得意の有樣であつたことから、漸々に筆を着けた爲に、反映の妙を極めて、讀者を感ぜしむることが一層深い、その上、大嘶く聲といつて、すぐに、池月を出さず、畠山重忠などまでか、不審の思に堪へなかたつことを敍して、次に高綱の僕を出し、景季が急ぎ呼び留めて責め問ふところから、怒りに怒りて決鬪せむとして待ち構へて居るところに及び、筆を轉じて、一方では高綱が從容迫らず、之を望み見て、さりげ無く進んで來る。その間の變化曲折、實 面白く出來て居る。

漸近。景季呼曰。四郞久濶。彼乘公所賜乎。高綱哂曰。否。吾患無善馬。欲就公廐借之。聞磨墨已賜於子矣。池月不得命矣。子且然。况於高綱乎。然君事方急。不遑顧慮。遂誘廐人竊之矣。後有責問。子幸救解之。景季色解。笑曰。悔我不竊也。乃與倶西。

○漸近とは、高綱が次第に近づき來ること、○久濶は、久し振」若しくは「姑らく遇は無かつた」といふこと。高綱が近江に居つたからして、云つたものと見える○哂は、せゝら笑○自分には善い馬が無いから、せめて公の廐に就いて借りようと思つたところ、磨墨はすでに御身に賜はつたが、池月の方は可け無かつたといふ。高綱の口ぶり、何となく梶原を崇めたところがあつて、頗る氣が利いて居る○子且然、親父が君寵ある御身さへ、さうだのに、どうして高綱に池月を賜はろうか○君事は、君家の事、今度の合戰をいふ○顧慮、いろ〳〵顧み考へるといふこと○誘廐人は、廐の別當をだましたといふ義○責問、罪科を責め問はれる○救解、口ぞへをして言ひ譯けして呉れよといふこと○色解、怒の色の漸く收まりしこと○

笑は、哂と對して聲高く笑ふこと○景季が自分も竊めば好かつたといふに至りては、全く高綱の術中に陷つたものである。

以上第三大段、高綱の機智、巧に景季を欺き、其怒を解かしめたのを叙し、有意無意の中に頼朝の訓戒を顧みて、結としたのである。この段中に、また善馬の字を點出して、前に出て居た善馬駿馬等を收めた所など、なか〳〵巧なものだ。前段には慍の字を出し、此段には哂笑の二字を出し、相映發して、乃與俱西の四字を着けた處から、二人聯騎。馬首をならべて、笑ひながら馳せ行く様が見える。

土佐日記講義（七）

文學士　鹽井雨江

十一日。曉に舟を出だして、室津を追ふ。人皆まだ寢たれば、海のありさまも見えず。たゞ月を見てぞ、西東をば知りける。

○十一日の夜明けに、那波の泊より舟を出だして、室津といふ泊りをさして漕ぎ出でたり。舟中の人々は、皆未だ寢て居る故に、舟屋形の戸は、なほ閉ぢてあれば、外面は見えず。海のありさまも見えず。唯、屋形の軒より、月を見て、西東の方角を知るとなり。

かゝる間に、皆、夜明けて、手あらひ、例のことどもして、晝になりぬ。今し羽根といふ所に來ぬ。

○かく漕ぎ行く中に、何時しか、夜は全く明けはなれ、人々も起き出でつ。手を洗ひ、顔をきよめ、髪をかきあげ。朝飯を食ふなど、朝毎にきまりて爲すべき事どもを爲して、とかくする程に、晝になりたり。をりから、羽根といふ所に來たれりとなり。○今しのしは、唯語調をつよめたるまでの助詞にて、別意なし。

わかき童、此の所の名を聞きて、はぬといふ所は、鳥の羽根のやうにやあるといふ。

まだをさなき童の事なれば、人々笑ふに、ありける女の童なん、此の歌をよめる。

まことにや名に聞く所はねならば
　飛ぶが如くに都へもがな

とぞいへる。男も女も、いかで疾く都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、げにとおぼえて、人々忘れず。

○此の段の文意は、幼き童が、此の羽根といふ所の名を聞きて、はねといふ所は、鳥の羽根の如くなりやと問ひたり。その童は、まだ幼き童の事なれば、人々が、其の問ひを、皆をかしく思うて笑ひたり。折りから、其處に居りたる少き女の子が、此の如き歌をよみたり。其の歌は、此の童子の言へることが、眞實にて、ナアー、此の羽根といふ所が、鳥の羽根ならば、何にとぞ、此處より飛ぶが如くに疾く都へ行きたいものかなといへる歌なり。舟中の人々はどうぞして、疾く都へ行き着きたいと、思ひ居る事なれば、此の歌の上手に出來たりといふにはあらざれども、人々は疾く都にかへりたしと思ふ心より、此の歌を、ナルホド尤よと感心して、心にとゞめて、永く記憶したりといふ事なり。

○ありける女の童。其の側に坐りて居りたる少き女子といふ事なり。○まことにや。ある本には、まことにてもあり。まことにやのやは、感動詞にて、眞實にて、ナアーといふ意なり。童の言へる事の眞實にてといふ事なり。

此のはねといふ所問ふ童の序にて、又、昔の人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。今日はまして母の悲しむことは、下りし時の人の數足らねば、ふるき歌に、數は足らでぞ歸へるべらなるといふことを思ひいでて、人のよめる。

世の中に思ひあれども子を戀ふる

思ひにまさる思なきかな
といひつゝなん

○此の段は、貫之夫婦が、土佐にて亡くなりたる女子を思ひ出だして悲むことを書けるなり。○此の羽根といふ所とふ童の序にて。此の羽根といふ所は、鳥の羽根に似たりやと問ひたる童の可憐なるにつけてといふ事なり。羽根といふ所とふは、所を問ふといふべきをを略きたるなり。○昔の人。土佐にて死にたる女子をいへるなり。○いづれの時にか忘るる。常に亡き女子の忘られぬ意なり。かは例の反語なり。○母。貫之の妻なり。○下りし時の人の數足らねば。土佐の國に下りし時に伴れたりし女子の、土佐に在國せる間に亡くなりて今都へ歸へるに、其の女子はあらねば、かく言へるなり。○ふるき歌に云々。古今集の羈旅歌の部に、讀人知らずにて、「北へ行く雁ぞ鳴くなる伴れて來し數は足らでぞ歸へるべらなる」といふ歌あり。それをさしたるなり。此の歌は、昔、ある女の、良人に伴れ立ちて、他國へ行きけるが、間もなく良人は其の國にて死にたりしかば、妻女は獨り都へ歸へり上るに、その途にて、北の方へ歸へる雁の鳴きて飛びゆくを見て、詠めるにて、歌の意は、北へ歸へり行く雁が鳴くよ、彼れも、去年の秋故郷より伴れ立ちて來たれる數の、今日は足らずして歸へり行くやうであるといへるにて、良人に死なれて、唯獨りもの さびしく歸へる故郷の途にて、もの悲しげに歸雁の鳴きてすぎゆくを見て、彼れも伴れて來し良人にはなれて、かく戀ひしく悲しくて鳴きながら歸へるかと、ながめうたへるにて、誠にあはれにきこえたる歌なり。○思ひいでての下に、嘆くといふ如き詞を入れて見るべし。○人のよめる。此の人は貫之なり。○世の中にの歌の意は、明かなるべし。說かず。○いひつゝなん。此の句の下に、嘆き悲みあへりといふ如き詞を置きて見るべし。

○此の段は、筆あまりにまはしすぎて、やゝ整はぬ心地す。「思ひ出でて、いづれの時にか忘るゝ」といへるも、すなほならず。「思ひ出でつ」ときりて、更に「いづ

れの時にか忘るゝ」といひたし。また、「母の悲しむことは」と言ひて、「思ひ出でて、人のよめる」にては、文、整はずといふべし。數足らでの古歌の意を、悲しむ母の心として、かく書けるなりといふ説もあれど、それにしても、文は整ひかねたり。思ひいでて嘆くといふやうに、一と先づ文をとゞめざるべからず。或は、人のよめるといふ詞を、削らざるべからず。いづれにしても、筆整はずといふべし。

十一日。雨降らず。文時維茂が舟の遲れたりし、鳴津より室津につきぬ。

○雨降らず。雨の降り來たらむ樣子なれば、今日は舟を出さゞりしに、雨は降らざりしかば、かく雨降らずと殊に書きたるなり。○文時維茂云々。文時維茂が乘りたる舟の、貫之の舟に遲れ居たりしが、今日鳴津より此の室津に到着して、貫之の舟に追ひつきたりとなり。「舟の遲れたりし」の下に、がといふ助詞を畧きたるなり。鳴津は、やがて、大湊の事なり。文時維茂の二人は貫之、屬官にて、共に都へ歸へる人なるべし。

十三日。曉にいささか雨降る。暫時ありてやみぬ。男女これかれ、浴湯せんとて、あたりのよろしき所に下り行く。

○十三日は、夜明けに、雨が少し降り出でたるが、間もなくやみたり。かゝる天氣にて、今日も舟を出さず泊まり居る故に、船中の人々が、浴湯して身躰を清めんとて、其の近邊の、便利よき所へ、舟より下りて行くといふ事なり。

海を見やれば、

雲も皆波とぞ見ゆる蜑もがな
いづれか海と問ひて知るべく

となん、歌よめる。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。

小説

雙々燕

藤本藤蔭

旋風（上）

仁心ふかき老夫婦は、いとゞ哀憐に堪へず、黄白の事や御葬りまをす事なぞは、決して御心遣ひさつしやるに暨びませぬ。手前どもの寺院へ假に御葬りまをし、いつでも御在所へお轉しなされるやうに和尚樣に言つて置きますから。と千代之丞の心を安め、翁は、老妻に告げて、夜が明けたならば、若者を走らせて、斯く〳〵云々にしてと命けて、その日にもなれば、人をも賴みて、葬りの營みをなし、亡父を送る孝子の千代之丞が、身の衣服までも新調して、迎ひ僧の來れる時には、準備すべて整ひ、千代之丞は、花色の紋付の衣服に麻裃を着し、雙刀を佩び、德右衞門翁は、羽織袴に小刀を佩びて、おなじく供に立ち、蘭若は本行德の德願寺なれば、道の程もわづかにして、間なく到り、引導等濟みて、亡骸を夕の烟となし、明くる朝、翁は、千代之丞を率て寺に至り、遺骨を拾ひ、小瓶に殮め、三好屋の代々の墓地の裡に葬らしめ、花を手向け、香を燒き、千代之丞を先に拜せしめて、己も敬々しく拜し、千代之丞の淚に搔きくれて、立ち去りがたきを慰め伴ひて家に歸り、位牌に香を具へ、千代之丞に告げて、形ばかりには御座れど、滯りなく御葬りも濟みましたれば、一日も早く館山へ御座られたく念はつしやらうが、御一人放しては御案じられますに、御孝道として、五十日の御忌は受けさつしやらんでは叶ひませねば、御忌中は、當家に御座られて、御墓參をも做さつしやられ、四十九日の御法事を濟ませ、その中に館山わたりの客人の中食などに立ち寄られますを、老翁が堅固な人を撰んで、一串に御伴れまをすやうに賴みませば、爾う思し召されて、しばらく安着

て御座られませ。と老妻にも告げて、ともく留めたるも情深し。

千代之丞は、席に着ける雨の手に、雨の也似く泪を落とし、何から何まで、御禮のまをしやうも御座いませぬ御世話になり、自恣に館山へ歸りたいなどゝは決して念ひません。唯這の上復た御世話に做つて居ては濟まないと思ひます。私は、御兩方樣を實の父母にも優つて、如何したら恩報しが成らう乎と、夫ばかり念つて居ます。何卒私を下奴として御仕ひ下されば、私は忝なくおもひ、勞作て御世話になつて居ますと。溢るゝ眞心を淚に覆して乞ひたり。

主翁も、老媼も咽び泣きて、どういたして御武家の若樣を下奴なんかにして使はれませう。少許の御世話を爲たつて、爾やうに仰られますと、翁も、媼も骨身に染みまして、嗚呼是れ若樣のやうな柔順い者が子とも做つたならばと、堪らなく若樣が欲しくなります。平素に考へて、人の子を子に爲たつて、所詮氣に適ふやうな者は無いもんだからと、斷念して居たので御座りますが。のう、婆々どの、千代之丞樣が下奴とも做つてと仰つて下される程の思し召しなら、寧そ三德の養嗣に御貰ひまをして、家資を御讓りまをせば、自己は、本望だと思ふが、おのしは何と念はつしやる。と諮ねたり。

旋風（下）

すでに翁の、千代之丞が孝心ふかきを慕ひて、養子にせまく念ふ意は、老媼も同じゆゑ、もし若樣が子となつて下さつしやれば、取る年歯の兩個ともに明日の日も分らぬ身で御座るのだから、爾うなれば、命日には、線香の一本も樹てゝ戴き、這の家も繼いで御貰ひまをせば、永年子がなくつて、今大きくなつた孝行の息子殿が出來まをしたので、實のこれが授かりもので、這樣な忝ない事は御座りましねえが、若樣が田舍婆々なんかの子となるのは嫌だと仰るべえも知れましねえ。と千代之丞の上下着たる美しき若衆姿を恍惚と見て、手もて口を覆ひ、ほゝゝゝ。と笑ひけり。

千代之丞は、面を赧やかにして、浪人の子の家も何もあ

りません者が、如何して當家の養子なんかに成られは爲ません。又爲ると言ひましても、不束な者で御座いますから。」と、辭むを、老夫婦は、なほ〳〵床しく念ひ、手に取れる玉を失はざらんと、只願説きて、何でも斯でもと、諾かざるから、千代之丞は、暫く案じ、私のやうな者をそれまでに仰つて下されますならば。と僅に諾ひたるを、老夫婦は、躍り起りて歡び、御忌が明けましたらば、改めて親子の御盃をいたしませば。と是れより佛事も一層厚くして、千代之丞を寵むこと限りなかりければ、千代之丞は、また老夫婦を實の父母のごとく敬ひ事へ、間あれば、請ひて墓詣でをなし、亡父の幽魂を訪ひ慰むるから、三德の老夫婦は、親ならずして是れ親なりけり。爾は子なくして子ありけり。千代之丞、生に事へ、又死に事ふ。平兵衛の靈魂もこれを歡ぶべし。

恁くて、四十九日の佛事も果て、千代之丞の忌も明けゝれは、翁は、常に親しくしける土地の長に、千代之丞の事を告げ、親族、知邊の者を招き、養子の披露をして、誇りかに千代之丞を紹介せ、こゝに親子の杯をして、三好屋の三の字をとり、名を千代三と改めければ、是れより千代三は、倍す〳〵養父母を大事にして、若者の爲なる業をも、身先に立ちて勞作きつ、客人を接待ふに、愛敬を盡くして、よくその機嫌を取りたれば、店さへいや增しに繁昌し、この街道にかゝれる旅客は、孝子茶屋と稱びて、立ち寄らぬもなく、其名遠近に聞えたり。

居ること、一とせと半あまりを過ぎて、秋のはじめになりたるが、この頃は、農業の遽しき際なれば、翁は、より〳〵に小作せしむる田園を視回りけるを、千代三代りて行くこともありしが、或日の事なりけり。空は藍を流しゝやうに晴れわたり、日熾くが也似くにて、野良にある者、汗の玉をちらし、風欲しく念ひたる未の刻ごろ、行德浦に立ちのぼる、鹽竈の烟の亂れけると見るほども、颯と發りたる一陣の風は、鹽竈の苫家をくる〳〵と大空に卷き上げて、木の葉のやうに亂し飛ばせ、耕地を霞め、たゞちに堤をさして、其方那裡の農家の庭場に乾したるもの、或は茅屋をむしろやうに攫ひて、渦く風の黒みわたり、鳴り響すさまじく、中山村を犯し、卷き上

げたる東西を遠近にみだし墜とし、利根川を越して、武藏の方位におし行く形状に、野頁に在る者は、呆れに呆れて、あれ〳〵。と眺めやる堤の方には、人の泣き叫ぶ聲して、那方這方に逃げ惑ふごとくにて、千代三は、はじめて斯かる暴風を見、太くうち駭き、養父母の上を氣遣しく念ひ、いそぎ我が家をさして走り歸りたり。

義兄弟（上）

おう、千代殿乎。はい〳〵、否もう膽が潰れて、腰がぶん抜けて了ふやうだつた。はい〳〵、先あ負傷も爲ましなんだつたが、其方は、さぞ膽消たて御座らう、婆々と案じて居ました。這樣な苛い旋風は、私が記えて、たゞ一回外ない。まあ裏へ往つて看さつしやい、風呂場の屋根を掻つ攫はれて、その傍に婆々が濯つて干して置いた、あつはゝ、婆々の何だ乎を、棹竹と一串にもつて行かれ、夫から又婆々が乾して置いた、夜具と布團を戸板ぐるみ掻つ攫つて行かれました。今向家の嬶々どのが來られて、其裡では、家臺店に並べてある菓子を、箱のまゝ貽らず持つて行かれたさうだが、あつはゝ、風の奴輩狂ひ回つて、腹が減つたのでもあらう。夜の具も、草臥たとき、寢まふとでも言ふんであらうが、婆々の古びた二布は、何にする積り乎、一向氣の知れぬ的で、あつはゝ。と笑ひ語れり。

千代三は、聞く事ごとに駭きて、攫はれたる物の、那方に墜としあらんも知れざれば、索しに行かんと言ふを、止つしやれ〳〵、木の上へひつ被けた乎、川の中へおん流した乎、怎麽して〳〵判るもんぢやあ無い。と留めしが、それでもどうだ乎、知れませんから。と提げし籜笠うち冠り、はや馳せ出でゝ、旋風の通りたる跡を其裡こゝと物色ゆけば、暴らされたる農家の幾千なるを知らず。戸障子などの微塵になりて、田畑の中に墜としあるも數知れざりしが、索ぬる夜の具は、似たらんと想ふるものも見當らずして、行徳川の堤に登りて看ると、いと大きやかな、柳の根本より捻り折られ、川中にうち倒れたるそが枝杪に、人のとり縋り居りて頭を出だし、援けて下され。と叫びたり。

いかにして溺れたらん乎。いまだ年若き男子のごとくなるが、漫々たる大河の、この程は、水量さへ増して、底ゐも知れぬ激流の、白浪起ちて、矢を射るごとく疾かるに、とり縋りたる枝の折れもせば、身は倏ちおし流されて、行く方も知らずならん。といと危く念ひ、先年雪の日に父もろとも凍え死せんとしたることも懐ひ出で、夫にも増さる危急の、疾く救はざれば、竟に陽世の人ならざらんと、胸轟き、脚顫へ、如何せば救はれんと、堤を下りて見れば、岸より二間ばかり距れしにあれど、水泳ぐことも知らざれば、考へて、柳を渡りて行かばやと、抱くやうにして、匍匐へ渡れば、危さは、溺れ居ける者といづれ劣らず、浪に揺られて生ける色もなし。辛くして一間あまり渡りて、隻手に我が帯をひき解き、そが端を川上へ投げて、その帯の端を捉へさつしやれ、這方へひき寄せますから。と言ふに、溺れし者は、生死の界とて、疾く帯の端を捉へたるを、手に捲くやうにして曳き寄すれば、身は浮びて、手許まで寄りたるが、已よりは、幾歳乎上の少年にして、竹の行李を大切さうに抱へ、岸は、意の外に水淺くして、脊丈も立ちけるから、やがて岸に達したれば、千代三もやうやくに戻り、扶けて堤にひき上げ、直に我が家へ伴ひて濡れたる衣服など着換へしめんと念ひしが、養父母に商量ずしてはと、敢て擅まゝに做ずして、そが事理を少年に告げ、少時御竢ち成されよ。といふゆゑ、涙を流して謝し、實に再生の恩人にて御座ります、大恩は、死すとも忘れませぬ。と掌を合せて拜みたり。

養兄弟（中）

憶なくも溺れ死せんとしたる少年を救ひたる千代三の嬉しさは、索ぬる被衾を見つけしに増して、いそぎ馳せ歸り、云々と養父母に語りけるに、徳右衛門翁、これを懌びて、出來さつしやられた〳〵、人としては、爾うなくては做りませぬ。是れ這の美事を做しながら、我れ等に遠慮さつしやる事やは。既に性命を救ひたれば、疾く伴れ來つて手當を做さずしては。と千代三を率て、翁みづから溺れし少年を伴ひに行きぬ。

この時には、そこかしこに里人の聚ひて、とり〳〵に、旋風の難に罹りたる風評もかしまし。千代三は、人を推し分け〳〵て、前の所に至れば、少年は、那里に行きたる乎、影だも見えず。訝みて所や違ひしと索むれば、我が匍匐ひ上りたる柳は、河中に僵れおれり。養父の遽しく那里に居る〳〵。と尋ぬるから、いよ〳〵周章て、悲しくなりて、前の方に復た人の集ふるから、其裡に馳せ至りて視ると、彼の少年は、這裡にうち仆れて居けり。生死の程は知らざれど、又彼の行李を大切さうに抱きて。

千代三は、遺失ものを見つけたるやうに嬉しく馳せ寄りて、貴客々々、怎麽しました。父に話しまして、とも〳〵御伴れまをしに來たので御座います。とせはしく報ぐ。少年は、頭を擡げ、恩人で有ります乎。私は復び御世話になりますのが、恐懼に堪へませんから、少許にても歩かれませばと、這里まで參りました處、眼眩み、脚戰へ、ばつたり僵れ、復た起つことも叶ひませんて、心地死すべきやうに惱ましく、我れにも在らで、嘹いて居ました。と應ふ。

翁は、千代三に、此方が溺れさつしやつた御人乎。と諮ね、熟々と視るに、年紀は、十八許にして、唇の色も變りたれど、容貌すべて鄙しからず。五所紋章の空色ちゞみの單物に、白麻の繻絆を着たるにも、平民にはあらざらんと察し、いとしと念ふ情は涙ぞ先だちて、自己は、これなる息子の老父めにて、息子より御災難の委細を承はりまをしました。何は措き、ともかくも自己許へ御座られませ。と誠意は辭に露れければ、少年は平伏して、涙と共にこれを謝せり。

翁は、千代三と俱々に扶け曳きて伴はんとす。さるも少年は、一歩も歩むこと成らず。よりて翁は、これを脊負はんとす。千代三は、危險う御座いますから、私が負ひます。と爭ふ。爾るも、實は兩個とも脊負ふに堪ふべからず。

これを視て、一個の里人の、相撲にてもあらんやうなる大の漢の、きやら〳〵と笑ひて、怎麽して〳〵、三德の檀那にや脊負はれましねえ。小檀那は、猶の事だ。自

己們がちよつと脊負つて行つて進ぜますべえ。米一苞の重量もある事ぢやあ御座るめえから。と衝と寄りて、少年を輕々と負ひ、先に立ちて歩みたる這のゆくりなき援助に、千代三は、猶更うれしく、少年の抱へゐたる行李を提げて、後より隨ふめり。この漢も亦より〳〵に三德の店に來たり、酒うち喫みて、常に翁を德とする者なるべし。

義兄弟（下）

嗚呼、是れ婆々どの、其樣な事は、どうでも宜い、速く奥の六疊へ床を敷かつしやれ。此方さんには、一銚子燗て進ぜろ。若い者に、いそいで醫者殿を迎ひに遣らつしやれ。と遽しく言はれ、老媼は、只ぐる〳〵と回つて、何を先にして可い乎分らず。彼の漢は、さすがに氣を利かせて、疾く立ち去れり。

醫師來たりて、奥の六疊の席に通り、少年を診察し、翁に告げて、這は幾分か河水を飲まれて御座るから、夫を瀉させまをしたならば、快然と做られるで御座らう。と薬を調じて授けたりしが、果して翌日は元氣出で、老媼の侑むる粥など啜り、涙を流して、その厚く世話になれるを謝し、翁に身の上を報げ、且水に溺れたる始末を語りたり。

大樣は、下總の關宿の鄉士のよしにて、父なる人を松本强右衛門といひて、維新のとき、關宿の藩中兩派に分れ、正邪いづれを知らざれど、迭に軋り合ひて紛亂を釀めたるが、强右衛門は、一日敵黨の激士に襲はれて、重瘡を負ひ、そが家をも燒かれて、妻と息子の芳之助を伴ひ、知邊の家に潜み、後出京して、名ある醫師に就き、傷痍の療治をせしが、餘病發りて敢なくなり、妻は世を果敢なみ、悲歎に沈み、尋で歿りて、一人殘されたる芳之助は、關宿に歸らんにも家はなし、爾せる親屬もなかりければ、這の大都にありて身を立てんと、何がし先生の塾に入り、螢雪の苦學に三とせの星霜を經、今年十八歲になりければ、一たび鄕里に歸り、父母の骨を菩提所に葬らんと、これを竹の行李にをさめ、便船を覓め、利根川をさかのぼりて、歸國せんとしたる昨の未刻すぎ、俄

然發りたる旋風に、川浪立ちて、船は車輪のごとく回り、檣折け、板子を飛ばせ、舟子らの犇くほども、船は横さまに覆り、乘りあひの旅客は悲鳴の聲もろとも、水底に沒したるも、僥倖に沈みも果ずして、三町ばかり流されれ、端なくも柳の條にかゝり、千代三のために援はれ、主翁の慈恩に斯くて在りけるも、他の旅客は、概ね皆溺れ死したらん云々と。

翁は、この物語を聞き、倶に涙を流して少年を憐み、且その孝心を感じ、いつまでも當家に御座られて、御身を健全にし、徐々と關宿へ御座られ、御志を果さっしやれ。と勸むれば、千代三も傍らに在りてこれを勸め、芳之助の落命をわが上に考へ、そが心中を汲みて、漫に亦涙を流し、竹の行李は、雙親の骨を殮めたればこそ、實にその身を離さゞりしも道理なれ。と感じて、苟且にさし擱きたりしを、床の間に上げて敬ひけるを、芳之助は、父母の骸骨まで御世話になりてはと、只管謝りけれど、翁までも大切に扱ひたり。

三日四日、滯留しける程に、氣分は、平生のごとくに復したれど、未はかゞしく歩むこと成らずとて、猶うち臥してありしが、實は、水に沒したる時、何ものにて乎、內股を斫り壞りしを、棄て措きても癒えんと、匿して醫師にも告げざりしが、疵口より河水などの入りたるもの乎、その夜さり、太く腫れて疵口膿み、起つことも做らざるを、醫師に訝まれて裹みがたく、云々と告げしが、既に療治の術後れになりたれば、急には痊えがたからんと言はれ、翁をはじめ駭きて、千代三に傍らを去らず看護せさせたり。

袖の露（上）

年齒こそ劣るれ、千代三は、實に芳之助が再生の恩人にして、朝暮また懇ろに看護せられ、肉親の者とても、斯う樣にはあらざらんと、心魂に銘じたる芳之助は、いかにせば、這の恩惠に酬ゆることを得んと、一日、千代三に我が意志を告げ、永く兄弟とも倣らんことを望みしかば、千代三は、他に恃むべき從兄弟とてもなき身とて、これを喜び、芳之助は、我れより年上なれば、兄と敬

ふも、却て是れ芳之助は、千代三を弟となすも、實に恩深き者にして、如旃、そが容貌の美しく氣高くして、心の慧く温順なる、我れには過ぎて、弟となすも弟ならずと念へり。唯千代三に些の文字もなきを惜み、たとひ小學の一章たりとも、聖人の道を學ばしめたしと念ひ、これを勧めたりけるを、千代三は、深く亦喜びて、養父に告げ、書籍を求め、看護の間々に學びたりしが、穎き心は、一たび授けらるれば、忘れずして、よく文義までも解したり。

芳之助の傷痍は、一月許りにして全く痊えたれど、翁の請ふるに依り、更に二月餘り滞留して千代三を訓導し、字をも習はしめ、これを心ばかりの報酬として、今はしも故郷に歸り、父母の骸骨を葬りたしと、只管暇を乞ひたり。老夫婦は、今更のやうに別れんことを惜み、迭に勧めて、關宿に御座られ、御葬りを了らつしやつたら、再び戻り來さつしやれ。と言ひ、這の様な痩せ身代では御座れど、食べて居さつしやるには、聊さし支へぬ御座りませぬから。と信實やかに言はれ、芳之助は、涙を流してこれを謝し、古郷と言ひましても、今は怎麼なつて居る乎知れません。古い詩に、故郷生處の好も戀はず、恩を受る深處便ち家と爲す。といひますから、是非また來まして御厄介になり、犬馬の勞を竭くし、御慈恩に報じたく存じ居ります。と應へけり。

發ちぬる日も定まりければ、老夫婦は、一夕、芳之助を饗應し、路銀五兩に、新調せしめたる衣服をとり揃へ、これを馬の餞としたり。芳之助は、輙く受けず、路銀は、舟賃と飢を凌ぐほどのものを拜借いたしませば、夫にて足りまをします。衣服は、この程賜はりて、着用いたし居ります這の布子にて、身に相應いたしませば。と固く辭しけるも、老夫婦の諾くべきにあらで、且言ふ、船路は、先般のやうな御災難のことも御座らつしやるから、路は迂回になりましても、馬を傭ひ、陸を行かつしやれ。と諌められ、涙をおし刷ひ、すべてそが意に從ひけり。發足しける時は、當家の馬に荷鞍を被けて、これに乘らしめ、壯者に口を取らせ、千代三をして松戸の宿まで送らしめたり。

兄と事へ、學びの師と敬へば、いとゞ別離の惜まるゝに、芳之助の人となりの謙遜にして、おのれを誇らず、義に厚く、情深くして、久後憑もしき人と想ふから、口にこそ出さね、千代三は、もし彼の地に止まられて、ふたゝび歸りも來まさゞらんにはと、いよ〳〵悲しく念ひ、涙のみ墜として居りしが、松戸の宿離處にて、芳之助の、馬より降りて、別れを告げゝるそが袂にとり縋り、兄樣、きつと復た御歸り下されませ。と聲もくもりて僅に言へば、私もその積りで居ます、賢弟は、私の恩人でありますから、萬望煩はずに居て下されませ。と俱に涙を墜として、顏を反けたり。現に再生の恩人として、兄弟の義を結び、三月あまり一家に相愛し相敬して居たれば、今こゝに別れて、復び歸り來たらんことも決めかねしを慮ひ、おなじ心にまた別離の惜まれて、暫し互に咽び入りたり。

袖の露（下）

古郷の地のさすがに懷しからかは。旅館にむすぶ夢は、疾く至りて、親族、知人などを音づるゝも娯し。やがて着して、心當ての家にたづね至れば、得知らぬ名標かゝりて、尋ぬる者は、疾く他へ移りたりと聞くぞ胸つぶれぬ。叔母のありけるも、二年ばかり後に失せて、今は世にあらずと聞ける、本意なく悲し。人情すべて往昔に異りて、他鄕に來つる也似し。父の時に預けおきしと言ふなる、些の田園も、その人變心して、知らざらんと空おほれしたる、口惜しくも口惜し。負ひ來たりし父母の骨を菩提所に葬らんとすれば、去年の春、巷より發せし火に燒亡したりとて、目馴れたる伽藍も、礎石のみ殘りて、霜に黃ばめる草のあはれに生ひ重なりたる、如來の靈光もなきもの乎と、呆れたり。這う樣の所にいかで雙親の骨を埋められんと、一日も留まり居らんとさへ思はず、一たび行德に立ち歸りて、あるじの翁に商議らばやと、袖を揮ひて、慘憺たる故山の地を立ち去り、恩德あぶるゝ行德の、三德の家をさして戻り歸れり。

老夫婦も、千代三も歡ばぬものかは。唯是れ天より墜ち來たりたる樣に立ち騷ぎて、風呂の沸き居ればと、翁の

勸むるも懇切に、老媪が食膳を調へて、空腹く御座られたらんと、弟の給仕して侑むるも嬉し。厚薄地を換へて、芳之助は、今更のやうに感じ、泪を流し、翁にも、千代三にも、關宿のうたてかる事を語り、兩親の骨も持ち歸りたるよしを告げ、愼みて、翁に當家の菩提所の片隅になりとも埋められん事を乞ひしかば、翁はいと心よく諾ひて、芳之助には、いつまでも當家に御座られよ。と勸め、遺骨を葬るとき、寺僧に若干の布施して、丁寧に回向せしめたりき。

爾れば、芳之助は、心を決して當家に止まり、千代三と共々に勞作きて、同じやうに老夫婦を父母とあがめ冊き、名も三好屋の好の字をとりて、好之助と改め、夜は、千代三に書を傳へ、初めに彌まして、相愛し、相敬し、兄弟心を一つに義父母につかへ、備さに人子の禮を盡くせり。

老夫婦子なくして、家の絶ゆるを自然に任せ、資産をもつて窮人を憐みたるが、自然に千代三のごとき孝子を得、さらに又好之助を得、親生の子にもまさる二孝子を得て、絶ゆるに任せんとしたる家は、益す〱榮え、世にも身にも缺くることなくして。老い至る老夫婦は、感冒の氣とて打ち臥し〻が、翁は、これを死期の至りたるとして、兩孝子のうち騷ぎて、醫を迎へ、神に祈り、夜も寐ねずに看護しけるを、老至りて死するは、人の定業ゆゑ、決して心配さつしやるな。自己が亡い後は、汝方兄弟、ます〱心を戮せ、誠に小身代ではあれど、當家を守つて下されば、自己は、いさゝかも心を遺す所が御座らぬ。藥を服むも無益で御座る、何も搆はつしやらずに下され。と始終念佛を唱へ、溘然として去りぬ。養父に後るゝ二日、養母また眠るが如くに逝きぬ。兩孝子の哀悼いふばかりなく、天に呼び、地に愴み、身をもつて代替られざるを恨む。されば、心の及ばん限り、野邊のおくりの營みを厚くし、村中の窮民に米錢を施し、二尊の靈魂を喜ばしめんと計る兩孝子の隈なき心遣ひを、四隣袖を濡して稱へざるものなかりき。

喪中、業を休み、兩孝子、哀傷を盡くす事は、わづらはしく記さずもあれ、再び店を開くにおよび、繁昌往日に倍

し、人手も足らざるから、更に壯者を雇ひ入れ、母屋を作事して、こゝをも客座しきとし、兄弟、客を大切にして、家業を勵みしかば、一年ばかりにして、家資大に殖え、好之助は、二十二歲に、千代三は、十八歲になりたるが、是れ這の才子、好少年の、友愛もつて業を勵むを觀て、村中の女兒をもてる鉅農ら、いかで餘所にして棄て措くべき、兄弟に婚姻をもとめ、人を央みて媒とし、先を爭ひて言ひ入れ、これを競ふに及ぶ。

簷の燕（上）

擇ぶに任す親家の富有、緣女の才美、媒人口の虛稱にあらで、風評にも知られたる、本行德の穀物問屋の女にして、花も羞ち、月も閉ぢなん姉妹の、春秋さへ、ことし十八と十六になれると言ふは、緣談中の尤れけるものにて、好之助は、得がたき好緣と念ひけるも、千代三は、一向に妻を迎へん意なくして、媒妁の勸むるもうるさしと厭ひたれば、好之助一人娶るべきやうなくして、日又日と延びゐたり。

一日、好之助は、千代三に說きて、妻を娶るは、家をとゝのひ、子孫を設くるためにて、賢弟、ことしは前髮を落し、男になると言はれ居れば、さいはひ妻をも定めては。御互に子なき時は、つひに當家も絕え、實家も亦立てることが成らず。斯くては、二人とも孝道に背き、子たるの道にあらず。諺に、婦無ければ家を成さず。といつて、家計の損も亦多し。賢弟、熟考して、人の周旋する時を機會となし、一生を誤らざらんやうに致されたし。と諭したり。

爾るも、千代三は從はず。兄樣と斯くありて、心を俱に生業をはげみ居ります樂しみは、何ものもこれに如かずと思ひます。もし他人を入れて妻となして、兄弟の間を傷はれも致されませば、却に他人を入れざるの優れるに如かずと思ひます。と常の溫和にして慧きには似ず、執意に同じやうなる事のみ言ひて、從はざりき。

好之助は、心ひそかに樂しまず。平生に文學の談敵とせる朋友の、新河岸に住めるを言耗れ、談は、緣組の事におよび、溜息つきて、弟の同意せざるよしを語りける

に、友はうち案じて、それは、必定彼の人の先に至りたるを、後れて至りたる足下が、先に立ちて、妻を娶らんと言ふを、腹起たしく思ひ、殊更に妨ぐるにてあらう。と言ふを、否々、愚弟は心端直にして、なか〳〵其樣な僻める氣のある者ではない。と辯ず。爾れば、令弟の年なほ少くして、女房を迎ふることを耻づるにてあらう。儻し爾れば、物熟れたる老女をもつて、細々に説かしめたなら、却て諾と言ふ乎も知れぬ。と打ち笑ひたり。

恰も好し、千代三の知れる、新田のそれがしの嬶々の、用ありて至りしかば、朋友は、この嬶々のおどけて口輕き者から、説客に遣りてはと、好之助に告げ、嬶々にあらましを語りて賴みたりけるに、どうではあ御座るべえ乎、ともかく參つて見ますべえ。と行きしが、間なく戻り來て、否ましねえ、頭から怒られつ了ひまして、猫兒の紙袋でも冠せられましたやうに後退りして、漸のことで逃げて來ました。御釋迦樣が行かつしやつたつて、駄目で御座ります。と報ぐるから、友は、おかしとて噴き出したるも、好之助は、却て失望したり。

家に歸りても、胸の裡晴れず、くもり勝ちなる此ごろの空に、雨を催して、ひら〳〵と庭に散れる海棠の花を惜しみ、簷端に巣つくる燕の、雌雄はいづれと辨ねども、迭に土を含みて、飛び來たりては、復た飛び去るを瞻め、しば〳〵吐息つく時、千代三の茶を煮てもち來たり侑むるから、それは忝なう御座います。と茶碗を把りて喫みつゝ、賢弟、久々にて簷の燕を題し、愚作が成きましたと。帳場に至り、筆を持ち來たり、鼠半切に書きて示す詩に、

營巣燕。雙々雄。
朝暮銜泥辛苦同。
若不尋雌繼殼卵。
巢成畢竟巢還空。

千代三は、朝夕看て居ましても、詩に作ることは出來ませんもので御座います。と敬々しくおし戴きて、口の裡にて吟ずること數回、微笑をもらして、兄樣、これ折れ歌にて御高詠を和しませう。と筆を把りて一首の和歌

を詠じ、その末に書いしるしたり。

いつまでも、
仇にや捿まん雄つばめの、
ひとりは雌とてなき慕ふれば。

それは有り難う御座います、面白く有りませう。と手にとりて吟すること再三、愕然としてうち驚き、千代三の顔を護り看て、方寸は、早鐘を撞くやうに鳴りたり。さても／＼奇異なる事かな。と念へど、漫なることは言ひ難くして、賢弟の秀才なる、和書などは、讀むといふ程も讀みも爲ませぬが、又這の樣に和歌をも詠ぜられ、私は、とても及びません。なほ歌の意をよく玩味いたして見ます。と懷にして庭に立ち下り、空うち仰ぎ見て、降りも做ないやうだ。と獨言ち、外面に出てゝ、いそぎ彼の友人の家を訪ひたり。

簷の燕（下）

友は、千代三の和歌を吟詠して、いかにも奇怪の事だ、令弟は、全く是れ變化ものだが、怎麼して亦足下は、一室に起臥して居りながら、是れまで其の形態の分らなかつたものだらう。と言はれ、今に至つて考ふれば、實に容貌も麗しきに過ぎ、言語も低くして温柔かるに、風呂に浴るには、夜ならでは浴らず、夏時といへど、筒袖の肌衣を着、半股引を穿いて居て、夏冬とも脫がざるは、體を大切にするものとばかり想つて居つたが、是れ等に據れば、いよ／＼和したる歌の雌燕を自身に擬へたので、足下の言ふごとく、變化ものに違ひない。と語りぬ。

夜に入りて、醉ひて歸る。千代三、帳場にありて算計をなし居りしが、いそぎ起ち出でゝ迎へ、その醉ひ居けるを見て、兄樣、何方で喫らつしやいました乎、例にもなく醉はしやつて居ますやうで御座います。と扶けて奧の席へともなひ、茶を煎てもち來たり、燈火を挑げて進むるを、好之助、熟々と覩つゝ、賢弟、先刻の和歌は、私にはどうも解しかねたから、實は友人の所へ持つて行つて見せ、酒を出され、大きに酩酊しました。と語り、茶を最う一抔下され。と茶碗を出し、猶覩る容貌の、眉な

どの纎うしてやさしかる、微笑む口の愛らしくして、白う歯の見ゆる、當初無心のときは、一點の疑ふところもなかりしが、今有心にしてうち覗れば、那邊も〳〵決して是れ、あはれ微美き女子なりけり。

爾れど、好之助は、うちつけに露しいふを憚り、賢弟の和歌は、朋友にも解しかねて、畢竟私も朋友も、國風は學びませぬゆゑ、賢弟、詩も巧に作られませば、願はくは、詩をもつて和しては下されませぬ乎。と乞ひたり。

千代三、顏を赧らめ、さし俯向きて應へざりしを、再三乞はれてうち案じ、筆紙をもち來たり、一首の詩を作りで和したり。

營レ巢燕。聲々叫。
莫レ使ニ青年空ニ歲月一。
可レ憐和氏璧無レ瑕。
何事楚君終不レ納。

まことに拙う御坐いますが。とさし寄する手も戰へて、顏を反けたり。

好之助、吟ずること一回、容を正し、賢弟は果して、是れ女子にて在られるなり。卞和の故事を引かれ、楚王名玉を棄つるをもつて諷せらる。意思あきらかにして、詩も巧にて、ほと〳〵感じ入ります。賢弟、甚のために久しき歲月を男子に扮り、身をも、人をも欺いては居ましたぞ。既に骨肉も啻ならざる間にしては、必ずしも裹み秘すところは有りますまい。と咨ねたり。

千代三、いたく羞ぢらひて頭を低れ、やうやくに應へていはく、兄樣の御不審は御道理にて御座います。私も好んでの事にては御座いませんで、母の歿りました後、父の身も以前の樣ならず。私は、幼くして留主を護りますより、人に輕蔑されぬ樣にと、千代とまをす名も、千代吉と呼びまして。後、仕へを罷めまして、在所へひき籠まんと、この行德まで參り、病氣に罹り、私の身を案じ、どこまでも姿容を變へずして、人の輕侮をふせぎ、竊に生涯の良人をえらみ定めよと、言されましたからで。其後、圖らずも兄樣を得まして、養父母の歿りました時に、委細を御話しまをさんと念ひましたが、未だこの家の身代十分に至りませんから、此上なほ兄樣を補

け、資産を殖さんといたしつゝ居りました處、憶はぬ縁談の事起り、今は裹み難くして、身の素性を和歌にて述べ、又詩にて羞づかしき心操をも。と言ひさし、顔を耳まで紅くして、さし俯向きたり。

好之助は、いよ〳〵奇異の念ひをなし、賢弟、亡大人の遺命を守り、苦心をもつて、一身の歸する所をえらみ、一代の大事を完成す。既に賢弟と一室に起きふしすること四年、絶えて一事一言、私の意に忤ふことあるなし。眞に節孝兼全、女中の丈夫とこそ言すへけれ。賢弟、愚兄が薄徳を捨てず、一身を歸せんとす。爾らんには、又何ぞ他に娶るの理あらん。萍水相逢ふ、よろしく夫婦たるべし。是れ豈人謀ならん。賢弟、いかに思ひます。と膝おし進めて問ひたり。

千代三、すこし後退りて答ふらく、その事は、兄様の御逗留なされて居らつしやる時、陰に謀りさだめ、父を當家の菩提所に葬つて御坐りますゆゑ、母も亦移して一つにいたし、私は、永く當家を去らずして、養父母の追善も缺かさず致したく存じませば、兄様も亦爾やうの御心に坐しまして、不束なるこの身を御棄て下されませずは。但し媒なくして私に合ふは、禮に於て如何と存じますゆゑ、すべて人の嗤笑を受けませぬやうに御裁酌くだされませば、誠にこの上もなく忝なく存じます。と言ひたり。

好之助は、只管感服して、這の夜は、室を異にして寐ね、あくる日、早旦に新河岸に至り、朋友に有りやうを語りて、そが雙親を媒妁に央みたり。朋友の父は、嘗て土地の與頭役をつとめ、人望あり。母は、若きときに大名の奥殿に奉仕したるよしにて、よく禮式等を辨別へたれば、誠に媒妁としては不足なし。好之助は、總べてそが指揮によりて支度を整ふるに、千代三が多年の苦心を彰かにせん爲に、當日の衣裳等も飽まで飾らしめたしその事ゆゑ、それ等の東西は、人を東京に走せて調はしむる程に、とり急ぎても左右して、五日あまりの日を費やし、やうやくにして調度の類までも整備にければ、當日は、親屬、知邊の者を招き請ぜんと、そが饗應の準備に復た遽はし。

千代三は、その日の朝までは、なほ身の容を變へずして立ちはたらき居りしが、この日をもつて、名をも童名の千代といへるに復し、媒人の內儀早うより來たり、かの何がしの嚊々の器用にして、髮なども善く結ひけるから、これに髮を結はしめて、櫛笄を挿さするも差圖して、髮は髢を入れ、つやゝかに高島田に結はしめ、齒に鐵醬を染めさするに、嚊々が、斯うさつしやつて。と口つき、手眞似しけるを、內儀も千代もをかしとて、噴飯すめり。浴して白粉を塗するに、內儀は、その能く顔に上ざるを察し、地に髮の油をひきて、斑なく塗らせ、領足を除るに、紙をきり擬ひて、そが上より、最白う塗らせたるを、嚊々は、感じ入りて、化粧上げたる容顔の、どうはお見ましても若檀那がお化粧さつしやつたとは見えません。繪にかいた花魁だつて這樣に美しくは御座りませんしねえ。と讃さるゝから、さすがに千代も疾く見ま欲しく念ひ、內儀が鏡の葢を除りて、まあ御覽なされませ。とさし付くるから、手にとり見て、ほゝ／＼とうち咲ひ、怪で變化が出たやうだよ。

豫て商議り定めて、祝言をなせるに先だち、養父母の墳塋に詣うで、兄弟の改めて夫婦となれることを報ぐる筈なれば、好之助は、先に至り、千代は、內儀に亦衣服をも着せられて、漸くに至りけり。曙ぞめの裾もやうなる紋付の袷の襲衣に、金いりの耀くやうなる帶を締め、白羽二重の足袋も目立つべきに、紅の襦袢の袖の手にまとひたる、何も／＼人に見らるゝ程の羞かしくして、三枚裏の雪駄重げに、媒人の內儀に日傘をさし翳され、やうやくに歩みたるは、又三德の小檀那ならず。看る者、路を塞ぎ、最に婚姻をいひ入れたる者、竊に來たり見て、呆れに呆れたるべし。

歸れば、追ひ／＼に客は來たり、ともし火點くる頃には、うち汰ひにければ、媒人は、鶴龜の屛風を建て回したる奧の室に於いて、新夫婦に千代萬代を契れる盃せしめ、了りて饗應の席に就きたるが、この頃、男はなほ髮を結び、吉凶の禮服には、𧘕𧘔を着けたれば、好之助は、黑羽二重の紋付の袷衣に、龍紋の𧘕𧘔を着し、小刀を帶ゝ、千代は、白綾の襲衣に、おなじ裲襠を着て、良人

と並び坐し、おもはゆ氣にさし俯向きたるが、燭臺の灯に照りそふ玳瑁の櫛笄も麗しう目だちて、人々に祝がれ、氣も上るめり。

めでたく祝宴を了り、爾來夫婦相敬し、相親しみ、ます／＼業を勵み、人を憐み、養父母の追薦は言はでしも、實父母の追薦も怠らず。遠近この異事を傳へ、その孝義貞烈を稱す。家倍す／＼榮え、男女の子も數人設くるに至るといふ。（畢）



雜錄

富士みやげ（寒中登山のつれ／＼）

野中千代子

◎尊とかりしもの

東雲の空ほの／＼と明けゆくまゝに打眺めをれば、函根足柄の裾をまとひ、寶永の頂にかゝれる白雲は搔消すやうに失せて、やがて中空に紫雲たなびき、海面に漂へる一帶の層雲は黃金色を帶び、ご光燦然として蒼天を貫くかと見る間に、やをら旭日團々として天に朝する光景は、さながら天の岩戸の古事も斯くやとばかり思出られて、眼眩み心機天外に馳せてこよなう麗はしく尊くこそ覺えしか。

◎怖ろかりしもの

頂きは凡そ風吹ぬ日とてはなかりけり、あまつさへ其力なみならず强ければ、山の懷を掠めて吹上る音恰も遠雷の如く、觀測所の附近に犬牙錯雜せる巖を衝て碎け散る聲はさながら裂帛に異ならず、餘勢噴火坑を襲ふて坑底に吹下す響は瀑布の傍に立つが如く怒濤の岸をうつに均し、かゝる折節丑みつ時の戶外の觀測こそ如何に怖ろかりしか。

◎耻かしかりしもの

飮料水を作らんとて笊といふもの小脇にかい込み鐵槌携へて戶外に出でんとするに、戶を引拔つや斷えず吹

上げつゝある吹雪に先づ前裳をさつと捲られつゝ、斷崖の端に張詰めたる氷の上を戰々兢々として歩を拾ひつゝ、打折るべき氷柱あるところに至り打かゞみて氷をかゝんとするに、又しも後へより裳捲らるゝことの腹立しさ耻かしさは無人の境なればこそ忍び得たりしか。

◉嬉しかりしもの一つ

名に高き千島の國の報効義會員兩名神無月二十八日といふに、郡司大人の仰を承はり御文と數々の贈物とを剛力に負はせ氷雪をおかして訪らひ給ふ、正午の頃にやありけん外面に喃々と戸をたゝく音す、又例の風にやはかられけるになんとて打すましつゝありけるに、頓てあやしげなる聲して、見舞の者こそまゐりつれこゝ明け玉はずや寒氣に得たゆべくもあらずといふに、いたう驚かれて馳出でつれども、門口は氷に閉されて戸のあくべきやうなければ、詮方なく内外力を合せて窓の戸引放ち、口狹ければ後へよりいざり給へ氷に傷つかせ給ふな徐かにせさせ給へ見たまふ如く今は早や七日あまり氷雪にとぢられ外面に出ること得ならねば年内はもはや下界の音信を得んこと思ひもよらずなど打語らふ折から眞に思ひもよらず訪せ給ひつることとよなき喜びにこそさむらへさかしき山路にさこそ勞れ給ひつらめ狹くとも今宵はこゝにと、其夜はよもすがら文幾通となく認めて故郷の方々に贈らんとす、實に思はざる外の便りを得つることの嬉しさは今更言出ぬべき言の葉もなかりし、二人の君は遙々の道すがら御つかれは申すも更なり所がらとて御もてなしも心にまかせず、方々は明る日の正午頃には早やこゝを立出で給ふと聞きて郡司大人に文してまゐらするはしがきに。

我ためにはる〳〵とはせたまひつる
　心おもへはなみだのみして

かた〳〵の姿を見送りて亘人も

我國の北の鎭めとなりぬべき
　ますらたけをの身を守れ神

◉淋しかりしもの

十月十三日東西にまします父母の御許に恙なう頂上に着にしよしを認めて我を送り給へる義弟清殿にことづてまゐらせしに、清殿もいつ果つべき名殘ならねばとて何くれと御心を盡し、さらば滯なう事を遂げさせ給へいざとて立出たまふ。我は良人と清殿との御心中を察しまゐらせてそゞろに涙をしぼりける。此日は稀なる好天氣なりしがいつしか御姿もいわほの陰にかくされて見えずなりにき、頂に物淋しき極みなりしか、それよりはさしも廣き富士の頂に良人と我と二人の外には禽獸すらあらずなりぬるにつけて、兩人こそ今より富士の主ぞと互に思ひ慰めてしことの心に浸みて、今も富士を見るたびに我物の心地ぞせらるゝ。

◉凄しかりしもの

風伯の怒れるをりの怖しさも去る事ながら、風なき夜半の山頂こそ物凄けれ、突兀たるわたりの巖は惡鬼の我を襲ひ來るかと怪しまれ、黒暗々たる大噴火口は今しも我を呑まんとて待つものゝ如し、かゝる折から下弦の月銅色を放つて岩頭にかゝれる光景は實に地獄のさまも斯くやとばかりにて、身はさながら劍の山とやらんにさまよひぬる心地して凄じとも凄しといふべくや。

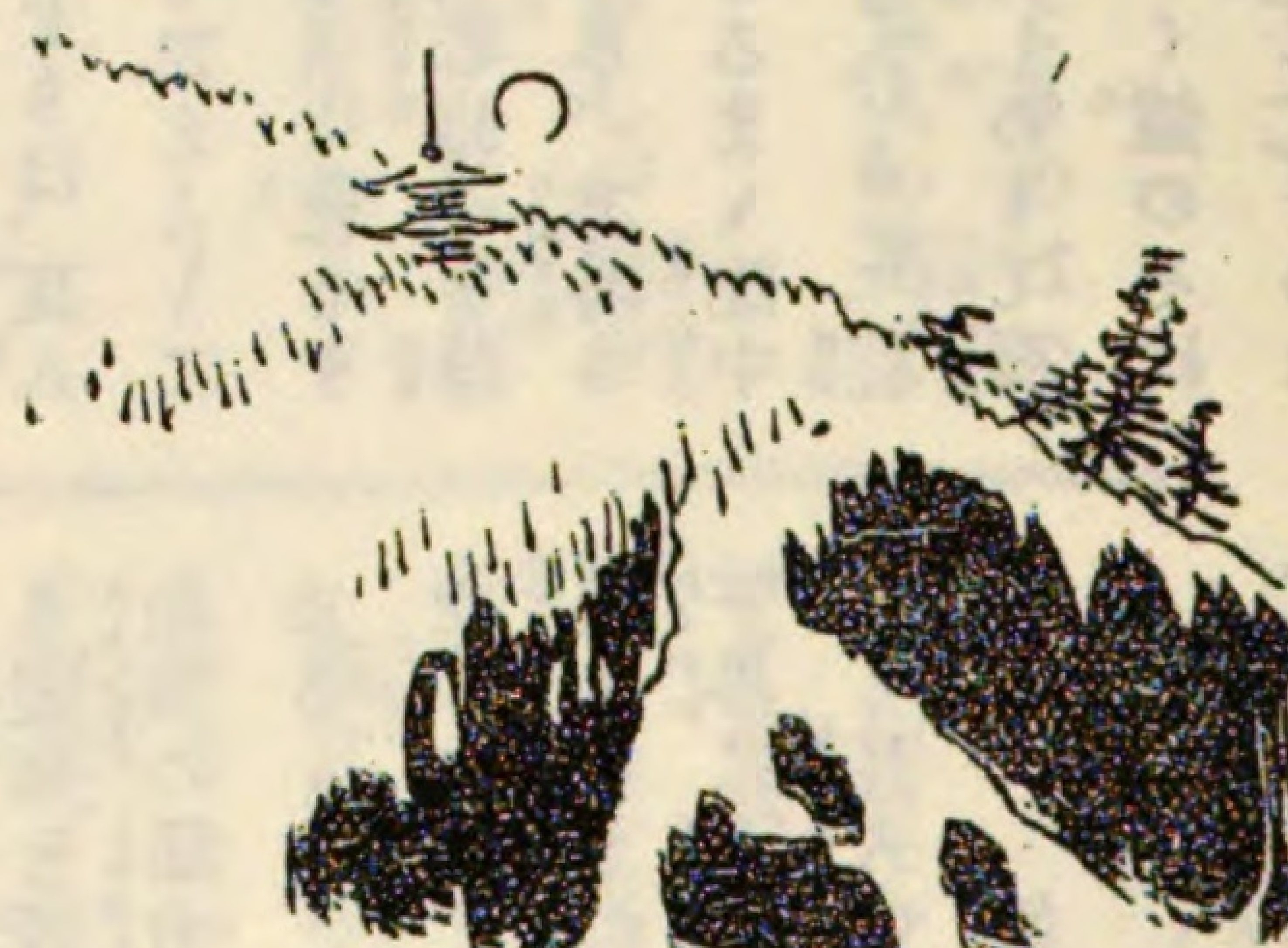
吹雪の凄しさも去ることにて、例へば火事場に殘れる土藏の漲る白煙に蔽はれたらんごとく、觀測所は斷えず吹雪の中に揉まれつゝありしか。

◉胸つぶれしもの

まだ夜をこめし窓のすげききら／＼とさし入る影におどろかれて枕もたぐれば今日は霜月三日そかし、實に人里もなき此山さへ流石に御國の祝ひ日とて常には似もやらで冬空ながら四方のけしき自から長閑くぞ覺ゆる、今は半は仙女となりつる我身ながら下界の慾はうせやらず、いざとく朝きよめして祝ひのもの調へ大御代をことほぎまつらんとて、さゝやかなる鍋に糯うるほしたるを炊ぎてやがて吹竹もて搗きなどしつ、果てはねぢまわしといふものゝ太やかなるものもてこねたれども、あやしげなるものゝ出來て喰ふべくもあらざりしかばかたへにかいやりつゝ力なく粥を啜りてやみ

にき。やがて巨人は日の御旗を取いで、屋の棟と同じ高さなる風力臺の許こそ名におふ日の本第一の高き處なれば今身は天上にありとてもいでやことほぎまつらんとて、窓の戸引放ちていざり出で彼の風力臺のもとに御旗を打揚んとし給ふに、烈しき風は情けなくもあはや吹去らんとして手を放つことだにかなはず、今は力なしとて懐におさめ跪づきて東に向ひて　宮城を拝し奉り、亦東西におはす父母にもがなとあなたこなたの空を視るが内に、はやて一むらの雲を誘ひ來て今まではげしかりつる風は彌増に強く、蹴立る吹雪はつぶてを抛がごとく、いやが上に重なれる巖の頂きをかすめて飛來る雲と共に岩根をゆすり、亂るゝ吹雪は時ならぬ落花となりて轟く音たとへんかたなし、さるおりにおのれはしなく二三間が程吹飛はされければ巨人のたはむれに

おなじみの風の御神は今日はなど



山の神をは吹き飛ばしけん

とぞ、おのれはいたう胸つぶれて言出でぬべき言の葉だにあらず、蹠めく足を踏しめつゝ石だゝみにすがりて窓の内にまろび入りぬ。

十二月二十二日の事なりき、我等和田技師の一行に扶けられて下山の途すがら、名にし負ふ胸突を過ぎ大だるみにかゝらんとする頃は日もはや西山に傾きければ、寒さ一しほ身に浸みて巨人は肌氷の如くに冷え渡り、わが口に息を吹こみ玉はれ和田氏と宣ふさへ舌唇冷え凍りて覺束なく、次第〳〵に弱り果てゝ今は早や眼も見えずなり給ひければ、我今是まででぞと思ひて自ら眼を閉ぢなは早や是かぎりなるべし、兎にも角にも朧氣ながら物の見ゆる限りは我いまだ死せじこゝぞとて、畏るべき吹雪に打向ひてうつゝの如くに見はり給ひしかば、眼は朱の如くに血走り痛み堪え難くて得明け給はず、程なく氣も魂

もつきはてゝ全く人事を辨へずなり給ひしとか、我此年月苦境に入りて未だ父母妻子を懐ふ程にかよわき心を起せしことなかりしが此時はうつゝの中にも思ひ出しぬと後にぞ語り給ひける。　斯る有樣なりければ迎への人々は必死となり急をば合目なる先發の人々に告げ、力を合せし石室の内に扶け入れ給ひしをりは、巨人は眼を閉ぢ色青ざめ肌は氷かと疑はれ息もたえ〴〵なりければ、和田氏は云ふも更なり皆かはる〴〵夜もすがら暖ためられける程に、眞夜中の頃稍人心地つき給ひしかば一同始めて安堵の思ひをせられける。其時おのれは巨人よりも半町餘り先立ちて打立けるまゝ途中の有樣辨へずして石室の内に打臥してありけるに、程なく一同の息まき給へる中にも何となう打しめりて聲さへ得あげず、やがて巨人を引ずるかごとく爐のそばにかきおろし給ひぬと見る内に、わが後ろ手にどうと打倒れたる音して聲立てぬばかりに泣く人あり、驚きて振向き見れば鬼をも取ひしぐへき彼剛力熊吉にぞありける、此時おのれは早や巨人は事はて給ひぬるかといたう胸つぶれて今より思ひ廻すだに身の毛もよだつ心地す、後に巨人は實に我も其時こそ富士の鬼となりつるよと思ひ定めたりしと語られしか。

◎羨ましかりしもの

山頂は日の光風の寒さに打消されて戸外に出るも露程も暖氣を感せず、さるからに小窓より下界を瞰下せば山頂の風力の强きに引かえて如何にも長閑に暖かう見ゆるものから、折にふれて我は下界の人も山頂の晴れたるを見て同じ思ひをなすめれどかゝる寒風の里人の眼に見えぬこそ口惜けれ、吁羽根あらば暫しなりとも下界に下りて暖き日の光に浴せまほしうなど戯れに言ひて巨人の叱をうけしか。

　姫神のゐますみ山にのぼりきて
　　住むはいかなるえにしなるらむ

と獨言して我と我心を慰めしか

◎苦しかりしもの

十一月上旬おのれ逆上の爲にやわらん扁桃腺炎にかゝりのんど腫れふさがりて湯水さへ通せず續いて全身腫

れまさる頃苦しさに得たえずも。

　増荒雄の身にはあらねど國のため
　　つくす心はいかでゆづらむ

とぞ。

　◎徒然慰めしもの

書見。晝夜二時間毎の觀測の手傳ひ。家族よりのはいふも更なり知ると知らざると寄せたる文。頁人の謠。

　◎千秋の思ひせしもの

つゝがなう日を送りし程は左のみにも思はで過ぎしが病の床に打臥してよりぞ行末一しほ遙かなる心地して如何に事果てゝ目出たう下山せん時節の待遠く思はれしよ實に千秋の思ひとは斯る時の事をこそ。

　◎嬉しきものゝ二つ

夢こそいと嬉しきものにはあれ、東西にゐます父母や故郷に殘しおきつる幼き女の我を訪らひ來ぬ夜とてはなかりしか。

　　たらちねはところ〳〵にましませは
　　　夢路もいとゝたどりかねつゝ

　ゆめの内にうれしくあひぬ此夕へ
　　わか子もわれを夢に見るらん

とぞ　　　（了）

思ひ出の記

高山樗牛

如何ならむ野の末なりとも、都のわづらはしきよりはと思ひたちて、過ぎし秋の暮れより吾れ居を湘南の涯りにさだめぬ。訪ひくる人もさすがに稀なれば、世外なるすまゐ、わびしくもまた長閑なりし。鴫立つ澤のほとりなるわが宿より、相模灘の眺めいとひろやかなり。東は平塚、茅が崎の汀をつたうて江の島鎌倉の浦々より、三浦半島の斷續を髣髴の間に認むべく、晴れわたりたる空には、安房館山あたりの山、遙にその間にながめらる。西は小磯小田原のあなた、足柄函根より伊豆の連山をたどりて、遠ほく稻取のみさきまで、色おもしろう薄れゆくさま、山のすがたまたあるまじくうるはしゝ。南は遠洋の煙波をうけて、大島

山青螺の如く横はり、ゆくゑもしらず立つ煙の、色さまさま〳〵のたゝずまゐ、心ゆくばかりなり。

心を傷ましむるかな、見渡すかぎりのながめは、一としてわが曾游の地ならざるはなし、今は病ある身の、心にまかせぬ事多ほきこそうたてけれ。夕べの空にながめ入りて、こしかた遠く思ひ起せば、今のわが身にひきくらべて、悲しきとのいひしらず湧き出づるに、いつしか涙の流るゝを覺えず。あゝいかにうるはしく天に輝かけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にありて幾時ぞや、げに見はてぬ夢の惜しみてもかひなきは、わが十年の過去なりき。

今のわれはおもはぬ地にさすらひの人となりて、いたづらに曾游の山河を望める身ぞ。秋くれて冬來り、小笹が末に霰たばしる、あはれ飄零のわが身にも似たるかな、萬山黄ばみ落ちて野に悲風あり。かゝる時にこそ思ひある身の哀はれは知らるゝなれ。

憶へばはや八年の昔とはなりけるよ、足柄山の奥にゆきくれて、豐原のなにがしが風騷の跡をたづねしは。春まさに暮れなむとして、竹の下道そことしも見えわかず、十日あまりの月影に、曾我野の原もおぼろにして、やうやく國府津の里にたどりつきしは、あはれにもまた興深かりし旅なりき。その折つれだちし友は、わが幼少よりの知已にて、この世ながく離れじとこそは願ひしが、今や身世處を異にして天涯相見るに由なし。わがみぢかき命の中にまた相見む折の幾度かあるべき。おもへばはかなき人の遭逢かな。山河の姿とこしえにかはらざるは、はかなき人に物思へとや。

足柄の嶺、函根の山より、伊豆の浦つたひに、わが思ひいよ〳〵はるかなり。眞鶴が崎の盡くるあたりは、熱海のかたなるべし。

あゝ熱海、われには如何になつかしき土地なるよ。春ごとにわれは老いて、六歳は暮の如くたちぬれども熱海にくらしゝ、三月のみこそいかばかり長く覺えしか。かの時は今のわれの如く、身にも心にもわづらひあるわれなりき。一巻のハイ子集を旦暮の友として、うきことしげき此世をば泣きくらさむと、あはれにも思ひさ

だめでき。今にして思へば、かゝる咏歎の中にわがいひしらぬ幸ひはわりたりしなり。わが孤獨を慰めむとて、わが友潮風、都よりたづね來りき。あゝいかなる歡びを以て、われはわが友を擁きしぞや。雨のあした、月の夕べ、語りもし、語られもせしこの世のうさのかずかずに、われやいくその涙をそゝぎたりけむ。友はまことに情ある人なれば、心よわきわれに咏歎のたのしみを禁めざりき。ある日、魚見が崎の斷崕に上り、共にグリルパルチエルがサッポーの悲曲を誦みて、たのみがたき世の事、人の上の、古も今もかはりなきを想ひ、人生の悲哀とこしえに盡きざるをかこち、あはれかゝる斷崕の上より、希臘の女詩人はその最後の救ひを求めけむよと談り合ひし時、われは崖下千尺の杳冥に見惚れて、慄然として目さめたるが如きを覺えたりき。かくてわれは友に語りき、サッポーの死や遲かりしを。あゝこの日、いかに樂しかりしよ、わが薄倖の生涯にも、なほかゝる福祉はありけるよ、思ひ出すだに、わが胸の物狂しうとゞろくこそ怪しけれ。



うるはしき日は夢の如く消え去りて、我が思ひのみぞ獨り老いにける。潮風今は西の方歐洲に去りて、際遇われと同じからず、たゞ曾游の興會、さすがに忘じがたくてや、この春のはじめの文に、今宵は君を熱海におとづれし日ぞなど書き送りけるこそ懷かしけれ。今や世にふたりなき友の、天涯はるかにわかれ住みて、互に孤獨の生を送らむは、まことに悲しからずや。

見渡せば沖の小島を詠まれけむ、初島わたり漕ぐ船の、行衛は網代、伊東の方なるべし。南、天城の高嶺峨々として豆南の天を限るところ、またこれわが曾遊の跡ならずや。二歳前の冬の最中のことなりしが、われ函根を踰へ、三島修善寺より

この山ふかく分け入りて下田の港に泊り、白濱、稲取の浦をつたうて半島の東岸を繞りたりき。名たゝる險難の土地とて、もとより車馬の便りに乏しく、三十餘里の惡路を物ともせずに歩みしは、げにわれながら健氣なりき。さるにても人の身の頼み難きことよ、二歳後の今のわれはいかなる態ぞ、旦夕の保生に心を勞して、遺悶の酒また多く用ふべからず、浪々として懶怠の月日を送る、おろかにもまた憐れならずや。あゝわれ何時の日かまた登攀の壯遊を試み得べき。

江の島、鎌倉の山水はいふまでもなくわが舊年の知己なり。わけて田越の里にわかしくらしゝ幾春秋こそ心ゆくばかり偲ばるれ。田越川のほとりに六代御前の古墳あり、われこゝに佇回して、哀れなる平家の末路をおもひうかべしことをも幾度なりけむ。このうたかたの生涯に、われ多く望むところ無し、たゞ數ならぬ身のなほ願ひ得べくむは、わが末路の願はくば平家の如くうるはしかれ。われはかゝる思ひにかきくれて、星合の空に七百年のむかしをたどりたりき。

三浦半島のつくるところ、地低うして海に沈み、房南の山杳としてその上に浮ぶ。あゝかしこにもまたわが思ひはかゝれるは。われ大學に入りし歳の春なりき、友と共に東、總房の海涯に沿うて、九十九里の長灣より、小湊、勝浦、天津の浦々をたどりて白濱根本の岬をめぐりしは、世にも樂しき旅なりき。爾來春秋いくたびか去來して、われまたいくたびか北條館山のほとりにさすらひき。あるは那古灣頭の夕照にあびて、友と自然の色彩を論ひ、あるは根本の海樓に倚りてローレライを歌ひしは、光景宛として尚ほ眼にあれども、早く既に八歳の昔とはなりけるよ。時は遊水の如くしばらくも停まらず、人は春ごとに老いて青春はやく暮れなむとす。心を傷ましむるかな。

あゝ湘南の風光うるはしからざるに非ず、たゞ懷往の情日に切なるを如何にすべき。世にも人にも離れたる身にしあれば、頼もしからぬ行末かけて、われはた何の望むところぞ、たゞ言ふまじく憶ふまじき過去の今なほ夢に入るこそうれしけれ。（卅四年五月十日湘南の寓居に於て）

米國女氣質

在米スタンフォード大學　飯島立峰

米國婦人と云へば、「世界で一番幸福なる一番勢力あるものである」といふ考が、直ぐ日本人の頭に浮んで來ますが、私が渡米以來の觀察に徵するに、實際であるやうに思はれます。而して此考は日本人ばかりで無く、歐羅巴人が米國婦人に付いて書いたる一二の書物を見ても、同樣の事を言つて居ます。偖て、斯る世界一の婦人の事を、私如き淺見寡聞のものが書き述べむとするは、大膽過ぐる話でありますが、多少此事に付ては、注意して見たり聞いたり爲たる所がありますから、深遠なる論でなくして、其見聞の儘を述べ、又時としては、日本婦人との比較を爲して、諸君の高教を仰ぎ度いのであります。文の拙きを咎めず其意を採り給はむことを望みます。

◉女子も國民の一人。

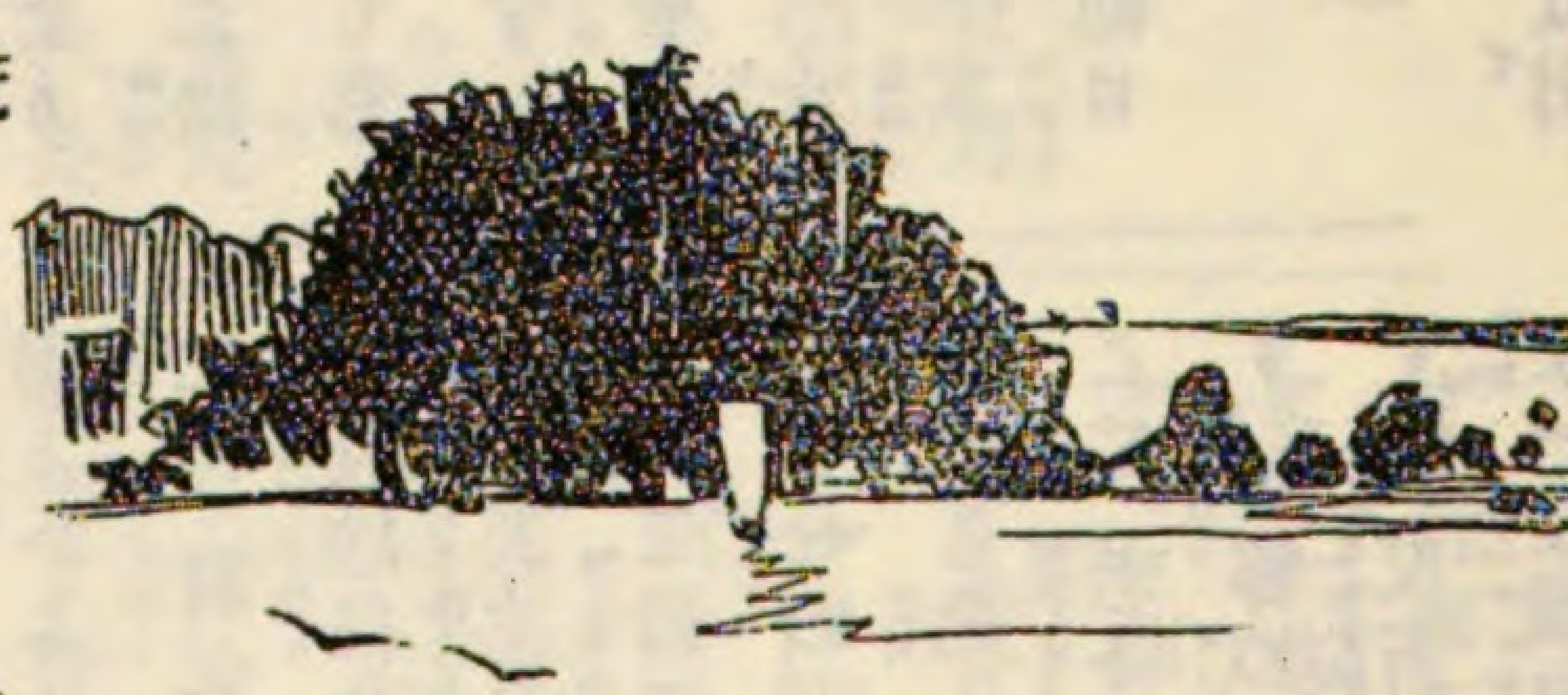
私は劈頭第一に米國婦人を世界第一のものと許しましたが、斯く申すと私は非常に米國婦人の肩を持つて、何の爲めにするかの如く疑はるゝかも知りませぬが、私は實際然樣の考は更にありませぬ。之を述ぶる私の宿意は、女も國民の一人である、國家構成の一分子である、我國に就て云へば、五千萬の同胞中の半數を占めて居る婦人である。斯の如く國家の上から云へば、男子と相並びて其國を代表し構成して居る婦人である以上は、婦人の知力、躰力、德力、其他一般能力の强弱大小は、直接に其國家の强弱消長に關係ある事は明かであります。其であるのに、一方の國では婦人が國家百般の事の上に主要の地位を持つて居り、他の國では殆ど婦人を度外に置き、恰も附屬物か、將た厄介物の如くに取り扱つて居る國があるを見ては、如何にも默して居る事は出來ませぬ。乃で今此に世界中で一番幸福であり、勢力あると云はるゝ米國婦人の狀態を述べ、或は日本婦人と比較して、參考に供ふる所以であります。元より事には善惡適不適がありますから、米國の事を其儘日本に適用する事は出來ませず、又之を許しませ

ぬから、其邊の斟酌は肝要の事であります。

◎女尊男卑の説は誤れり。

西洋は女尊男卑の風習が行はれて、誠に不都合千萬、又我々日本男子には不愉快極まる」。とは私が度々之を耳にしたるのみならず、又口にしたる事もありました樣に覺えて居ります。其でありますから、今私が米國婦人の事を喋々して、日本婦人の位置を高め、其便利を圖り、其權利を擴張しなければならぬ、と説きますのは、大に我が前日の説にも悖り、又日本男子諸君から、大に譴責を蒙るかも知りませぬので、頗る此問題を筆する事に躊躇しましたが、如何に咎められても、私の前説の非なる事を知り、又一方に國家の爲でもあり、正義にも適ふ事を知りたる以上は、之を説かざるを得ませぬ。且又所謂女尊男卑と云ふ事は、全く用語の弊害でありまして、其實際は決して然樣の事はありませぬ。矢張女は女、男は男として上に立つて居ります。實例の一二を述べますれば、日々時々の禮であります。例へば途中にて婦人と會遇したる時の如き、必ず女より目禮又は禮語を發し、而して後男子が之に答禮するのであります。成程其時に女は着帽の儘、男は脱帽しますから、其外面を見て、女尊である、男卑であると云はれたのでもありませう。併し能く其裏面を知つたならば、其説の誤なる事を知ります。女の帽は御承知の通り、留針で留めてあります上に、帽を以て主要なる身の飾りの一として居ります。其ですから一つには之を脱することは、面倒で而して困難であります。又主としては、禮意を表するに、相當の飾りを爲すことこそ至當であれ、之を脱するの、不條理なることは、明かであります。例へば日本の婦人に就て云はゞ、其大金を掛けて頭髮に裝ふ櫛、笄又は根懸等が、丁度西洋婦人の帽に相當するのであります。日本婦人が家の内外を問はず、又敬禮を爲す時に、是等を脱せざると、西洋婦人が同樣の塲合に脱帽せざると、同一の理由であります。又西洋婦人が落し物をなした時、男が之を拾ふて遣るといふは、如何にも不見識極まるといふ事も、度々聞きましたが、之も彼の衣服の仕立方、幷に着法の如何にも屈伸するに、不自由な

る事を知りて見ますれば、決して不見識も何もありませぬ。只彼れを助くるに止まるのみであります。元來弱者を助けて強者を挫くといふ事は、古今東西に通ずる天則でありまして、近來世界に喧しき權力平均といふことも、此原則より來る現象であります。女は天然に弱者であることは、如何に同權といはるゝ米國其他歐洲でも、認めて居ります、又實際であります。其ですから之を助け、之に便利を與ふるといふ事は、強者の義務であります。英國の一學者ブライス氏も、此男女の區別に就て、申しましたる事があります。其要は「如何に女に自由便益權利を與ふるも決して、彼等をして、傲慢不遜ならしめ又は男子と同等に至らしむるの憂なきなり。更に男女の間に存する精神上及び道德上の差違は、金城鐵壁の如く、牢固拔くべからざるものあり。偶々其差異消滅するが如く見ゆるも、天然の羈絆は強大にして、之を破る能はず云



云」と、私は至言なることを信じます。又女卑の最も著しき例があります。即ち女子は教會堂に於ける講壇に登りて、説教することを得ざる一事がありまして、之は實に注意すべき事であります。神の前には帝王乞食の別なしといふ主義は、往々日本に於て不敬事件を惹起したる原因であります。斯く自由平等の主義と教義を信ずる、而も自由平等を以て天下に鳴り、又男女同權を以て社會の耳目を聚むる當米國に於て、斯る事ありとは、實に豫想外であります。女人は成佛する能はず、(法華經を除きては)といふ佛教と照合して、どうしても女は罪深きもの、汚れの多きものと、宇宙其規を一にすることは、益々以て女人の男子に及ばざることを、證明するものと見て宜しい。其他妻とし夫に仕ふる有樣を見ても、男女同權などいふ事は、語の亂用若くは將來の希望に過ぎざることを

知ります。併し其將來の希望といふ事も、第二十世紀は男子と其地位轉倒するなりなどゝいふ、途方もなき、實に少く物の理を解する人の云ふまじき愚論が實際に現はれ來る如きことは、私は斷じて無いと信じますから、我々男性は安心して居て宜しいです。併し婦人方より云へば、其事を現實すべし、又せざるべからずといふ決心と勇氣とを以て、御進みなされんことを望む。斯くしてこそ國家社會の進歩が得らるゝ所以でありますから、決して失望せず、落膽せず、何處迄も男子を愛せなければならぬ、といふ考で頂きたい。之を要するに、女尊男卑といふ事は、語の亂用に過ないといふ實例は、其他澤山ありますけれども、餘り長くなりますから、他日に讓ります。

◉女子一般の傾向

天然の兩性に與へたる限界は、到底打破することは出來ませぬが、併し女子の能力の範圍内に於て、近來漸く男子に近づき、之と併行しゆかんとの傾向は、現はれて居ります。又男子よりも其傾向を幇助しつゝ居るは、米國男子の特色と見て宜しいでせう。なか／＼歐羅巴でも米國程には行かず、又行て居らぬ事は、以下に論する所に因て知られます。

それですから、米國女子の行動を見ますに、男子も舌を卷といふよをな事が、往々ありまして、我等日本人の眼には、實に驚きに堪ない事が、澤山あります。併し彼等は其國民の一人であり、共和政躰の一要素であるから、各々其本分を盡くし、分限を全ふせねばならぬと、いふ考て行て居るかと思へば、實に敬服するより外はありませぬ。啻に男女が著しくないのみならず、老幼の區別も殆んどありませぬ。八十以上の老人の活潑なること、若々しき事は、種々の點に於て、現はれて居ります、是等の實例を話せば、可なり面白き事も澤山ありますが、又折を得て申述ぶることに致しませう。

又一般傾向の一として見るべきは、成るべく臺所働きを止めて、他に相當の職を得ることに汲々たる事であります。之が元動力となりまして、高等教育を受くるものが多く、法律上、社會上などに女子の權利を高めん

とする、政治運動が起つたのであります。此事に付いては、逐次詳論を致しませう。

瓜生岩女（二）

文學士　常盤大定

◎戊辰戰後の岩女

○○○日新館、…かくて元治慶應と過ぎ、明治元年八月、刀折れ、力盡きて、主君は、恭順の意を表せしが藩士は概ね或は病み、或は傷き、四方に離散するもの數知れず、こゝには夫に別れたる妻あり、かしこには父を喪へる子あり、戰後の光景また見るに忍びざりき、岩女の弟半治、男祐三も亦戰場より歸らざれば、岩女は殘れる兒女と共に家に潛みつれど、たとひ婦人の身なりとも、是等の慘狀を坐視すべからずとて、あらん限りの力を盡しけるが、中にもわきて哀れむべきは、こゝかしこに取り殘されたる藩士の幼兒の上にこそ、是等の幼兒は誰ありて敎へはぐゝむものとてもなく、あたら月日をあだに過すのみなれば、行末は如何になりゆくらん、岩女は見るに堪へかね、つく〴〵思ふやう、いかに敗殘の餘なればとて、素性正しき武士の子を、かくも無敎育に打すて置きなば、行末も覺束なく、また御國の爲にもあらず、如何にせば是等罪なき子を救ふべきとて、さま〴〵に案じ暮しけるが、兎も角も敎育せではなるまじとて、こゝに學校の設立を思ひ立ち、赤谷、村岡、大塚などいへる人々と相謀りて、明治二年の春、小田切村といふに、一ツの校舍を創めたり、さて敎員をと求めけれども、戰後の事とて、大かたの人は藩の難に殉しければ、思ふに任せず、偶々藩校日新館といふに敎官たりし淺岡源三郎なる人、前日の戰爭に負傷して、平林村なる某寺に潛める由を聞き出で、これを我家に請じ、手疵の治療に手を盡し、やがて此人を推して敎師となし、讀書算術を敎へしめ、己れは女子に裁縫を敎へ、兒童の來學を勸めしほどに、落ち殘れる藩士の士女は更にもいはず、近郷農家の子女までも、來り學ぶもの甚だ多く、又この美擧に感ずる誰れ彼れ、或は米穀、或は野菜味噌、

又は紙筆、又は薪炭、又は何、何と寄附し來りて、日ならずして維持の方法も完備し、盛んに咿唔の聲を擧ぐるに至りしが、せめては昔の名殘にもとて、校名をば藩學の名をそのまゝに日新館とぞ命じける、此擧漸く其緒につき、自他共に少しく愁眉に開きつゝ、只管子女の成長を樂みしに、こゝに又一難の此校に降り來りしこそ是非なけれ、

そは何事ぞといふに、會津藩士は、一旦順逆の途を誤りしものなれば、淺岡氏とても其まゝにはすみがたく、江戸に拘禁せられて、謹愼すべき身となりし事是なり、淺岡氏は此校唯一の敎官なり、淺岡氏なくば此校は成立せず、而して淺岡氏の身の上は此境に臨むに至る、心盡しの甲斐ありて辛くも咿唔の聲を擧ぐると見たる岩女の嘆きは如何にあるらん、げにや前門の狼に繼ぐに後門こゝに虎を見るの感に堪へざりしなるべし、されど岩女はやる瀬なき歎きのみに沈む女には非るなり、千々の思ひに袖のみをしぼるものには非るなり、女子の身にしあれど、雄々しき志を勵まし、遂に斷乎として決する所あり、男の祐三をして、淺岡氏に代りて捕に就かしめんとせり、義の爲には笑て情を棄つるは、皇國の美風にて、この根幹ありてこゝに國躰の精華を見るに至りしなれども、婦女の身にして、其子を犧牲としてまでも、公の爲にせる志は世にもありがたく、殊に夫に別れて後は、子女の敎訓の爲、養成の爲に、苦心を重ね、辛勞を積み、行末の杖と賴み、將來の柱と思へるその子を以て、身代りとせんとの決心は、心にや義烈の魂より出でたるものならんかし、岩女既に之を決して、この事を願ひ出でしも、容易くは許されざりしが、請ふこと再三に及び、母子が至誠の致す所、遂に天に通じて、やがて許しを得てしかば、男は遙々江戸に檻禁の身となるに引かへ、日新館は依然として變ることなきのみならず、日新の名に背かず、次第に盛大となりにけり。

弔魂法要　會津城の南方に中りて、會津口と稱へられたる御藏入りの難所あり、こゝは會津勢が二晝夜の間必死に防戰し、尸屍艸間に縱橫せしところ、戊辰の戰後こゝを往來する里人は、往々にして鬼火の飛ぶを見、

啾々の聲を聞くとて、果ては黄昏より一人のこゝを通過するものなきに至りしが、岩女思ふやう、逆順の論は別とし、唯目には薩長の暴慢を憤り、一死以て其志を果せる、あたら武士の魂魄が、永く彼土に止りて、地下に瞑する能はざるは素と其所、之を慰むるは敎法によるの外なしとて、神官僧侶に說き、有志者を語らひ、明治二年の秋、御藏入の里に、高く祭壇を築き、一週日の大供養を行ひ戰死者遺族への慰め、貧民への施し等、かくの如くすみて後、この地の怪異全く已みにきとぞ、岩女が同情の涙は生者にのみ止らずして、其篤信の眼よりは死者とてもたゞに之を看過するを得ざりしなり。

○○褒賞　是等の德行官に聽えて、當時の民政局より褒賞を賜はりき、

其方儀、小田付村に罷在、去々辰年以來、右近村へ割付に相成候婦女子共へ夜具蒲團衣類或は建具等自ら裁判致し、貸渡し且つ田小付幼學所新取建之儀、同所出張民政局へ度々申込、聞置きに相成、新に建築し、普請料多分入費調達致候而已ならず、出席の幼童萬事親切に取扱、其外戰死者供養の爲、施餓鬼等致候由、德行衆に抽で、志操稀なるものに付、追ては重く被賞方も可有之候得共、不取敢爲御褒美、金壹兩被下候事、

明治三年三月七日　民政局



この褒賞の文面より見れば、記しゝ外にも猶岩女が心盡しの并々ならぬもの數多あるを知るべし、げにや岩女は戰後に於ける會津の大悲母なりしなり。

○○歸農　明治四年、舊藩士始め藩士は斗南に遷さるゝこととなりければ、日新館の生徒の過半は、その父兄に從ひてかしこに去り、其後幾程もなくして、政府より小學制度の發布あるに至りしかば、日新館はこれを閉ぢ、又この時藩士の半は、藩主の諭により

て、士籍を除きて歸農することゝなりければ、岩女の家も農に歸して、其のまゝ會津に止まりけり。

◉救育所

男祐三は此比まで江戸に拘留せられけるが、漸く赦されて鄕里に歸り、母子再會の喜び、四方八方の話柄盡きざりしが、話頭忽ち救育の事に移りつ、時に祐三は東京深川なる元の古河侯の下屋敷に、救育會所なるものありて、貧家の子女を多く救養するよし、物語りければ、岩女は之をきゝて、世に同志あることを喜ぶ事深く、一たび當事者と相見て、其志を語らんものと思ふ一筋は、矢もたまらず、その年の十月、遂に百里の長程を、馬に騎らず、輿に依らず、唯三尺の杖と一双の草鞋とを命とし、悲風慘雨の度毎に、いやまし其決心を固め、十餘日を歷て漸く出京して、會所の監督大塚某に就き、救育の方法を問ひ、其實地を視察し、己れも亦實際の經驗を重ねばやとて、其ほとりに假住して、貧家の子弟を敎育すること半餘歲に及びつ、遠き片田舍の奧州路より、往來の困難をものともせず、五十里百里の遠きに至るにけ

水盃の訣別を爲せる當時、婦人の身を以て尋ね上りし事なれば、大塚氏も其志の厚きに感じて、以後互に相翼くべきを誓ひき、半歲の後、岩女は會津地方にもまた救育所を設けて、この會所の分所と爲さんとの希望を抱き、之を大塚氏に謀りて一先づ歸鄕せり、岩女の故宅にては、たのみ〳〵し慈母一たび家を出でゝ後、一月を經るも、二月を經るも、當時の事とて露の便りもなく、健なるにや、將た病めるにや、また死せるにや、生死の程も覺束なく、兒女皆夜々額をあつめて、便りもがなと待ちわびし、日々閭に依りて歸る姿もがなと案じ暮しつれども、三月、四月、何の沙汰とて曾て之なく、やがて半歲に及びつるが、或日の事、人あり、岩女の某處まで歸れるよしを報じたれば、長女は夢かとばかり打ち驚き、あまりのうれしさに、思はず走り出て町はづれまで、まろぶが如くに至りつるに、後にて見れば右には木履を穿ち、左には艸履を着けたりきとぞ、當時にありて死者の再生ほどに珍らしく感ぜられしも無理ならぬ事にて、かゝれば旅のつらき事も思ひやるに餘りあることな

り、岩女歸鄕の後、舊藩士等にこの事を說れたれば、贊成する人殊に多かりしが、不幸にも加盟者の中に、不慮の事起りて、此企は遂に空しくなりぬ、かくて世態は一變して、廢藩置縣となり、若松縣を置かれ、澤簡德氏こゝに縣令たりしが、岩女屢〻救育所の必要を說き、澤氏も頗る其志の可なるを嘉みし、資金なくてはかゝる事業を成しがたるべしとて、會津地方にある石炭採掘の事を計畫せられしに、事未だ其緖に就かずして、澤氏は職を去りしかば、岩女は大に望を失ひけれど、さればとて、多年の志を一朝にして廢すべきかはと、遂に我家を以て救育所に充て、後に狹きが爲に、下岩崎村長福寺に移りて、こゝに貧兒を聚め、晝夜を分たず、心を養育の事に傾け、明治十一年の末つかたまで、辛くも私財を擲ちて之を續けたりしが、其後耶麻郡宮の前といへる所に一の救育所を創設せんと企てたり、こゝに古より大用寺となん呼べる荒寺ありしが、この寺に毗首羯磨の作と傳へられたる釋尊の木像あり、三國傳來のものにて、本邦三作の一なりとて古來頗る其名高く、維新前には參詣の人遠くより至りて、冠蓋相望みしが、今は見る蔭もなく、朽ち果てつる寺の事とて、之を護るものもなく、朝夕の香華とても冷かなりしかば、篤信の岩女はいたはしさに堪へず、如何にもして其再興を計らんものをとて、喜多方町の一隅に地を購ひ、こゝに小やかなる一宇を搆ひ、こゝに釋尊の木像を遷し參らせ、自分香華を捧げて朝夕其傍に事へ、この側に救育所を建立せんとて、計畫殆んど完きに至りしに、天此人をして其志を固からしめんとのはからひにや、愈〻其美性を發揮せしめんとの佛意にや、亦も事の妨ぐにあり、いすかの嘴とそれちがひ、こも果さずして止みけり、斯く萬事齟齬せりと雖、岩女の本心はいつか動ぜず、獨力にて惰りなく其志を盡し、又かねて素心なる墮胎の惡風を矯めん事に熱中し、又疾苦よるべなきものは、見るにつけ、聞くに從ひ、老幼の別なく、寄せ集めて、之を救恤せしにぞ、其力によりて自立せしもの幾人あるを知らざりき、岩女が斯く救育の事に心を盡せしは、其素心なる矯風即ち墮胎の惡風を根絕せしめんとの事と、離る

べからざる關係ありたればなり。

不時の歸省（下）

湖畔吟客

男の世帶

母上の病痾は日を追ふて快方に向ふ、十日も經つともう大勢の手を要せぬやうになつた。祖母上も姉君も十分といふ見込が付たので、各々自家に歸られて、初は日に三度程も見舞に來られたのが、後には一度、更に二日に一度といふやうになつて來た。祖母上姉君が歸られた後は予と弟と甥の三人とそして病母とのみで、詰り男三人が立ち働く譯であるから、家の中か餘程と奇觀で宛て山寺の生活だ。予は先づ三人の部署を定めた、即ち年嵩丈けに予が奧樣役を勤むると、中年の甥か仲働、最も年下の弟か下女役といふ鹽梅である。そして三人が合躰して、亭主とも御主人ともいふべき母上の看護を爲すのである。大略予等の勤を一日に割つて記さむなれば、蚊幮を疊む寢床を上げるは面々の仕事として、病人の床を布き替へる手水を使はせるのが予の役で、其の間に間中の掃除をする雜巾を懸けるのが甥の役、弟は食事を調へ膳立をする。軈て醫者か來れは之に挨拶し病人の診察を手傳ふのが予で、茶菓子淸き水を運ぶのが弟と姪、と恁樣一應定つて居るが、病人を風呂に入れたり又庭などを見ると望まるゝ時などは、三人懸りて湯殿に導き庭に抱へ出すのである。其て湯藥抱きかゝへ洗物一として不自由なく賄はるので、病母は却て女なとか及はぬ爽々した所かあると、いつて病を忘れて喜ひ給ふのであつた。

恩愛

丁度予が歸り着た翌日であつた。四五日前が病の瀨越てあつたといふに拘らす、母上は予を近く呼んて、枕から上らぬ頭を捩り向けて、痛々しい手を出して其を開けよとて、枕許の折籠を指し玉ふのである。予は命のまゝに先つカステイラの折を開き次に枇杷の籠を鎖ると、母上は思ひ入たる氣色で、此は丁度卿か歸るといふ返電が有つた日見舞に貰ふたのであるが、病人の口に

一人まずい思して食ふより祖母樣初め卿前等兄弟に上げやうと思ふて、其にしても長男の卿か來てから卿の手で開かせやうと、態と其まゝにして置たのとであつた。予は此の序であり慈悲ある言葉を聞て不覺涕に咽んだのである。母上は明日を定ぬ命、病苦と戰ふ外餘念あるべからぬ時‥‥、あゝ子といふものは忘られぬものであらふかと、其から此も食物であるが、其後時日を經て母上が床の上に坐り玉ふに苦痛の減してからのとで、母上は彼處此處見廻して後思いたしたやうに語り出て玉ふのは水餅であつた。其の言葉に。去年の友人への傳言に今年は夏になつたら歸らるゝやも知れぬと卿が言つたさうであるから、若し歸りでもすれば小供の時から好であつた餅を上けやうと思つて、正月の鏡餅三個程水に浸して置た、其も姉に吩附けて私が病氣になつた後も水を替させて置たが、彼が歸つてから卿等も知ら道理はないし一寸御覽、食へるのかしらと指し玉ふので、予は敎のまゝ戸棚の下から其の水甕を出して見ると、母上の念の屆たのであらう、幸ひまだ腐敗なつて居なかつた。あゝ又涙を强いられた、讀者よ笑ひ玉ふな、水餅は藤村の羔



寒、風月の栗饅頭、鹽瀬の最中と月鼈の差であらう、然し母の身になつて見玉へ不確實な傳言と自分も疑を挾みながら、果ないとも便にして、五ヶ月に渡り誠の水を汲み替へ〳〵、餅を保存しやうといふ意思は何處から出たのであるか之を思へは羔寒饅頭、最中は此の水餅に比して雲泥の差ではあるまいか。送別會や宴會に臨んで、此れ一つと母を思ひ出したとの有つたか無つたか、親馬鹿子畜生とは那樣な事から出たのであらふ。

病蓐の別れ

母上の病氣も餘程回復した、今まで曲つた切りで少しも伸ひなかつた左の足も、伸はせは伸び力は入らすと

も杖さへあれは、どうかこうか便所位には行き返りの出來るやうになつて、もう大の男三人の力を要せぬやうになつたて。まだ居たい〳〵といふ姪も義兄への義理もあるから、元の如く熊本へと返し、後るは予と弟とで一入家内は水入らすの樂となつた、予か歸省してから已う五十日餘りである。然るに好事魔多くで、予が勤めて居る東京のある社からは、病氣の見舞が何時しか歸京の催促となり、果ては又た電報沙汰となつた。予〻母の膝下を離れともない、が又世間を思へは東京へも歸らねはならぬ、進退維に谷まりて、取つ置つ苦心をして居ると。母上は早くも此を推して、猝かに元氣を粧ひ速りに東京へ返るべく勸め玉ふのである。予は幾百回胸中の悶々を繰り返して遂に東京に歸るとに決心した。

出發の日となつた。朝の五時何分の一番列車といふので、弟は甲斐〳〵しく未明に起きて諸事を調へ呉れた、食事の片手に予は行つた後の事を殘りなく弟に吩附て、若し母上が別れの悲しみに變事でも有つてはならずと、途中予が落付くへき宿、例へば門司では何某尾の道では何、大阪では何といふ風に書き殘して、必要の場合は時を計つて之に打電せよと諸々落なく言殘した。

昨夜頼んて置た車も來て、時間は遠慮なく迫る、愈々出發といふ時母上に暇乞をすると、母上は叶はぬ足に蚊蟵を滑り出て。では行くのかえと昨日の勇氣に引替て鼻打ち咳み玉ふのである、其の姿が小闇き洋燈の影に映して限なく悲しひ。と何とも言へぬ氣がするから見返へすと弟は食事の後を押し方付けて居るのか見へる。明日からは母上と是とか二人、嘸ぞ骨が折れるであらう、手馴れぬ水仕事に下女同樣の働きをせねはならぬ、と母を思ひ弟を思と東京に行くのか此の上なく忌はしくなつて立ち兼て居る。車夫は理由知らずか、もう行李を運び出して居る、五時が打つた、臺處に居た弟は驚いて走せ出る、車夫は今ま提燈に火を點して立ち懸る、母は涕を見せましと焦り玉ふ。此時此の光景名譽も義理も……。（完）

乙羽先生を悼む

日東生

生きたる人、誰れか一たびは死せさらむ、生あれば死あり、死あればこそ生あるなれ、生死は洵に自然の數にして、また人力の如何とも爲し難き所也、されば、人の死、元より悟むべしといへども、また悉く惜むに足らざる也、况んや世には、却て其生を悲むの人もなき能はざるをや、されど、年尚ほ壯んなるの異才にして、不幸にも二竪の侵す所となり、空しく志を抱いて逝くを見ば、誰れか之れを惜まざるものあらんや、蓋し其一死は、唯に其人の不幸に止まらずして、また社會の爲めに不幸たれば也、されば、世人の之れを深惜するも亦宜ならずや、乙羽先生の如きは、實に其人也といふべきか。



先生は、山形縣米澤の人なり、元と姓を渡部といひ、名を又太郎と稱す、明治二年六月二日を以て生る、嚴父を治兵衛氏といひ、家は旅宿を業とし、屋號を音羽屋といふ、乙羽の雅號は即はち之れに取るもの、而して「音羽の水滾々として盡きざる」意義ありとしいふ、十四才の時、鄕里の小學を卒へて、山形市の呉服店富士屋吉兵衛に事へしが、天資文學を嗜好し、業務の餘暇、常に文筆に親しみき、十五才にして父を喪ひ、十九才にして母を失ふ、當時、家に學資を給するの途なきも、遊學の念勃々禁ずる能はず、遂に意を決して東都に出で、尾崎紅葉、石橋思案等の先輩に就て、文筆を修練し、文壇に現るゝを得たり、その初陣の著書を、『露小袖』といふ小説也、後ち東陽堂に入りて、風俗畫報を編輯し、又た中央新聞社に入りて、文學に筆を揮ひたり、その間に於て、著作にも筆を染め、文名江湖に嘖々たるに至る、後博文館主大橋新太郎氏の知る處となり、入ッて館務に掌執して、爾來精勵殆んと十年

に近く、多忙の身を以て、文學社會及び出版社會に貢獻する處頗る多し、先生は、才敏に筆健に、頗る著作に富む、彼の「乙羽十種」の如きは、其尤も精選せるものたり、又た昨年の春、館用を帶びて歐米に漫遊し、彼の文明國の文物風土を歴覽し、殊に出版事業は精密に觀察し、大いに得る所あり、歸來その修得せる知見を館業に施し、以て我國の出版業を改良進歩せんと努めたり、世人に珍愛せられたる『歐山米水』及び『世界一周』は、皆其新たなる製作に成れるもの也、此二書の如きは、裝釘の美、挿畫の精、意匠の粹、實に我國未だ見ざりし珍書といふも過褒にあらず、聞く所によれば又た、其病床に就かるゝ前に、更に『歐米小觀』と題する書を出さん計畫ありしといふ、思ふに先生は、我が出版界樞要の地位に居り、今や其新知見を事業に施さんとするに際し、此の多矚の前途を捨てゝ逝かれたるは、殊に社會の爲めに惜まざるを得ざるなり、

○○○○○○○○○先生は、所謂才子なりき、貧生より身を起して、能く世に處し人に用ひられ、文士としては知名の文士となり、事業家としては有力なる商估となる、此の如き立身榮達、是れ才子にあらずんば、能くせざる所也、操觚者の生活より一轉して、出版業者となり、その玲瓏たる美的頭腦を以て、趣味索然たる實務を執り、而かも事務に敏活にして、才氣煥發し、此の如く理と情とを兼ぬるもの、是れ才子にあらずんば能さる所也、年未だ若くして、能く社交に老け、能く世事に慣れ、平素人の貴賤を問はずして、社會のあらゆる方面の人と交遊し、又た社會大體の事柄に通じて、所謂「何んでも能く知れる人」也、此の如き社會的の才、是れ才子にあらずんば、能はざる所也、天性多才多能にして、小說を能くし、紀行文を能くし、又た時文を草するに婉麗輕妙、文章の技優に一家を成せり、されど、其才智は文學に用ひて餘裕綽々たり、才氣迸る所、性情展ぶる所、其才と其手は、多種多面に揮はれ來りて、美術癖となり、寫眞癖となり、旅行癖となり、自然と人工の美的趣味を解得せるが如し、此の如き器用の才、是れまた才子にあらずんば、能くせざる所也、

されど、生の見る所を以てせば、是れ倘ほ言ふに足らざる也、先生の先生たる所以は、此等の才能以外に於て、倘ぶべき所のもの存在するを見る、何ぞや、其摸範的性格を有する人たりしこと是れ也、少しく其性格を解かんか、極めて淡泊に、言はゞ無邪氣なるが如く、一たび會ふものは、親しむべきを知り、また幾たび接するも嫌惡の念を起さず、之れ其交際を助けたる要因たるべきか、加ふるに、眞實の心と、同情の念に深く、故に能く人に愛せられ、能く親まれ、知交日に月に廣まれり、其交際に成功せるもの怪むに足らんや、されば先生は、此點に於て、彼の末松青萍氏と甚だ肖たるを見る、而して先生は、性來甚だ勤勉、文學に、出版業に、極めて忠實なりき、されば、出版業務に心力を注ぎたる餘り、忙中の閑を得ては、文筆を弄び、尨然たる書冊も其間に成る、其精勵なるや、人の及ぶ所にあらず、此の如き正實の性格は、他人の情性を感化するに足るもの、多くの使用人の監督者としては、最も適任たるを見る也、而して又た先生は、世の所謂紳士連の如く、虚榮虚飾を好まず、酒色に荒み、豪遊を試むるなど、凡て傲奢自ら居るが如きものなく、實に洒々たる風采を具へ、而かも何處やらに愛嬌のある紳士なりき、先生は、實に模範的の人たりし也、されば先生の先生たる所以は、彼れに在らずして、寧ろ此に在りと謂ふべき也、

嗚呼、明治三十四年六月一日は、如何なる悪日ぞ、天は無情にも、慘酷にも、此多くの人に愛せられたる好人物、前途多囑の一才子たる、乙羽先生の生命を奪ひ去らんとは、此日の早朝、余は何心なく館に到るや、同人突如として先生の訃を傳ふ、余は之れを聞きて、悲愴の感に打沈むもの多時、何等の言を發するを得ざりき、顧へば、先生が病の爲めに、第一醫院に入られしは二月十七日なりき、爾來病狀宜しからざりしも、時々佳報を傳へて人意を強くせり、數旬の長病、元より憂ひなきにあらざるも、此事あるべしとは夢だにも思はんや、あゝ先生は逝けるか、暮春の頃、先生を病床に問ひし時は、最後の面晤なりしか、今や再び先生の音容に接せんとするも、亦た得べからずなりぬ、享年僅かに三十有三、

悲哉。

越えて三日午後二時、葬式を行ひ、日暮里村の養福寺に葬りぬ、會する者、當世の名紳、巨匠、無慮一千人一市人として葬送の盛壯なる蓋し儔罕れなりといふべし、噫天成の才、情けなくも黄土に埋められ、永遠に此世の文學界を飾る能はすなりぬ、何んぞ悼惜の情に耐へむ、この日、細雨濛々として新緑にそゝぎ、人をして徒らに消魂せしむるのみ、悲哉、嗚呼傷い哉。



社交



流行の夏衣裳

衣裳の流行は年々に推移してこの夏も亦納涼の船に避暑の水際に新たなる模様風致を添ふるとなれり、玆に三井、大丸、飯田新の三呉服店に就き各々意匠を異にせるものを比較して好み〳〵の選取りに任すべし。

◎令孃向

年齢十五六歳の令孃向は紋絽・紋壁絽などにて地色は薄小豆、水淺葱、模樣は曙、染の香爐峰の雪、或は地落染の波、又は海藻又は流水に紅入りの萩、撫子などの模樣ゐの襲は鴇色の絽等にて以上の代價は三十三圓位帯は紅地絽繻珍の夏草に蝶の模樣又は繻珍御納戸地の女波男波の打寄せ模樣のもの代價四十圓より五十五圓位長襦袢は紅の紋絽又は紋絽縮緬にて代價十圓より十五圓位なり又同じ年頃の略衣にて少し派出好みは友禪絽縮緬又は絽の白地にて淺葱の忍草に紅の疋田入の蝶模樣又は淺葱の瀧と波に色入の紅葉散し模樣のもの代價十七圓より二十圓位、長襦袢は市樂絽の紅地夏草模樣もの代價十六圓位、帯は地質絽にて大波に片輪車の模樣片側は紅地白上りにて片側は白地に紅上りの染出し又は繻珍白地に牡丹の大模樣金絲入のもの代價二十圓より二十五圓位なり其他明石、紋上布、絽明石の類にて何れも地色は薄小豆又は白地に紫根の絣り物向口よし總て近來は此年頃の令孃は縞物は似付かずして用ひず重に絣り物流行せり（三井呉服店）

禮服用地質は霞織絽にて色合は淡藤又は紅空色の五つ紋(大さ鯨尺壹寸)裾模樣は八つ橋に菖蒲を白抜とし業平菱を金銀の蒔繪彩色にて散らし裏は紅梅色の紋織絽を付けて仕立上り代價二十八九圓、長襦袢は絽縮緬の鴇色地に白の總疋田形に光琳の鶴と龜甲にて半襟は絽縮緬の櫻鼠地に菖蒲の白拔き此仕立上り代價十七八圓、帶は絽繻珍の丸帶にて淡御納戸地に秋草の大模樣銀絲通しの裏吹き代價廿五六圓、又略衣にすれば地は紋織數寄屋、地色は藤色にて白の藤形又は草花の小紋この代價十一二圓、長襦袢は鴇色の紋絽又は無地にて袖は鴇色の絽縮緬にて代價十一二圓、帶は清涼織にて單の雨而織柄合は御納戸地に白の瀧縞にて影の寄紅葉を金茶に染出し其中へ燕子を銀絲にて織出せしもの又は博多織の御納戸地又は金茶地にて藤の立枠か或は雪中の竹にて單の雨而織にし其織留を絲にて編みて先ははばれん樣に切り下げたるもの等なり(以上大丸呉服店)



禮服用地質霞絽にて空色染の留袖裾模樣にして薊に女郎花の圖樣紋は五所にて大さ一寸より一寸二分とし此代價二十五圓より二十八圓位、長襦袢は紋絽縮緬の鶸色染にて紅模樣のもの代價十三圓より十六圓位帶は絽繻珍織の白鼠色蝶模樣のもの代價十三圓より十六圓等なり又略衣にては着物の地質洞絽の鼠色染にて留袖裾模樣の蘆に蜻蛉の圖樣紋は五所大さ一寸より一寸二分代價十九圓より廿二圓位長襦袢は白地絽に表紺青裏紅色の石竹模樣これは兩面友仙にて色を違へて染めるなり代價十八圓より廿圓位帶は網代織の薄納戸色にて濱千鳥模樣のもの代價廿圓より廿五圓位 又通常衣裳の好みは代價十圓より十三圓位の紋上布にて長襦袢は七本絽地の肉色藍染模樣のもの代價十三圓より十七圓位帶は明珍織兩面色違ひ代價十二圓より十五圓等

なり（飯田新店）

◎令閨向

三十歳前後の婦人向きは矢張り絽にて地色を素鼠、利休鼠、藍生壁、藍鼠などゝし小紋は金通に大小の水玉又は毘沙門龜甲、潰沙綾形に葉櫻の二重小紋柿の蒂小紋など何れも靜付にて三つ紋付この仕立上代價十五圓より十八圓位、長襦袢は絽の紅無し友禪の蘆に螢又は太藺に溜水などの模樣のもの代價十三圓より十六圓位帶は博多暈織の竪、漣の中に千鳥又は絽地にて御簾の中に蝶の模樣代價十六圓より廿圓位何れも上品なり略衣は本上布、越後上布の紺地にて片葉三筋に紋絣のもの又は白地に紺と薄紫根の井の字十の字の違絣等代價十五圓より四十圓位、長襦袢は紋絹縮又は絽にて萩の地紋に雨暈模樣又は柳枝を藍と鼠の濃淡に染出して影の蝙蝠の模樣置きたるもの等代價十二圓より十七圓位、帶は厚板織の錆鐵地に白の鱗繋ぎの單帶又は縞絽にて片側は白と御納戸の細横棒縞に片側は紫根地白の一本獨鈷代價十五圓より二十圓位（三井呉服店）

同じ年頃の禮服用は地質五本絽にて地色は利休鼠又は御納戸にて五つ紋付にし模樣は奴襷（裾許り模樣を付すもの）にて青海波を地落とし見切は千鳥形繋ぎ襲は白絽にて仕立上げ二十四五圓、長襦袢は絽縮緬の白地に裾許り海松の散し模樣胴と袖とは白の無地にし半衿は絽縮緬の白地に白絲にて小菊を縫ひたるもの仕立上げ十七八圓、帶は絽博多の白茶色の總木目形に菊の花を金絲にて香は銀絲にて總裏吹き代價三十圓位（大丸呉服店）

同じく禮服にて絽上布もの代價九圓より十三圓位、長襦袢は絽地雲暈しの地色のもの代價十三圓より十五圓位、帶は紋博多織の單帶十三圓より十八圓位又略衣にては小紋絽地上布九圓より十三圓位、長襦袢は絽縮緬の白地の小模樣もの十二圓より十五圓位（飯田新七店）

◎男子向

男ものは年齡を差別せず禮服は紗壁紗絽などにて黒の五つ紋付（紋の大さ鯨尺一寸より一寸一分位）の羽織代價七圓より十五圓位着衣は本上布、越後上布にて紺地

の絞絣井の字絣又は白地の須濱、猫足絣十五圓より五十圓位なり帯は綴織の横妄縞又は藍皮地に白茶の一本獨鈷代價十五圓より二十五圓位次に略服は羽織は縞紗、壁絽、縞絽の大明、千筋、崩縞、木賊縞、等又は織色の無地もの代價八圓より十圓位、着衣は淸涼織、笹波織、紋上布、縞越後にて柄合は大明、萬筋、角通し、金通し、横よろけ等代價十圓より十五圓位、帶は博多、縞絽、紋博多の類にて御納戸地の大々明、共獨鈷、又は紋地と無地との晝夜帶など代價七圓より十圓位(以上三井呉服店)

同じ禮服にて古風の好みは羽織は五本絽にて黒五つ紋付(大さ鯨尺一寸一分)着衣は壁絲織にて淡色の微塵縞又は市樂柄代價十四五圓繻袢は胴を白の越後縮とし袖は白絽を用ひて長繻袢に仕立て半衿を白越後にして仕立上げ代價六七圓又禮服には紫の紋付を用ふる向もありとは越後紫に五ッ紋を付し紋は藍染又は漆紋(漆にて紋を描きたるものにて舊幕時代には大に流行せしものなり)にしたるもの最も高尚なるべし此代價六七圓位、又略衣にては結城紬の紺地に十の字絣代價十五六圓より三十圓位帯は博多の袋織にて片側は御納戸の無地、片側は鱗形の紋織代價十一二圓、袴仙臺平練りの淡色にて棒縞又は鎧縞のもの仕立上り代價十四五圓位、(以上大丸呉服店)

又羽織は洞絽黒染にて紋は五所大さ一寸二分のもの代價二十圓より二十五圓位着物は精良上布の白地大明縞巾通し又は絣代價十八圓より二十三圓位、袴は絽織の薄鼠三段竪代價十二圓より十七圓位、帯は京精織眞無し二つ折のもの代價六圓五十錢より七圓五拾錢、右最も上品なり略衣は霜降絽の紐織代價十二圓より十五圓位、薩摩上布紺地縞又は絣の着物代價二十五圓より三十圓、冷泉平の袴代價八圓五十錢より十二圓位、袋織の帶代價九圓より十一圓流行す(以上飯田新七店)

△浴衣地　浴衣地の流行は近年益々盛にして男女貴賤の區別なく思ひ〳〵の柄合を好み然かも場所の何れを憚ることなく一般に用ひらるゝを以て其需用の區域極て廣く爲めに仕入元に於ては種々の意匠を凝せども未だ一般の需用に充たす能はずとなり昨今の流行は白地

の中形模様　模様の大小によらず置模様のものを云ふ)にて色合は淺葱の濃きもの等にて以前の紺地ものは模様上り悪しとて用ひず但し此中形模様は浴衣地のみならず瓦斯壁、木綿明石、紅梅織、瓦斯織絽縮等にも應用せらるゝよし總て細き模様の唐草など需用最も廣しと云へり代價は壹圓位より二圓七八十錢位まで、
其他浴衣は玉川縮代價七八十錢より一圓位、千代田縮又は瓦斯縮代價一圓五十錢より二圓五十、錢位、瓦斯上布代價一圓二三十錢より二圓位、又絣にては薩摩白地絣代價二圓より三圓位、大和絣代價一圓より一圓五十錢等何れも流行せり(以上三井呉服店)

◎男女學生の風俗

都下十萬の男女學生は其の學校に依り夫れ〲服制は一様ならざれども、今市中にて最も多く目を映つるものに就て流行子の調査せる處に依れば概ね左の如し

女生徒

▲頭髪は、額一杯に大く前髪を取りたる銀杏返に、白の葛引又は花元結をかけたるが多く、十二三歳以下は重に紅、牡丹色などのリボンにて結びたる下髪にして、稚兒髷も亦可なりの流行なり

▲襦袢の襟は、縮り牡丹又は薄色の無地襟の地質は、縮緬を用ふる向もあれども、大抵はメリンスにて、模様物は一切見受けず、又大方下襦袢を着け居り、其襟は白に限れり

▲帶は、以前と違ひ大抵袴着なれば、中帶人は細帶を通常とす地質は博多、繻子、メリンス等種々なり

▲袴は海老茶色
色合海老茶に限れるやうなるが、小石川より本郷に掛けては、間々紫色と黑とを見受く、地質にカシメヤ、縮カシメヤ、メリンス等種々あり

▲履物は靴を多數とす
靴は多く黑革の半靴にして、下駄と塗駄とは五分〱位なり、下駄は素履の吾妻形へ、天鵞絨の緒を附けたるが多きやうなり、尤も向に依りては、表附繻珍緒の小町形もあり

▲被布は小紋又は黄縞物
時候柄羽織は一切見受けれど中には、被布着けたるがあり、縞物たれば着物と對の柄合が流行なり

▲布呂敷は海老茶色のカシメヤと、紫のメリンスが多し

▲手袋は白の絹製
此頃は一躰に、白の絹製が流行の模様なり

男生徒

▲シヤーツは、大鼓形、飾なしの長仕立(白セル地)

▲着物は小柄の絣物
先一般に流行なるは、薩摩木綿にして、米琉なども一部の喝采を博し居れり

▲羽織、着物と對の小絣物
昨年迄は、黑キヤラコの紋附に限りたれども、追々厭かれ氣味にて、

小許物大の流行となれり、地質は着物と同種なり

▲袴は鼠と白の千筋

瓦斯織にして、靴履の外は、長目に穿くが多し

▲牛ズボンは、飾りなし、白リンネルのピジヤッ留め

大抵此牛ズボンを着し、ベースボールなどの技を戦はすには、直樣上着を脱ぎ捨て、例の白セル大皺形のシャーツと云ふ、輕裝とはなるなり

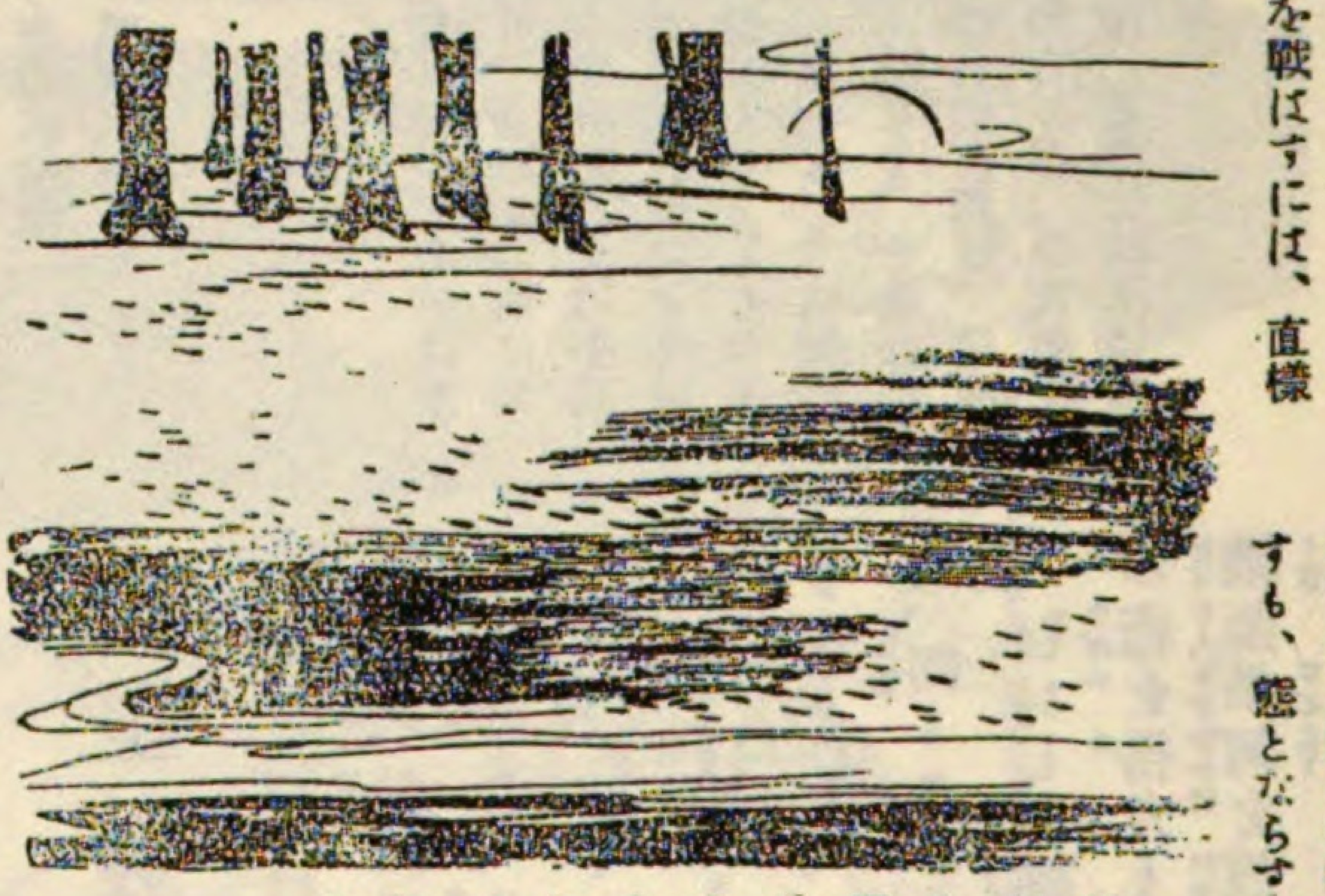
▲兵子帶は黒のメリンス

絞り兵子帶は、黒紋附と共に廢りの方にて、十人が十人迄、黒のメリンスとはなれり

▲履物に、薩摩下駄へ風通と鹿革の鼈腹を附けたるものか、赤革ヅックの半靴にて、靴下は黒の長仕立洋傘は一切手にせぬ樣なり

◎流行の櫛笄

櫛笄はこれまで鼈甲に金蒔繪をなせしもの流行せしが昨今は多く白檀、黄楊、椰子樹、鐵刀木　象牙又は白鼈甲の如き最も輕きもの流行し蒔繪も暑苦しき金色に廢りて冷しき銀色專ら行はれ繪樣は山水又は花鳥の類を選び尚ほ見榮を好くし重量をも減らす爲め透し彫となし諸々に眞珠金剛石其他の寶石を以て飾りたる濠州彫と稱するもの大流行なり代價は寶石次第にて一定せざるも普通一組にて五六圓より二十圓位品によりては五六十圓より百四五十圓に上り先頃菜男爵夫人が作りしものは上等の眞珠と金剛石とを數多用ゐし爲め四百二十圓の高價に上りしとは贅澤もまた極まれりといふべし



◎角製前差

白蓮花、(花は象牙、蕊は角製)竹に雀、萬年竹(總角製)白鷺(象牙製、脚は黒角)など、出來榮殊の外面白く、銀杏、天神髷の娘盛りより、丸髷結初め夫人間に持囃され居れり、勿論前差しの揃へなれども、後差しとなすも、態とならずして好かるべし、價は何れも二拾錢位なり

◎流行の麥藁帽

鍔の狹き、山高に一インチ半位のリボンの顳卷したるが流行にして、編目は細の紐打よりは、荒き菱形を好む向多く、又麥の荒菱とタスカンの紐打とを一本置に編上げたるは新形とて、若き紳士間に厚遇を享け居れり、猶圖に出せるタスカンのヘルメット帽(兜形)は、本年初めて見本として輸入したるものなるが、從前の白布を覆たるものとは事變り、何となふ落付のある帽なれば、頗る人氣に適ひ、最早何處も賣切の模樣にして、僕にも一個と御所望あるも、態々英國より取寄せねばならぬ譯なり、此模樣にては、明年こそは、彌々此ヘルメット帽の流行を見るに至らんか

價格

麥藁大菱編	壹圓參拾錢より
麥藁とタスカンの雜編	貳圓より
タスカンノヘルメット帽	四圓より

◎小供の夏帽子

男の兒には、海軍ピラ附(麥藁製にて縁取のピラ附)女の兒には同じピラ附にても、縁なしにて、リボンとピラとは桃、赤、ひわなどの色物にて又乳兒より三歳位迄の處にては、重に白蓮製を用ゐ、圖に示せる大黒形

は男兒向にて、女兒は山岡風と知るべし、本邦製も形狀は仲々巧みに拵へあれども、兎角元料惡くして、洗濯の利かぬ處より、價は廉くとも、舶來品と比べて、經濟上如何あらんか

價格（舶來品）

海軍ピラ附　七拾錢より壹圓貳拾錢
女兒帽ピラ附　七拾錢より貳圓
白麻製男兒帽　壹圓位
同女兒帽　貳圓半位

◎流行の半襟

夏襟と云へば、無論これまでは淡色に限りたるものなれども、本年は意氣者間にてコックリと濃色のものを好むやうなりたり、勿論上品向は淡色なり、凡て濃色は暑くるしと云ふに、其暑くるしき色合が、此の手間の氣に入ると云ふも流行變遷のしるしなるべきか、而して色合など冬揚物と差して變りはなけれど、總躰に淡すりとして、餘りくさ〲したる模樣はつけず、先づは圖に出したる位の行方が流行と知るべし、朝顏模樣は令孃向、濃地へ五月花の白拔は意氣向の尤も喜ぶ品なり、令孃向には紫根ざし、油脂ざしとて、色物を用ふれども、他は一般に錆勝、消炭等にて模樣を顯はしたるが好評にして、盛夏には平絽なるが、是處暫くは絽縮緬にて、模樣は露柴、夏菊、撫子、朝顏、藤花、其の他秋草等ならん、價は三拾錢より壹圓四五十錢位なり（以上流行）

娯樂



星祭り

名ばかりは秋といへども、暮れても團扇の捨てがてなる夕、晴れては海かとも見る、空うち仰げば、西みなみの涯より、北ひがしの空さして、長く流るゝ、一筋の星の川あり。天の川となん言ふ。

思へばオ、それよ、月もふみ月、この七日は星のまつりなりけり。いでやむかしにかへりて、故ことの一ふし、語りきかさばや。

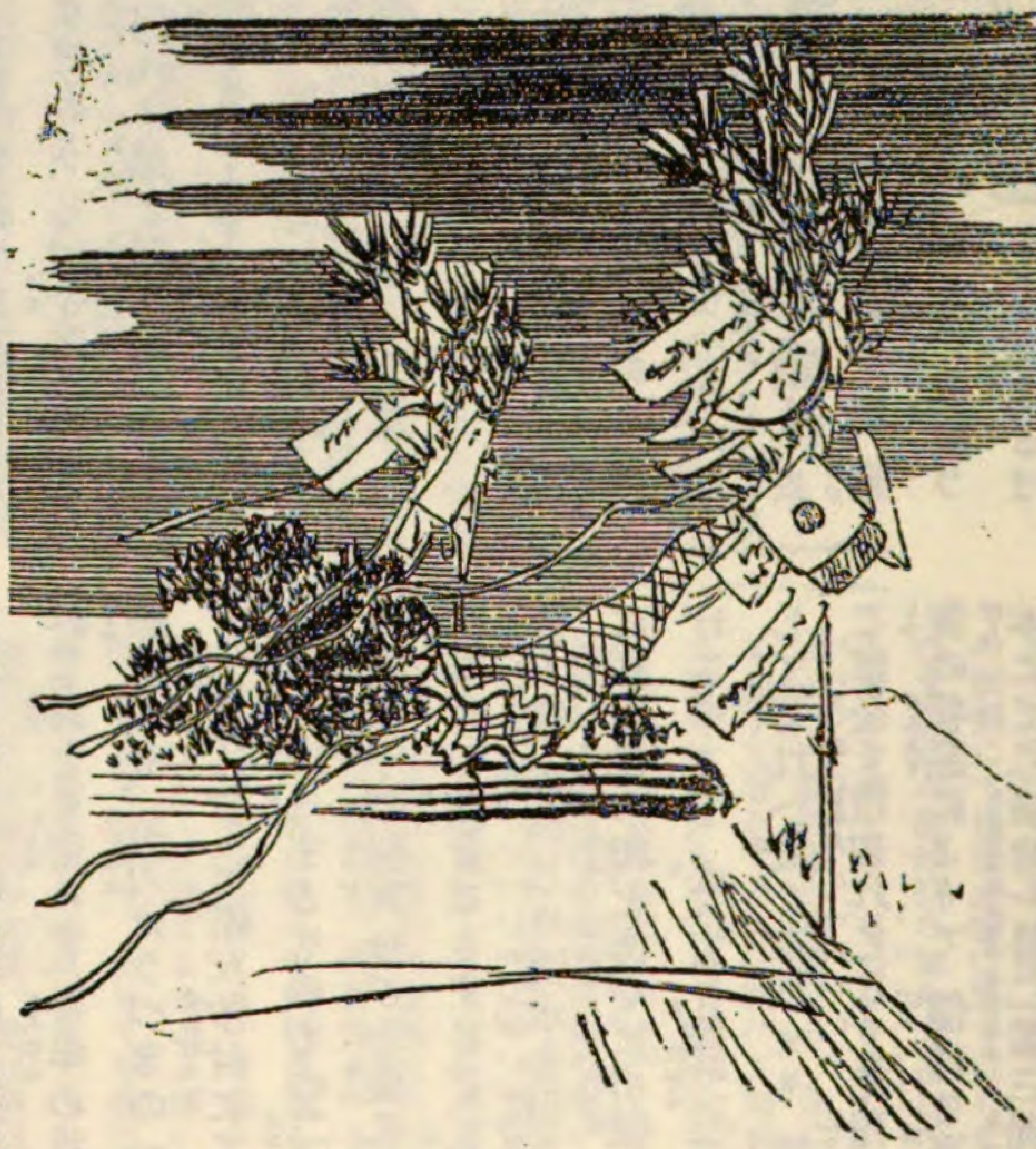
むかし漢國に、武丁となん呼べる男ありけるが、仙家の術を得たりとて、語りけらく、ふみつき七日のよひ、織姫銀河を渡りて、夫なる牽牛に逢ふよと。されば彼の國の人々、この宵まつりごといとなみしを、我朝の孝謙天皇、天平勝寶七年と云ふに、彼の國より渡來りて、維新前までは、盛に子女の間に行はれたり。

瓜果を供へ、竹の葉に五色の絹糸うちかけ、梶の葉に願ひ歌かきしもの、今はやう〳〵に、うつりかはりて五色の短冊をつくることゝなれり。

一年にたゞ一度のみ、逢ふさへあるに、折りあしくも空やくもりて、雨など降りなば、天の川、みづかさ増して、逢ふことの難きに、また來む年を待つも悲なしと、彦星織姫は、川をはさみて、泣きあかし給ふとなり。思へば荒唐ながら、叉やさしきものがたりならずや。

此の宵のまつりごと、これを乞巧奠とぞ云ふなる。

同じ心の友とち群れて曉の星の光さへ、まだ消えがてなるに、ちり〳〵と昨夜の聲の、今朝までのこる蟲の音きゝつゝ、玉かとまがふ



草葉の白つゆ踏みつゝ供へもの採りし頃の樂しさ。

竹の葉に附くる、短冊の數多きを誇り、供へものゝ水瓜の、殊に太りしを喜び、燈籠の美しきを愛でし年頃の面白さよ、さらば吾も今はむかしにかへりて、星まつりを祝ぐなり。(小船山人)

酸漿の話

昔と今との大道物賣の風俗を比較し見るに、大方は變革まりたるが中には、全く廢れて影さへ見えざるものもあり、假令へば今は氷屋の年を逐ふて、次第に大仕掛と變り行けど、以前は瀧の水とか氷水とか行燈に書きて、家臺に杉の葉を擴げ眞鍮の朝顔形の水呑を業々しく飾り立て、白玉、道明

寺干飯に心太、寒天、砂糖水を賣り、心太や寒天や、白玉冷ッコイと涼しく呼びたてし者なるが、此他の夏景色としては虫賣、烏丸枇杷葉湯、甘酒、目高金魚朝顏賣茄子瓜の實生賣植木唐がらし、なぞありしが今に少しも變らざるものは酸漿賣なり、何れも扇を開きし如くにならべ立て、雨擔子もあれば提るもありて、彼れは勇の男是は年若き女の細き聲にて、ホウヅキや〳〵と呼び立て歩く、女ばかりを合手の商賣はこのほうづきやのみなるべし。

此の商賣は春夏秋冬ぶッ通しの如くなれど、今日此頃より初めて五月雨過ぎに新物が現らはれ來るをもて、今が昨年物の仕舞ひなるが地方にては海ほうづきは見かけずも、丹波ほうづきと稱する赤く熟せるを賣り、虫の根が切れるとて小兒等に食はしむる風習あるが、東京にては食する者絶えてなし、丹波ほうづき千成ほうづきは山の手にも多く作られ、海ほうづきと稱するは薙刀、巾着、ヒヨツトコ、チヤン〳〵其他なれど、女小供の好み愛するは薙刀と巾着となり、薙刀は紅螺の子にして、以前は品川沖に澤山有り、房州若しくは伊豆の漁舟が日本橋へ來る序に、少しづゝ持ち來りし位ひなりし、今日は品川灣にて天然生のものは、全く捕り盡されて跡をも留めず、今年のごとき數萬人の汐干狩が出船せしも、薙刀ほうづきの一本も拾ひたるとをも聞かず、現今にては唯だ沙村にて作る者と、諸國にて作りて東京へ輸入するものとの二つなるが、其採收にも期節ありて子の發育せざる前に採收せざれば、腹切れてほうづきの用をなさずとぞ、左れば砂村附近のほうづき作りは、豫かじめ海水を引入て紅螺を養ひ置き、五月前に數百本の繩を海中に引張りて、此なわへ子を生み附けさせさて、夫れを見計いて引揚げ鹽漬をもなし、又乾して蓄はへ置くなれども、若し少しにても加減を誤りなば全く腹切れとなりて用をなさずとぞ、されば其品質の善惡によりて、價にも高下あり上等なるは小賣一本にて二錢位一房二圓三圓と呼びて中々馬鹿に出來さる物なり、是を呼賣する行商人もよし原又は藝者や、場所にては日に三圓五圓の商ひをなす者あり、其問屋は

神田多町と、日本橋平松町と二軒ありとぞ。

時事

風俗改良談 （前號交際論のつゞき）

東京音樂學校長 渡邊龍聖君

◎次は儀式的の文通でありますが、是は幾らかの飾りが要ると思ふ、感情の疏通を主とせればならぬ、美術的に認める方が宜い、之は同情を表はすものでありますから簡潔といふよりも寧ろ文章に多少の修飾を加へ、暖なる同情を表はすが宜いさて何とも彼とも附かぬ文通がある、友誼的とも職業的とも儀式的とも解釋の出來ぬ文通があります、それは斯ういふ文通でありますす新年の活版摺の年賀狀、此節流行る洋行者の暇乞の端書、それからして今一つは葬式の通知の端書、どうも譯が判らぬと思ふて居る、此頃斯ういふ種類の端書が流行る「拙者儀明朝五時新橋發滊車にて歐洲留學の途に上る、行李倉卒の際御暇乞に罷り出づるの閑を得ず端書を以て御暇乞まで匆々」といふ手紙である、私は之を一つ解剖して見たいと思ふ、之を解剖すれば不注意といふことを顯はして居りはせぬか、少しく無頓着に過ぎて居りはせぬか、親しい間柄ならば一遍會ふが宜い、會ふだけの親しみのない人ならばそんな端書を送る必用もあるまい、若し敬意を表する積りならば他に敬意の表はし方があらう。明朝何時に出發するといふ事を端書で通知するは餘り敬禮的とも思はれぬ、友誼的とも解釋出來ず、儀式的とも解釋出來ず或はこんな意味かも知れぬ。明朝新橋へ御出下されば御目に懸る、即ち見送りに御出なさいといふ意味かも知れぬ、是は兎に角もう少し考へて宜いことゝ思ふ、通知を受けて甚だ難有いこともあるが又場合に依るとそうでない事もある、尋れて來たこともなければ、尋れて行つたこともなく云はゞ相互の間に友誼上の交際が成り立つて居らぬ、顏の知り合ひ、名の知り合ひ位の間柄にては稍失禮に亘りはせぬかと思はれる。

◎又葬式の通知狀の如きも遺族のものが餘り無差別に通知し過ぎる故に彌次馬が會葬する、笑つたり喜んだり、更に謹愼の意を表することの出來ぬやうな彌次馬が會葬する、是は畢竟無差別に通知するからである、是も知つて居るであらう彼れも知つて居るだらうと、宜い加減にごたごたと通知するからである、葬式は大禮である、大禮に、彌次馬的に來るものゝ集むるは不注意である。

◎新年に活版摺の端書は餘り厭い、御互に新年に於て、貴方の事を忘れはせぬといふので端書の一枚も交換するは宜い、けれども活版摺は餘りひどい、活版摺にして書生に表書をさせて出すは餘り厭すッぽい友誼である、友誼的年賀狀の交換ならば、自筆で書いて貰いたい、直筆で書くだけの親切がなく、活版摺でやられればならぬといふは餘り虛禮に流れ過ぎて居る、私は追々年賀狀は廢しにならうと思ふ、交際の廣い人は數多くの人から年賀を受くる、それに一々自筆で返禮することは出來ず無據活版摺にして返禮するといふ譯になつて遂に今日の如き虛禮になつて仕舞つたのであらう、依りて早晚は廢しになつて眞に親しき間だけ直筆で年賀を交換するか或は面會して年賀を述ぶるやうにならうと思ふ。

◎次には友誼的の文通、是は規則正しくしたが宜い、親しき間ならば忘れぬが宜い、忘れぬならば時々見舞狀を出すが宜い、然るに間々斯ういふことがある、用事が起れば、大變長い手紙を書く、平生御無沙汰の御詫を百度も繰返して、却說此度實は御依賴申上度一條といふ樣なことを

書くものがある、それは餘り宜くない、用事のある時には友情が溢れ出る、用事のない時には思ひ出さぬ、ソンナ事がある譯でない用事のある時だけ手紙を書いては、千言萬言昔日の友情を繰返しても役に立つものでない、乃で、平生友誼上の手紙の文通が出來ぬ位ならば、其人には友誼的に事を依賴せぬと斷うしたが宜いと思ふ。

◎次に私は訪問といふことに就て卑見を述べたいと思ふ、是も職業的、友誼的、儀式的と分れます、先づ職業的訪問に就て申せば私用と公用と別けるが宜い、私用ならば自宅に訪問するが宜い、公用ならば公けの場所が宜い、職業的訪問は往復端書か電話で面會の時間と場所とを聞合せたが宜い、朝まだ寢て居る間に尋ねるとか、夜寢る時刻に尋ねるは宜くないと思ふ、人に度々尋ねられて不在であると、面目ないものである、又人を度々尋ねて用事があつて、其人が不在であると終には腹も立つものである、然るに能く考へれば御互に無益の時間を省くことが出來る、面會の期日時間場所を「はがき」か電話で約束して、其時間に行けば決して無駄の時間を費す必要がない、さうして用事が濟んだら直ぐ別れたが宜い。用事が濟んでからブラ〳〵するは宜くない、用事が有つて訪問するならば單刀直入訪問の所用を語るが宜い、職業的訪問であるか友誼的訪問であるか判明せぬ樣にゴマスは宜くない。其區別を判然とするが宜い、時候の挨拶は至當とした所で、平生御無沙汰の御詫やら御世辭やら、世間話やら、ヤガテ一時間も下らぬ話をして、扨本日推參致しましたといふ樣に在つては一日が百時間有つても尚ほ不足である仕事は出來ぬ、尋ねる人は、自分の閑な時に尋ねるから宜いけれども、尋ねられる人は、必ず閑と限つて居らぬ、隨分立て籠つた用事かあるかも知れぬ、私共は閑な人間であるが、それでも困ることがある、今學校の授業時間で出ればならぬ、今出れば遲れるといふ時に、尙世間話しでもして居らるゝと、其辛さは云ふに云はれぬ、實は斯ふいう譯であるといつて、譯を言ふても御客樣は一年振りで一遍會つたのであるとか、三年振りで會つたのであるとか、偶に一遍位は遲れても大した差支はなからうと云ふ樣子で落ち着いて居らるゝと眞に心苦しい、依りて御互に時間の儉約をせねばならぬ時節であるから職業的に訪問する時は用事か濟んだら直く歸へるとするが宜い。

◎次の儀式的訪問、是は別に御話し仕たいと思ふのでありますから、餘りクダ〳〵しくは申し上げませぬ、一口申し上げて置きます、儀式的訪問、其重なるものは冠婚喪祭に於ける訪問であります、此時は何れも當局の家は混雜して居ます、故に名刺を置て歸つて來て然るべき所もあり、其所に居て手傳をして然るべきもあり兎に角能く考へるがよい、愚圖愚圖に曖昧で時間を費すは宜くない、常識で判かる能く考へれば判ヵ事ですから、役に立つと思ふたらば留まるも宜い役に立ぬと思へば居らぬが宜い、葬式抔は手傳人が來る、其手傳人を待遇ふ爲めに又手傳が要る、其手傳を待遇ふ爲めに數多く人を傭はればならぬことがある斯る事は、葬式許りでない、其他の場合に於ても澤山ある、兎に角常識を能く働かすれば大した失敗はない。

◎年賀の虛禮に就て一寸申し上げたいと思ふ、私は東京に生活した始め一二年の間は年賀にグル〳〵廻ッテ歩きました實は私は一々面會して年賀を述べて廻る積りであつた、初めに行つた家で既にヤリ損ひました、タノマウと音訪れると書生が出て來た、新年の賀禮に罷出ましたと云ふと、其れは御苦勞樣、其處へ名刺を入れて下さいと云ふて、取次ぐ樣子がありませぬ、乃で其儘其處を去りまして外の家に參ゐつて見ますと何れも同一樣でありました、或る家に參りましたが其處は少し樣子が違つて居ました大槪の處は、人が誰も居らなくて名刺受がある其處ゝ限つて、

子供が二人袴を穿いて玄關に居る、是は感心と思ふた、私が門に入るや否や、一人の子供が來た〳〵と云ふ、すると他の一人は筆と端書とを手に持ちまして、私が名刺を出して歸らうとすると、一人の子供が、私の名刺を讀み上げかけた「渡邊……ナンダ六ケしい名前だ、サヤして番地が書いてない」、……家に歸へつて少し立つと、其家から小供の筆で謹賀新年の返禮端書が來た、乃で私は年賀の廻禮は詰らぬ事と考へてよす事にしました。

◎次に友誼的訪問、友誼的訪問は自分の都合の宜い時はかり考へて訪問する譯のものではない、訪れらるゝ人の都合も考へて行くが宜い、寧ろ訪れらるゝ人の都合を考へて訪れるが友誼的の訪問であらうと思ふ、……一寸此邊に來た、何處かで休みたいものである、何番地に誰が居る寄つて休んで行かう……是れでは友誼的訪問でないと思ふ、

◎田舍に近づきを有つて居ると、御無沙汰の申譯旁々、随分出し拔けに御客さんが來る、さて貧乏世帶であつて見ると、泊り客がありますれば、損料蒲團を借りに行け、天麩羅屋へ走れ、蕎麥屋へ走れと、大騷動を致します、御客樣はオッシャル……イヤどうも平生は御無沙汰を致して居ります年始狀も差上げませぬで申譯がありませぬ、此度は、其申譯旁々東京見物に參りした、前以て手紙で御知らせ致さうと思ひましたが其れでは又御構ひ下さると恐れ入りますから、出し拔けに參りました、……ドウして〳〵、前以て知らせて貰ふた方がイクラ有り難いかも知れぬ、サスレバ、破れ蒲團の一枚も洗ひ張りして置き、古膳古椀でもあさつて來て置く、ソレデあるから、人の處に逗留に出掛る積なれば、前以て知らせた方がよい、外國風にするが宜い、外國では人を訪問して逗留する意志ある時は、前以て手紙で承諾を得て行く、人は本來社交的のものである故に、人に御馳走するとか、人を泊めることを好む、成るたけ多くなす事を喜ぶものであるが、併し乍ら、又人には身分相當と云ふ事がある、分限と云ふものがある、ソレ故に何んぼ社交的にそういふ事を喜んでも夜具蒲團のないのに泊りに來られたり或は、酒屋肴屋に拂の滯りがあつて御用を聞かないのに、酒肴を出さればならぬと云ふは、餘り小氣味の宜いことではない、依りて斯くあらんと思ふ時は前以て打合をするが宜いと思ふ。

◎人を訪れる時の服裝であります、我國民は無頓着の樣ですが外國人は八ヶ間敷い、我國でも婦人は可なり八ヶ間敷い樣です、人を訪れるには餘り穢くても宜くない又餘り奇麗でもよくない、外國では自分より目下であり又は不幸な者の所には綺羅を飾つて行くなといふ、餘り奇麗な風をして來らるゝと、見すぼらしき借家に在つて見るさ、随分面目ないやうなこさがある、破れ蒲團を出し苦くゝて困ることがある、故に服裝も注意を要する、併しながら服裝は個々に依り各別のもの、身分に依りて違ひますから、コンナ風が宜いとは申されぬ、自分の身分はどうか又尋ねらるゝ人の身分はどうか、注意を要することであると思ふ、餘りヒドイ穢い風をして行くは訪れられる人を輕蔑する譯である、餘り奇麗な風をして行くも亦訪れられる人に敬禮を顯はす譯でない、交際は人の感情を尊敬すべきものである、理窟ではいかぬ、理窟では交際は出來ぬ、交際は感情であります、人の感情を重んする交際であるから、身分相應合相當、常に常識を働かして、服裝に注意すべきものであらうと思ふ。

◎人に依りては、御客樣を三十分も一時間も待たすものがある、他に用事があつて待たす人は仕方がないが勿體振つて待たす人がないともいはれぬ、威張りたければ他の方法で威張て貰ひたい、人に貴重の時間を無駄に費さして威張るは餘り感心仕らぬ、依りてさういふ方が萬々一あるならば改良して貰ひたい。

◎又客室の粧飾に就ては身分といふものがあるから、一概して申されませぬ然し乍ら身分相應に奇麗に飾り立てる人もあり、不相當に穢なくして置く人もあるが、是も考ふべきことである、客を接待する所でありて、客に誇る場所でないから、强てハデに飾り立つべきものであるまい、さりながら客に敬禮を失ふやうに穢なくして置くべきものではあるまい、是は銘々自分の常識で判つて居ると思ふ。

◎此頃日本家で西洋風に、椅子に腰を掛けることが流行する、冬、洋服で、玄關で靴を脫がされ、客室へ這入つて腰を掛けさせられる、「ストーブ」もなく、寒い部屋で、靴を取つて居るから足が大變冷える、隨分是れで風をヒクことがある、是れも西洋風にしてあるならば、「ストーブ」を入れて置くか、靴の儘で通すか、左なくば、何か暖かなものを足にはかせる樣にしてほしい。

◎それから贈物のことに就て申上げたい、贈物は、職業的とか儀式的とか、友誼的とかいふ區別がハッキリ立て憎い、人に物を贈るといふ事が、職業的にせよ、儀式的にせよ、旣に友情を充分含んで居る次第である、然るに、此頃の贈物は虛禮虛式になつて來て居る、贈物は人の眞情を表はすものである、冠婚葬祭の如き儀式に於ける贈物でも、之に依りて、充分同情を表はすべきものである、單に友誼的の贈物ならば、尙更らの事である、之に依りて愛情を顯はすか、或は感謝の意を顯はすものである、依りて贈物は總べて眞實でなければならぬ、然るに此頃箱が大きくて正味の少い贈りものが流行る、五十錢位で二三圓に見えるものが賣れが宜い、鰹節ならば、三百本も這入りさうな箱、卵ならば、五百も這入りさうな箱、そんな大きな箱の中に、鰹節が四五本游いで居つたり、チャボ鷄の卵が一ダース位、巣立ち前でトキをツクル稽古をして居つたりする、一月能く話しに聞くが歲暮に鴨を一番人に贈つた、其鴨が廻り廻つて、一月下旬に自分の元に戻りて來た、開けて見るれば、モハヤ料理する必要がない、ドロドロになつて居つたといふことである、贈物も此所に至つては全く無益である、却て自分の品位を損ひ人の感情を害する次第である、ソンナ贈物はせぬ方が宜い、贈物は價格の多少を問ふべきものでない、長者の萬燈より貧の一燈である。地方に依れば、何か物を持つて行かねば、人の家に這入られぬといふ所がある、東京も婦人などにはそんな向きのものが多い、親しき間柄ならば持つて行くも宜い、然し乍ら、わざわざ菓子箱の類を買ふて持つて行かぬでも宜い、自分の手で拵へた物であるとか、或は名物であるとか、其他有合せものでもよい、唯其人を忘れないといふシルシである、ア・斯ういふ旨いものを貰ふたから彼の人に分けてやりたいとか、自分で之を拵へたから彼の人に持つて行てやりたいといふことは、其人の眞情を表はすもので又貰ふた人を甚だ喜ばすものである、一體今日社會に於て、贈物のやり取りが甚だ多過ぎる、それも其筈、心にない贈物が流行するからである、心にない贈物は、社會から絕やして仕舞はねばならぬ。

◎此所に何とも彼とも云はれぬ一種の賄物がある、强いて名くれば職業的賄り物である、即ち賄賂のことである、賄賂といふ贈物がある、昔から今日迄賄賂が宜いといつて辯護したものは一人もない、今でも、誰に會て聞て見ても、賄賂が好きだ、賄賂は宜いものであるといつて辯護するものは一人もない、けれども何處かに好きなものがあると見え、未だ賄賂が絕えぬ、私は石炭屋に友達を有つて居るが、其石炭屋が、斯ういふことを言つた、「どうも場所に依りては、正式に石炭を賣込めなくて困まる、」正式で賣り込めなければ、變式で賣り込む、變式で賣込むとはドンナ賣り込み方か、聞きたいものである。

◎爰で私が賄賂の撲滅策を出します、諸君ドーゾ御同意下され、それは

斯ういふことである、賄賂を持つて來るものがあれば、幾らでも取つて仕舞へ、さうして言ふことを聽くな、賄賂を請求するものがあれば幾らでも約束せよ、さうして實行するな、賄賂は幾らでも取つて言ふことを聽かぬ、約束は幾らでもするけれども、實際となれば破約をするといふことである、こういふことに社會が一致すれば賄賂は自然なくなると思ふ、其他に名案が有りますかどうです。

◎次に會合のことを申します、通例集會若くは會議と呼ばるる職務上の會合もあり、又冠婚喪祭抔の儀式的の寄合ひもある、又旅行とか、會食とか、宴會とか、饗應とかいふ友誼的の會合もある、サテ諸會に通して吾々が守りたいといふのは時間のことであります、時間は正確に守るとにせれば、貴顯の時間を無駄に費す、若し總べての會合の時間が正確ならば、一ッの會に行きて、それから斯うする、アゝするといふとが出來る、正確でなく三時と言つても五時や七時に始まるやうな工合では一ッの會の爲に、其日一日はツブレて仕舞ふ、時間はあらゆる會に通じて正確にしたいと思ふ、然らば、さういふ私が、正確に時間を守るかといふに、さうでない、自分計り正確に守つても、人がそうでないから仕方がない、私も遲れます、會社が不道德ならば私も不道德にならねば世渡りが出來ぬ、社會道德は一人でいかゐ、一致協同を要する者である。（中略）

◎一體今日の宴會には大缺點がある、ソレハ會の幹事とか委員といふ人達が、人を紹介することに務めぬ、會員同志を紹介することを務めぬ、故に知つて居るものは話し合つて居るが、知らぬ同志は睨み合つて居る、成程大臣であるとか、大金持であるとかいふエライ方は、紹介される必要はない、誰も彼も容子を見て、是はエラさうな方と思ふと、名刺を出して自ら紹介する、所が、其會の末席に坐はるやうな人は甚だ氣の毒である、誰も一向目を附けて吳れぬ、さ席に坐はる人の所には、人が一杯ゥッ高く集まり、三味線を彈くやら、御太鼓をタゝくやら、時時はエライ方から法螺の貝がなる、ソレハ〳〵中々面白い、けれども末席の者は面白くない、酒の酌をして吳れるものもないイツモ伏し目になつて居られねばならぬ、不圖頭を上げるさ、エラさうな方から睨み附けられる、何ぜ挨拶に來ぬかといふ樣子が見ゆるから、慄は〳〵行つて名刺を出して、私は斯ふいふものでござゐますと申上ると「フーン」といふ御言葉……それでは懇親會ならぬ、末席に坐する樣なものは、何時でも面白くない、ソレテあるから家に歸つて酒の飲み直しをやる（中略）今日の樣な有樣では、一遍會に行くと懲り〳〵する、エライ方の御出席になる宴會へ行くより、牛肉屋か蕎麥屋に行つて、天麩羅とか、正宗とかいつて、下女でも叱り飛ばして居る方が餘程面白い、「鶏口となるも牛尾と爲る勿れ」といふは此の邊のことであらう、此の如く申し上げましたら、一口二口如何して改良が出來るであらうかといふことに就て申し上げたいと思ふ、私は嘗て宴會の改良論とか良案とかいふものを書て見たが、誰も贊成して吳れぬ、それで止むを得ず當分は自分も矢張昔流で酒を飲むさ極めた、けれさも宴會制度は早晩改良せねばなりませぬ、今日は唯一口二口申し上げて置きます、……第一に總ての宴會は精神的の宴會でなければならぬ、身體が醉ふた計りでは宜かぬ、精神が醉はればならぬ、身體が旨かツた計りでは宜かぬ、喉が鳴つた計りではいかぬ、精神が鳴らればならぬ、精神が樂しまねばならぬ、精神的宴會にしてもらひたい。

◎次には總ての宴會には婦人を連れ出す樣にせればならぬと思ふ、婦人は必ずしも鍋のスミ取る計りの役でない、稀には親や夫と共々に、宴會に行くが宜い、我國に於ける教育の缺點は、一は斯ういふ點にある、日本の婦人は表を知らぬ、社會の狀況を知らぬ、故に子供の教育の上に於て幾ら障害があるか知れませぬ、子供の教育に就て夫と意見の合はぬ

事が往々ある、夫は社會に出て潮流を知つて居るが、妻は内にありて表のことを更に知らぬ、故に子供の教育の上に於て、夫婦間に意見の衝突するは尤である、子供は家庭に於て其大部分は女に教育せらるゝ、然るに、其女を社會に對して盲にして置くといふは好ましくないことである……、總ての宴會は一體女がなければ淋しい、妻が夫と倶に出るとか、娘が親と共に出れば其會が和かになります、總てのことが打解けて圓滑に行く、藝者に宴席を周旋させるに及ばぬ、夫が會員であるとか、親が會員であるとかいふ場所であるから上品の場所である、そこで妻や娘が杯盤の周旋をしたとても、決して下品なゲスビタことではない、故に社會一般にさういふことを奬勵して貰ひたいと思ふ。

◎又宴會には音樂を用ゐればならぬ、さう言へば自分の田に水を引くやうであるが、さうでない、私は音樂のない會は野蠻な會と思ふ、中には、私は音樂は大嫌ひといふ人がある、私はソンな人は野蠻な人であると思ふ「ヘーさうですか」と口にはいふが心で野蠻人と思ふ、野蠻の遺物と思ふ、音樂が嫌ひでは社交的になることは出來ぬ、外國では、音樂の趣味が無ければ、交際場裡に出る事が出來ませぬ、サテ其音樂の趣味といふものは、急に養成の出來ぬものであるから、今日の我々は仕方がないとした所で、我々の子弟子女の教育の上には、吾々は餘程老へればならぬ、是れから十年も經ては、音樂をしらぬものは、交際が出來ぬ樣になるであろふと私は推測する。

◎支那の孔子樣が、風を移し俗を易ふるは樂より善きはなしと言つた、音樂の風を移も俗を易ふるは申し上げる迄もない、然し音樂は道德其ものではない、音樂といふものは、人の感情を代表すものであるから、高尙にもなれば卑猥にもなる、之を善く用ゐれば國民の風俗をして高からしむることも出來、打遣つて置けば墮落の手傳にもなる、立派な建物も、打遣つて置けば蛆が涌く、音樂も其通りである、故に改めて東京市の教育會員諸君に希望致したい、此東京市は、音樂を能く用ゐずしては、市民の教育を旨くやることは、出來ませぬ、往來に出て見れば守り子がケシカラヌ俗歌を謠ふて、背に負ふて居る子供の感性に注ぎ込む、新橋、日本橋邊へ行くと、此處彼處の料理屋待合で卑猥極まる音樂を聞かされる、寄席へ行けば、聞くもいまはしき事が多い、こんなことで、東京市民に純良なる教育を施すことは迚も出來ぬ、依りて音樂改良は一般教育の上から大切であると思ふ。音樂位感情を統一して人の精神を綜合するものはない、幾百萬人集つまて居らうとも、君が代の一曲を皆が謠ふ時は、滿堂擧つて天長地久の感情を起す、若しもこゝに一の進行曲が響て來たならば、音諸君は擧つて進行の御心地なさるに相違ない、何と言つても音樂が一番調和力に富んで居る。（下略）

才媛詞藻

第六回懸賞文披露

和歌

佐々木信綱先生 選評

（天）　暑中休暇　　播磨明石櫻町波多野方　秦　常子

かへりきて村のわたしに舟まては

まづなつかしき河風ぞふく

横濱市壽町 關根方 長谷川さく子

（地）仝

友は皆國に皈りしこの夏を
ひとり都の宿に病みつゝ

信濃國諏訪郡 下諏訪町 岩波のち子

（人）螢

乳やらむやどをかさむと子等あまた
うちはかざして螢よぶなり

（秀逸）

◉螢 名古屋 岩田靖子
ちいさなる橋のたもとの鬚白き翁ひさぐゝよ螢すゞむし

◉同 芝 津田千代子
鍬洗ふ人影絶えて里川の水の上ひくゝ螢飛ふなり

◉同 山本清子
泣きて待つ子等なくさめん爲めにとて急ぐ家路に取る螢かな

◉同 名古屋 林千代子
なき人の柩送りてかへるさのみちてらして飛ぶ螢かな

◉同 名古屋 安福鈴子
今宵また畑を過ぎて橋こえて螢狩りにゆく里の子の群れ

◉同 長門 芦江露子
卯はら散る里の小川の夕暮に螢とふなり月はなくして

◉同 神戸 青木京子
人しれずもゆるおもいもあるものをなどかほたるのあらばなるらむ

◉同 神田 清水澄子
父上のかへりまちつゝ出てみれば有明月にほたるとぶなり

◉同 牛込 鈴木千枝子
ほこりかにうなかもてる紙つみしつみこほれてちるほたる哉

◉同 甲斐 渡邊よし子
夏毎にかへりなれたる故郷の山路にたかき蟬の聲哉

◉同 岩代 志賀季子
螢みにひと夜は來ませ我か窓は川にのぞみて前に田もあり

◉同 山口 草賀きくの子
得物顔にほたる一つを捕へきてかたるわらべのあいらしき哉

◉暑中休暇 西島きみ子
あなられし鎮守の杜はほの見えぬ杜の彼方に母やまちます

◉同 河内 たか子
父にやせてかへりし人を妹さむかへまつりぬ稲青き門

◉同 愛知 川崎よし子
夏休みあす歸らんと定むれは早くも夢に母さ語りぬ

◉同 横濱 戸倉のぶ子
父母の御肩なてつゝ面白きみやこ語りに夜ぞ更にける

◉同 小石川 近藤頼子
地圖ひらきいつこのあつささけんかと所えりする夏やすみかな

乙羽大人のみまかり玉ひければ 五郎川信久

殘されしとつ國々の道の記は
なききみ忍ふ種となりぬる

天の下限りしられぬ水くきを
あとに殘していにし君はや

◉螢　　肥前　吉田みれ子
なくこなば背負ひて立てる傍を風にみだれ螢とぶなり

◉同　　信州　小岩井愛子
水にさすかげより暮るゝ葦の葉に夕かぜ吹きて螢亂るゝ

◉同　　丹後　中西そわ
川ぎしの柳のかげにたゝずめば我袖ちかく螢とびくる

◉同　　信州　小岩井愛子
里川の眞菰かくれに一つ見え二つあらわれ螢とぶなり

◉同　　大阪　上村まづ子
いさら川きよきながれにさをさして螢かりせむ夏の夕ぐれ

◉同　　東京　臨屋直子
窓の戸に月のひかりと思ひしは螢なりけり夕ぐれの空

◉同　　山口　青山こさ子
わが窓の螢にはなん夏の夜にふたゝび文のひもをときけり

◉同　　芝　金山雪子
里の子の光をあてに小笹あげて螢追ふさま神の子のこと

◉同　　神戸　藤田鶴子
なつかしきむかしの人の面影見するは窓の螢なりけり

◉同　　伊勢　いはで
小女子の團扇の風にふかれつゝかげを流してゆく螢かな

◉同　　大阪　西島きみ子
浴みして團扇片手にさまよへば袂かすめて飛ぶ螢かな

◉同　　鹿兒島　土持とく子
なか〳〵にたもとにかよふ風よりもすゞしくまとふとぶほたるかな

◉同　　麹町　岡村しづ子
夕立のなごりの露の草むらにひかりをそえて螢とぶなり

◉同　　名古屋　音羽子
女の神の舞の衣と見ゆるまで闇を縫ひつゝ飛ぶ螢かな

◉同　　函館　梅田いし
花もなき名もなき里の草むらに時を得顔にとぶほたるかな

◉同　　滋賀　吉田倭文子
いにしへの人にならひて學べとかいさめかほにも飛ぶ螢哉

◉同　　名古屋　安藤鈴子
雨晴れし野らの小路を騒がしく螢狩る子等の群れてゆくかな

◉同　　横濱　萩原濱子
文學ぶともしさなしゝ人もありき光りは同じ螢なれども

◉同　　山形　鈴木さた子
己が影友さや見らん川面をのぼり下りて螢とぶなり

◉同　　石川　河崎あや
里の子のうちはのかせに追われきてすたれまくてに螢とふなり

◉同　　千葉　小出ひで子
あつめにし螢や籠にみちぬらんさとのうなゐのよろこびの聲

◉同　　和歌山　小池青葉
里の子が螢來よとてうたひ行く野べに月おち歸路遠し

◉同　　周防　安富直枝
空晴るゝ星の林に影そへて月の入江をとぶ螢哉

◉同　長崎　久世たゑ子
窓の外に螢とぶ見ゆ鳳金路をはしる車の宇治やすくらむ
◉同　本郷　小林靜香子
夕風にゆらくもすゝし川のへの柳の枝に螢みたれて
◉同　栃木　津久井みつ子
やま螢汝れよ來よかしやよ螢文よむ窓の栞りにやせん
◉同　信濃　碓田龜子
行く水に光りうつしてとぶ螢おのが影をや友と見るらん
◉同　東京　小川しげ
賤の子が田植がへりの菅笠をめぐり〳〵て螢飛ぶなり
◉同　近江　三井須磨子
久方の星の國にや入りぬらん何處もわかで螢追ひ來て
◉同　麴町　中　春子
夕さればほたるに道をたづねつゝ涼みにきませ木かくれの宿
◉同　名古屋　淺井雪子
かどの田の稻葉に露のほの見えて涼しくとぶ螢かな
◉同　芝　吉澤清子
飛ぶほたるいよ〳〵たかくなりにけりまれく少女をよそになしつゝ
◉同　石川　下平龍江
都人とひきて見ませ我さとの苗代小田にほたるとぶなり
◉同　磐城　内山ふさ
我家のありしあたりは野となりて夏草しげり螢とぶなり
◉同　大阪　井村はる子
かしましの里のうなゐかこえたゑてふけゆく野べにほたるとぶなり
◉同　悅子
やとはれて人は書見ぬあさち子にあたらほたるのかげぞ殘れる
◉同　長野　林さみ子
まどちかくとびかふほたるともし火の影をや友と思ひ來ぬらん
◉同　芝　杉浦信子
少さき妹が池にうかべし笹舟に夜は螢の光さしけり
◉同　群馬　生方賢子
母君の奥つき近くさまよへば水際の草に螢飛ぶなり
◉同　名古屋　伊東利子
蚊遣たく家居はなれて水きよき澤邊のあたりほたる飛ぶかな
◉同　下總　篠　多光
きこえのころほしかと見えて二つ三つあけゆくそらにとぶ螢哉
◉同　相模　松本やす子
行く水にゆられてうこくあしのかげ見ゆるあたりに螢とぶなり

竹柏漫言

佐々木信綱

春の名殘を惜みつる鶯も、み山の奥にかくれて、時鳥はそゞろに名のり出でぬ。暑さも一日〳〵に烈しうなりゆけば、諸孃の中には、都にあるは更なり、地方に在るも、あるは若葉すゞしき山かげの出湯に湯浴して、峯の松風に輕き袂を吹かせ、あるは波しろき海べに、清らなる眞砂ふみつゝ、磯つたひして夏をすぐす人も多かりなん。今は誠に旅行の好時期なりけり。

いでや旅行と歌とにつきて、聊か思ふふしを述べん。今こゝに人に向ひて、人生の快事は何ぞと問はゞ、大方は旅行と讀書とを擧げて之に答へ

ん。殊に旅行は、見聞を廣くし、かつは心をなぐさめ、かつは身をも健かにするものぞかし。されど三保の松原に遊びて、富士の白雪を望み、駿河灣に漕ぎよする艇の小舟を眺めて、只だうつくしさのみ稱へたりとも、あるは汐原の溫泉に宿かりて、湧ぎ出つる雲を眺め、岩に碎くる水を見て、只だ涼しさのみ唱へたりとも、其は誠に本意なき事どもなりけり。況してや其うつくしき山、淸らなる水の、長しへに心の底には殘らぬをや。うつくしき山きよらなる水を見て、永く之を後に傳へ、思を遣るものは、この歌をおきてある事なし。かの日々暇なき職をとりて、言の葉の道には縁遠き人の、旅にありて宜き景色に逢ひたる時など、かゝらん折に歌よむすべをだに知らば、如何ばかり嬉しからんなどいふを、しば〳〵聞けり。況して其道に遊び、其林を分くる諸嬢が、此夏の旅行に於きて、すぐれたる歌の材料を、海に山に拾ひえられん事こそ望ましけれ。

新體詩

妹の墓にまふでゝ

名古屋市皆戸町一丁目千代重方　林　千　代　子

（天）

時じくぬる、おくつきの、　あしたの風はつらくとも、
夢になさめそ人の世は、　猶わづらひの緊からむ。
君が好みし撫子は、　濃き紅に匂ひたり、
阿伽井の水は淸くして、　星も映るか宵々は。
つらき運命をぬけひでゝ、　天に歸りし君なれど、
あゝはかなしやしかすがに、　春や昔の忍ばるゝ。
春は花散る朝窓に、　暮れゆく春の香を悼み、
夏は川べの夕涼、　夜すがら興じむつれしを。
世がたりつきぬ小窓には、　冬の寒さも忘れしを。
さては淋しき秋風に、　うつし合すや筑紫琴、
つらき運命の人の世に、　君と別れて何かせむ、
戀に希望(のぞみ)もうらぶれて、　慰藉(なぐさめ)もなきわか身なり。
さばれわが世の慰藉は、　熱き涙にこもりたれ、
墓場の露は繁くとも、　やすき眠りのなくてやは。
時しぐぬるゝおくつきの、　あしたの風はつらくとも、
夢になさめそ人の世は、　猶わづらひの緊からむ。

野川の夕暮

信州松本町東之丁　小　岩　井　愛　子

（地）

ゆふべを告ぐる鐘の聲、　響く方より暮れ初めて、
しづかに垂るゝ夜の幕、　里の煙も見えぬとき。
堤づたひをうち連れて、　罪なきこゑに謳ひ行く、
里のわらべのひな歌も、　さほく畑にさざゝれぬ。
かしこの黑き森かげを、　かすかに漏るゝ燈火は、

梭の音ひゞく宿ならん、清けき歌もきこゆなり。
小川の水は絶え〳〵に、ほそき調にさゝやきて、
野末はろかに流れ行く、夕の歌をうたひつゝ。
そこに盡きせぬ響あり、そこに絶えせぬ調あり、
しづかに聞かば永劫の、神のみ聲もやどるらん。
あゝ誰か聞く小野川の、調も細きさゞらきを。
けがれ〳〵し人の子の、心もはるゝ思ひあり。

(人)

夕の磯

和歌山北田邊町 西村方　藤田いさを

入相つぐる鐘の音の、海面遙かにひゞくとき、
沖よりかへる海士の子の、ふなうた遠く日はくれぬ。

中空高くかゝりたる、入日の月はかげ淡く、
輝きそめぬきよらかに。

波は自然のつゞみうち、梢にかよふ松風に、
自然の琴のしらべあり。

あゝ、此の光仰ぐとき、
あゝ、この樂をきかんとき、

文章

(甲賞)

日記の一節

南筑　三毛野　須美子

六月十一日、きのふよりの雨けさは小降りになりぬ、櫻の君訪はれたまふ、四方山の話に打興しつゝ此頃の憂さも、雨と共にはれて、時の移るも覺えず、午後は歌よまんとて短册など取出たす、おのれ

枇杷の實も色つきそめて五月雨のふる日も近くなりにけるかな

とよみしに櫻の君、名所を知るか歌よみの能にもあるまじなど笑ひたまへど、えわからず、五月雨は君の目のあたりに來りたるには非ずやとのたまはせたるにてはしめてかわりぬ實に今日は入梅なりけり。

十二日、細雨濛々垣根の牽牛花のぶること寸餘

十三日、けふも

幼子か持てる飴武者、鉾先きのにぶりがちなる五月雨の頃

五月雨に庭の池水あふれいてゝおもはぬかたに魚ぞ遊べる

十四日、雨ふらず遲咲きの躑躅くさりて新芽の間に殘れるもあはれ、胡瓜畑には麥藁などしきたる茄子の五寸はかりになりたるに、早う竹そへたるもゆかし

十五日、天氣よれば野外に散策を試む、このもかのもの麥生皆かりつくしたるあとに、夏大豆の早や一尺許にも伸ひて、綠の波うたせて亘る風いと涼し、若葉かげすゝしき下に蒐しきて遊ふ里の子、紫陽花咲け

る垣根に草の葉食ふ猫の子何れか畫中のものたらさらん。

評 文簡淨にして事を叙するいとたくみなり

（乙賞）

日記の一ふし

名古屋南鍛冶屋町
三丁目十六番地 龜山音羽子

十二日、金曜日、晴渡る初夏の空は、拭びたるが如く一點の散雲だになく、そよと吹く朝風に未だ醒めやらぬ短夜の夢も、いと輕やかに身裝へしつゝ、食前の散歩えも言はれず、並一時間あまりは夏の命の杖とも柱とも、日に増し我は思ふなる。

學友露子の君、例の如く誘給ひはり、前七時十分家を出す、午後四時三十分歸宅、不在中家事何の障りも無き由。夜十時半眠りの床に就く。夜半二時頃警鐘夢を驚ろかし千種村との事、但燒失一ト棟、知己、朋友なく見舞ふべき家なし。

十三日、土曜、晏、前五時四十分起床、七時登校、露子の君常に増したる喜びの顔いと晴やかなり、何をか胸に抱かるゝにや。

後三時歸宅（但裁縫の爲め常より後れたり）

五時露子の君訪ばり文學の話に興を添へ、不知不識夜を更しぬ、十時三十分下女お竹露子樣の母君より宜敷との言傳を持ち歸れり、殊に露子の君よりも妾に宛たる玉章一文

（前略）失禮ながら手紙にて一寸お斷り申上候實は明日歌會に御同伴可致やう申上置候處昨夜東京より絹川の兄上樣御來名被遊色々取込事有之候まゝ缺席至度、先刻參上至し候も右御斷り申上ぐる筈なれども又おなぶり被遊候もやさ（下略）

右絹川樣とは露子樣結緣の兄上樣なる由、軈て聞く處並に記して後日の笑ひを買はんとぞする。

十四日、日曜、晴れ。

熱田の姉上より書面來ろ、廿一日の大祭に招かんとし情をこめられたる文意、父母の赦しを得、厚意を謝しお邪魔可致旨返事出す。

午前十一時弟の浴衣縫ひ終り、晝飯の後ち菅原町歌會に赴く、幸ひに入賞せり、來會者十六名ありて非常なる盛況なり、午後四時散會、露子の君居まさゞりしは物たらぬ心持せり。

歸途本町廣小路角にて三輌の腕車に出逢ふ、車上の主は、露子の君、絹川樣、跡なるは露子樣の母君たり、目禮して西と東に分る。

本夜女學世界六號、母上の乞により讀み、十時眠りに就く。

評 親切丁寧日記の文としてこれほどなるはなし

（丙賞）

夏のたのしみ

牛込 櫻井春子

玉の臺に起き伏して、世の貧と苦とを知らず顔なる、やんごとなき人々の榮華の夢を貪る大磯鎌倉の避暑地のたのしさは知らず。我は宇宙の神のまに〳〵還り來れる夏の自然の趣を歎はん哉。

人々は花染衣ぬぎ更へて、天地綠の装ひせる程、夏も未た若葉に隱れて時鳥の忍び音に二聲三聲なのるも哀れに、深山かくれに殘んの花を見出して春の名殘を覺ゆるもをかし。卯の花くだし五月雨の降りつゞく頃は、心もいとゞいぶせきものなれども、いつしか晴れわたれば、綠の稍

はいよゝまさり行きぬ。

朝。霧たちこめし林を縫ひ、置きわたせる草葉の露を拂ひて出づれば、稻葉にそよぐ朝風は肌心地よく我を迎ふるなり、東光の娘なるオーロラの、露けき野邊に紅の光一面に滿しゝ頃、入り殘れる星も光を收めて西の空微かに消え行くの時、いとゞ濡れたる裳揭げて立ち歸る、生けるが如き夏の清晨ぞ樂しきとの一つなりける。

晝。水無月の半、人は檐下三尺の陰を爭そひ、犬は喘々として柳陰に憩ふ、水乾き土燒け石熱したる今日此頃、老樹の枝は高く茂りて照る日の光微かに洩れ、細流淙々として石に私語き汀の若草を甜るの處、誰か兼好法師の「人遠き水草清き處にさまよひありきたる許り心慰むことはあらじ」の語を思ひ出さぬものあらん、實にかゝる所こそ夏にありては此上なう心地よきものなれ、綠の影、清しの汀、そよぐ涼風徐ろに美妙の樂を傳へて、パラダイスにさまよふの思ひせらるゝ處は、吾が世の夏も忘らるゝなり。

夕。夏の御神の賜物は將に是れ夕暮景色なるべし、瞬くひまに夕立の過ぎて跡なき庭の面、あるは打水に隅なく潤ひし庭の面、綠姫翠色の髮を梳りて草木の葉末は幾多の瑠璃に天眞の美を湛へ、楷を傳ふ風は涼しの袖を翻して、苔のむしろに月を宿せる露にもほへり、木の葉がくれにもゆる螢は乙女の戀にも似たるかな、淺茅が原、いさゝの流、淸風時に來りて水を甜り草を甜りて、後方の松翠を訪へば水聲玆に松籟と和して天津御神の琴の音か、最後に我が懷に入れば滿腔の苦悶は晝の暑さと共に自ら洗ひ去られて、不平不滿、中空に懸れる皎々たる月影よりも淸うなりぬ。

夜。人も家も野も山も水も皆眠りて、萬象深く神秘の幕に閉されぬ、水の如き月、玉の如き露、星の如き螢、我が夜ながらに思ひに沈み思ひを集し、水鷄しばなく萩草に、遠く蛙の聲聞けば無聲にまさる淋しさに、「眠」を誘ふ遠里に小野の水の音も冴えて、詩神の御魂は今や將に此の世に天降り給はんとすめり、嗟、歌人ならねど我は悟りぬ宇宙の「永刧」を、詩人ならねど我は知れり天地の「萬有」を。

あわれ〳〵、人は佐保姫の溫和艶麗なるを稱へ、龍田姫の閑雅清洒なるをほめて、春秋の優劣を爭へど、そは貫之の「春秋に思ひ亂れてわき兼ねつ、時につけつゝ移る心は」、兼好の「折にふれば何か哀れならざらん」といへる心を知らずして、徒らに「あつし」とのみいひて、夏の自然に接して夏の樂みあることを知らざるぞうたてき。

評　臨時增刊の懸賞文に全力をそゝぎたるためにや。こたびの「夏の樂」には、一つもこれはと思ふ文なきこそ遺憾なれ。この篇もさして感服すべきふしなけれども、なほ他の諸篇に比して、やゝ見處あれば、取り出でたる也。　（桂月）

（丙賞）

溫泉日記（一節）

陸中のかたほとり　福井かね

短かゝらぬ秋の夜も、きのふの疲れにや、ふすかとすればはや東雲の白み渡りて、向への林に鳴きさわぐ山鳥に、夢やぶられて起きいづれば、朝霧ふかくたち込めて、まがきに咲ける白菊の、みさほたゞしく世のちりに染まぬすがたぞ奥床し。やがて朝餉終る頃より、空はよく晴れてちりばかりの雲もなく、今朝迄は翼をおさめし蝶も、今は萩の花白菊と、飛びかふ樣ぞ愛らしき、われもきのふほのかに、大澤の溫泉に知る友あるを聞きて、かゝる日和りに尋ればやと、立ちいでしは八時過ぐる頃な

りき、日はうらゝかに照りそへて、萌ふく春の青柳にはあられど、おのれひとり風知り顔に打靡くさまいとをかし。行く手の小川には、雌鴨雄鴨の打よする波間に、餌をあさるさま繪にもかゝまほし。

斯くて豐澤の流れに添ひて山又山を廻りて行く程に、かなたこなたの枯野に、獨り尾花の哀れげなる、さては桔梗女郎花の、霜になやみて打しをれたる、かなたの山々は又一入、紅葉の錦織りなして、惜しきは妻戀ふ鹿の聲なきなり。歌よむわざも知るならば、などか興ある事ならん。草を刈る童にや、路の邊にやすらひたるに、大澤迄何程あるやと云へしに、南部訛りにて三丁餘りと答へしぞをかしき。獨進み行きて、大澤橋と云ふに至りけるに、いと怪しげなる音のすてければ、欄干に寄りて見下しに、木々の間にほの見えて、危うき岩角にたてたる水車小屋なりき。水は澤よりかけひをもて引けり、其様人の業とも見えず、寫眞の業もて寫し撮りて、物の本の口繪となさば、あまた名たゝる名所にも劣らざるべし。かくて程なく大澤の宿に着きぬ、大澤溫泉と筆太に書き付けたるかぶき門を通りぬけて、知る人いづこと尋ねつゝ、神の渡せるといふ橋を渡りて、左に折れて行く程に、今しがた茶を煮てありし其人の、面かげ露たがはねば、急ぎ行きておとなふに、思ひきや尋ぬる人吉田の君なりとは、吉田の君は先つ日より、兄君と共に入湯に此地に遊びしなり。

そも此大澤は鉛より一里餘りありて、一きわ景色すぐれしいでゆなり。豐澤の流にそふて、左右に建てつられたる數多の客小屋、紅葉なす山を前に控へ、又は後ろに負ひて、川の流に紅をちつすさま、得も言はれずあかぬ眺めなり。かなたの岸邊には　里の童の魚釣るとて、糸を垂れて打興じ、こなたの岸の草むらには、兒狗等が追ひつ退はれつ戯るゝなど、何れも罪なげなり、かくて彼の君と噂さ談しなむしつゝ居しが、先づ浴みし給へといふに、共に浴室に至り見れば、腐からざる湯槽は、底淺くして、溫度はことに微溫く、上に筧をもて溫泉を引きて瀧となし、是にて肩など打たせそこ〳〵に此所を立出ずるに、淸げなる乙女の、湯上り裝に丈なる黑髮なが〳〵と垂れて、風になぶられつゝ、橋の袂に寄り添へて、愁ひ顔なるも可愛ゆし。

評　叙事鮮麗

賞外佳作

◉夏のたのしみ

姫路　高井もと子

雪月花と云ふて、春秋冬は非常に世の人に受せらるゝが、自分は何だか此三季が嫌でならない。此三季が嫌でならない丈けそれだけ夏が好である。夏と云ふと暑い〳〵三伏の炎天や、赤痢や、蚊などの事が聯想されるべきであるが、自分はどうしても、そんな聯想が浮ばない、時鳥や、若葉や、蛙や、納凉が聯想されるので、夏のもの皆趣味津々として居る様に思はれるので、随て樂みが澤山あるのである。舟遊びも我樂の一である。朝早く弟と二人て程近い逸川の流に棹さすのである。弟が棹さしてをる間に自分はホーマーの詩集を讀む。自分が慣れない手に棹さしてをる間に、弟は涼しい聲で「風と波とに送られて、夏ものこらぬ船の中、ゑがほすゞしき松島わ、はやわが前に向ふなり」と船遊びの歌をうたふ。その聲が靜なあだりの天地に響いて、實に何とも云へない感を起さすのである。之が天の神が彈いておられる一百五絃の琴の音ではあるまいかといつもさう思ふので、しまいには我を忘れて棹さすのをも知らずにお

る事が度々である。やがて下流の棟の若葉が汀に茂つて涼しさうな處に船を繋ぐのである。我は其舟の中でホーマーの詩集を繰り返し／＼誦したり、又はスケッチブックに此神聖な景色や、弟の魚を釣つたり蝦を掬ふたりしておる其愛らしい後姿や、無邪氣なありさまを寫生したり、此仙境に感じた歌を書いたりしてゐるのである。

向ふの山を見ると、眞紅な旭の團々としたのが其茂つた山の樹の上に上つておる。恰も夜の罪惡を洗ひ清むるやうに。さして其山の麓一帶の地には、白いものが點々動いてゐる。それは神の子の羊が平和な生活を牧地に送猟つてゐるのである。上流の水車小屋ではのんきな歌が起つて來た。そして細帶の女が水汲に出た、そして東を向いて旭を拜んでゐる。實に短夜の名殘の景色がよくあらはれて云ふべからざる詩趣がある。

川面を吹いてくる風が露を含んだ棟の葉をゆすつて、そして我袖をあほつて何とも云へないよい心地である。弟は今鱗を釣り上げた。水平を破られた水は圓く波動を傳へ始めた。そして其波動一つ／＼が、旭に輝いてきら／＼としてゐる。弟は背白く光つて潑剌としてゐる鱗を手につかむで、滿面の笑みを以て一心にそれを見つめてゐる、風は水兵帽の後の垂れてゐる巾をあほつてゐる。實に運動シヤツの其無邪氣な姿は神の子ではあるまいかと、一種氣高い感に打たれた。我は此仙境に此樣な境遇を送つて居たいのである。此邪念も愛憎の念もない神聖な弟をいつはりの浮世に出したくないのである。星のやうに輝いて居る涼しい眼は天地の玄妙の理を悟り、芙蓉花のやうに薫つてゐる美しい唇はやがて宇宙自然の美を歌ふであらうと思ふと、大變弟の前途に希望の光を望まれるのである。など思つて寫生も詩集も忘れて遂には無心の境に彷徨してゐるのである。

實に此樂しい舟遊は我希望をつないでゐるのである。

◉日記の一節

米澤市　馬場春子

六月一日、いとよく晴れて暑さいみじ人々の花色衣惜むめるを心つよくも春に別れぬあしたの間オルガンなく校にいそぐ光子の君千代子の君ら早や例のロンテニスに興じゐ給ふとみに心悪らなりもて梓弓はりける網に心ひかれて思ひし氣はボールと共に空上りてオルガンの事むげに忘れける淺間し

夕方例の事すまして近きわたりそゞろありきす梢ふく風流の音さ交りつゝ暑さを洗ひてすが／＼しうす墨繪の愛宕山やゝくろむほどまどかなる月いづ花色に匂ふ樣さすがに春の月なめり

久方の桂の宮も春を惜み花の衣をぬぎがてに見ゆ

ふけゆくまた新樹にかゝりてれむたげなる月の影紫のおもさならねど志くものやある朧月夜に

二日、やゝくもれど降らず蛙の聲小川に高し午前夏子の君玉子の君そゝのかして日曜なれど校にものしぬ午後敎の親より御返しありいさうれしくてよみ行く末に今宵は月のよかりければ

今宵こそありし昔の教子も同じ心に月を見るらめ

さものし給ひけるあはれふかかりこそ夕ぐれ都の便に嘗て同鄕なりける乙羽氏の黄泉の旅に赴かれしさきいさゞ驚きぬ嗚呼そが記行を見るやいつならん夜さり光子の君來給ふ

三日、きのふに同じ文學史要の萬葉集にはくしいたかり志も眞卒なる雅音に當時の樣のしのばれてゆかし夕方雨少しふるまなくはるれ月影をかしく淸し

なめらかに梢すべりて夏草の露にやされる月の涼しさ

四日、あしたの間霧ふかうたちこめて愛宕山の消え殘りたる繪のごとく

なまめかし校にてさしたる事は家事の試驗なりしとクリケツトにかちしのみ夜ふけて又しも小雨しめやかに窓をさふさびし

五日、よべの雨なごりなう晴あたり一入あほみわたる

　宵の間の雨にいやます若緑うれしさ見てや狗もくるひる

あまりの清々しさにそゞろありきして

　綠こき木々の下路ふみ分けてあやしく忘る花のなもかけ

校にて數學の試驗なりけるうれしからず暮れはてゝ都なる榮子の君より消息ありかの君しすさめばわびざらましなと深山邊のおそ櫻巻き入れ送りけるがかへしさおほしく

　色も香も移ろいはてし都べにすさめさらめや故郷の花

などものし給ひつ又末に

　此ころは空のみしくれふる里なてらす月さへ見えずなりける

さは君か心の淺くやは獨り孤燈にむつびつゝ君や今しも故郷の夢路たどるゝかなどひとりごつほど浮世もはやれむめるなかすかに鐘のひびきわたるれよさの鐘さおもひし外響鐘なりけりあはたゝしう窓なし開けば名寺山のかげいさあかし小野川などにやとおそろしくて枕につきぬ

評　文はよけれど少し濃厚にきこゆるが疵なり

◉日記の一ふし

山口町　松田もえ子

五月廿九日朝七時、宿を立ち出でゝ停車場に至り、切符購ひて下り列車の、今か今かさ待つ程に、轟々として太き蛇の走せ來るが如く彼方に見へしが、次第に近よりて停車場の前に止まれり、乘り後れてはと急ぎ飛ひ入りしが、客は案外にも少くて、其處此處二三人つゝなり、七時卅七分滊車動き始め、富海の町をあとにしてけわしき崖の邊を過ぐること長し、其前面は波穩かなる海鏡の如く、章魚壷乘せし舟の繋かるもの幾つ、土方の三三五五群れ働ける、さだかに見わかぬ際に去りて迎へ出つる小松原の綠濃し、右手向に禿山の連れるは、松崎公園にて今工事中なり、三年四年の後は都の上野岡山の偕樂園にも優る眺めさなりて、みやひさの杖も絕えさるべし、七時五十二分三田尻驛に着く、

下車して波止場に出づ、數多の船出つるもあり、入るもあり、止まるもあり、其樣を眺めて唯獨ぼつれんさしてありしが、サツと海の面洗ふて吹き來る風に促されて踵をめぐらし、住吉神社に詣で、開地に出てぬ軒を並らべし赤行燈、身を賣る乙女の住へる館數十、實に此等の里には大和の厨の手ぶり如何にや、身は浮鳥の羽露とも知らぬもののみなるべき、されど中には道知らぬかどわかしの爲めに泣けるのあるべく、親の困苦救はむが爲めに此處に投げしもあるべし、かゝる不幸は中々に忍び得られつべくもあらず、異樣の感に打たれつゝ此處を過さて再び停車場に出てぬ、

十時廿八分滊車に乘る、暫しがひまに車塚の森は見へすなりぬ、ふと思ひ浮びしは、過る年弟が急症のとき願掛け平癒せしとて、母の常に念じ玉ふ其稻荷の祀なるに、已れはぬかりよそに詣つるとな、かくて滊車の窓には麥刈、蝙蝠傘、小川、山林、茅屋、白壁、小學校、墓地さては蝶のあふなげに舞ひ、燕の健かに飛ふなど、入り替り〳〵宛然活動寫眞を見る心地せらる、十時卅七分佐波川を渡る、橋の上に非常に美しき旗樹てられたり何にするものか知らす、その下には川舟四五隻止り居れり、勾配やゝけはしくなり滊車いと迅し、繁枝の松原か過さて大道に着き止まると少時、又動く、五十三分長澤の堤畔を通り椹野川を渡り小郡停車場につきしは十一時三分なり、

下りて茶店に憩ふと暫時にして立ち出でしが、暑はげしく、かてゝ加

へて風立ちて塵砂吹き捲くにぞ腕車を命じぬ、ほろの内にて何時夢とやなりけむ見覺むれば、はや我宿の門なり、入りて家の人に挨拶なし居る時午後二時を報ず、

評　文詞流麗にして、見る所の實景、之れに對する感想を寫し得て妙、日記としては、理想のみを織れる文よりは、却て此文の如く寫實的なるものをこそ、望ましけれ、

◉夏のたのしみ

横濱　一花女

いつしかと待ち渡りし夏は來にけり。學びのまども閉ざされて、おのがまどたのしき家庭にかへるべくなりぬ。妾も亦此數に洩れざりしは、げに嬉とも〳〵譬ふる樣なくてなむ。

花咲き匂ふ春の空、月すみ渡る秋の夜半、皆とり〳〵に樂しけれど、我等もの學びする身には夏ばかり樂しきはなし。まことやつかのまも忘れぬ垂乳根、同胞の豊なるかんばせ愛らしき姿親しく拜みつゝ、朝はさく草葉の露をふみしだき、弟妹と袂連れて朝顔の花を賞まし、池水に浮べる魚に餌をなげつ、僕の好むは此鯉よ、妾のは此金魚よと嬉々する樣も、愛らしく樂し、松の木の間の月影をはしゐにめでつ、父母の御肩撫でつゝ、くさ〳〵の都語りに夜を更かし、あるは打連れたちて磯邊にそゞろありきし、松風のしらべに和して歌ふも面白し。雨降り暮す日は、たれ籠めて、馴れし妻琴かきならし、懐舊の袖をしぼり、あるは昔の友垣たづれあひ、ほど近き澤邊の螢狩などに過す間の樂しさ、げに筆にも及さずなん。

あはれ紅匂ふ花かげ、さやけき月の下も、たらちれ同胞と睦びつゝもてあそばんには、此夏の日にもまして樂しからましや。かく放れたる身にはいとゞ故郷しのぶくさはひともなりていとゞ心淋しくおぼゆるぞ是非なき。嗚呼實に樂しきは夏の日にこそ。

◉日記の一ふし

姫路　高井もと子

六月九日。

間近き家の水汲む音に短夜の夢破られて蚊帳を出づ。床を上げ室を掃ひなどするに、朝の蚊の幽にうなりつゝ、擔の方へと飛び行くも今更に哀深し。

口すゝぎして例の産土神に詣づ。短夜の名殘りか、街燈は眠氣にしばたゝひて、殘の月は影淡く手柄山にかゝり、まだく夢より醒めざる市民を守れるがごとし。此靜かなる町を通りて社に詣で神寂びたる拜殿に額けば、葉櫻吹く朝風の身にしみて、何となう嚴かに覺えらるゝに、異郷の空にある友垣の目出たく業なしおへて歸り來む事など祈りまつりて歸る。

朝餉ものして庭を見まはるに菖蒲の美しく咲きてありければ、

今更に手折るは惜しゝされど〳〵
其露汲みて歌書き見ばや

と誦して之を手折りて歸る。床に活けて其前に文机を移し女學世界を讀む。

八時頃、親しき友のかづ子の君來給ふ。明け放なちたる書齋の椽に出でゝ、共に女學世界の事に就きて語る。庭の若葉越しに見ゆる隣家の鯉幟は風を孕みて東西にひるがへり、矢車は勇しき響をなして廻るさま實に趣味ありなど話し給ふ。やがて十一時頃歸り給ふ。

萱餉ものしける時、三崎の友より手紙來る其端に昨宵夢に得しとて歌かゝれたり。

見下ろせど君が居村はそれと分かず
　　立てる夕霧悲しくなりし

庭に下りて金魚の水を代ゆ。今年六歳になれる弟、曾て教へやりし少年世界の話の中にありし歌の「九力は戸を明けたくは思へども父の添寢に母の手枕」と云ふ歌を誦しつゝ來りて、金魚の話してと云ふに、やがてのほりて話しけるに何時とは知らず寢入りてありぬ。軒の風鈴なりて、打水せし庭の植込を吹き來る風の涼しければ、端近く食卓を移して夕餉の膳につく。やがてたうべて植木棚の葱、蘭、夕顏などに水を遣る。

日の入る頃かづ子の君來給ふに十二所神社の夜店に植木求めんと共に出つ。歸りて直に蚊帳を釣り、灯を植込に移して椽に涼む。妹の釣りてよと持ち來し走馬燈に灯して、風鈴の傍に釣りて、星の話しなどして聞かす。何所より來にけむ螢の一つ飛びて蚊帳にとまりたれば、暫し見惚れてあるに、不意に柴折戸開くものありて聲しければ、振向きしに弟の螢とりて笑ましげに歸れるなり。やがて蚊帳に入りしに、あたりの小田になく蛙の聲一きはしきりにて、折々は里人の夜水とる聲幽に聞えぬ。

◉日記の一ふし　（箱根旅行）

本郷　高野ふみ子

二十日、朝つとめて起きぬ、空よく晴れ渡れり、けふは大地獄に赴かんとて舟をもとめて湖水を渡る。舟は權現の森を右に見て漕ぎめぐるに、その東岸は駒が嶽冠が嶽の麓にして奇巖苔むし蔦かつらの纏へる老樹は岸の水面に臨み、今にも倒るらん許りに見え、また巨石の落ちかゝりたるが漸く樹木の根にさゝへられたる樣、えもいはず面白し。向ひは幾重となく疊みなせる芝山の湖水を圍み、水の面は塵ひとつなくていと清らなり

あしのうみさ名には呼へさも水清し
　　山もさやけしはしき水海

山々のあはひより富士の高根の一きわ近く聳ノ立てるさま、ゆかしとやいはまし、なつかしとやいはまし。山影は倒しまに湖水にうつりて面白し

舟うけて我こきゆけは水底の
　　かげも流るゝふじの芝山

吹き來る風に硫黄の香のするは、はや大涌谷に近けばなるべし、やゝありて舟岸に着きぬ。山籠に乘りて行く、此のあたりは冠山の裾野にて廣き小笹原なり、尾花の中に打まじりて種々の花など咲出でゝいとをかし、富士が根は尙左りの方に聳へたり、此の原を登り果てゝ少しく下れば姥子の湯なり、路いと細うなりて左右は悉く馬醉木の林なり、此の木は萬葉集などによまれたれば籠より下りて林の中を行きめぐりありきぬ、花の頃いかゞあらん、なつかしゝ、此處を過ぐれば大地獄なり、馬醉木は硫黄の火の爲めに、白く幹枯れてのみ立てるあり、打倒れたるあり、硫黄の火は此處彼處の山の裾、または路の行く手の左右いづくともなく燃え出でゝ我が歩み行く足の爪先きのほどりよりも火燃え出でなどして、物凄きといはむ方なし。此のあたりは、あだし草はなくて、虎杖のみぞ生ひ出つ、今を盛りと花咲き匂へり

燃ゆる火の中とも知らで咲き出でし
　いたとりの花ぞあわれなりける

さて硫黃の燃え果てたる石の上を踏み渡り、からうじて山を下る、路凡そ十四五丁ばかりならん、こゝより又た籠に乘りて宮城野を打過ぐ、萩多く生ひ茂りたれど花いまだ咲かず。このあたりより相模の海いとよく見ゆ、金槐集の著者が『伊豆の小島に波のよる見る』とよみたりしは此處ならねど坐ろに思ひ出でらるゝになん（下略）かくて夕暮に旅舍に歸りぬ

評　敍事精細

◉日記の一ふし

横濱市　荻原濱子

五月二十七日　よく晴れたり

朝、母君の、み供して汽車に乘る。さるは十七日より大磯に病ひを養ひ給へる父君のみもとに赴かんとてなり。茅が崎あたりに愛らしき草花の敷きたらんことあるを見て

妹のつとにせましを、を車の窓のそとものくれなゐの花

名を知らぬに形さへよくはえわかず、急がるゝ心にも、こゝのみは早き車のなか／＼に恨めしかりき、誰が籠の中にか摘み入れられんとすらん、いづこの童にか、もてあそばれんとすらん。

大磯につけば停車場に父君ゐましたり、やゝこゝろよげに見え給ふこそ嬉しけれ、車急がせて鳴立澤のほとりなるみ宿にゆくに、まづ妹の眼のなやみを問ひ給ふ、はじめより心もとなきものにし給へるなれば『やゝ輕くなり侍りて此頃はくすしのもとに行くことも日に一度のみに侍り』ときこゆればいと喜び給ふ。晝すぎ海邊に彳みて見渡すに、あやにくに富士の嶺は雲に隱れて見えぬものから例の心地よき景色にて、絶えず寄

せかへる涙の何なが云ふらむ様に思はる、岩の上にやすらひつゝ、この地に湘煙女史みまかり給ひて近き程に、はふりの式を行はるゝが、あはれそのざえの百の一だに、わが如き者に殘していに給はましかば、殊に御齢も老いたりなど云ふきはにはおはさゞりしを思ひ、はた、我身去年の夏は、親しき友とそのなりどころにやどりゐて、日々このあたりゆきかへりつゝ歌語りもなしぬ、歌もよみぬ、日記を『姫百合』に寄せて、その十頁ほどを埋めぬ、あはれ今年のわれはいかに、今日も歌はならで鉛筆の手まさぐりのみぞ、なほ變らざりけるよと思ひ、さては、その頃は父君もすこやかにおはしましき、など思ひ續くるひまに、いづこより來し人にか、幼き男兒二人三人ゐたるが、紙鳶をあげんと云ふにそこよりこゝより、ところの人と見ゆる、その子と思はるゝ、など集ひ來て聲の中に紙鳶は中空に舞ひのぼりぬ。夕さり御暇申して汽車に乘る、

夕ばえの雲流れゆく海原を眺めゐまさむ、たゞひとりして

我等のみなりし室の中に、藤澤より男女の西洋人六人乘りたれば、とみに賑しくさへなりたるに、鞄開きて、酒や、パンや、菓物やと、とりでゝあるは語り、あるは笑ひ、あるはうたひ、遂にらうがはしさにえ堪へずなりぬ。わが國の婦人の弱點を數へて、外國ぶりをたゝふる人もあれど、この國にしてかゝる有樣の女のみいで來なば、いかにかせんとすらん、うべ中庸はえ難きものかなと、かたはら痛くも、をかしくも思ふまに、横濱々の聲は窓の外に聞えつゝ、かれもわれも人の中につゝまれて別れぬ。

◉日記の一ふし

さみ子

五月十九日、きのふの雨拭ひたらんやうに晴れてけふは稀なる好き天氣

なり
朝餉終りて庭に出で見れば、白く氣高かりし梨の花は日のあめに洗はれて、名殘りなふ散りうせ、池の邊には花菖蒲優しき笑を洩し初めてありき、ゆかりの色なるも捨つべきにあられど、我は白きをこそ一入なつかしく覺えぬ、そは亡き父上の世の塵にも染まで淸く美はしければとてこよなふ愛で給ひし花なればなり
花はよし一たび散るとも時だに來れば又去年に變はらず、美はしう咲き匂ふものを愛でたまひし父上は、幾とせ待つとも皈りまさぬかと思へばそゞろかなしうなりて眼には怪しき露さへ浮びぬ
それよせめてはとて中には美はしきを二もと三本手折りて御靈の前に手向けまゐらせてき。

◉日記の一ふし

牛込　櫻井春子

六月十日。朝霧深う綠の梢を立ちこめて晴天の兆を呈しぬ。我はおとゝ日、學の窓を引きてより餘りに物憂かりければ、明日の日曜を幸ひにさて、故郷なる妹の屢々書をよせて、螢を眺め、青葉の綠りなど告げおこせたるまゝ、紅塵百尺の都を出でゝ、汽車の便りに上野より一時間ばかりにして故郷に來りしも、今日はいかにしても都に歸らざるべからざる日なりけり、暑中休暇も近ければさはいへ、積る話の半ばをもせずして徒らにあかぬ別れせんも心ぐるしければ、我は妹の課業を終へて歸るを待つことゝ心定めぬ。

我は獨り庭になり立ちて、綠したゝる木影に持ち來し書ども開けども、妹のはや歸り來らんをのみ待ち詫びて、暫しまどろまんとすれどもまどろまず、淸き池水、綠の梢、我幼なかりし折、妹と共に遊ひ、共に歌ひたる様は、昔ながらに忍ばれて、懷舊の情胸を打て起りぬ。あはれ此の庭、此の水のほとり、此の木のもとに、春も夏も秋も冬も來りて、好める歌集ひもときて情を天地に訴へしこと幾度、あやめもわかぬ戀になきしこともと幾度、あゝ思へば昔の夢なりけり、今唯一人苦むせる木の根に倚れば、妹のことのみ思ひ浮ばれて何事も覺えず、歸り來なばいかなる話して聞かせん、如何なる話を聞かんかなど、心とみにかき亂されてくるし。

やがて妹は歸りぬ、袴をも解かで我が傍らに來りぬ、嬉しきまゝにそこはかとなく物語せしことゞも、筆に記さんも煩はし、されど妹の幼なきにも似ずけなげなることは、我れ「此の次の休暇に歸らん折の土産は何ぞ」と問ひしとき、「女學世界も給はりてよ、其他我等の爲になるべき書二いろ三いろ」といふ、年は二八の春を送りたれど、髮の飾、着物の事など一言もいはぬは我が愛情をして益高かまらしむるのみなり。

盡きぬ物語に此頃の長き日もはや傾きて、暮影四方を襲ひ、風は二人の袖を拂ひて燈頃ともなりぬれば、飽かぬ別れにはあれど、我は暇を告げて立ち出づれば、妹は「停車場までも送り參らせん」といふ、その情の切なるまゝに辭み難く、さらばとて共に停車場に至りて、上り列車に乘り込めば、妹もプラットホームまで來りて、懇ろに別れの辭をのぶるもはや涙ぐみたるなり。

又と逢はれぬ別にはあられど、胸もさけんはかりなるつらさは我のみにあらざるべし、汽笛一聲緩く汽車は歩み出しぬ、あはれ妹の姿は涙の中に見えずなりぬ、我は唯窓に倚りて故郷の空のみうち眺ゆ、この一日二日の事どもを繰り返すばかりなり、夢に夢みし心地して、いつしか汽車は上野に着きければ、それより車を驅りて寓に歸れは、傳通院の鐘の音微かに響きて、友に送らん土産にとて持ち來りし螢は、昨夜に變らず籠

の中に光れども、見る人の我のみなるはいとゞ思の種なりし、あはれ今宵の夢はいづこの山を廻るらん、いづこの水をあさるらん、ふる郷の山故さとの水ならでやは。

◉磯のゆふべ

わかやま　いさを

父上母上にともなはれて、故郷とほく旅のそら、こゝ並木の松のしたかげに宿りとめて、住まふ身となりしより、早や、三とせを經ぬ。長くもあらぬこの月日の間に、など、我が身にかなしみごとの、かくまで多きことぞや。秋の空、しぐるゝ雁の音づれは、兄上の東のみやこにてはかなくなりたまひしことを傳へ。春のくれつかた、落花ゆく方にまよふ夕まぐれ、いとなつかしき我が妹は、かへらぬ旅に出で立ちぬ。あはれ、これ等のことども思ひ出づるごとに、人の命のつらつらはかなく思はれて、打ちなきつ。よせてはかへす白波に、我が身をまかさむことの、いかに幸多きことならんと、思ひしことも幾そたび。松の下露こぼれては、我がそでゆらし、無限のあらしふきあれては、我が心をさはがす。たのしと思ふ日は一日ともなく、三年むかしの心は、いづこへやら、かはりはてたる我がこゝろ。あゝ、それにつけてもかはらぬは、波、楢にかよふ松風、青き廣き海原なりける。

あゝ、なつかしき此の景色、我れの兄上妹を忘れ得ぬかぎりは、片時も忘れ得じ。今日もまたいつしか、白花さきにほふ岩頭に立ちて、夕ぐれの景色を、ひとりながめつゝあるなり。

やゝ紅帶びたる夕陽は、淡路島の上、一間あまりの所にかゝりぬ。しづけき夕なぎの海面に、その影をおとして、かなたより我が足下まで、金色にかゞやけるまばゆき太き橋をかけぬ。ゆら〳〵とゆらめきて、さながら浮べるが如くなり。

夕陽は山の端に近づくに隨ひ、いよ〳〵大きくなりまさり、よう〳〵その光を收め、ます〳〵色は紅にそまり行くめり。四方のそらうすくれなゐにゝほひ。中空たかく浮べる片雲、あるは紅のそでをかざし、あるはこむらさきのすそを曳く。海の面も、光りゆく色くさぐさに、うるはしともうるはし。

光線は全く收まりて、紅玉かともうたがはるゝ、火の球のごとき夕陽は、今かくれそめぬ。浮橋いつしか碎けて、海一面にちりぬ。

我れの立てる巖も、我が手も、足も、衣服も、かいくれなゐにもえたちぬ。右なる松江の濱も、左なる雜賀の岬も、後なる松原も、其の間にみえみえすみする我が家も、皆最後の光をうけて、異樣の色に掩はれはてぬ。葛城の連峯紫にゝほひ、紀州富士藍色にかすめり。あゝ、美なるかなこの景色、さびしくかなしみのある今の心を以てながむるも、すでにかくの如し、昔の我れなりせば……………あゝ如何に。妹の手を携へ、兄上に導かれて、此の景色賞せむは何時！

自然の神の美妙なる筆もて、ゑがきたまひし一幅の繪畫とも見て、我が心をなぐさめむ、いつまでも長くこのまゝにあらむことを祈りつゝ、獨りながめ居る程に、夕陽はいつしか、西の空に餘紅をとゞめて、沈みはてぬ。移りゆく西のそら、波の色、雲の光、あゝ、今しばらくもがな。

水と天と接したる所、けぢめ漸くわかずなりて、暮烟たちそめぬ。刻一刻ひろごり來りて、早や我が世をつゝみ了りたり。白帆あはく、ふなうた遠し。

萬象はやがてうすゞみ色にそめられつ、夜の神は、この世を治めそめけり。そがまとへる暗のころもを、かざらむとてか、今さめ出でし星のか

すゞ〳〵、八日の月、淡く光を放ちぬ。

あはれ、この清き光を仰ぎ見しとき、夕榮の景色に醉ひ居し我れは、始めてさめぬ。我れ未だこゝにありしか、家に居ませる母上は、さぞや待ち佗びたまふらむ。されど、されど、我れは、此のうつくしき靜けきながめを捨てゝ、歸るに忍びず。

あなあはれ、

いつしか我れは泣けるなり。

大波小波に自然のつゞみうたせては、梢にかよふ松風に、琴のしらべもあるなれど。

おゝ、兄上よ、妹よと、我しらずさけびしとき、遙かに我が名を呼ぶこゑきこえぬ。驚きて耳そばだつれば、まさしく母上なり。あゝ我れしらざりき、我れしらざりき、許したまはれ母上よ、いざ我れかへらむ。さらば、さらば、海よ、波よ。

覺へずそらを仰げば、光をませる月、またゝく星、何となう、心ありげに。

◉山家の夏夕

茨城　山口すみ

晝の暑さの堪へがたきに待ちわびにしそよとの風もおとづれず送る扇の風もぬるみて如何はせましとかこつ折柄日は漸く西の端山に傾きそめぬ、いでや此折水打まかむと幼き妹そゝのかしてたすきあやどりもすそからげてそこゝゝとわからなく水打まくに庭の面むさながら空に知られぬ夕立のなごり覺へて晝の暑さにしぼみ果てし草葉の惠みの露にうるほひて緑いやまし時得顔なるこそうれしけれ、早やもこなたへとの母君の御言葉にいそぎ足そゝぎ湯あみすまして定めの席にいたれば、妹はいたく勞やしけむ母君の膝にもたれて庭の面ながめつゝありしが何見とめけむ「あれ螢がとつてよ」と叫ぶにと見ればあなうれしみ空高くぬるゝばかり涼しき月のいつの程にかさし昇りけむやり水の名殘の露に光宿して螢とまがふこそ見るからにいとすが〳〵し、妹は庭に下り立ちしが「あら水なのよ」と不興顔なるも又をかし兄君は月の光の水にうつりし事どもたやすくとき聞すれば悟りやしけむみ空仰ぎつゝ「お月樣はいゝ子ね」などうれしげなるも罪なしや折からそよ吹く風も樂しき念の中戀しくてやおもむろにゆかしき香りはなちつゝ音も靜かに吹き通ふこそやさしけれ、父君は常になう笑ましげに今宵は月いたく冴へたればいかで日の宴開かばやとのたまふに心もとみに勇み立ちて近きわたりの唯彼よび迎ひ咲き匂ふ夕顔棚の下陰に芝生をしとねにまとゐして日をめづれば葉末の露玉とかゞやきて美はしさいはん方なし、折から彼方の森陰に調べ妙なる笛の音きこえぬゆかしき君の手すさびやと耳かたぶくれば月はいよ〳〵澄み渡り下を流るゝ小川の水の音と調べ合して節いとゞ面白かりしに、あな面にくや一群の蚊軍閧を作りて攻め寄せければ人々堪へ難くて顔しかめ或は團扇もてたゝくなどにわかの狼狽たとしへなつかし、母上は早くも蚊遣りたき給へど中々にひるむ色なく先陣後陣とつぎ〳〵に攻め立られ果ては人々困じはてけむ松杉の落葉かきあつめて火をはなてばむら〳〵と立昇る烟りにさしもの强敵も叶はじとや思ひけむ隊伍亂してのがれ出るこそいと〳〵氣味よけれ、父君も手作の酒かたむけつゝ甘露〳〵と舌打ならし給へばよりつどへる人々も己が自〻ざれ言いひつゝ打興ずるも樂しけれ、實に黄金をのべし高殿金樓に山海の珍味を集めて開く月の宴にもいかでか劣らんとぞおぼゆる、時しも彼に繁げる草むらの中より節面白く鳴き出たる虫の自然の聲のたくみなるに心奪はれ如何なる虫のしらべにやあはれ見まほしと足音ぬすみつゝ、こゝなんめりと手を出せば虫の音はたと絶へてはるかあなたに又鳴きいでしこそいと腹立しう

なむ、こたびこそはよもやとて露ふみしだき音に誘はれて歩みよれば又もたぶらかされし口惜さよ、尋れあぐみてたゝずめは夜や更けぬらむ月はいつしかひくき山の端の松にかゝりて青白う見ゆるに父母君のいひ給ふもきかでさまてはとて人々の歸り行くにいそぎ立もどりそこゝ取かたづけぬ、いでやありし事どもかいつけて置ばやと文机にむかへしにいぎたなき身のひたぶるにねぶたくて筆もつ手もいつか夢路たどりしにはたゝ〱と水鷄の音に驚されて窓おせば都人の夜も得ねむらで待つなむ山ほとゝぎすの雲間がくれに名のりいでしこそ實に〱うれしき極みにはありけれ

◎日記の一ふし

赤間關　五條橋　はる子

六月六日

昨日にかへて、よくはれたり。

向ふの山の背より、雲の峰あらはる。

暑さまさりたるやふなり。

東京の姉上より手紙來る。

かれて賴みおきたる浴衣地に、暑中見舞のしるしとして、銀簪添へて、小包郵便にて送りたりとの知せなり。

晝食前、父上あまり鬱陶しとて、青々とよく茂りたる庭の樫を、幹の半はころより切り取り給ふ。

あとにふとき木は、たゝ千代かへぬ玉椿のみとなりぬ。

樫の葉をとりて、粽にしらへてと、妹は母をせめけり。

午過ぐるころ、隣家の淺子さま來給ふ。

二階に伴ひて、琴の稽古を始む。

眠氣催ふして面白からず。

下女のお石、姉上よりの小包を持ちて來たる。

中には、知らせ通り、浴衣地に、鉦を打ち出したる、銀簪とありぬ。

淺子樣は、浴衣地の形摸樣好ましとて、姉樣に賴みて買ひもとめてよと云ひ給いぬ。

妾は浴衣地よりは、銀簪の方をうれしく思ひぬ。

隣室に笑ひ聲きこゆ。

淺子樣は驚きたる樣に、崩したる膝正して、妾の顏を凝視め給ひぬ。

妾も可笑しくて笑ひぬ。

淺子樣もともに笑ひ給ふ。

襖を開けて、入り給ひしは兄上の友にて、淺子樣とも知り合ひの山田さまなり。

馬關每日新聞に歌を募集し居れば、出し給はずやと勸め給ひぬ。

母上の命によりお石、御茶と菓子とを持ちて來る。

兄上は門司に行き給いて留守なり。

山田樣は、歌の話などなし給ひしかども記さず。

母上入り來給ふ。

すゝめによりて、吳竹を彈く。

夜に入りて、兄上歸へり給ひしが、連れの人ありて、直に出て行き給ひぬ。

父上に連れられて、龜山に參詣す。

見るべきものなし。

歸途商工館にたちより、德富芦花著の、思ひ出の記を求む。

綴りたる日本新聞の、哲人の家庭を讀む。

初めて蚊帳をつる。

床に入りしは、十時を少し過ぐるころなりき。

懸賞文募集

本誌は初號以來『才媛詞藻』の欄を設け賞を懸けて廣く才媛の詞章を募集し來りしが、今回より改めて毎回必らず文題を設くる事となしぬ。其の選評者は孰れも國文學界の泰山北斗とも稱すべき大家先生也、海内の才媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄されんことを

八月分月題左の如し（〆切七月十五日）

すゞみ臺（廿四字詰百行以内）

（すゞみ臺なる下に各自の偶感を記して送られたし文体随意）

（賞　甲　一人（圖書切符）金貳圓
　　　乙　二人（仝）金壹圓
（品　丙　三人（仝）金五十錢

和歌兼題（〆切七月十五日）

扇　納涼

（天、地、人、三名選び前掲賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本書は女子の手に成れる投稿を歡迎す

一、投書の種類は文草（文體は國文及普通文に限る）詩歌（新體詩及短歌今樣の類）小説は優美にして卑猥ならざるもの等とす

一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る

一、投書の用紙は半紙二ツ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る

一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す

一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること

一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

（寄稿募集）本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の狀況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の狀況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

學事

東京裁縫女學校

東京裁縫女學校は本郷區東竹町卅五番地に在り校長は渡邊辰五郎氏にして曩に共立女子職業學校裁縫科教師として老練家の聞へ高き人なり。同校は和洋裁縫特思者の爲めに設くるものにして併せて隨意科として英語禮法、家事、經濟、教育學、算術、刺繡、國語、漢文、生花、茶道、編物を教授し其の本科卒業生には各小學校裁縫科正敎員同等の學力を授け、其の高等科卒業生には各高等女學校及女子師範學校裁縫科教員たらんとする者の資格を養成すべしといふ、同校は去三十二年の創立にして開校未だ日の淺きに拘らず目下通學生寄宿生を合せて約八百名に上り、私立女學校中屈指の稱あり。左に同校の規則を掲ぐ、

私立東京裁縫女學校規則

◎學科　本校教程を本科速成科高等科の三種に分つ

◎本科　本科は初學者の爲めに設くるものにして二ヶ年を以て卒業せしむ

◎速成科　速成科は普通裁縫を修業せしものをして補修せしめんが爲に設くるものにして生徒の技倆に依り六ヶ月以上一ヶ年以下に於て卒業せしむ

◎高等科　高等科は裁縫科教員をして衣服全般に付き補修せしめんが爲めに設くるものにして高等科程度表に依り和洋服裁縫を教授するものにして生徒の技倆に依り六ヶ月以上一ヶ年以下に於て卒業せしむ

◎試驗　本科は一ヶ年二週進級試驗を行ひ二ヶ年の終りに於て卒業試驗を行ふ

但し品行方正學術優等の者には教員會議の上無試驗進級せしむ速成科は滿六ヶ月間在學し程度表皆濟の者に下試驗を行ひ合格者に限り卒業試驗を行ふ

但し滿六ヶ月間在學の者と雖も多缺者は下試驗に應ずるを得ず高等科にありては滿六ヶ月間在學し程度表皆濟の者に限り卒業試驗を行ふ

但し滿六ヶ月間在學の者と雖も多缺者は受驗するを得ず六ヶ月間に於て十五日以上缺席せるものを多缺者とす

◎卒業生の學生　本科を卒業したるものは小學校裁縫科正教員同當の學力を有するものにして本校設置の高等科に編入するを得

速成科卒業は本科卒業に同じ

高等科卒業生は高等女學校女子師範學校の裁縫科教員以上の學力を有す

◎授業時間　授業時間は午前八時より午後四時迄とす

但し時宜に依り伸縮するをある可し

◉入學及び退學（入學期は別に之を定めず入學試驗を不要）本科に入學せんと欲するものは高等小學二年級を卒へたる十四歲以上の婦女子に限る

速成科に入學せんと欲するものは高等小學二年級以上の學科を修めたる十八歲以上の婦女子に限る

高等科に入學せんと欲するものは本校設置の本科又は速成科を卒業したるものか或は裁縫科正教員たるの資格か有するものに限る

但し本校に於て本校設置の本科或は速成科と同等以上の學力を有するものと認むるときは假編入を許す

假編入生に對しては在學中試驗の上編入を許可す

各科とも入學を許可せされたるときは第一號書式に依り入學證書に束修月謝を添へ事務所へ差出す可し

保證人たる可きものは東京市內に一家計を立つる成年者たる可し

各科とも本校設置の隨意科を兼修するを得

生徒隨意科を兼修せんと欲するものは兼修願を事務所へ差出す可し

退學せんと欲するものは第二號書式に依り願書を事務所へ差出す可し

◉賞罰（略す）

◉學費 束修月謝左の如し

束　修　金壹圓

（月　謝）

本　科　金壹圓

速成科　金壹圓五拾錢

高等科　金貳圓

隨意月謝左の如し

一科に付　金參拾錢

隨意科中月謝を要するもの左の如し

禮法、刺繡、生花、茶道、編物

隨意科中月謝を不要もの左の如し

英語、國語、漢文、算術、家事經濟、教育、習字、

二ヶ月間月謝未納の者は除名す

生徒十五日以後に入學するも規定の月謝を納む可きものとす

教程表

科目	每週時間	教科書
裁縫	四二	裁縫教科書 一、二、三、 渡邊辰五郎著
家事	三	家事教科書 上下 後閑菊野 佐方鎭子 合著
教育	三	內外教育小史 金港堂 應用教育學 越智直 安東辰治郎 合著
英語	二	文部省會話讀本 一、二、三、
算術	三	口授
國語	三	新定女子國文讀本 五、六、七、 生目經德編
漢文	三	女子高等漢文讀本 一、二、三、 簡野道明著
習字	二	楷行草
禮法	三	口授
刺繡	九	
古流生花	一ヶ月 六回	
有樂流茶道	一週 一回	

生徒心得（略す）

塾則（略す）

雜報

◉東宮御消息

東宮近侍の向より洩承はるに皇太子殿下は過艦盤城艦にて近海巡航前後より玉躰特に御健かに渉らせられ御用邸に駐輿中も日々御徒歩又は御乘馬にて近邊の山野を跋渉し玉ふに由り日々の御食事も中々に進ませられ玉躰昨年の夏季に比すれば殆んど一貫目以上重量を增させ玉へり先日葉山より還御あらせらるゝや直に迪宮殿下を抱かせられ御子の稍笑顔をつくらせ玉ふを悅ばせ玉ひ御機嫌麗はしく又迪宮殿下は御誕生の當日より僅かに五十日を過ぎたるのみなるに御乳は妃殿下自から進め玉ひ日々肥滿じ玉ふを覺ゆ此御子の御眞影なりとて坊間の書草紙店若くは新聞雜誌等に揭ぐるものあれど皆想像にて畫きたるものなるべし未だ皇長孫の御寫眞は撮らせ玉はぬなり又皇太子、同妃、皇長孫の三殿下今夏共に西京に行啓御避暑あそばさるとの噂は或は一時侍醫より内奏したるやも知れざれど今日の處は未だ斯かる御内議あるを聞かず而して東宮殿下は今夏日光御用邸に行啓あそばさるゝ御内定なりと

◉山王大祭の景況（口繪參照）

神田明神と共に東京の大祭禮たる山王日枝神社の祭禮は去月十四日より十七日迄都合四日間なりしが、本年は同社が國幣中社に列せられてより二十年に相當するを以て其の紀念の爲各氏子町内にては非常の大張込みなりしが今其の景況を記さんに、十五日午前十時千家東京府知事は勅使として日枝神社へ參向し幣帛料を供へたり、扨て前日來麹町、四谷、芝、京橋、日本橋の五區に跨がる氏子町々に於ては戸毎に軒提灯を懸け造花を飾り又に提灯に代るに名所人物花鳥畫の絹燈籠を以てしたる向きもあり中にも麹町區は宮本のことゝて非常に奮發し數多の山車と踊屋臺を午後一時より各自の町内を曳廻したるが若者等は何れも揃ひの浴衣を着し又は縮緬の揃ひを飾りて意氣揚々之に附添ひ又麹町五丁目同八丁目は何れも手古舞を出したれば見物人は之に群集して中々の賑ひなりし又十五日は愈々大祭の當日にて神輿は正午頃より麹町區内を渡御し一層の雜沓を極めたり因に記す麹町區内より今度曳出したる山車屋臺を擧ぐれば麹町一丁目猿二重勾欄岩組みの鉾、同二

丁目花山車、同三丁目徳川家康鉾、同四丁目土佐坊鉾、同五丁目猩々、同六丁目神武天皇、同七丁目桃太郎、同八丁目神功皇后、同九丁目武内大臣、同十丁目浦島、同十二丁目花山車、山元町一、二、三丁目鞍馬、下六番町岩に獅子、紀尾井町閑古鷄、平河町一、二丁目花山車、同町三、六丁目同四、五丁目花山車同外に大工中より番匠の花山車同左官中より花山車都合十九本又踊屋臺は五番町、上二番町、隼町、元園町、下二番町永田町、土手三番町、麹町二丁目の都合八本にて其他の町々に於ても、居囃子手踊等の催しあり又京橋區八丁堀仲町、長澤町よりも山車屋臺を曳出し日本橋區の通り一、二、三、四丁目の如きは左右兩側に藤棚を吊て美麗なる提灯を懸け聯ねたりき。

◉日比谷公園の新設計

舊長州侯邸跡にて練兵場たりし日比谷原は其後東京市の市有となりて豫ねて公園を設くべしとの問題ありしが近日いよ〳〵其設計を決定して公布せり

（一）本苑の面積は五萬一千一百七十有二坪なるを以て之を四大別し東南部は歐風式の開濶なる運動場とし南西部は歐風式の噴池小丘及散策の地を設け諸種の花木樹常盤等を植へて四時の美觀を具へ其南西隅に鬱蒼なる樹林を排植し其間に歩道を設く西北部は本邦風の庭園とし山を築き池を穿ち溪谷及瀑布を設け清流を作り四季の花木常綠樹を配列し山の西北に綠竹綠木を幷植し幽邃の狀を寫すべし北東部は將來萬人を容る可き公會堂の豫定敷地とし傍ら植物溫室飼禽室を置き石橋の南頭に音樂室を建設し又公會堂未設中假りに花壇を造り其空隙を補ひ且つ舊郭壁城濠を利用し池を環らし以て本邦風の小庭園を作成するものとす

（一）東南の運動場は得壽庭と名く中央を芝生地とし各種の遊戯場に宛て周圍に巾間六長さ四百九十二間の競走場を作り且大小八ヶ所の半圓休息場を設けたり

（一）南西の庭園は凡一萬七千餘坪を有し東道の東を仁壽園と稱す園の中央に壽泉と稱する面積五百八十坪の池を穿ち其中央に蝦蟇仙人の銅像を立て噴水を裝置し池の周圍に花綠門花垣散策道を設け處々に休憩所及歐風コーヒ店を置き池と運動場との間に小丘を築き「ツ、ジ」の類を植列し園の南西隅は南壽林と稱し幽邃なる樹林地とす

（一）西北の庭園即ち本邦庭園は凡そ一萬一千八百坪を有し中央に面積二千百三十坪の池を穿つ其形狀は「ヒヾヤ」の文字に象り之をひゞやヶ池一名涵文湖と稱し池中に二個の島嶼を築き杜鵑花を滿栽してサツキ島と稱し一を片輪島と名く池上に千鳥橋を架し春雨橋と名稱し橋殿を設け鑑水亭と言ひ他の一橋を金瓢梁と稱す又一橋を夕陽橋と名づく池の四邊に楓、柳、櫻、百日紅、其他の林園を設け櫻林を萬櫻林、柳林を萬柳瀞、楓林を萬楓逕、百日紅林を三薇汀と稱し池の南西に武の字に象りたる威武山と稱する高六間乃至三間の山を築き山間切通しに車橋と名づくる棧橋を設け山の盡くる所に方石を以て斷崖を築き之を方石溪と名づけ高四間乃至五間の瀑布を作り其下流を細流として池に注ぎ猶之を東方の池に導く園の西北には海棠林萬梅塢萬竹岡の三觀を排

植し四季の眺望を持續し且つ護武山上に一堂を設け時散堂と稱し梅林に添ひ二屋を建て一を黄鸝亭他を双柑堂と名く園の周圍は常緑樹を并植し別天地となすものなり

(一)北東部に於ては舊郭壁城濠を利用し之を修飾し且倚城濠を延長して公會堂豫定地(面積四千九百坪)の周圍を環らしめ且つ南面及西面に各一個の石橋を架し其内に植物温室及び飼禽室を建設す温室は面積二百坪とし中央を冬園とし左右を花卉室氷草室とす又飼禽室は其面積六十坪の楕圓形とし巨鳥小禽を區別放養するものとす其他の公會堂設置以前に於ては敷地の空隙を以て假りに花壇を設け牡丹芍薬菊及薔薇等各種の花卉を培栽す音樂堂は運動場の北公會堂南方の橋頭中間高凡一丈面積二百坪の延壽臺と稱する小丘上に建設し其建坪四十坪を有せしめ後來建設さるべき公會堂に相對せしむ舊城跡は從來の樹木郭壁を艮門墟一名日日比谷ヶ岡と名け其儘に存置し各種の灌木を加へ其麓に竹垣を環らし石垣面には蔦葛を滿栽し其他は春秋の草花を植へ遊歩道を設け池邊に蘇鐵を植へ細流に橋を架し本邦古風の門を建て公會堂西北方には櫻樹、杜鵑花等を植へ樹間に事務所を設け郭壁の南端と日比谷門の中間を書籍館を建設する豫定地とす

(一)周圍に六門を設け東方内山下町より入るを日比谷門と稱し其東南隅より入るを幸門と稱し南西貴族院議長官舍傍より入るを西幸門と稱し西方霞ヶ關より入るを霞門とし北方に面する外櫻田堀筋より入るを櫻門と名け又東北隅より入るを有樂門と名け何れも電燈又は瓦斯燈を點し扉を設け平時は開放し必要に應じ之を閉鎖するの便に供せり(中略)

(一)園内各所に休憩所を設け又腰掛を配置す且つ各種の遊戯器械を配置す

(一)車道の兩側及び園内各所に電燈又は瓦斯燈を點し又人畜の飲水所を設く

(一)園内の瀑布、噴水、及撒水用の水は舊玉川上水萬年樋より幾水を利用し之に三百粍鐵管を持續し之を引用し瀑布へは二百五十粍鐵管噴水へは百粍及び五十五粍の鐵管を用ひ撒水用としては五十五粍の鐵管を用ゆ飲料に供する水は改良水道を用ひ一時鉛管を以て之を引用するものとし又豫備として新水道より噴水等に連絡管を設け置くものとす

(一)本説明書氷鷗證亭、双柑堂、植物温室、飼禽室、歐風休息所三ヶ所花縁門花垣事務所コーヒ店書籍館及舊水道幾水引用設備は追て完成し先以て他日に讓る能はざる設備を本年度より向三ヶ年繼續事業として着手するものとす

○日比谷新公園の命名に就て

新設日比谷公園中の橋梁池亭等の命名は當局者の頗る苦心せし所にて漢名和倚の兩様を以てし萬壽の二字を割きて洋風和風の兩庭園に分けたるものゝ由なるが今左に確定したる日本風庭園の漢名和名を擧ぐれば左の如し

漢名	和名
涵文湖	ひゞやの池
春雨橋	はるさめばし
鑑水亭	はしどの
黄鸝亭	うぐひす亭
雙柑堂	さけのや
金瓢梁	ふくべ橋

萬柳灣	やなぎがふち
萬櫻林	花の下みち
萬楓逕	もみぢのしたみち
萬梅塢	うめかをか
萬竹岡	たけのだい
夕陽橋	ゆうひばし
三薇汀	さるなめりのわだ
方石溪	はこいは谷
蜀錦經	かいだうばやし
藏武山	くらたけ山
輿車樓	くるまばし
昆門墟	ひどやがをか
時啓堂	きじ堂
杜鵑洲	さつきじま
牛月嶼	かたわじま

◎四恩瓜生會春季大會

錦輝館に催したる四恩瓜生會の春季大會は非常の盛會にて養育院の安達憲忠氏棚橋絢子氏下田歌子氏島地默雷氏村上專精氏等の演說あり樓上には賣店を設けて同會の趣意を賛する諸名家の扇面揮毫及養育院にて出來たる麻裏等を陳列したり◎四恩瓜生會の事業として安達氏の報告したる大躰は「瓜生會は毎月廿日小石川大塚辻町なる養育院に例會を開きその都度佛教各宗の碩德を請ひて法話を托し可憐の在院者を慰めかつ當日參會者の隨意寄附により救養者に施齋す、三十二年より東京佛教婦人會と協力し本鄕元町等正寺内に儲けある德風夜學校は目下の生徒四十餘名主に商家の子弟、敎員は常盤文學士大學生龜山西山の二氏其他地方出張演說及印度饑饉在清軍人のために臨時寄附をなしたる事」その他數事◎同會の歷史と希與、故瓜生岩子刀自の志を嗣ぎ矯風慈善の道に盡さんとの趣意にて三十二年六月發會式を擧げ瓜生會と名けしが九月四恩會と合して四恩瓜生會と稱す會長はその當時土方伯爵夫人にて同夫人の沒後缺員の儘、副會頭は子爵母堂三島和歌子男爵夫人澁澤兼子、岩佐夫人河野夫人原夫人等主として盡力せらるその中所々の裏店に家を借りて貧民に道を傳へ且外出勝なる勞働者のために幼稚園風の者を設けて幼子をあづかる事無資の子弟に敎育を施し獨立自營の道を得せしむる等の事をなす筈◎無料宿泊所を直接に同會の事業にはあらねど同會員諸氏の勸誘盡力によつて成りたる淺草神吉町六番地なる無料宿泊所に就て安達氏は曰く「養育院孤兒院は出來て居ても此所は浮浪無宿生計の道を知らざる小兒大人

を収容みちが附いて居ない木賃宿にすら泊る事の出來ない彼等は養育院孤兒院を思ひ出す前に(かゝる所のある事を全く知らないので)鵜の目鷹の目で探して居る掏兒惡黨に拾はれて仕舞ふ、放火などするものも大抵この種の人間です、無料宿泊所とは敢て新しい考案でもないですが例へば昔し慈悲宿とか善根宿とか助小屋とか云つた樣なものです、これをある篤志の僧侶さんが私財を以て目下淺草神吉町に設けましたまだ小規模ですが、慥かに有用な事業です食物なども出來る丈け安くあがる樣に毎日泊りに來たものに車を引せて養育院の殘飯を取りに來ます、經費の事ですが、財産家でもないから、某氏の私財は永く續かぬ事が分つて居るそこで贊助の慈善家に毎月何人づゝかを泊める約束をして貰つて例へば一日一人の宿泊料八錢とするなら十六錢寄附すると二人泊める事になる斯うして集めたのを切符にして交番や警察官の力を借つて無宿者などをこの宿泊所に送る樣にするのですそして孤兒院に送るもの感化院に入るべきものまた職業を與ふべきものなどそれ〲に指示して墮落にむかない工夫をするのです行旅病者などは年々四百人位養育院に參りますがそれが大抵死ぬる何ぜかと云へば少し位加減の惡いものが道を彷徨つて居ても警察では唯その樣にうろつくのではないと云ふ丈で行旅病者として區役所に送るのは病氣がモー嵩じはてゝ到底なほらぬ樣なもの斗です無料宿泊所はかゝる者のためにも必要であります云々

●大橋乙羽氏遺族の篤志

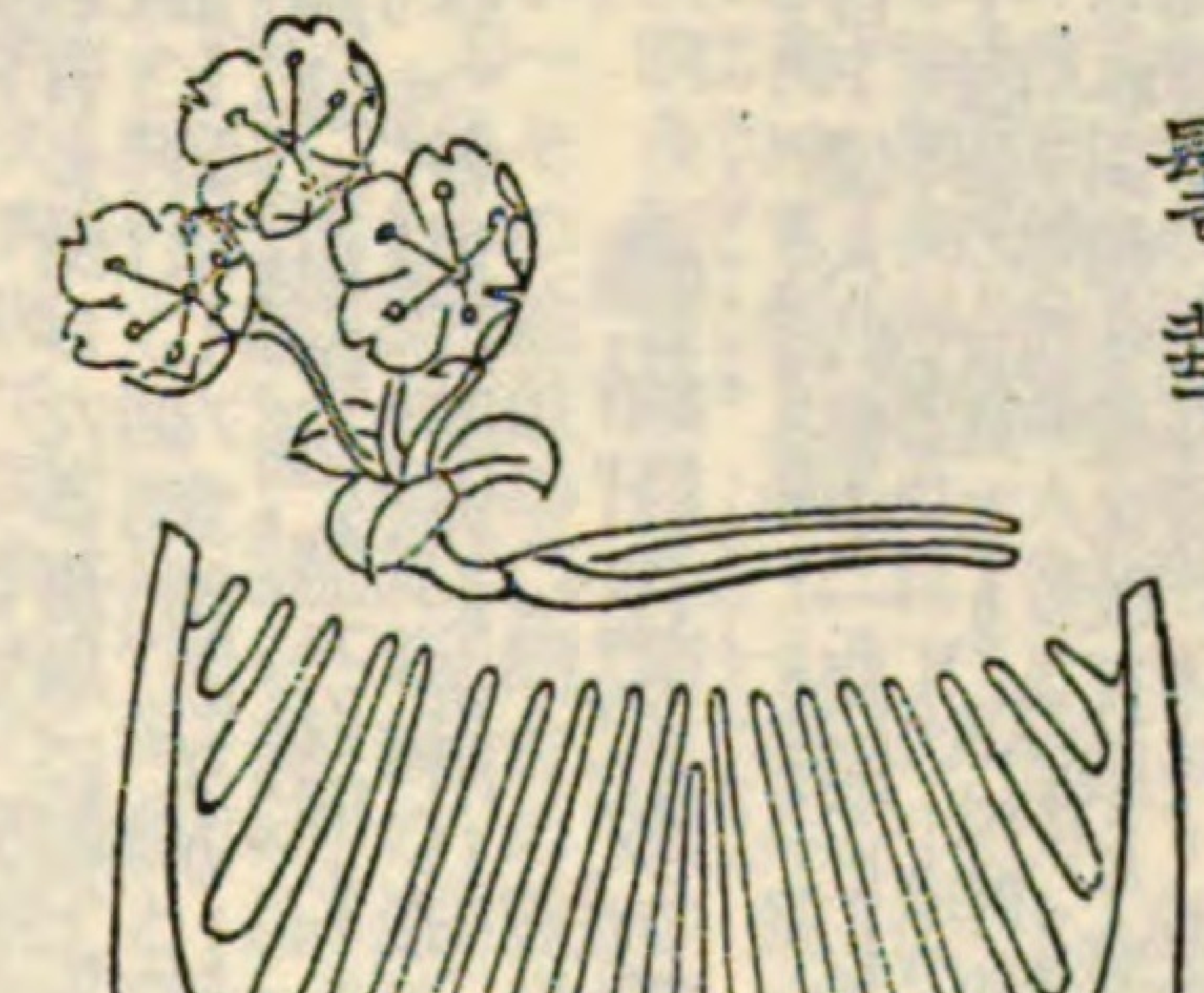
大橋乙羽氏は生前にありて、死後其の葬儀を質素にし冗費を省いて成るべく之を公益の爲めに寄附せんことを遺言し、殊に其生地なる米澤市興讓小學校には幼時敎育を受けたる舊恩に報ふの意を表する爲め、奬學資金を寄附したき素志なりしを以て未亡人とき子より同興讓小學校に金五百圓を、又東京市養育院東京盲啞學校へ各金百圓宛を寄附して其の遺志に添へたり。

●梶田氏の改良服(口繪參照)

目下婦人社會の一問題として研究せられつゝあるは女子服裝の改良なり、這は昨年日本婦人協會に於て唱へられ同校生徒に改良服を着せしめたりしが、爾來女服に就ての改良説は各所に起り隨て專門大家の考案を煩はすに至りたり、下田歌子、弘田長、高木兼寛、渡邊辰五

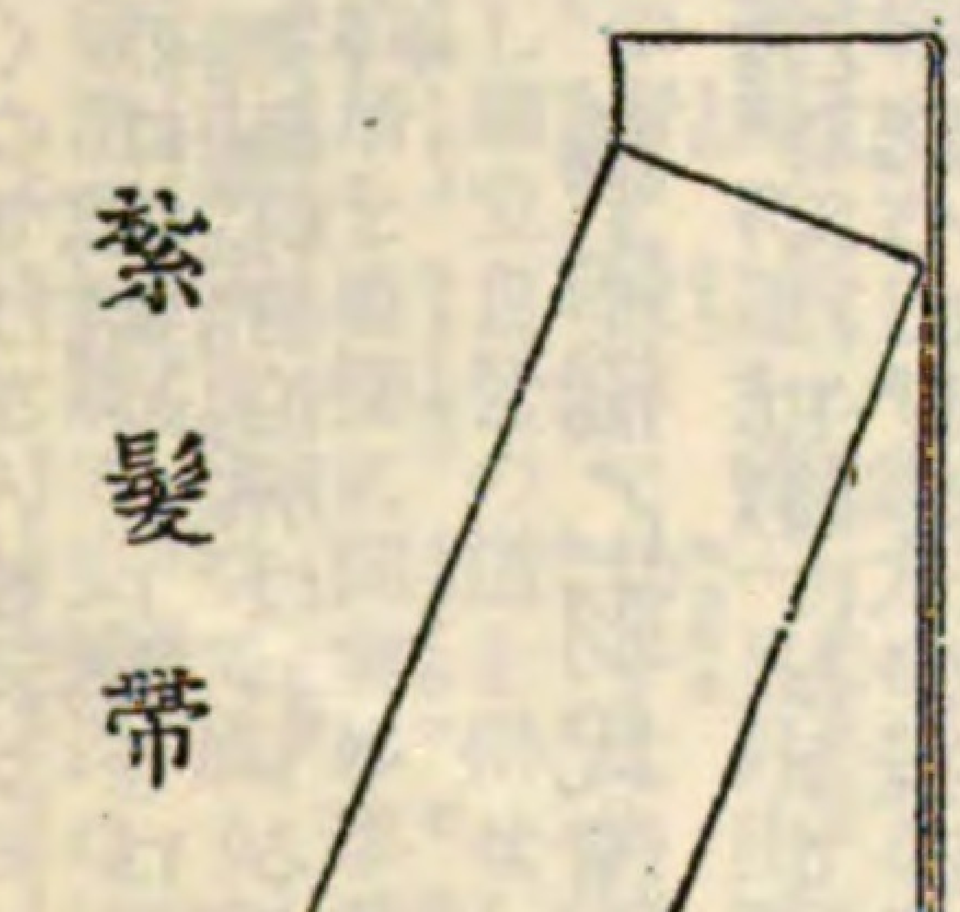
郎等の諸氏或は風俗の上より、或は醫學上より、或は經濟實用の點より各一家の考案を具して世に示されたりしが、爰に又畵家梶田半古氏は豫て我國女子の服裝に就て改良の意見を有し、今春讀賣新聞及太陽等に其の一斑を記して示されたり、同氏の考案は專ら美術的に着眼したるものにて本邦古代の沿革に依り傍ら印度支那朝鮮等東洋諸國に行はれたる服裝を參酌折衷したるものなれば、裁縫女學校若しくは婦人協會の改良服に比して美術的なるだけそれだけ複雜なるは此の改良服の特色として見るべし。

今口繪の摸像に就て說明せんに、先づ其の注意すべきは頭髮なり、髮は紮髮帶と稱してリボンにて括り簪華を以て正面の粧飾とし櫛にて止むるやう作りたるものにて一見高尙に見ゆ、服は最下に白木綿の褌を穿ち、其上に襯衣(胴は木綿袖と襟とは白綾かり)をまとひ穿褌(裏木綿表紅絹)を穿ち、其の上に胴服(薄紅梅色有紋絹)を襲ね、胴服の下部に襲(赤有紋絹)をまとふ而して其上は即ち表衣にして薄紫紋絹を用る裳は薄綠の緞子を用ゆ、又帶は表裏共表衣と同じく、而して上衣の上に褙(襦袗裏表とも)をうち掛く、襟は蘇芳色にして被布は白の羅衣なり又韈は白



簪華

櫛



紮髮帶

絹を用ゆ、勿論これは女子の盛裝(春衣)にして禮式等に着用すべきものなり、猶頭髪の詳細は圖に就て見るべし。以上年齢十七八歳を標準としたるものなり



◉蚊を全滅する法

近頃伊太利國の醫師フエルミ氏は蚊害を除かんが為め之を全滅するの法を案出したりと氏が此方法を案出する前には具さに蚊の性質を研究して其卵は溝渠汚水又は貯水の中にありて發育するものなるを知り次で石油は其卵を殺すに足るべき事をも發見し氏の居住するサツサリ市に於て蚊の發育すべき水中に二週間毎に石油を注ぎたるに夏季に及びて一匹の蚊をも見出さゞりしと云ふ尚氏の計算に依れば人口五萬を有する市街に於て毎年四百圓乃至六百圓の石油を溝渠汚水及び瀦水等に注入すれば蚊は全滅すべしと云ふ

◉生命保險の死亡者

生命保險に於ける被保人の死亡は猶ほ火災保險に於ける被保物件の燒失と同一の損害を受くるものにして被保險者の健在如何は其營業の消長に至大の關係あるは論を待たざるなり然れども當初其保險を契約するに際し成るべく危險の多きものを避くるは一般保險會社の

執るべき方針なるも契約後數年若くは十數年を經過したる時に於て人の健康なるものは常規の如くに律すべからざるものありと見へたり今試に昨三十三年一月一日より同年十二月三十一日に終る一ヶ年間に於て有力なる某會社の死亡數と未だ信用の深かゝらざる某會社の死亡數を對照するに左の如き結果を示せり

病名	信用ある會社	信用薄き會社
肺結核	二〇〇プロシル	一二二プロシル
腦充血	一〇〇プロシル	五〇プロシル
結核諸症	八〇プロシル	五プヒシル
消化器病	七五プロシル	七二プロシル
肺炎	五〇プロシル	二五プロシル
肺氣	四〇プロシル	九〇プロシル
虎列刺	―	―
赤痢	―	一一五プロシル
賀扶斯	二〇プロシル	八七プロシル
百斯篤	―	―

以上は其會社に於て最も死亡數の多きものを示したるものなるが最も信用ある會社にありては生命保險に於て最も忌むべき敬結核の死亡者が被保險人の死亡總數千人中に於て二百人の多きに上りたるものは要するに其被保人が上流の生活に在るもの多き爲にして信用薄き會社の死亡數か其總數に對し脚氣千人中の九十人赤痢千人中の百二十五人の如き要するに其被保人か中流以下の生活に在るもの多きか爲めなり元來死亡數なるものは被保人の常住すべき場所及び其日常の生活の狀況並に職業等に依り一定なる能はすと雖も前掲せる優劣二會社の死亡對照に依ば蓋し一般の内容を知に難からず

◉禮法講習會開會式

過般其の開會式を擧げたる有樂町神宮奉齋會內の禮法講習會はかねて設けありたる奉齋會內の禮法部と下田歌子女史が帝國婦人協會附屬の禮法講習會とが協議の上合併したるものにて下田女史を會頭とし多數の貴婦人紳士評議員となりて社交に應用すべき實地的禮法及茶の湯挿花料理等各自の望みによりて敎授するよし敎師は何れもその道々の專門家にて時間の如きも一家の細君學校に通ふ令孃たちの爲にも都合よく出來居れるがなほ右開會式に於ける下田歌子氏演說の大要を記さんに「近來我國禮法のみだれたるは過渡の時代とて致しかたなき次第なるが外形の粗漫は內部の精神にも影響ある事なればこの際禮の講習は肝要の事なりと思

はる而して此所に注意すべきは禮法お茶花など云へば習慣上贅澤事の業に思はれ會員自身も衣服その他に心を勞する樣にては國家他事の折から憂ふべき次第なればさる思ひ違ひなき樣に」と述べ更に「先刻御覽に入れたる婚禮式の如きも細川潤次郎氏が中流及それ以下に於る婚禮の有樣日々に嚴肅を缺くの嫌ひあるを憂ひ古禮を參酌して現今社會の狀態に適當すべき禮式を案出されたるものにて式の穩當なるは云ふ迄もなく左迄多くの費用を要せざる等の便利もありより〳〵の贊成を得て近來該式によりて結婚する人少からぬよし云々

●夏期講習會

●文部省の夏期講習會　文部省にての本年開かるべき師範學校、中學校、高等女學校教員夏期講習會は七月廿五日より八月十四日まで東京(教育、法制及經濟、國語及漢文、學校建築、音樂、理科、家事)、仙臺(歷史、博物)、京都(英語)、金澤(數學、博物)、熊本(物理、化學)、福岡(普通體操)の六ヶ所に於て各括弧内の學科につきて開校せらるゝ筈なるが、專ら高等女學校教員のために開かるゝは東京に於ける理科(藤堂女子高等師範教諭)と家事(三宅醫學博士)とのみにて兩者は相兼ぬることを得べしとぞ又凡て一學科の講習料は壹圓五十錢、二學科目は金二圓也、但し地方長官は講習員を選定して六月十五日迄に文部省に差出す筈なり

●女子夏季講習會　東京府教育會は來る八月一日より同月二十一日まで神田橋外東京府第一女學校内に於て夏季(女子)講習會を開くに決し講習科目及び講師は左の如しといふ

一教育　女子高等師範學校教授　安井てつ子
一國語　東京府女子師範學校教授　前田　捨松
一音樂　東京音樂學校教授　小山作之助
一裁縫教授　女子高等師範學校舍監　喜多見佐喜
一禮式　華族女學校講師　小笠原淸務

●帝國教育會夏季講習會　師範學校中學校高等女學校の教員及び該教員志望者其他左の學科研究志望者の爲め本年八月一日より同二十七日まで神田一ツ橋通の該會に於て夏季講習會を開設する筈なり志望の人は其講習すべき學科及び氏名住所職務を記したる書面を以て至急申込むべしと其講習學科及講師は左の如し

一教育學　高等師範學校及哲學館講師　熊谷　五郎
一國語　東京帝國大學文科大學及女子高等師範學校講師　岡田　正美
一教育行政　東京帝國大學法科大學講師法學博士　木場　貞長
一心理學　東京帝國大學農科大學講師　塚原　政次
一動物學　東京帝國大學農科大學教授理學博士　石川千代松

尙講習の餘科として一回又は數回澤柳政太郎湯本武比古藏原惟郭文學博士松本亦太郎諸氏の講演ある筈なり。講習料は一學科金壹圓五拾錢二學科金貳圓五拾錢三學科以上金參圓五拾錢の割合を以て前納すべしとぞ

●女子技藝學校開校式

同校は去月十二日麴町區飯田町四丁目一番地稚松小學校内に於て擧行、校長寺田勇吉氏主幹三輪田眞佐子を

始め講師職員出席來賓として岡東京府視學官市長代理浦田助役、松長市敎育會評議員會副會長、磯部梅澤兩市學務委員日下部東京府敎育會、山田、深山、平賀の各同理事あり寺田校長先づ開校の式辭を告げ星市敎育會長の祝詞(山田理事代讀)松田市長の祝詞(浦田助役代讀)あり寺田校長之が答辭を述べ三輪田主幹は將來女子の要務に就き懇篤に訓諭し岡視學官の演說等ありて式を終り來賓及び生徒には別室に於て茶菓を饗し愈こ散會したるは午後五時過なりし因みに同校は此際隨時入學を許す由

◉新書月旦

『松葉籠』　東京　勉强堂發行

藤波しま子女史の編著にして、著者は其はしがきの劈頭に云く『あはれ賤の女の負ふ『松葉籠』よ、編者の目的は如何に、世の美文を讀み又は學ばむとする人の爲に、わが國のシェーキスピアと謳はるゝ近松巢林翁か一代の著作中より、歷卷の文藻と思はるゝ佳所を拔粹して其資料に供さばやとて』と又著者は翁か作中世話物よりは時代物に重を措て云く『是なしも文藻の上より見る時は其時代物の方こそと妾は思ふなり、『松葉籠』に收むる所のもの、其時代物の多くして世話物は『措瀞原』以下『女人堂』まて僅に十一『編のみ』と又以て其所見を知るべし、本書收むる所『忍ぶ滸笠』、『凱陣八嶋』、『なのの白露』、『出世景淸』、『扇賣』、『百日曾我』以下總て六十五編、『何れも蘭菊各美を競ひ鳳鸞幷に彩を爭ふ』ものなり、皆是翁か一代の妙技を表せるもの綠陰風淸き處、以て淸夏の好伴侶たるべし(定價金三十錢)

▲北淸觀戰記　坪谷善四郎著

此書は、著者が戰地視察記也、水哉子は才敏に筆健に、加ふるに其世務に精勵なる、人の能く及ぶ能はざる所あり、先きに北淸に戰亂起るや、子直ちに軍旅に從はんとしたるも、故ありて果さず、後ち北淸の形勢稍々鎭まるの時、親しく其戰亂地を跋涉し、戰後北淸の情勢、列國軍の動靜等、實視するに任かせて、本國へ通信したるの文、蒐まりて此一書册と成る、製本の美、記事の精さ相俟ちて見るべきものあり、又た卷歐には十數頁の寫眞口繪を挿みて、記事の足らざる所を補ひなり、兎に角北淸戰史の參考となる良書也、(文武堂發行定價金四十錢)

▲人皇のはじめ　神田　開發社發行

この書は遊佐誠甫といふ人の著、歷史修身談の第二卷として出づ、その內容は題目の如く、我國の皇祖神武天皇以來、開化天皇の御代に至るまで、凡そ七百年ばかりの歷史の梗概を、極めて平易の文を以て叙し、少年者の讀本に供せるもの也、著しさしく別に新らしき意匠もなく、普通ありふれたる讀本の體裁を襲ふものなれど、少年に讀ましむべき敎訓的の書物としては、先づ適當のものと云ふべきか、(定價は一册僅かに十二錢)

▲東宮御慶事の記　仝　同社發行

此著書の目的は、昨年五月十日宮中に行はせられたる　東宮殿下御慶事御盛儀と、裕仁親王御降誕の摸樣を謹叙し、之を全國の同胞に知らしめ、家庭並に學校の敎育に資せしむると共に、長く後世に傳へて、以て益々忠義の大義を發揮せしめんとするに在り、載する所の材料は、多く新聞の記事を燒直したるものなれど之れを、纒めて一册の書册とせるは少け

れば、本書の如きも亦必要の書といふべきか、（定價一冊金三十五錢）

▲松をゑやま　仝　同社發行

こは數十頁の小冊子のみ、されど、著者は教育界に錚々たる湯本武比古氏、氏は國語、國文、國字について改良の意見を有するを以て、本書の文脉の如きも、之れが改良意見の一端を施せるもの、全文みな假名を用ゐて、兒童をして固有の假名文に慣熟せしめんと勉めたり、されば尋常小學の生徒にても、十分之れを讀むことを得べし、さりながら、家庭讀本としては、世已に此種の文章に老熟せる小波子の諸書あり、釘裝の美、輕快の文、殆んど獨擅の觀を爲せば、本書の如きは、釘裝に於て、挿畵に於て、文章に於て、固より遜色なき能はずと雖ども、また之れに比して、一異彩を放ちものなきに非ず、（代價金十錢）

▲家庭の教育　文友堂發行

曾て讀賣新聞に連載したるものを集めたるものにして貴顯名家の家庭教育の實例多く美を擧げて他を勵す醜を黎げて人を戒む、又た名ある人の家庭教育談尠からず、婦人の讀物として良好の書なり（定價五十錢）

星亨氏の兇變

明治政界の大立物にして政友會の總務委員たる星亨氏は六月廿一日東京市參事會秘密室に於て刺客伊庭想太郎の兇手に罹り五十二歳を一期として空しく黄泉の客となり了んぬ、越へて六月廿六日芝二本榎承敎寺に於て葬儀を營む、會する者無慮八千人朝野の名流殆んど一堂柩前に集まる町法號を大雄院殿元貞日覺大居士といふ氏は實に東京市敎育會長たりしなり

成女學校夏期講習會

麹町下二番町なる同校は夏朝休業中に於て女子の夏期講習會を開き料理法及家庭衛生の講習をなす由其略則は左の如し

一料理法は七月二十二日より八月三十一日までの四十日間とす其の時限及講習料は左の如し

日本料理　每月水、金、曜日午前八時より凡三時間約十八回　講習料金貳圓五拾錢

西洋料理　每火、木、土曜日午前八時より凡三時間約十八回　講習料金貳圓五十錢

但日本料理西洋料理を兼修するものは其の講習料を金四圓とす

一家庭衛生は來る八月一日より十二日まで每日午後五時より凡二時間約十回とし其の講習料を金壹圓五拾錢とす

注意　家庭衛生に關しては專ら左の事項を講習す　衣服、飮食、住家に關する要項看病法、救急法、繃帶のかけ方、等

一家庭衛生及日本料理若くは西洋料理を兼修するときは其の講習料を金三圓五十錢とし家庭衛生日本料理西洋料共に兼修するときは其の講習料を金五圓とす

一料理は前記講習料の外別に每回實費金貳圓五拾錢內外を授業の都度納付すべし

一講習志望者は來七月十日までに族籍住所職業年齡を記したる入會書を差出さるべし

一講習結了後は講習證書を授與すべし

一地方よりの志望者には寄宿の依賴に應ずべし

一講習中は時々山根正次先生其の他大家の出席講演あり

一本會の講師は左の如し

家庭衛生	ドクトル	川瀬元九郎君
仝	醫學得業士	中島郁夫君
料理法		松本常二郎君
仝		三枝富吉君
仝		嘉悦孝子君

女學世界第十號記事要目

其他修身禮法學藝講義雜錄文苑等例に依つて材料豐富

毎月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内〔定刊數……十二册　増刊四回…三、六、九、十一月價格同一〕	
郵税 一冊	二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

● 本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
● 御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
● 郵券代用は一割増にて五厘一錢の分に限る。
● 總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅四年七月五日發行 第一卷第九號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

文學博士萩野由之君編

四版 大日本通史

全三冊上卷定價金壹圓五拾錢郵稅拾錢
上卷紙數九百八十餘頁印刷鮮明用紙精良

洋裝菊判 總クロース 金文字入

大日本通史は史學に精通せらるゝ萩野由之先生の新著にして上は神代より下は德川將軍の政權返上に至るまでを記し安德天皇以前を上卷とし後鳥羽天皇以後を中卷とし下卷たるものにて時勢の變遷に從つて編を分ち毎編御歷代に依りて次序を立て制度文學宗教風俗に至るまで關係の大なるものは一切漏す所なく且卷末に索引を附して考索に便せられたれは此種の書中最も完備したるものと言ふを得べし左に上卷の概目を摘記す

第一期 神代
第二期 大倭振興の世
第三期 三韓內付の世
第四期 律令制定の世
第五期 奈良朝
第六期 平安朝
第七期 藤原氏攝關の時代
第八期 院政の世

中卷——追て發兌す

博文館發兌

落合直文君小中村義象君合著

五版 新撰日本外史

正價金壹圓貳拾錢 目方四百匁

全壹冊總クロース金文字入

概目

○第一編 御矛の雫（神代）
○第貳編 大和錦（大和時代）
○第參編 唐錦（同上）
○第四編 藤の下言（藤原時代）
○第五編 躑躅の咲分（源平時代）
○第六編 星月夜（鎌倉時代）
○第七編 芳野の櫻（南北朝）
○第八編 北山の時雨（室町時代）
○第九編 五月闇（戰國時代）
○第拾編 桃山の春（豐臣時代）
○第拾壹編 江戶紫（德川時代）
○第拾貳編 千代田の宮（明治時代）

歷史の要は事蹟を推究して眞相を記するにあり去れは文章の明暢を缺くときは讀者眞相を解するに苦しむと多し、本書は能く實際の眞相を得たるは勿論文章雅健にして一讀手を釋くに忍びず、上神代より下今日に至る一貫秩然として復得易からざる良史なり。

宮中顧問官西村茂樹君序文（貳拾版）

高等師範學校教授萩野由之君著

中等教育

日本歷史

洋装上製 總クロース 全貳冊

正價壹圓貳拾錢 郵稅貳拾錢

文部省檢定濟

著者の我が國史學に精通すること世既に定評あり、本書は肇を日本の地形建國に起し進みて太古史近古史の體裁政治の變遷に及び遂に廿七八年戰役臺灣鎭定に終る、而して各史編末に附するに制度風俗の沿革を以てし、卷尾に諸國封建沿革略を附載す、文辭明快敍事富瞻中等敎育を受けつゝある者は勿論何人と雖も一本を座右に備へらるべし。

博文館發兌

法學博士有賀長雄君著（拾版）

增訂

帝國史畧

洋装上製 總クロース 金文字入

全壹冊正價金壹圓五拾錢 郵稅貳拾錢

本書は著者が多年講究の餘に出でたるものにて、主として日本國民の變遷に於ける原因結果の次第を明にせるもの事實は一に正史に據りて最も正確に行文は簡明にして通暢なり、一讀帝國史の要領を得るに於て物を嚢中に探くるが如し、而して製本は美麗にして背皮金文字を彫型し、紙質精良、釘裝堅牢、實に帝國史中無比の良冊なり、

概目

第一期 國民興起の代
第二期 國民隆盛の代
第三期 佛法傳來の代
第四期 唐制摸倣の代
第五期 藤氏攝關の代
第六期 武家爭權の代
第七期 德川幕府の代
附錄 今代

○紙數一千頁以上九十三章鼇頭入

博文館發兌

（後付の二）

足立栗園君著

（紙數三百五十頁）

通俗百科全書

通俗日本歷史

壹冊洋裝正價金廿五錢郵稅八錢

本書は、皇謨の雄渾、民情の淳直は、固より言はず、政治、宗教、文學、美術等の變遷推移せる梗概等細大洩らさず通俗的に叙述し、而かも正史の足らさるを補はんが爲め、鼇頭に於て英傑傳、文人傳を附記したり。卷末には『日本開化の眞相』と題せる編を添ふ。これ著者が詼諧の筆を弄して、譬喩的に我國開化の歷史を叙したるもの、亦た用意の周到なるを見るに足らん、請ふ一本を購ふて、家庭の讀み物となし給へ。

水哉坪谷善四郎先生著

通俗明治歷史

全壹冊洋裝紙數三百五十頁

正價金貳拾五錢 郵稅八錢

徳川慶喜公政權を奉還し、政權を王政の古に復して以來、伏見鳥羽東北函館等の戰爭、藩籍奉還、廢藩置縣、薩長藩閥の由來、臺灣遠征、佐賀熊本鹿兒島等の叛亂、政黨の盛衰、國會開設の沿革、條約改正の顛末、日清戰爭、臺灣平定の事實迄、多く肖像及地圖を挿み、極めて平易に之を編次し、鼇頭には明治元勳の詳傳を掲げ、最近三十年間、帝國國勢の進歩、變遷は精細に叙述して、恰も活動寫眞を見るが如し。

文學士阪本健一君著

日本風俗史

全壹冊 洋裝菊判美本

正價（上製五拾錢 並製卅五錢） 郵稅拾錢 郵稅八錢

本書要目

●緒論○第一期……大倭民族本來相○第二期……民族制世相○第三期……唐風摸倣世相○第四期……文弱華奢世相○第五期……武强質實世相○第六期……文武離亂世相○第七期……偃武文恬世相○第八期……最近文明世相○史後剩筆

民人文野の別は國俗の純雜に現し社會隆汚の運は世風の張弛に觀る可し、彼奢泰の世相と緊肅の時態と表裏し文華質實交替し來れる新風舊俗の推移は豈社會の眞相にして國家盛衰の運繫る所に非ずや、此書我國風俗の沿革を叙して敢て其詳を盡すといはざるも茫々上下三千年間大局の趨勢を示すに意を致し兼て畧部分の細を説く、古人曰く民俗國民眞學問と、乞ふ擾々たる權勢爭奪史外、別に國民全般眞意俗の開展を記する史界の半面あるを見よ。

文學士高山林次郎君著

七版

世界文明史

全壹冊
洋裝上製金五拾錢
郵税拾錢
並製金卅五錢
郵税八錢
前金

本書概目

近年歴史の著譯一にして足らず、而かも悉く政治史のみ、唯往年キゾー氏の原著西洋文明史の翻譯を外にして未だ一卷の文明史なきなり、是豈本邦史學の一大缺陷に非ずや、著者の是著あるは、實に是缺陷を補充せんが爲めなり。乃ち筆を有史以前の民族に起し、佛蘭西大革命に至る迄、章を重ぬること十有五。主として哲學、宗報、文藝及び政治の上より東西歴史の隱微を描破せむと擬す、殊に基督教と西洋歴史との關係に就ては、著者自ら其簡明痛切を貢ふ、庶幾くは讀者をして目瞬指顧の慨あらしめむか、一小册子素より其名に稱ふことを得ずと雖も參考該博、用意愼密の二點に於ては著者敢て其力を惜まざるなり。

文學士中野禮四郎君著

東洋西洋教育史

全壹冊
洋裝上製金五拾錢
郵税拾錢
並製金卅五錢
郵税八錢
前金

本書概目

國家の隆盛を望まむと欲すれば先づ教育の要を認めざるべからず、然れども教育の事たる架空の念を以て實行すべからず、家庭及學校に於て充分の思考注意を用ゐざれば到底滿足すべき結果を望むべからざるべし、本書は先づ東西の教育思想を縷述して、教育の要點を指示し、傍ら國風を顧みて西洋の長を取り、以て教育の完備を期せむとす、其身教育に從事する者及子弟を有する者の爲に尠からぬ効力あるは疑なし萬般の事柄に於ける、史的研究の効力は、玆に喋々するの必要なかるべし、讀者此書に依て教育の要旨を得ると、蓋し淺少ならざるべく、學理を研究せんと欲する者も、一讀東西古今の學理を知り得べし、按ずるに教育書多しと雖も飜譯或は洋書飜案以外に立ちて、善く實着なる說明解釋を下したるは本書に若くものなかるべし。

文學士笹川種郎君著

支那文學史

全壹冊 洋裝菊判美本

正價 上製五拾錢 郵稅拾錢
並製卅五錢 郵稅八錢

本書概目

總論●第一期春秋以前の文學（總說、書、詩、易）●第二期春秋戰國時代の文學（總說、孔子と老子孟子と莊子、屈宗、韓非子）●第三期兩漢文學（總說、賈誼と楊雄、司馬遷と班固、司馬、相如、詩と樂府）●第四魏晉及南北朝の文學（總說、建安の詞人、陶淵明、南北朝）●第五期唐朝文學（總說、初唐の詩、李白と杜甫、韓と柳、白樂天、晚唐の詩）●第六期宋朝文學（總說、蘇東坡と其前後、陸放翁）●第七期金元の文學（總論、元遺山、小說と戲曲の發展）●第八期明清文學（總說、高青邱、李何七子と李王七子、小說と戲曲●第九期清朝文學（總說、詩人と文章家 小說と戲曲及批評）

支那は東洋の古國にして、特に其文學は日本文學の鼻祖として、苟くも日本今日の文學を研究せんと欲するものは、必らず支那文學の發達沿革を玩味して、今日文化の淵源する所を知悉せざる可かず、本書は時代に依り種類を分ち各種文學の由來變遷を說明すること精透到れりといふべし。

發兌元 博文館

支那文學全書

全部二十四冊紙數一冊四百廿頁以上

●一冊二十五錢 十二冊二圓五十錢 郵稅
六冊一圓卅五錢 廿四冊四圓七十錢 八錢

（全部目次）（博文館發兌）

- ●第一編 四書講義（大學中庸論語）上卷……內藤耻叟君述
- ●第二編 四書講義（孟子）下卷……內藤耻叟君述
- ●第三編 小學、孝經、忠經、講義……內藤耻叟君述
- ●第四編 老子、吳子、孫子、列子、講義……小宮山綏介君述
- ●第五編 韓非子講義上卷……小宮山綏介君述
- ●第六編 韓非子講義下卷……小宮山綏介君述
- ●第七編 莊子講義上卷……大田淳軒君述
- ●第八編 莊子講義下卷……大田淳軒君述
- ●第九編 正文章軌範講義……石川鴻齋君述
- ●第十編 荀子講義上卷……城井悔庵君述
- ●第十一編 靖獻遺言講義……（賣切）
- ●第十二編 唐詩選三體詩講義……大田淳軒君述
- ●第十三編 續文章軌範講義……石川鴻齋君述
- ●第十四編 荀子講義下卷……城井悔庵君述
- ●第十五編 十八史略講義上卷……大田淳軒君述
- ●第十六編 近思錄講義……內藤耻叟君述
- ●第十七編 十八史略講義下卷……大田淳軒君述
- ●第十八編 戰國策講義上卷……平井晉堂君述
- ●第十九編 戰國策講義下卷……平井晉堂君述
- ●第二十編 墨子、文中子講義……內藤耻叟君述
- ●第廿一編 詩經講義……小宮山綏介君述
- ●第廿二編 史記列傳講義上卷……城井悔庵君述
- ●第廿三編 史記列傳講義中卷……城井悔庵君述
- ●第廿四編 史記列傳講義下卷……城井悔庵君述

（後付の六）

慶應義塾大學部文學科卒業　奥村信太郎君著

通俗文學汎論

全一冊洋裝菊判
正價金貳拾五錢
郵稅八錢

目次

文學の隆運蓋し現代の如く旺盛なるはなく、大詩人出てよ大製作出でよと叫ぶの聲は日に高まると雖も、然かも人未これが眞意義を解せざるもの多きが如し、叙事詩抒情詩とは如何なるものの乎　此編說く所頗る詳密、先づ藝術の分類に始りて　文學の定義に及び詩を二大別して吟體讀體となし一博く美術家の說を參酌し、勉めて正鵠を失はざらんことを期すると共に、例を古今に索め、文は平易簡潔を旨とせり、加之鼇頭には、英獨佛文學史を揭げて、其發達を叙述したれば、文學入門の士が、絕好指南車たるべし

發兌元　東京　博文館

大和田建樹君編

第四版

作文寶典

全壹冊

正價金貳圓廿五錢小包量目四百匁
洋裝總クロース美本七百餘頁

▲日本新聞評　大和田建樹氏の編する所、彪然千六百九十八頁の大冊子、其凡例に曰く作文寶典は國文國歌を習ふ人の爲に作れり、故に作文の方針と應用の實例とを示すを以て目的とし、雅にも俗にも偏ぜざるを以て主義とす、作文とは散文韻文等の總稱を意味す、散文の作例は書中最も重を置く所なり、然るに記事文を多く採りて論文を少く撰びたるは初學者の入り易き者より順序を踏ましめんとの意のみ云々と、以て本書の趣旨を知るべし。總論文法、美文學、作例八百九十一篇、書簡文、韻文、文學の沿革等の七編に頒てり。又鼇頭に和學の栞和漢洋名數官職一覽始め、參考に必要なる十數篇を收む、洵に中學生徒が國文普通文研究の寶典なりと云ふべし。

▲讀賣新聞評　國文國歌を習ふ人のために著はしたる者にして　作文の方針と應用と實例を示すを以て目的とし雅俗共に偏せさるを主義とせり。全編を總論、文法、美文學、散文、書簡文、韻文、文學の沿革等七編に分ちて論じ。散文論には、古今和文家の文章三百餘章を擧げて作例を示す。作文寶典の名に背かず、國學者の重寶たるべし。

發兌元　博文館

久保田米僊君著（發兌元博文館）

第八版

畫法大意

全壹冊洋裝
正價拾五錢
郵稅四錢

米僊先生の畫法に妙なる、天下眼あるものは視て之を知れり、本書は先生が獨特の秘訣妙機を擧げて、初學蒙士を啓發するの資に供せられしもの指導懇切加ふるに密畫數十葉を挿入したれば斯道を學ばんとするには此書に如くものなかるべし

第三高等學校敎授
醫學士高橋金一郎君著（發兌元博文館）

第四版

通俗看病法

全壹冊洋裝
正價拾五錢
郵稅四錢

婦人は常に看病のとを心得おきて我家庭の變に備ふこと尤も緊要なり本書は醫學上の事を解せざる婦人にも容易に行ひ得べく且つ有益なる治療法を說明し殊に病名は多く俗間に行はるゝ名稱を附したれば明白に解し得らるべく箇々皆剴切に其看護法を附記したれば婦人は必ず一讀を要する良書なり

澁江保君著

第三版

泰西婦女龜鑑

（博文館發兌）

全壹冊上裝正價拾五錢郵稅四錢

泰西婦人の中には貞節忠孝萬世を化すべきものあり、詩歌の絕妙なる鬼神を感動せしむべきものあり、廉潔堅忍貪夫をして廉ならしめ、懦夫をして志を立てしむべきものあり、西洋にも亦婦女の龜鑑と爲るべき賢婦人少なからざるなり本書は、貞女、孝女、愛國者、文人、詩人、學者技藝家、政治家、勇婦 慈善家の十項に別ち、又附錄には美人の項を設け、合計三十餘名の傳記を掲げたれば妙齡利發なる令夫人令孃、携へて立志の一助に供せられんとを請ふ

文學士濱田健次郎君校閱
中洲濱本義顯君著

（博文館發兌）

婦女敎育

明治姬鏡

和裝上製美本
正價九拾五錢
郵稅六錢

本書は專ら婦女に要する文學技藝を敎へ其守るべき分を辨へしめ以て善良の婦女を養成するに在り記する處讀書習字を敎へ德育智育を導き婦女技藝一斑を授く文辭平易にして讀み易く眞に婦女必讀の寶典なり

㊟極彩色木版密畫及木版繪畫挿入

（附付の八）

詩大文士必携書豫約出版

大明王世貞校正
楊淙參閱
大日本石川鴻齋先生訂正
（七月上旬發行）

圓機活法

全部三冊
銅刻和綴
絹表紙帙入
六百八拾四枚
印刷頗鮮明

正價金三圓　小包目方四百匁

豫約申込期限　八月十日限

豫約特價　金貳圓五拾錢

◎期限後は直に正價に復す◎御注文は送料共凡て前金の事

詩は本と之を性情に發す。然れとも六義あり五理あり四得あり、皆詩を作の準繩たり。更に篇法あり、句法あり、字法あり、音節あり、是れ詩を作るの規矩たり、苟くも規矩準繩に據らされば、千言萬章を連ぬと雖も、以て詩として視るべからず。本書は明の大家王鳳洲世貞の纂訂する所、詩學全書、韻學全書の二に別ち門を立て類を分ち、熟語を擧げ、典故を正し、索むる者をして左右源に逢ふの感あらしむ。實に詩學の寶典なり。弊館新たに善販を獲て之を印刷發行す、銅鐫鮮明、紙質堅牢、以て吟客騷士坐右の珍とすべし

發兌元　東京　博文館

（笠原製本）

毎月一回五日發行
（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）　第壹巻第九號　（明治三十四年七月五日發行）

（定價金貳拾錢）

（東京株式會社秀英舍印刷）